

『竹むきが記』研究

九七八一〇一 五條小枝子

目次

序章	『竹むきが記』研究の課題	
第一節	『竹むきが記』研究の諸問題	一
第二節	『竹むきが記』再評価の視座	一九
第一章	『竹むきが記』の構造	
第一節	『竹むきが記』の記事と史実	
一	基本的性格としての記録的態度	二五
二	作者の生きた時代―史実の確認	三一
三	史実との齟齬	四六
第二節	元弘元年暮の記事における史実との齟齬	
一	記事の配列とその問題点	五三
二	記事の構成とその分析	五五
三	再構成の手法と和歌の役割	六二
第三節	北山第御幸の記事における史実との齟齬	
一	北山第への行幸・御幸の記録	六八
二	暦応五年御幸始の記事	七三
三	暦応四年御幸始の記事がないことの意味	七八
第四節	『竹むきが記』の構成法	

第二章 『竹むきが記』の表現様式の特質

- 一 史実との齟齬からうかがわれる意図的操作 八二
- 二 日付の混乱からうかがわれる意図的操作 九一
- 三 意図的操作と構成意識 一一一

第一節 作者の教養の基調にあるもの

- 一 作者の和歌的環境 一一七
- 二 作者自詠の和歌とその参考歌 一二二
- 三 地の文の和歌的叙述 一三六
- 四 作者の教養の基盤 一四一

第二節 上巻の和歌のあり方と地の文の叙述

- 一 上巻収載の和歌 一四六
- 二 対象とする二つの章段 一四八
- 三 当該章段前後の記事の配列 一五〇
- 四 和歌の有無と地の文の叙述との関係 一五三
- 五 公宗とのかかわりで詠まれた和歌の意味 一五八

第三節 下巻の和歌のあり方と地の文の叙述

- 一 下巻収載の和歌 一六一
- 二 下巻における和歌の諸相 一六三

第四節 記録的叙述の特質と再評価の試み

- 一 作者にとっての和歌の位置と叙述 一七四

二 記録的叙述の底流にあるもの

一八一

三 表現様式の特質とその評価

一九四

第三章 『竹むきが記』における宗教観

第一節 浄土教思想とそれへの懷疑

一 作者の宗教的環境

一九九

二 『竹むきが記』にみえる浄土教思想

二〇三

三 「生死を出づる道」

二一〇

第二節 『竹むきが記』作者の宗教への想念

一 靈鷲寺とその長老

二二〇

二 作者の志向した修行

二二八

三 作者の教説受容の態度

二三四

四 作者の道心の本質

二五一

終章 『竹むきが記』の成立

第一節 『竹むきが記』の原点

一 公宗事件の実相

二六五

二 生きていく作者の心底

二七三

第二節 『竹むきが記』の成立

一 「昔」——回想の起点

二八四

二 「北山第」への回帰

二九〇

序章 『竹むきが記』研究の課題

第一節 『竹むきが記』研究の諸問題

『竹むきが記』は、西園寺公宗の室日野名子の手になる日記である。この点について、疑義を差しはさむ余地はあるまい。しかし、その名子自身のことについては、不明な点がはなはだ多い。例えば、彼女の没年が延文三年（『公卿補任』・『愚管記』）であることは確実であるが生年がいつなのか、生母は一体だれなのか、兄弟姉妹たちとの出生の次第、同腹・異腹の関係などはどうであったのか、光厳院に仕える以前に宮仕えしたことは推測できるが誰に仕えていたのかなどである。しかし、作者が生きた時代は鎌倉末期から南北朝にかけての動乱期であつたこともあり、現存の関係史料は多くない。また、『竹むきが記』の現存する写本（宮内庁書陵部蔵本・京都大学国史研究室蔵本・東京大学史料編纂所蔵本・神宮文庫本）は、すべて国立国会図書館蔵本を祖本として明治期に写されたものであるから、国会図書館蔵本は、実質的には天下の孤本ということになる。明治四十四年、『竹むきが記』を初めて紹介された和田英松氏は、「其写しはあまり古きものには非ず、享保の頃、堂上家の手写せしものなるが如し。たゞ表紙に竹むきの記と題せるのみにて、著者の名もなく、巻末の識語も見えざれば、其伝来等詳ならねど」とされている^{〔注1〕}。さらに、玉井幸助氏は「現存する国会図書館本はそんな古写本ではなく、江戸時代中期頃の写しと思われ、誤写も多く、読みかねる所も少なくないが、他に伝本のないのは惜しいことである」とされた^{〔注2〕}。大東急記念文庫蔵『禁裡御蔵書目録』には、「竹むきか記 上宗綱卿／下基綱卿・一」とある。宗綱、基綱ともに室町時代の公卿であるが^{〔注3〕}、同『目録』の識語に「右官本万治四年正月十五日禁中炎上之時焼亡^{〔注4〕}」とあり、この書は焼失している。玉井氏の上述の言は、これをさしていわれたものである。両氏と

も国会図書館蔵本について、江戸中期の書写との判断を示されており、これに従うと、『竹むきが記』の日付の明示された最終記事からでも約三五〇年近くを経た頃の書写ということになる。江戸中期書写と思われる一本しか現存しないことは、形態や本文について比較検討する手だてがないということの意味している。これらのことが『竹むきが記』に関係する様々な事項の解明を困難にしている。数少ない史料から、あるいは『竹むきが記』に見いだされる内部徴証から類推していくしかないのが実情である。従前、先学によって様々に提示されてきた考察の結果も、すべてが一致をみている訳ではなく、未解決のまま残されている問題も少なくない。それらの問題は、大まかに次のように整理できるであろう。

(1) 本文校訂

『竹むきが記』には、明らかに誤写と思われる箇所、文意の通じにくい箇所などがある。先述の如く国会図書館蔵本は孤本のため、比較検討する材料がない。したがって、本文の校訂作業は文脈の解釈による推定とならざるを得ない状況となっている。例えば、『竹むきが記』上巻、正慶元年四月の賀茂祭の記事を見る^(註1)。

祭の頃、内へ参る。雑色・侍など、ことに引きつくるふ。菖蒲の匂の袷の衣、生絹^{すじし}の単、朽葉の唐衣、紅梅の二小袖など也。祭の日は警固の姿どもをかしう見ゆ。北陣、黒戸にて御覽ぜらる。殿も候はせ給。女房はさるべき四五人ばかりぞ侍し。女使は小大納言典侍殿にてぞをはせし。

この章段の「女房はさるべき四五人ばかりぞ侍し。女使は小大納言典侍殿にてぞをはせし」の部分は底本(国会図書館蔵本影印、勉誠社文庫)では、

女房はさるべき四五人ばかりぞ侍し。女使は小大納言典侍殿にてぞをはせし

「女房」

となつてゐる。これを次田香澄氏・渡辺静子氏は、「女房はさるべき四、五人ばかりそはしめ、使は」とされ^(註2)、水川喜夫氏は「女房はさるべき四五人ばかり添はしめ、使は」とされた上、「御覧になる天皇のお傍に、で

はなく、行列の出車に乗る女房である」と注しておられる^(注)。岩佐美代子氏は、これを「は」は「侍」、「め」は「女」の誤写として改訂されている。当然、解釈も違ってくるはずである。

あるいは下巻における北山第讀美の記事での次の叙述は、『竹むきが記』執筆の時点を示す証左とされている(後述)。

ことに成就心院は座をさまさぬ不断の勤め、^(げんどう)嚴重の御願なれば、安貞二年十一月に始置かれけるより、今貞和五に至るまで、一時も退転あることなし。(下略)

しかし、この叙述の「貞和五」が、初めから本文に書かれていたのではなく、作者自身の傍注かあるいは後人の傍注が、書写段階で本文に混入された可能性は否定できないのである。このような例は数多くあり、定本と呼べるものは未だ完成を見ていない。

(2) 本文読解

右と関連するが、本文の読解において問題となるのは次のような点である。

① 語句の意味の解明できないもの。

例えば、下巻冒頭部の実俊真魚事を見る。

十二月廿一日に右大臣殿に渡り給。諸大夫・侍などあり。車に女房二人。広蓋あり薄様二、重ね敷く。太刀・^{あまがつ}天児、二小袖五具、この外色くあまた入る。ゑりきのため^{あこめ}相を用ゐる。蘇芳に唐織物の文、龜石疊、帯に置物あり青き単を重ね。(下略)

しつらい、装束などを記録的筆致で記しているが、「ゑりきのため」の「ゑりき」の意味が不明である。そこで「校注」は、『ゑりき』は『ゑんぎ』(縁起)の誤か」とし、「全釈」は「不詳。『ゑりつき』(摩付)の脱か、『恵』と『志』との類似による『しりき』(事力―太宰帥・国守に賜った舎人)の誤写か。今は後者の転用と考え、雑用を勤めた者、としておく」としているが、いずれもこの文脈に適切な解釈とは思えない。

② その語句の示す実態がどのようなものなのか断定できないもの。

例として、元弘元年十一月と思われる「月のくまなき夜」の叙述を挙げる。

月のくまなき夜、女房あまた御供にて蔵人町の方へ成らせ給しに、安福殿・左衛門陣の方ざまなどはるかに見渡されていとおもしろきに、滝口の還遊の声聞ゆ。御まへたちとよぶ声さへをかし。こなたかなた、歌うたひ歩くに、摺らるゝ沓の音までも雲井に冴ゆる心地して、をかしくのみぞ聞きなされし。

視覚と聴覚とをもつて感覚的にその夜の情趣を描写している章段である。安福殿と左衛門陣が同じ方角に見えるような書き方をしているが、正規の位置にあるとすれば、蔵人町からは左衛門陣は見えないはずである。また、滝口の還遊の音が「御まへたちとよぶ声さへをかし」としているものの、「御まへたちとよぶ」が具体的にはどういうことをさしているのが不明なのである。「新大系」は「未詳」とし、「校注」は「御まへたちと『呼ぶ声』。御まへたち『とよぶ（響く）声とも』とする。「全釈」は、『「たち響ぶ」は『たち響む』で、あたりに響くほどの音たてる、の意。名対面（点呼）の声。但、『御前たちと呼ぶ声（女房たちと呼びかける声）』ともとれる」とする。「御前たち」と呼びかける声という解と、「御前」において「響ぶ」声という解との両解があるのである。

③ 『竹むきが記』に登場する人物の比定。

例えば、「二位殿」は、『竹むきが記』中、一四箇所に見いだされる。内訳は、「二位殿」一二例、「柳殿二位殿」（「柳殿」は細字で傍注）、「按察の二位殿」各一例の一四例である。位藤邦生氏は、「二位殿」を同一人物と考え、『竹むきが記』の記述に条件のあう人物として「清水谷公永の女懷子」に比定されている¹⁾。「全釈」では、「按察の二位殿」を除く他の「二位殿」をすべて「今出川藤原公顕（右大臣、從一位、元
応三年二月八日薨）の女（從二位、一条藤原内経公室）であろう」としている²⁾。しかし、「柳殿二位殿」、「按察の二位殿」を除いても、残りの「二位殿」すべてが同一人物をさした呼称とは考えがたい。例えば、暦応元年

暮、実俊が深鍛^{かかたぎ}のため北山第へ行った際同行した二位殿について、「校注」は「西園寺実衡室、昭訓門院春日、大納言為世女、公宗母。勅撰集に計四十首入集。永福門院と協力して実俊の世出に尽力した人。二位の記録は他に見当らぬが、当日記には『二位殿』として散見する」とする。岩佐氏は、渡辺氏に賛意を表しておられる^(注9)。ここは、実俊の深鍛の記事であり、永福門院との関係からも公宗母、実俊にとつては祖母にあたる「昭訓門院春日」に比定するのが妥当であろう。一方、貞和三年初瀬詣の帰路、奈良において、作者は「昔、氏光、春日の宮使にて春日祭に向ひ侍しに、二位殿・我が身道連にて参れりしも、この如月ならんかしと思ひ出でらる」と回想する。この回想に出てくる「二位殿」を、「校注」は、「公宗母春日局」とするが、「新大系」が「俊光室、氏光・名子の祖母寛子か」と比定している祖母寛子と考える方が自然であろう。氏光健在の頃（氏光は『尊卑分脉』によると、公宗とともに建武二年八月二日誅されている）、作者と公宗母昭訓門院春日との関係がそこまで親密になっていたとは考えにくい上に、氏光・名子という日野家の姉弟と同道するにふさわしいのは、西園寺実衡室である春日局よりも彼らの祖母である寛子であろう。このように、同じ呼称でも、別人をさしていることもあり得ることから、『竹むきが記』の文脈を丹念に辿った上でそれぞれを比定していかなければならないのである。

④ 文脈の辿りにくい箇所。

例として、元弘二年三月、八幡臨時祭の記事を挙げる。

三月十三日、八幡の臨時の祭なり。申の時にはじまる。女院御方、仁寿殿にて御覧せらる。御木丁出さる。清涼殿、二間の中開けあはせて女房達見る。使、堀川宰相中将、舞人陪従、常のごとし。時刻五竜也。公卿、三条大納言・西園寺大納言殿・殿大納言殿・帥中納言・徳大寺中納言・富小路宰相中将など也。^(下略)

「時刻五竜也」の意が不明のため理解を妨げている。「八幡の臨時祭」つまり石清水臨時祭は、「三月午

日ニシテ、三午アルトキハ中午日ヲ用_ニ、二午ノ時ハ下午日ヲ用_ニル」(『古事類苑』『石清水臨時祭』)とある。元弘二年三月十三日壬午は、この月の中の午の日にあたる。『花園天皇宸記』には、この日の条には記載事項がなく、十一日に「今日石清水臨時祭試楽并御馬御覧_{云々}」とある(注1)。他の史料にも十三日についての記載事項は見いだせない。女院や女房が見物する気楽さや、天皇の御褌や御幣を拝する一連の行事についての言及がないことなどから、「申の時にはじまる」以下は十一日の試楽の日のことではないかと考えることも可能である。しかし、『花園天皇宸記』十一日条には、続いて後伏見院が長講堂へ御八講聴聞のため御幸し、西園寺大納言や帥中納言も御幸に供奉していることがみえるため、『竹むぎが記』の記事を試楽の日と考えることは無理ということになる。とすれば、女院や女房たちが見物したのは、儀式を一旦終えた後の舞御覧ということになるかもしれない。あるいは「時刻五竜也」の前後で文が切れて、日が変わっているかとも考え得るが、不明というしかない。

本文読解においても、本文校訂と共に諸説、見解の相違が見られる箇所は多い。

(3) 作者周辺の環境(作者自身に関する問題、作者の人間関係、宮廷における人間関係等)の解明
先に例示したとおり、作者自身に関することも不明なことが多い。作者の女房としての経歴も、光厳院に仕える以前に誰に仕えていたのかという問題については、広義門院(和田氏)、花園院(伊藤敬氏)_(注2)、後伏見院(岩佐氏)の諸説がある。その他にも、作者と氏光は同母姉弟かという問題、『竹むぎが記』にも見える「志葉」(芝禪尼)は作者の生母か、それとも作者の妹宣子の母であるのかなどの問題も種々検討されてはいるが(注3)、解決をみてはいない。

(4) 作品の背景となる中世における宮廷社会の生活文化の解明

例えば、中世における「乳父」・「乳母」の地位やその職に対する意識などの実態は、明らかにされているとはいえない。作者の祖父日野俊光とその室寛子は、後伏見院、花園院の「御乳父母」であり、作者の父資名も、

光厳院の「御乳父」であつた。したがつて作者は、光厳院とは「乳父子」の關係にあつたのである。当時の宮廷の「御乳父」への意識が少しでも明らかになれば、作者と後伏見院や花園院、光厳院との親疎の情を理解するのに役立つであらうし、『竹むきが記』に記された作者の三人の上皇への心意に迫る助けとなるであらう。

これらの問題は、一氣に解決できるものではなく、本文の丹念な読み込み、周辺史料の博搜による傍証の蓄積などを通じて推断していくしかないものである。

(5) 作品論

そして本来はこれらの点を踏まえた上で、『竹むきが記』の作品論に立ち入ることになる。まず、現存の『竹むきが記』は、上下二巻の形態となつてゐる。早く室町時代にはすでに上下巻に分かつた形態があつたことが『禁裡御蔵書目録』から確認できることは先に触れた。『竹むきが記』は当初から上下二巻の形態であつたものであらうか。上巻の記載期間は、元徳元年（一三二九）十二月から正慶二年（一三三三）六月中旬まで、下巻のそれは、建武四年（一三三七）十二月から貞和五年（一三四九）七月までである。上巻末尾から下巻冒頭までの間に約四年半の隔たりがあることから、中巻の存否について様々な考察がなされてきた。その中断期間に、作者の夫西園寺公宗が後醍醐天皇方から謀叛の疑いをかけられ斬罪に処されている。このことから、中巻の存否は、『竹むきが記』の執筆動機、それと直結する主題などの作品論とかかわつてくる問題と考えられるからである。

先の和田氏はこの点について次のような見解を示された^{（三）}。

此書今伝はれるは二巻なれど、上巻は正慶二年にて終り、下巻は建武四年十二月に始まりたれば、上下の間三年ばかり脱せり、もとは三巻なりしが、いつの程にか、中巻は散逸せしものならん。

もともと上中下と書き継がれていたもののうち、中巻が散逸したのではないかという推定である。これに対して玉井氏は、

上下の間に三年ばかり欠けているのは、夫公宗の非業の死を中心とする建武年間で、書くに堪えなかつた為

であろうか、それとも中巻もあつたのが散逸したのであろうか。

とされた^(注1)。完成後の散逸の可能性とは別に、書かれなかったという可能性を提示されたものである。玉井氏は、その理由として、作者にとって公宗の斬罪があまりに凄惨で深刻な出来事だったため何年経っても書くことができなかったのではないかと考えられたのである。また、書かれなかった理由に作者の周囲の人々に対する配慮を推定されたのが、位籐氏である^(注15)。

名子が日記の中で公宗の死を悼めば、当時の恨みを書かざるを得ない。だが、貞和五年の時点では、そのことはできなかったわけである。天皇、上皇、広義門院その他の人々、尊氏に対しても、公宗の思い出を記すことは憚られたのだ。更にもう一つの理由を考えるなら、かつて公宗の陰謀を密告した竹林院公重が、この時正二位内大臣として北朝に仕えており、この人物への配慮も考えられる。氏光の場合も、その死を悼むことができなかった理由は、公宗の場合と同様である。実俊のため、ただ一つに実俊のためであった。^(中略)断腸の思いがなかったわけではない。蓋し、それを公表することは許されなかったのである。この考えに立てば、「竹むきが記」中巻は、書かれなかったと考えるのが適當である。理由については、もはや説明は不要であろう。或いはもし書かれたにしても、決して人の目に触れることなく、名子自身の手によって篋底深く秘されたか、焼き捨てられたことであろう。

中巻のない理由を、心情的な面ばかりではなく、「実俊をとりたててくれる人々」への憚りから公表できなかったのだと考えられたのである。この所説に概ね同調しておられるのが、福田秀一氏、水川氏、藤田一尊氏などである^(注16)。

以上のように、中巻が書かれていたにしても書かれなかったにしても、現在、大方の意見は、『竹むきが記』は作品の完成時点で、すでに中巻にあたる部分はなかったという推定が支持されていると考えてよいであろう。さらに、ではなぜ作者は『竹むきが記』を書き残したのか、という執筆動機の問題がある。このことに中巻の

存否を関連づけて考えられたのが、松本寧至氏である。氏は、「日記文学の多くに愛する人との死別がその動機となつてゐることは事実であろう」とされた上、次のように述べておられる^(註)。

このように『竹むきが記』上下を構想的にながめると、『太平記』の記事のように、公宗の存在、というより公宗の死と実俊の誕生が、その中心にすえられ、それによつて、上巻に返り、下巻に発展して行つたことが考えられる。この事件は『太平記』のみにあつて『竹むきが記』にないが、実はこれらが上下という作品の核になつてゐるのである。しかし、それはやはり書かれなかつた。いや書けなかつた。だが、書けなかつたことが、そのまま上巻下巻を要求した。書かれなかつた中巻ともいふべき空白のために、上下が書かれたともいえるのである。

つまり書くことができなかった公宗の死が、『竹むきが記』執筆の動機であるところであつておられるのである。渡辺氏は、『竹むきが記』の執筆動機・執筆意図について、

これは長い間の作者の苦悩に対する報酬という意味だけでなく、謀叛者として誅せられた公宗の無念をはらそうとする女心と一生の幸福を踏みにじられた女の執念ともいふべきもののあらわれであろうか。要するにそれは亡夫の供養をしながら、こうした世に弄ばれた女の、いや人間の、生死が何であるかを、身をもつて会得し得た理性的な美しい女性の生き方のサンプルで、この辺を意図していることは明らかである。(中略)

成立年代の貞和五年は実俊が正月五日に正三位に叙され、三月権中納言に昇進している。ここまで育てればもう心配はない。この安心感と喜びに当たつては、深い苦悩の過去も笑つて回想し話しあえるのではないか、重要事項の記憶に新たな事項を書きそえて、かけがえのない人生体験を残してみよう、天下晴れて供養のできる公宗の菩提を弔う一つの方法でもある。というような気持ちの結集が、この作品となつてあらわれたのではないかと推測する。

とされた上、「女として救われた作者を配して、最後の雨の無量光院の花見で終わらせている」と作者が最終的

に救われ、実俊の順調な昇進、つまり西園寺家再興のよろこびを書き留めようとしたものだとしておられるのである^(註3)。しかし、作者はほんとうに救われた思いで『竹むきが記』を記しているのであるのか。その点に首肯しがたいものがある。

また、小島明子氏は、反復表現から『竹むきが記』の主題意識を探り、光厳院への思いを読み取るうとしておられる^(註4)。

本記が、西園寺家の名譽の記録であることは疑いの余地がない。^(中略)ただ、西園寺公宗・実俊と名子自身の榮譽は、常に持明院統皇室、中でも取り分け、光厳天皇（光厳院となつてからも含めて）と歩みを共にして描かれていることを小稿の各章で述べて来たつもりである。^(中略)長い人生の中で体験したことの何を書き残し、何を切り落とすかは、日記の文学性を考える上で重大な示唆をあたえてくれるだろう。すると、「持明院統の、特に光厳天皇（院）の治世と、その中で重用された名子自身と西園寺公宗・実俊の甲斐ある姿」を残したいという意図が読み取れはしないだろうか。^(中略)従来の指摘以上に、光厳院に対しての名子の強い敬愛を、私は本記に認めるし、また一方、公宗との愛の過大評価に疑問を抱く。西園寺公宗との逢瀬は、本記によれば元弘二年（一一三二）二月に始まったらしい。その公宗は建武二年（一一三五）六月に罪に問われたので、三年余りの夫婦であった。むろん忘れ形見、実俊の存在は大きいが、それでも、おそらくは幼少時より見知っており、典侍として親しく仕え、また名子晩年まで接触があった光厳院への思いはそれに劣るものでないと考えているのである。

たしかに、光厳院の御代をことさら荘嚴なものとして記したいとの作者の意図を読み取ることはできるが、それは夫や子に対する情とは異質のものであろう。

岩佐氏は、『竹むきが記』の、特に下巻を「西園寺公宗正室の手によつて書かれた、女性の『管見記』であると考えたい」とされた上で、次のように執筆意図・主題について述べておられる^(註5)。

本記の根本的な性格は漢文日記と同様の記録性であり、女流日記一般に期待される如き文学性は付随的なものにすぎない。名子にとっては公宗・実俊に代表される西園寺家名誉の記録、これを書く前提としての自らの女房生活と結婚生活の記録が、身にかえても後世に伝えたい最重要の主題であったのである。

おそらく「家の日記」ということを意識して考えられたのであろう。しかし一方、氏は別の機会に、

本記に記されている事柄はほとんどすべて、宮廷生活にまつわる自己の名誉の記録、西園寺家の名誉の記録にすぎない。女流日記としての独壇場であるべきはずの、動乱の中での愛と死という好材料を生身で体験しながら、なぜ作者はこのようなものをしか書けなかったのか、いや、なぜこのようなものをこそ現実に書いたのか。本記の執筆動機の根底をなすものは、理不尽に誅せられた夫西園寺公宗と自分との正当な愛情関係の確認であった。

とも考えておられるのである^(註)。記録的叙述を裏で支えている作者の心情を看取されてのものであろう。そうであるとすれば、表面的には、西園寺家の名誉、自らの名誉を記録してただけのように見えても、作者の本当の意図、心意がただそれだけにあるとは考えにくいことになるのではないだろうか。

おそらく作者は、心底から沸きあがってくる「何かを書き残したい」という欲求に突き動かされて、『竹むきが記』という作品を書き記したのである。その「何か」が、己の半生にかかわるものであったことも確かである。それは、水川氏が、執筆意図について提示された、

執筆意図はと尋ねられれば、構想が明確でないのと同様に、取りたてて応え得るようなものはないと答えるより仕方ないようである。少なくとも、幾つかの古典女流日記・紀行文のように、作者が書きたく思い、よりよく書こうとした意図のようなものは見出すことが出来ない。(中略)強いて言えば、書かされているような恐れを感じながら、なお、目につき心に留まる出来事を、目標をしぼらず、書き留めておこうとしたというのが執筆意図となるのであろうか。

といったとらえ方^(注2)をされるようなものではないと考える。『竹むきが記』の構成や叙述を検討すると、作者がただ漫然と書き綴っていただけであるということは考えにくいのである。『竹むきが記』に公宗の死について直截には一切記すことをしない作者が、それでも、回想を日記として綴るという作業において公宗の死と向き合い、多少なりとも己の半生を客観化できたのではないだろうか。『竹むきが記』執筆という行為は、作者の意志的な営為であるにとらえられるべきであろう。

(6) 成立論

『竹むきが記』の記事は日付が明らかなものによる限り、元徳元年（一三二九）十二月に始まり貞和五年（一三四九）七月に終わっている。上下巻の間に約四年半の空白の期間がある。『竹むきが記』がいつ成立したのかについては、日次に即時的に書かれていったものの蓄積なのか、一時に一気に書きあげられたものであるのか、上巻下巻の成立を別々のものとして考えるのか、さらに、その場合は上巻と下巻の成立の先後についてはどうとらえるのかなどの問題がある。

作者の没年は、延文三年（一三五八）であるから、『竹むきが記』の成立がそれを下ることはない。早く和田氏は、この点について、

この書は、其さ大凡年次を追うて記載したれど、毎日かきつぎせる日記にもあらず、また其をりくに記しつけたるものにもあらず、後より記憶のまゝを何くれとかきつゞりたるものなり。^(中略)然らば、此書のなりしは、いつの頃なりしにか、下巻の末尾は、貞和五年にて筆をとどめ、且つ康永元年北山殿のさまをかける条にも、

ことに、成就心院は、座さまさぬふたんのつとめ、けんてうの御願なれば、安貞二年十一月始めおかれるより、今貞和五にいたるまで、一時もたいてんあることなし。

とあるによれば、貞和五年に著したるものなり。

とされた^(註3)。『竹むきが記』が後年の回想によつて書かれたものという点、最終記事の貞和五年、本文の「今貞和五」に注目された点については、現在においても諸説の基礎的な共通理解となつてゐる。

和田氏は、下巻の最終部に置かれた二首の和歌の内容から、「其頃かきあつめたるものなる事を証すべし」とされ、貞和五年に上巻下巻とも書かれたと考へておられるようである。しかし、約二十年にわたる記載期間は一気に書き上げるにしては長すぎることに、上巻の最後尾に「いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り侍べきにやとぞ」との跋ともとれる一文があることから、上下巻は別々に成立したと考へるのが一般的になつてゐる。次には、上巻と下巻とはどちらが先に成立したのかという問題を考へなければならぬ。諸説を検討するに、上巻が先に成立し、その後下巻が成立したとの推定が優位である^(註4)。

福田秀一氏は、「上巻が一旦先に成立してゐると見る方がよささうでもある」とされた上、上巻の一応の成立を公宗処刑以後、しかも、

公宗処刑の痛手からいくらか立直つた作者が、その幸せであつた日々への思出に、自分をそれ（公宗との出会ひ）へ導いた宮廷生活やその中で晴れがましかつた日々の記憶をも交へて一篇の回想記を執筆するといふことは十分可能性がある。（下略）

と考へられた^(註5)。さらに、上巻の下限については、

下限は、下巻の冒頭が建武四年十二月となつてゐる以上、それ以前と考へるのが順当であらう。即ち、上巻の執筆は、上巻一旦成立説に立つならば、建武三、四年の頃といふことになる。

とされた。下巻については、和田氏の所説に疑問を持たれてゐる。すなわち、

末尾の部分で最終年たる貞和五年のことを記すに當つて、「貞和五のむつきに……」と言ひ、更に「その年の春、除目に……」「同じ春の頃……」と書いてゐることである。これは、前引の「今、貞和五に至るまで……」といふ言ひ方とは、どうもそぐはないやうに思はれる。もしこの末尾部分が貞和五年の執筆であるなら

ば、「今年」「この春」といふやうな言い方をしたのではあるまいか。右のやうな書き方は、この部分の執筆が貞和五年ではなくて、少くとも翌年以後であることを示すやうに、筆者には思はれる。尤も、さう何年も後のことではなく、恐らく一、二年乃至数年の後であらうが、少くとも貞和五年ではなく、やゝ後であることは誤あるまい。たゞ、実俊が権大納言に進んだ文和二年（貞和五年の後四年）より前であることは確かである。

さらに、「下巻に書き継ぎ乃至二段階の成立」を想定され、

その境目は、暦応五（康永元）年の条の末尾ではないかと思ふ。即ち、「今、貞和五……」と書いた直後のこの部分までが貞和五年に一旦成立し、「康永三年に改まりぬ」以下末尾までは、数年後の書き継ぎではないかと思ふのである。康永二年の記事がないのもさうした事情によるのではあるまいか。

と推論しておられる。松本氏は、福田氏の所説を支持しておられるが、上巻の成立年次については「建武三年の中頃から四年十二月までの一年半くらいが範圍だと思ふ」とされ、やや範圍を狭めて考えておられる^(註36)。福田氏と同様に、下巻を二段階の成立と考えられたのが、渡辺氏である^(註37)。氏は、「上巻、下巻の間に欄筆があつて、一部出来上がつていた上巻をうけて、下巻が後に書きつがれ、最後に総仕上げが施された」という成立過程を想定された。上巻の成立時期については言及されないが、「一応上巻は、次の巻との間に断絶をもっていると考えてみたい」とされている。下巻については、康永四年の光嚴院御幸始に実俊が供奉した記事で実俊を「三位中納言」（康永四年当時実俊は中将、中納言への任官は貞和五年三月）と呼んでいることから貞和五年以後に書かれたと思われること、康永二年の記事がないことなどから「下巻においてもこの辺で一たん筆を折り、あとを書き継いだ形跡がある」と考えられ、「下巻の後半は貞和五年において書かれ、下巻前半は康永元年八月頃から同二年あたりで一たん欄筆せられていた」と推定しておられる。

これに対して、上巻を前後に二分して考えられたのが、前田美稲子氏である^(註38)。氏は、「この日記の最初の

制作意図は作者の宮廷生活の思い出にあった」とされ、それが「元弘三年の記事は、公宗と作者との愛の記事に終始」することから元弘三年正月以後の「制作意図」の変化を読み取り、「こゝで一たん筆は擱かれた」と想定された。そして、上巻の後半はそれよりも幾年か後に書かれたものと考えられ、「その記述された時点は、前半は元弘三年六月から建武二年六月までの間であつて、作者が宮廷における若い日のみずからの姿を書きとめようと意図して制作されたものと考えられる」と結論しておられる。下巻については和田氏の所説を踏まえておられるようである。

以上のように、先学により様々な推論が提示されているが、ほとんどが定説たり得ることもないまま未解決の問題として残されている。それは、ひとえに、『竹むぎが記』の本文校訂の困難さによる本文読解の不十分なこと、周辺史料の不足による傍証の少なさなどによるものである。昭和六十年、岩佐氏が、『竹むぎが記』研究の課題として挙げられた、

本文の丹念な読解、登場人物の慎重な比定、作者の女房経歴・婚姻形態・家門意識等への時代背景をふまえた深い理解は、本記のみならず女流日記文学研究一般に必須の前提である。

という提言は^(註1)、まことに指摘のとおりで、『竹むぎが記』その他の女流日記文学を研究する上で、常に心がけておかねばならないことである。しかし、その点についての研究は、現在も決して十分に進んでいるとはいえない状況のままなのである。

注

1 「竹むぎの記について」(『史学雑誌』第三二編第六号、明44・6)。なお、和田氏は、この論文で、書名について「同(帝國)図書館の目録には、竹むきく記とあれど、のの字の写しくの如く見えたるより、誤りにして、竹むぎの記を正

しとすべし」としておられるが、同年八月の『史学雑誌第一』では「竹むきが記」と訂正され、後、昭和十四年に当該論文が再録された折にも「竹むきが記に就いて」と改訂されている。

2 『日記文学の研究』（「各説」二三「竹向が記」 塙書房、昭56）

3 上巻を書写した宗綱については、『公卿補任』永正十五年（一五一八）に、「散位 准大臣 従一位 松木同宗綱七十四
八月廿四日准大臣可令朝参之由宣下。征夷大将军御執奏云云。月日出家。法名玄空。（十月廿八日下国。^き）大永五年六
月三日於勢州薨（八十一才云々）。とある。これによると宗綱は、文安二年（一四四五）の生誕である。また、下巻を
書写した基綱については、『公卿補任』永正元年（一五〇四）に、「権中納言 従二位 姉小路同基綱六十四 後三月十六
日任。四月廿三日卒於飛州。法名常心。」とあり、基綱は、嘉吉元年（一四四一）の生誕である。

4 『竹むきが記』本文は、岩佐美代子氏校注『竹むきが記』（『新日本古典文学大系』51『中世日記紀行集』 岩波書店、
平2 所収）による。以下「新大系」と略称する。ただし、振り仮名は適宜取捨する。以下同じ。

5 次田香澄氏、渡辺静子氏校注『うたゝね 竹むきが記』（笠間書院、昭59）。以下「校注」と略称する。

6 『竹むきが記全釈』（風間書房、昭47）。以下「全釈」と略称する。

7 『『竹むきが記』の特質』（『中世文芸』44、昭44・7）。位藤氏は、「二位殿」の条件として、「上巻・下巻を通じて登
場する人物」、「名子よりかなり年上であるらしく、名子は彼女を深く信頼していた」、「諸寺諸社への参詣も、二位殿
と一緒にいる」、「この女性は宮仕生活の経験もあり、光厳天皇の即位の儀式にも奉仕している」、「永福門院と広
義門院の両方の御座所に自由に出入りできる」、作者の父資名の没後実俊が身を寄せている、拝賀の折実俊が「一条今
出川にある二位殿のさとを中宿」にしているなどを挙げておられる。

8 水川氏は、「二位殿」を今出川公頭女とする理由について、「今出川殿を里とし、実俊を後見人のように世話し、西園
寺家の行事には暫々顔を出していることから考えて、西園寺一族の出身で誰かに嫁いだ者と思えるからである。しかも、
この『女』は、永福門院と叔母・姪の、また、広義門院と従姉妹の關係にあつて、本日記中の、その行動にふさわしい。

更に、内経公は正中二年十二月二日に三十五歳で他界しているので、この『女』は当時寡婦であり、内経公がこの正慶元年に生存しておれば四十二歳であつて、この『女』は四十歳近いと思われ、二十歳代の著者に対して指導的後見的立場にあつたことは充分考えられるところである」とされた。

- 9 『竹むきが記』私注(下巻)、『国語国文』第四一卷第三号、昭47・3)。なお、岩佐氏は、「新大系」脚注においては、「二位殿」を「祖母寛子か」とされており、不審である。

- 10 『花園天皇宸記』(『史料纂集』古記録編)

- 11 「室町文学史私注 二 序の章——『竹むきが記』の周辺——」(『藤女子大学国文学雑誌』21、昭52・6)

- 12 岩佐氏は、『園太暦』文和元年二月十六日条に「実俊卿先々尽渡住芝禅尼居云々」とあることから、芝禅尼を「名子の生母と目してよいのかも知れない。尊卑分脈には俊光の弟、資名の叔父頼宣(日野別当、尊勝院)の女子に、資名室、氏光母がある。氏光と名子との親しさから二人を同母と考えれば、この頼宣女が芝禅尼であるかとも思われる」とされた(前掲注9論文)。また、伊東明弘氏は、氏光と名子を同母(頼宣女)とされているが、芝禅尼については「名子の生母とは考えたくない。何かよそよそしい感じがする。むしろ末の妹の従一位宣子の生母に比定したほうが面白いように思う」とされている(「竹むきが記作者の一族をめぐる」『慶応義塾志木高等学校研究紀要』第五輯、昭50・3)。

- 13 前掲注1。

- 14 前掲注2。

- 15 前掲注7。

- 16 福田秀一氏「竹向が記試論——特にその成立と史的意義について——」(『武蔵大学人文学会雑誌』第4巻第1号、昭47・

7)。水川氏「『竹向が記』の構想と執筆意図」(『女流日記文学講座』第六巻『建礼門院右京大夫集 うたたね・竹むきが記』勉誠社、平2 所収)。藤田一尊氏「『竹むきが記』の世界への窓」(前掲、「女流日記文学講座」第六巻 所収)。

それぞれの所説には、多少論調に違いがあるが、基本的には、位藤氏の所説に賛意を示されていることになろう。

- 17 『中世女流日記文学の研究』(第五章「竹むきが記の研究」二「竹むきが記」の形成) 明治書院、昭58)
- 18 『中世日記文学論序説』(第三章「鎌倉後期の女性の日記」第一節「竹むきが記」考) 新典社、平1)
- 19 「『竹むきが記』の主題意識―反復表現の検討―」(『国語国文』第六一卷第九号、平4・9)
- 20 『京極派歌人の研究』(第三章「後期の歌人」第四節「竹むきが記作者と登場歌人達」) 笠間書院、昭59)
- 21 『宮廷女流文学読解考 中世編』(「中世の三女房日記」) 笠間書院、平11)
- 22 前掲注16、「『竹向が記』の構想と執筆意図」。
- 23 前掲注1。
- 24 下巻が先に書き始められたと想定するのは、白水直子氏である。「『竹むきが記』の成立について―特に執筆態度を中心として―」(『甲南国文』第36号、平1・3)。氏は、過去回想助動詞「き」と「けり」の用いられ方を根拠にした作者の執筆姿勢などから「同記の執筆の中心(動機)は「西園寺家再興を許る厳格な『母としての姿』」の下巻部にあると考える時、あるいは下巻から書きはじめたのではないかという推測が可能になる」とされた。また上巻前半部に「自己の主観的な判断や感情の介入は皆無である」と断じておられるが、むしろ記録的な叙述の裏に作者の心情を見てゆくべきであろう。特に『竹むきが記』の場合、記事の取捨選択といった別の角度からの考察も含めた総合的な判断が必要である。氏の推論は、組立に少々無理があり首肯しがたい。
- 25 前掲注16、「竹向が記試論―特にその成立と史的意義について―」。
- 26 前掲注17(一「概説」)。
- 27 前掲注18。
- 28 「『竹むきが記』の形成」(一)「『名古屋自由学院短大研究紀要』第四号、昭47・2)
- 29 「日記・紀行研究の概括と展望」(『中世文学研究の三十年』 中世文学会、昭60 所収)

第二節 『竹むきが記』再評価の視座

『竹むきが記』は、女流日記文学の掉尾を飾る作品である。松本寧至氏は、『竹むきが記』をもって女流日記文学が文学史の表面からしばらく消えてゆかねばならなかった事由について、日記文学がその文学性を失ったからであるとされ、次のように述べておられる（注し）。

日記文学は日記から発展して、自己凝視、自己の再建ということで、単なる事実の羅列ではなく、文学的創造をなし遂げた。それはむしろ記録性から遠ざかることで果たされた。（中略）しかし、めまぐるしい変動に対応するためには、それは行動の記録となり、表面的にならざるを得なかった。漢文日記から離れることによって成り立つはずの日記文学においても、やはり行動の記録になり、表面的な事実の羅列になり、自照の深さにおいて中古のそれに及ばなくなった。自己の心の内面を描くというより、華やかな行事や、儀式や遊樂の記事に多くの筆を費やすようになってきた。それが作者にとつては印象的であり、自己の存在を確認することであり、後世に語り伝えたい事柄であるにしても、文学性は希薄になって行った、といわねばならない。（中略）一体に日記文学が衰弱してくるのは、おもなる作者である女性の立場が拡大され、自己表現の場が作品ではなく行動に託されるようになったからでもある。（下略）

さらに、

日記が記録であり、日記文学も事実をもとにして成り立っているが、日記が日記文学となるためには、事実をそのまま羅列するのではなく、その対象に作者の主観がはたらき、事実の選択と掘り下げがなされなければならない。いいかえれば記録性から遠心的になることである。まったく遊離するのではなく、緊張関係を保ちながら、どれだけ遠ざかるかである。この緊張がゆるむと文学性は低下する。事実の記録というのは、

男子の官僚の漢文日記の姿にもどることであり、官僚の記録する「公」的なものにかえることであるから、「私」の世界を描く日記文学としては、その表現の意味を失うことになる。(中略) 私的な世界を掘り下げることによって文学性を獲得した日記文学は、公的なものをとり込むことによって、その文学性を失うことになるはずである。(中略) 中世になると伝統的な宮廷女流日記は、自己凝視の精神が厳しさを失って、羅列した事実によりかかって自己を表現するようになり創造力を失ってくる。

とも言われている^(まじ)。記録性への回帰が、創造力を失速させ文学性を希薄にしているという論旨である。氏は『弁内侍日記』、『中務内侍日記』について、「その日その日の出来事を記録していくことで、作者は自己の存在を確認していたのであるが、それは日記文学の中心となる自己凝視という点で、中古のそれらに比べるとかなり平板な表面的なものになっていることはいなめない」としておられる^(まじ)。それは、そのまま従来からの、『竹むぎが記』への評価ともいえるのである。

それに対して、位藤邦生氏が「中世の女流日記文学に見られる、こうした記録への接近を、どのようにとらえるかは、中世女流日記を文学として評価してゆく上で重要な課題となるであろう」^(まじ)とされた如き中世という時代に産み落とされた作品として、その特質をとらえなおし、新たな文学性の評価をしてゆこうという動きが生まれている。それは松本氏の言われる「事実によりかかって自己を表現する」ことの意味の問い直しということになるう。

本論では、如上の課題を踏まえて、『竹むぎが記』そのものに固有の文学性があるのだという立場で論を進めたい。一見記録的叙述の羅列としか見えない表現の裏に隠された作者の真情をさぐることにより、事実の記録(いいかえれば叙事)を重ねることによる叙情の表現が作者の選んだ方法であったことを明らかにしたい。叙事も重要な叙述の方法としてとらえ、きわめて記録性が強いが、それも一つの文学表現であると考えてみたいのである。『竹むぎが記』に記されている事柄が表面的には記録に偏しているとしても、それがとりもなおさず作者の自己

凝視が不足していることの証左にはならないという点も明らかにしたい。作者の自己凝視が直截に『竹むきが記』に表現されていないからといって放置するべきではなく、作者を執筆という営為にかりたてたものの正体を見極めてゆこうとすることこそが、『竹むきが記』の正当な評価へとつながってゆくのではないかと考えるからである。

日記とは、ある程度他者を意識しつつも、ある面では他者を拒むものである。道綱母が『蜻蛉日記』に綴った己の心情は、現代の我々から見てもかなりあからさまなものを含んではいるが、それでも道綱母の本当の姿がすべてさらけ出されているのかというと、そうであるともそうでないとも簡単には判断を下せないものである。ましてや、現存する下巻においても公宗の事件を露わにしないことによつてうかがわれるような執筆姿勢で貫かれた日記『竹むきが記』であつてみれば、作者が他者に知られたくないと思つてゐる部分はかなり大きいと考えなければならぬ。それでも作者がこの作品を残したのはなぜか、己の何を書き残したいと考えたのかについては、書かれてゐる部分から推断してゆくしかない。そのため、公宗の斬罪事件があつたればこそ、『竹むきが記』は今の形態、今の表現方法をとつて成立したということを本論の前提としたい。したがつて、中巻はおそらく書かれなかつたであろうと考えておくことにする。先述のように下巻においても、作者は公宗事件について直截に触れることを、慎重に回避してゐると考えられるからである。さらに、謀叛の咎で誅殺された公宗の遺児を抱えて、世間を憚りつつ、いわば逼塞の時を過ごさなければならなかつた作者が、その時期に筆を執り得たとも考えがたく、手控えの類も不備であつたはずである。後年、記憶を基に回想するにしても、この時期に関してはかなりの困難を伴つたと推測されることも理由の一つである。

さて、作者の意図をさぐる手段としてまず想定されるのは、記事の取捨選択からの接近である。そこで注目されるのは、作者の生きた時代の実相（史実）と『竹むきが記』に描かれてゐる記事との隔離である。その際に観点として設定され得るのは、記事の取捨・記事の内容、これには史実に忠実な場合と日付や記事内容に改変が施

される場合（齟齬）との二つが考えられる、さらには構成法として、『竹むきが記』の記述上も日付の順に混乱が見られる箇所などである。これらについて、細かな検討を加えることにより、作者の意図的操作というものを読み取りたい。

次いで考えられるのは、『竹むきが記』の文学性について、その表現様式からの接近である。『竹むきが記』の表現様式の特異性から、それはまた作者の意図をさぐることにもつながってゆくのではないかという予測を立てることができる。この作業は、『竹むきが記』という作品の記録的叙述への再評価の試みとなるはずである。

さらに、『竹むきが記』の文学性を支えるものの一つとして、作者の仏道修行への傾心をとらえたい。渡辺静子氏は、作者の道心について、

鎌倉末期に観念されていた一般教養的無常観は、作者において、家門意識という現世執着とそこから脱出しようとする宗教志向との葛藤によって、人生探求、自己確立の立場から飛躍し、道念として人間開眼へ赴く契機をなした。つまり名子の無常観念は、その心象の中で燃焼され、人間のあるべき真の姿をみつめる内なるものによって、開眼し啓示されたといえる。それは『竹むきが記』最後の「雨の無量光院の花見」における表白がこのことをよく示している。

とされ、下巻最後の「鷹司の老人」との贈答歌に、「名子の開悟」を見いだされている^(註5)。

実俊が貞和五年正月の除目に、中将中納言となつた時、この世に思い残すことのなくなった名子の安堵の心の現れである。これこそ名子が自らの実践行によって、開悟に近づいた心境を歌ったもので、桜の花を楽しむながら、それに託して人生を語っているこの贈答歌には、すべてを放下して、生を楽しむ境地に近い、達観的心境がうかがえる二人の老人の姿が、雨の中に彷彿と浮び上がってくるように、描き出されている。^(中略) 禅的草庵の悟道にも、中世草庵の思想にも似て、人間愛の暖かさを内奥に秘めた、名子の悟道精神の到達地点であつたのである。

しかし、そのような心安らかな人生を楽しもうといった境地に作者は本当に到達しているのだろうか。そこに、解放された作者の姿が見いだせるのだろうか。実俊が中納言に直任されたとはいえ、家督相続を争う相手公重はこの時点ではいまだ北朝に仕えており、同年九月には内大臣になっている。さらに、先述のごとく文和元年には、実俊は北山第を公重に譲り芝禅尼の許に身を寄せているのである。これらのことを考えれば、政情は決して安定していたとはいえず、作者が安堵できるにはいささか心許ない状況であつたはずである。本論では、作者の到達した心境とはどのようなものであつたのかについて考察を加えてみたい。この問題においてこそ作者の「自己凝視」の姿を浮かび上がらせることができるであろう。

最後に『竹むきが記』の成立について考察しておかなければならないだろう。ただし、本論では具体的な成立の時点の想定には拘泥することなく、執筆の契機となつたにちがいない公宗の斬罪の実相を確認して、作者がその後どのように生きていったのか、その心底をさぐることにより作者の思いが回想に向かつていく起点を想定したい。その心理的回路をおつてゆくことで成立過程を推定したいと考えている。

作者が言うに言われぬ思いを抱えて生きていったことは誰しもが否定しないであろう。その己の思いに、作者がどのように向き合い、そしてどのような欲求に突き動かされて『竹むきが記』という作品を書き綴つたのか。いかにすれば作者の心の深奥に迫まれるのか、試行錯誤の一段階として本論をまとめてみたいと考えている。

中世という時代に生きた女流日記文学の作者たちの中古とは違った文学的営為のあり方について、岩佐美代子氏は次のように評し、研究者へ提言しておられる⁽⁶⁶⁾。

執筆者である女性達もまた、実務者としての客観的視点、論理的思考表現を身につけるように成長して来ており、「公」の中の「私」である自らをはつきりと見すえつつ、「体験に基づいて自己を再発見」(松本氏)する日記文学を、中古とはまた違った形で創り出したのであろう。(中略)「私」の世界における自己凝視に徹した中古日記とは違う世界が生き生きとくりひろげられている。そこに描出された種々の人間模様は、中古日

記の世界を襲つて貴人との悲恋をえがく『うたゝね』のそれよりもはるかに生彩がある。纏綿たる美文をもつてひたすら自己の内面に食い入って行く中古女流日記の世界が、いかに文学的に高く、深くとも、時代は変り、もうそこへは戻れないのである。強いて戻ろうとすれば『うたゝね』の恋のような観念的自己陶醉的なものにならざるを得ない。研究者も読みなれた中古日記の郷愁に固執せず、新たな視点から虚心に中世女流日記を見直し、評価をも批判をも行わねばならないであろう。

右の氏の「中世女流日記研究への一提言」を肝に銘じつつ、また励みとしながら『竹むきが記』の本質的な評価へ向けて考察を重ねてゆきたいと思う次第である。

注

- 1 『中世女流日記文学の研究』（序論「中世女流日記文学序説」第一章「日記文学の本質」 明治書院、昭58）
- 2 前掲注1（序論、第二章「中世女流日記文学論」）。
- 3 前掲注2。
- 4 「女流日記文学における『竹向が記』の位置」（『女流日記文学講座』第六巻『建礼門院右京大夫集 うたたね・竹むきが記』 勉誠社、平2 所収）
- 5 『中世日記文学論序説』（第三章「鎌倉後期の女性の日記」第五節「『竹むきが記』の無常観」 新典社、平1）
- 6 『宮廷女流文学読解考 中世編』（『中世女流日記研究への一提言』 笠間書院、平11）

第一章 『竹むきが記』の構造

第一節 『竹むきが記』の記事と史実

一 基本的性格としての記録的態度

本章では、『竹むきが記』の作品としての構造を考察する。その主たる視点は、作者がこの日記を執筆する際に、どのような意識のもとに作品としての『竹むきが記』を構成し統合していったかということに絞られる。

『竹むきが記』の構成法について検討を加えることにより、作者の執筆態度について明らかにしてゆこうと試みるものである。

本節では、その考察に入る前に、まず、この作品の基本的性格についておさえておきたい。

『竹むきが記』を発見、紹介された和田英松氏は、次のように述べておられる^(註一)。

蓋し、一子の教育と、家門の再興とに苦心して、漸く其素志を達するに至りたる実歴を叙して、子孫の訓戒に遺さんとの意なるべし。^(中略)この書は専ら一家の私事に關する事どもを録したるものなれど、史学の上にも裨益する事頗る多く、実に重んずべき良書なるに、空しく高閣に束ねられて顧みるものなく、著者の事歴の世に知られざりしは、遺憾に堪へざる所なり。

氏は、『竹むきが記』を史料として位置づけておられる。それは、この作品に記載された公事の記録などに史料的价值を見いだされたからに他ならない。このように、この作品の基本的性格として記録的態度をとらえることができるのであるが、この点について、具体的な記述から確認しておく必要がある。

『竹むきが記』冒頭部は、次のように書き起こされる。

元徳元年十二月廿八日、春宮御元服侍き。その夜内裏に行啓あり。安福殿を御休所にせらる。女房には上臈・二条殿・内侍参る。萩戸にて御対面とぞ聞えし。御作法御進退など、事多かる御事にて、御習礼など、かねてよりいみじき御紛れにぞ侍し。

内裏の儀、指図さしづにて御日記に継つがるべきを、官より参らせ、おびたしく広く侍しかば、小さく写しなすべうけ給しを、いかにすべしとも覚えざりしかど、とかくしつゝ一枚に写しな侍しかば、いみじう御感ありて御日記に継がれしかば、今に留とまるらんかし。

書き出しは「元徳元年十二月廿八日、春宮御元服侍き」と公的日記的なものである。指図の縮写を命じられて苦勞したが、その出来ばえが後伏見院の御意に叶ったと自讃している。女房としての作者の職掌なのであろうか。これに続けて「御日記に継がれしかば、今に留まるらんかし」とわざわざ書き加えている点、作者が非常に強く日記（記録）を意識していることの証であろう。

また、右に続く章段では、元服の後に行われる「御遊」に関する記録を終えるにあたり、「聞きおよびし片端なり。定めて僻事もあらんとつゝまし」と、記録の不確実さや不備を断っている。ここには他見を前提とした作者の意識をうかがうことができる。この他にも、正慶二年三月の六波羅行幸・御幸の記事では、「我も人もたゞあきれまよふほかの事なかりしかば、僻事もあらむとて、書きもとめず」と記している。ここからも「僻事」つまり不正確を怖れる姿勢と、備忘録のようなものを書いていた（この日記をさすとも考えられるが）ことが推測される。

さらに、元弘二年春の節で、御方違の行幸・御幸の折の北山第のしつらいを描写する章段には「小公卿座のそばは新院の御方なり。御衣架、奥にありて、見も覚えず。御服ども、経康掛けけるとぞ聞えし」とある。ここは、その場に居合わせた者の言い方であると同時に記録をより完全なものにしようとする姿勢がうかがわれるところ

である。その他、調度類や装束の詳細な記録、これはやはり女房としての視点であろうか、また行事進行の様子などを丁寧に追いかけている記述などがあり、名子の記録しようとする姿勢は、随所にあらわれている。

その記事の記述の精粗の程を知るため、元弘二年三月十六日に行われた「由の奉幣にて神祇官に行幸」に関する記事为例として、同日の『光厳院御即位記』(註2)の記述と比較して掲げてみる。

・『竹むきが記』

同十六日、由の奉幣にて神祇官に行幸なる。

御即位に出づべき人々、障りども申つゝ、供奉人さらになし。公卿には大炊御門大納言・

右兵衛督などなり。神祇官の北門より御輿を入奉りて、いはに筵を敷きて昇き据へ聞ゆ。

内侍一人先に参る。門の前より下りて、筵道をとりにて上に昇る。髪上げて妻戸の内に候ふ。

その妻戸に御輿を寄せ奉る。殿、御供に参り給。さて大床子に御座。劔璽、御左の方に内

侍置く。

蔵寮の御唐櫃にて、帛の御袍を渡しまうけらる。平敷の御座にて召さる。無文の御冠を奉る。御装束には大納言冬隆卿、範賢と参る。

御唐櫛笥など渡る。その後大床子に御座。薄き生絹の衣にて御冠の巾子を大納言結い参ら

・『光厳院御即位記』

三月十六日。即位由奉幣行幸也。出御。其儀

如恒。関司鈴奏警蹕等無之。入御郁芳門并神

祇官北門。「神祇官献大麻。」寄御輿於北舍

北面西戸。「地上敷席。」公卿列立東傍門。

「北上西面。」内侍二人候妻戸内。左右公卿

次将「忠懃朝臣。」取御劔授内侍。先授東内

侍。但任常儀可為西之由。有其沙汰之間。内

侍立替。次下御。「余候御裾。」無警蹕。御

輿退。着御大床子。「南面。劔璽置左端。」

入御後閉北門。公卿着門内東腋座。此間職事

「定親。国俊。」運置御調度御装束。「帛御

装束。御冠笥。唐匣。甘器子「等敷」也。「

御装束了又着大床子。

す。黒塗の御半挿・盥、頭中将持ちて参る。

御楊枝・御手拭、同じく柳筥にて高坏に据ゆ。

御盥に貫簀あり。御手水の後、大床子より東に御半帖をよそへるにむかはせ給て舍人を召さる。神祇官の物ども御幣を取りて出づるに、その振舞どもあり。

次供御手水。陪膳「実継朝臣。」取打敷参進。敷大床子南端。役送「定親。国俊。」持参御手水洗椀一。「二可有也。」御手巾。楊枝。

「盛柳筥。置土高坏。」次令洗御手。次第撤之。次余召奉行職事。問事具否。次主上着御拝座。「異向。以後着給於大床子下。召御草鞋。」次藏人頭献御笏。次御拝。兩段再拜。

次召舍人。「二音。」大舍人四人称唯。少納言参跪版南。勅曰。中臣忌部召。称唯退。次中臣。忌部。卜部「号後取。」入自東南櫓門。列版位下。「北面西上。」各立定。勅曰。忌部参来。忌部称唯参上。取外宫幣。授後取之後列。忌部更帰取内宫幣後列。次勅曰。中臣参来。中臣参上。勅曰。能申奏。称唯退下。次三人退出。次返納御笏。次召御草鞋。移敷於平敷御座。令脱帛御装束給。此間御幣了還御如初。於本宮猶無警蹕。聞司鈴奏名謁等。

本文の傍線を施した箇所が、ほぼ同じ事柄を記しているところである。『即位記』は、正式な記録と見てよいで

あろう。その記録と比較してみても、かなり正確に記録していることがわかる。光厳院の即位には、作者は、名誉ある^養帳の典侍として大役を命ぜられており、特に印象深い行事であつたことは容易に想像できる。

この記事に引き続く即位式の次第は、^養帳を勤める作者の動きを中心に記録されている。式に直接参加している以上、これは自然なことで式の次第を漏らさず記録することはこの場合作者には不可能なことであつた。ここでも装束に関しては、かなり熱心に書き記している。一例として、この折の自分の装束を記している箇所を引用してみる。

しばしありて、昇るべき由、御使あれば、装束を改む。皆紅の衣、数六、同じ単、打衣、袴袴萌葱の表着、赤色の唐衣、地襦袢。得選、礼服を持ちて来る。大袖・裳なり。もとの裳・唐衣を撤して礼服を着る。衣の脇をほころばして、裳にて腰を強く結ふべし。得選、蔽髪を参らす。(中略) 先づ童二人左火取、右箇。紅梅の汗衫、紫の三相、白単、

雲を付く。紅の打衣、袴、萌葱の表の袴、文、紫に蔽、上刺、紫の匂、物忌、紅の薄様、扇をさす。(中略) 次に下使二人柳の三衣、紅梅の

単、打衣、袴、葡萄染の唐衣、海鼠の裳、物忌、扇、童に同じ。次に裾被き六人生絹の袴、襪をはさむ、薄衣、織物、絵縫物などなり。(下略)

典侍としての職掌からも自然に注意が向くのであろうか。『後宮職員令』には、典侍の職掌について「典侍四人。掌同^三尚侍」。唯不^レ得^三奏請宣傳」。若无^三尚侍^一者。得^三奏請宣傳^一とあり、「尚侍」については「尚侍二人。掌下供奉常侍。奏請。宣傳。檢^三校女孺^一。兼^三知内外命婦朝参^一。及禁内禮式之事」とある(まじ)。これによつても、儀式の次第への作者の関心が強い事由の一端がうかがえる。有職故実の前例としても格好の材料であつたといえる。この他にも故実にこだわる姿勢がうかがわれる記述がある。次に例示する。

踐祚廿二日也。女房は四十人なるを、とりあへらるゝに従ひて、卅人ばかりとぞ聞えし。

(元弘元年九月・光厳天皇踐祚)

未申ひつしまるの方に床子はあるべしと聞きしかど、得選がはからひにや、西の正方にありしは、いづれか本なるべきにか。

(元弘二年・即位式の高御座周辺のしつらい)

常の儀と異なる点についてわざわざ疑問を感じたことを記している。

以上のことから、作者名子は、女官として出仕していた役目上も、その責任感の強さからも、相当意識的に公的記録に近いものとして自分の日記を位置づけていたのではないかと推量できる。それは、三角洋一氏も指摘されるように^(註4)、

元徳元年十二月廿八日、春宮御元服待き。……

元弘のはじめの年、八月廿四日の夜、内裏見えさせ給はぬよし、……

践祚廿二日也。……

同じ十三日、内裏に行幸なり。……

十一月朔日、日蝕なり。……

十一月、賀茂の臨時の祭、清涼殿にて行はる。……

といった日付の後に、その日の記事を記入するという形を取っていることにも、明らかにあらわれている。

『竹むきが記』は、かなり明確に記録することを意識して書かれていると考えられる。それは、下巻に至って公事の記録が減少する代わりに、作者の内面のことや物詣の道中のありさまなど私的な記事が増えてくるようになったのも変わらない。一子実俊の元服の記事、実俊の供奉に関連して接することのあった公事については、やはり記録的な筆致で書いている。

同十二月七日、元服の事あり。寝殿の西の端より、あふきの御方と一つになす。南面一間、簾^{すだれ}を上げ。二間は公卿座す。園の中納言基成卿・三条中納言実経卿・別当資明。装束直衣下結。この次^{つぎ}一間は板にて、藁座を敷く。寝殿の間の障子^{あはひ}を取りて、簾^かを掛く。これに女院の御方御座あり。公卿の座上、東の御簾^すの際、加冠の座を敷く。

北面の一間、着袴の間とす。簾を上げて西東に高灯台を立つ。これにて袴着あり。水干、裏濃き蘇芳唐織

物・萌葱、文鶴菱、松樺の栢、紅梅の浮織物の二小袖、白織物の肌小袖文、水干に同じ、院の御直衣御指貫に改む。
装束師重任。大納言殿結ばせ給。御前の物、銀器。陪膳はいぜん知雄、役送の諸大夫光衡・永衡・量衡、又吉書を見給。
其後薫座に付き給ぬるに、理髪の薫座を敷く。又院の御冠を右に置く。(下略)

(暦応四年・実俊元服)

故竹林院入道大臣、卅三年に当り給。御仏事の為、広義門院御沙汰として、無量光院にて仏經供養あり。九月廿五日、院の御方御同車にてならせ給ふ。御堂の西東に上達部の座を敷く。東の簀子に紫縁一帖、堂童子の座とす。南の端一間は院の御聴聞所、その次の間に織物の御木丁を出ださる。女房の聴聞所、同じく木丁出づべし。公卿、洞院左大臣・大宮大納言殿・春宮大夫・日野大納言・四条大納言・葉室中納言・四条宰相・蘭宰相・竹林院三位中将・西園寺三位中将。この外、人々聞きも覚えず。

(貞和三年九月・西園寺公衡三十三回忌)

『竹むきが記』上下巻を通してみれば、その記事内容が、私的なものに偏つてくることを認めないわけにはいかない。しかしながら、下巻の記事内容は変容していつているものの、作者の公的記録に携わった者としての態度、作者の本質はそのまま保ち続けられていることは確認できるのではないだろうか。『竹むきが記』の基本的性格として、少なくとも当初は「公的記録に近い女房日記であった」ことを指摘することができるのである。

二 作者の生きた時代―史実の確認

前項で『竹むきが記』の基本的性格として、記録的態度を保っていることが確認できたと思う。では、『竹むきが記』の時代、つまり作者名子が生きていた時代に一体何が起こっていたのか、その具体相を、この作品以外の史料からまとめてみる。

次に『大日本史料』・『史料綜覧』などから、作者に身近なものと、重要と思われる事柄とを項目にして掲げる。『竹むきが記』に記載のある場合は、項目の下に、上巻の場合は（※上）、下巻は（※下）をもって示した。なお、通覧は、作者がほぼ十代半ばと考えられる正中元年（元亨四・一三二四）から、その没年、延文三年（一三五八）までの範囲で行った。また、「賀茂祭」・「叙位」・「内侍所御神楽」・「節会」など、恒例の行事は、一部を除いてこれを省略した。

正中元年 一三二四 一月 三日 北山第（右大将実衡）に方違の行幸

二〇日 永福門院・広義門院、北山第に御幸

二月 一九日 北山第に行幸

二一日 北山第において舞楽御覧、翌日百首和歌など、二四日還御

六月 二五日 後宇多法皇、崩御

一二月 一九日 東寺末寺六条坊門不動堂焼亡。後伏見・花園両上皇中園第に御幸の上、火災御覧

一二月 九日 正中と改元

正中二年 一三二五 一月 三日 幕府、政所等焼失

二一日 後伏見・花園両上皇、量仁親王立坊を幕府に勅す

五月 八日 日野中納言資朝、佐渡に配流（『統史愚抄』による、『史料綜覧』には、八月とあり、『尊卑分脉』には、「元亨四十二依天下事配佐渡国」とある）

六月 二六日 京都、大雷雨洪水

一〇月二一日 京都、連日大地震

二三日 衣笠殿焼失

二四日 量仁親王の元服、衣笠殿の火災により延引

嘉暦元年 一三二六

三月二〇日 春宮邦良親王薨す

四月二六日 嘉暦と改元

七月二四日 量仁親王、皇太子となる

十一月二八日 前内大臣西園寺実衡薨す

嘉暦二年 一三二七

一月二九日 関白太政大臣藤原冬平薨す

三月一日 広義門院平癒のため、後伏見上皇願文を日吉社に奉る

三日 同じく水無瀬御影堂に願文を奉る

一二日 興福寺堂宇を焼失（『統史愚抄』では一六日とする）

五月二三日 正三位公宗を従二位に叙す

嘉暦三年 一三二八

二月二五日 後伏見上皇、前右大臣兼季に琵琶の秘曲を受ける

是 歳

法勝寺焼亡

元徳元年 一三二九

八月二九日 元徳と改元

九月三日 伏見天皇十三回忌を修す

一二月八日 春宮量仁、元服の日時定まる

二八日 春宮、紫宸殿において御元服の儀（※上）

元徳二年 一三三〇

一月九日 北山第に方違の行幸

元弘元年 一三三一

三月三日 中宮禧子、北山第に行啓

四日 北山第に行幸

七月十三日 北山第に行幸

八月二十四日 *後醍醐天皇、神器を奉じ、俄に奈良に行幸 〈※上〉

二十七日 *笠置山に行幸 〈※上〉

後伏見、花園兩上皇および春宮、六波羅北方に移る 〈※上〉

九月十九日 後伏見・花園兩上皇、土御門殿に御幸、春宮、常磐井殿に行啓

〈※上〉

二〇日 皇太子量仁、踐祚（光嚴） 〈※上〉

二八日 *笠置山落城

二九日 *後醍醐天皇を平等院に奉ず

一〇月 三日 *後醍醐天皇、平等院より六波羅南方に移御 〈※上〉

六日 劍璽、光嚴天皇に渡御 〈※上〉「十月十日頃にや」とする

一三日 光嚴天皇、土御門殿より富小路皇居に移御 〈※上〉

十一月 一日 日食 〈※上〉

十二月十七日 内侍所御神樂 〈※上〉「二八日とする」

一月 一日 光嚴天皇、四方拝、節会、小朝拝を行う 〈※上〉

二日 光嚴天皇、花園上皇と北山第に方違の行幸 〈※上〉

二〇日 後伏見、花園兩上皇、北山第に御幸

二月十六日 光嚴天皇、北山第に方違の行幸、後伏見、花園兩上皇も之に御幸

三月 七日 *幕府、後醍醐天皇を隠岐に遷す

元弘二年 一三三二

一一日 石清水臨時祭試楽 (※上)

一六日 光厳天皇、神祇官に行幸、即位奉幣使を発遣 (※上)

二二日 光厳天皇、太政官庁において即位の儀 (※上)

四月 一日 女叙位 (※上)

二二日 賀茂祭 (※上)

二八日 正慶と改元 (※上)

六月 二日 幕府、日野資朝を佐渡の配所にて殺す

九月 二日 権中納言公重を従二位に叙す

一〇月 二八日 大嘗祭御禊 (※上)

十一月 二日 光厳天皇、常磐井殿(後伏見院・花園院御所)に行幸、大嘗会神饌の

習礼、清暑堂神楽拍子合、淵酔の習礼あり

三日 習礼

四日 後伏見院御所において清暑堂御神楽拍子合あり (※上)

七日 大嘗会三社奉幣使を発遣、夜、花園院御所において清暑堂神楽拍子合

あり (※上)

一一日 五節帳台試あり (※上)

一二日 大嘗会叙位、広義門院御所にて淵酔 (※上)

一三日 大嘗会、廻立殿の行幸、標山を曳く (※上)

一四日 節会 (※上)

一五日 清暑堂御神楽 (※上)

元弘三年 一三三三 一六日 豊明節会（『宸記』では「踏歌節会」）（※上）
一月 七日 白馬節会（※上）

（正慶二年）

一六日 踏歌節会（※上）

一七日 後伏見上皇御幸始

閏二月二四日*先帝（後醍醐）隠岐脱出

三月一二日 赤松則村、入京、光厳天皇、後伏見、花園両上皇、六波羅北方へ行幸

（※上）

五月 七日 高氏、入京し六波羅を攻む。光厳天皇、後伏見、花園両上皇東国を目

指し脱出

九日 一行、守良親王（五辻宮）により阻まる。資名出家（※上）

二八日 後伏見、花園両上皇、廃主と近江より京師に還御（※上）

六月一二日 公宗、権大納言罷免

七月二一日 後醍醐天皇中宮禧子（西園寺実兼女）西園寺氏を皇太后宮と為す

八月一五日 公宗、権大納言に還任

一〇月一二日 後京極院禧子、崩御

一二月 七日 公宗、中宮大夫

建武元年 一三三四

五月 九日 北山第に方違の行幸

一〇月一四日 北山第に行幸

建武二年 一三三五

六月二二日 公宗、資名、氏光等謀叛により捕縛さる

二六日 公重、家督相続決定 明日、流人宣下

建武三年 一三三六

八月 二日 公宗、氏光、三善文衡誅せらる

一月二二日 花園上皇、落飾

一月一〇日*後醍醐天皇、神器を奉じて東坂本に幸す

三〇日*後醍醐天皇、京都に還幸

(延元元年)

二月二五日 広義門院、落飾

二九日 延元と改元

四月 六日 後伏見法皇、崩御

五月二七日*後醍醐天皇、神器を奉じて東坂本へ、光厳上皇不予と称して同行せず

六月一四日 尊氏、光厳上皇、豊仁親王を奉じて入京

八月一五日 豊仁親王、踐祚(光明)

一〇月一〇日*後醍醐天皇、京都に還幸

十一月 二日*神器授受の儀あり、後醍醐天皇に太上天皇の号を上る

一四日 成良親王、皇太子となる

十二月二一日*後醍醐天皇、神器を奉じて吉野に潜幸

建武四年 一三三七

一月二六日 鷹司冬教、薨す

二月 三日 北朝、光厳上皇妃寿子、女院宣下、徽安門院と為す

(※下、但し「暦応四年四月」とする)

九月 二日 光明天皇、一条室町第より土御門東洞院殿へ

十二月二八日 光明天皇、即位

暦応元年 一三三八

五月 二日 日野資名、薨す

(※下)

八月三日 北朝、益仁親王（崇光）を皇太子と為す

二八日 曆応と改元

十一月十九日 北朝、大嘗会

曆応二年 一三三九

一月十六日 今出川兼季、薨す 〈※下〉

八月十五日*後醍醐天皇、讓位

一六日*先帝（後醍醐）吉野にて崩御

歴応三年 一三四〇

四月二十八日 南朝、興国と改元

五月二十九日 宣政門院、落飾 〈※下〉

六月十九日 興福寺東北院前大僧正覺円、寂す 〈※下〉

十二月 光嚴上皇、北山第に方違御幸 〈※下〉

曆応四年 一三四一

一月二十八日 光嚴上皇、御幸始で北山第に幸す

八月十九日 春日神木帰座 〈※下〉

十二月二日 実俊、臨時除目で左中将

曆応五年 一三四二

一月五日 実俊、従四位上

（康永元年）
二八日 光嚴上皇、北山第に幸す 〈※下〉

三月三日 広義門院、御惱平癒

四月二十七日 北朝、康永と改元

五月七日 永福門院、崩御 〈※下〉

八月二一日 今出川実尹、薨す 〈※下〉

康永二年 一三四三

一月五日 実俊、正四位下

康永三年 一三四四

一月五日 北朝、叙位、実俊従三位 〈※下〉

二月一〇日 西園寺宝蔵焼亡

三月二二日 内府拝賀に実俊属従の予定（但し、「俄所勞云々」）

康永四年 一三四五

二月八日 広義門院、土御門内裏・持明院殿に行啓

（貞和元年）

一四日 実俊、行光を使いとして、公賢に御幸始供奉について質す

三月一六日 光厳上皇、褻御幸始で広義門院御所に幸す 〈※下〉 名子、実俊の供

奉について公賢に談ず

是月 広義門院、御逆修として五種行法を行う 〈※下〉

一〇月二一日 北朝、貞和と改元

貞和二年 一三四六

二月三日 光厳上皇第二皇子弥仁親王、著袴

三月八日 実俊直衣始 〈※下、但し康永三年三月とする〉

五月二五日 大宮季衡、薨す 〈※下〉

一〇月 広義門院、北山に行啓 〈※下〉

一二月五日 北朝、京官除目

貞和三年 一三四七

三月二九日 北朝、県召除目

五月二九日 光明天皇、方違で六条殿へ

八月二五日 広義門院、新御所御仏事

九月二四日 西園寺公衡三十三回忌、光厳上皇、広義門院北山第に幸す 〈※下〉

十一月二八日 光厳上皇、十一面観音供養

貞和四年 一三四八

二月九日 光厳上皇、褻御幸始で広義門院の新殿に幸す

一三日 花園法皇、顯親門院十三回忌仏事萩原殿にて修せらる

光厳上皇も御幸

四月 六日 北朝、後伏見天皇十三回忌仏事 〈※下〉

二八日 北朝、臨時除目、公重右近衛大将(兼)

九月 五日 光厳上皇、萩原殿御幸、花園法皇と立坊の事を議す

一九日 光明天皇、方違で持明院殿に幸す

明日広義門院の新殿に幸す 実俊供奉 〈※下〉

一〇月 一三日 北朝、直仁親王(光厳院皇子)、加冠

二〇日 花園法皇、御不予

二二日 北朝、任大臣節会

二七日 光明天皇讓位、崇光天皇踐祚 春宮元服 実俊行啓に供奉 〈※下〉

二八日 実俊、本宮并内裏に参る

十一月 一日 北朝、皇太子直仁親王、新殿に行啓、光厳上皇も御幸

実俊、加補院司の交名に別当候補として登載

一〇日 公賢、太政大臣拝賀、実俊扈從

一日 花園法皇、萩原殿にて崩御 〈※下〉

二四日 北朝、花園天皇二七日忌、宣光門院落飾、光厳上皇萩原殿に御幸

二八日 光明上皇、布衣始 実俊出仕か

一二月 一七日 光明上皇、持明院殿に御幸始、実俊、後騎人として供奉

二〇日 北朝、花園天皇遺詔奏

貞和五年 一三四九

二八日 崇光天皇土御門殿に還幸、実俊、急遽供奉

一月 五日 北朝、叙位 実俊、正三位

九日 崇光天皇、御方違で持明院殿に行幸

二九日 光厳光明而上皇、褻御幸始で北山第に幸す (※下)

二月 一九日 光厳上皇、花園天皇百箇日のため萩原殿に御幸

二二日 花園天皇百箇日御忌

二七日 清水寺火災

三月 二五日 北朝、県召除目 実俊、権中納言

(※下 月日の確定できる日記の最終記事)

九月 一三日 北朝、任大臣節会、公重内大臣に

一二月 二六日 崇光天皇、太政官庁にて即位

観応元年 一三五〇

二月 三日 光厳、光明而上皇、褻御幸始、広義門院の新御所に御幸

二七日 北朝、観応と改元

四月 二九日 北朝、大嘗会国郡卜定、権大納言四條隆蔭、権中納言西園寺実俊、参議

今出川公冬を大嘗会検校に補す

六月 二八日 北朝、前内大臣大炊御門冬信薨す

九月 六日 長講堂供花、光厳上皇御幸、広義門院も密儀を以て行啓

九月 一八日 光厳上皇、竹林院に御幸、次で長講堂に御幸

十一月 八日 北朝内大臣左近衛大将竹林院公重、左近衛大将を辞す

九日 光厳上皇、花山院兼信に、若狭名田荘内下村の事につき、西園寺実俊の

書状を下して、答陳せしむ

観応二年 一三五二

一月 一日 北朝、兵革により小朝拝、拝礼を停め、節会を省略

五日 北朝、兵革により叙位を停む

一日 北朝、兵革により、県召除目停む

三月 一日 幕府、疎石をして、光厳上皇に謁し、両朝講和の事を奏す

一五日 光厳、光明両上皇、持明院殿より今出川公直の菊亭に移御

二九日 直義、院御所菊亭に参り、大事を奏す

三〇日 崇光天皇、持明院殿より土御門殿に還幸、光厳、光明両上皇菊亭より持

明院殿に還御

四月 一〇日 北朝、内大臣竹林院公重、罷む

八月 一六日 後醍醐天皇十三回忌、北朝、天竜寺疎石に勅し、仏事を修す

九月 三〇日 前天竜寺住持疎石、寂す

十一月 七日 北朝の天皇及び皇太弟直仁親王を廃す

(正平六年)

十二月 二三日 北朝の神器を収む

二八日 光明、崇光両院に太上天皇の尊号を上る

光明上皇、御落飾

正平七年 一三五二

二月 一六日 実俊、芝禅尼第に移住

一七日 是より先、竹林院公重に西園寺の家門を安堵せしむ、是日、公重、実俊より受ける

二六日 直義、鎌倉に死す

(文和元年)

三月 三日 光嚴、光明、崇光三上皇、直仁親王及び尊胤法親王、河内東条に遷御
五月 一日 義詮、竹林院公重をして竹林院第に帰住せしむ
六月 二日 光嚴、光明、崇光三上皇、及び直仁親王、賀名生に遷御

一九日 是より先、義詮、光嚴上皇第三皇子を立て、政を聴くことを広義門院に請う、是日皇子の踐祚を聴く

二七日 義詮、正平の制を停め、觀応を旧に復すことを広義門院に請う

八月 八日 光嚴上皇、賀名生に於て御落飾

一七日 北朝、弥仁王（後光嚴）、土御門東洞院殿に於て踐祚

九月 二七日 北朝、文和と改元

十一月 二七日 北朝、西園寺実俊に伊予国衛領を安堵す

文和二年 一三五三

六月 一三日 義詮、後光嚴天皇を奉じて坂本より東走し、結局小島を行宮となす

二二日 南朝、洞院公賢を太政大臣に任ず、公賢をして久我長道、竹林院公重と議して、京都の事を沙汰せしむ

七月 一二日 南朝、今出川公直の菊亭を収公して、同公冬に賜う、是日、広義門院、菊亭より萩原殿に遷御

二六日 北朝、西園寺実俊に山城鳥羽殿領を安堵せしむ

二七日 北朝、前権大納言正二位柳原資明、薨ず

八月 六日 北朝、左衛門督堀河具孝を罷め、西園寺実俊を替補す

二五日 後光嚴天皇、小島行宮より垂井に遷御、在京の公卿を召す

九月 二一日 後光嚴天皇、京都に還幸、土御門殿に入御

二三日 北朝前内大臣竹林院公重、竹林院第を売り、京都を去る

一〇月一九日 北朝、西園寺実俊をして武家のことを執奏せしむ

十一月三〇日 北朝、西園寺実俊をして、竹林院公重の所領を領せしむ

十二月二十七日 後光厳天皇、太政官庁にて即位

二十九日 北朝、追儺除目 実俊、権大納言

文和三年 一三五四

一月 六日 実俊、従二位

六月 一日 西園寺実俊をして拝師莊の押妨を幕府に尋究せしむ

十一月二一日 花園天皇七回忌

一六日 北朝、大嘗会

一八日 北朝、清暑堂御神楽（比巴 実俊）

十二月二十四日 尊氏、後光厳天皇を奉じて、近江武佐寺に奔る

文和四年 一三五五

一月二一日 後光厳天皇、近江成就寺に遷幸

二月 七日 後光厳天皇、東坂本の祢宜成国の第に移御

二八日 南朝中納言西園寺実長（公重男）、河内天野に薨ず

三月二八日 後光厳天皇、土御門殿に還幸

八月 八日 光明法皇、天野より伏見殿に還御

九日 洞院公賢、出家

十二月 八日 北朝、臨時除目 実俊、正二位

延文元年 一三五六

三月二八日 北朝、延文と改元

延文二年 一三五七

二月一八日 光厳法皇、崇光上皇及び直仁親王、河内金剛寺より京都に還御、法皇は

深草金剛寿院に、上皇は伏見殿に移御

四月二十九日 後光厳天皇、御琵琶始

閏七月二二日 広義門院、崩御

延文三年 一三五八 二月二三日 名子、没

この表の項目は先述の基準に従って選んだが、その判断に、なお恣意的な面があることをお断りしておく。

この期間の史実について確認したのは、記事の取捨選択に作者の意識を探ることができるかもしれないからである。『竹むきが記』の場合、記事内容から推測して、書かれていてもよいはずなのに書かれていないものについて、なぜ作者が書かなかったのかを考察することは、書かれてある記事について考察することと同様に重要な作業であると考えられる。

史実との対応関係を大まかに確認してみると、次のようなことに気づかされる。

まず、上下巻通じて、後醍醐天皇の動向に関する記事（通覧に＊印をつけてあるもの）がほとんどないことが挙げられる。わずかに上巻の始めの頃に不安定な世情の一つのあらわれとして触れているにすぎない。吉野での後醍醐天皇の崩御（暦応二年八月十六日）は、下巻の執筆期間中であるにもかかわらず一切触れていない。

また、同様に、佐渡に流され当地で斬罪に処せられた日野資朝についても触れない。資朝は、資名の兄弟であるから、名子にとっては叔父にあたる。処刑された不名誉を畏れてか、事件そのものを憚ってかして回避したものとも考えられるが、やはり後醍醐天皇との関係で書かなかった可能性はある。

日野家の関係でいえば、資朝と同様の立場の資明は下巻に登場するが、和歌の贈答の相手や物詣の同道者としてであって、決して政治的立場で登場しない。名子の兄弟氏光の負傷にしても、その緊迫した状況に触れはするが、それは結局、公宗の見舞いの和歌の詞書的な説明である。名子の父資名にしても、「五節沙汰人々、花山・

西園寺殿・日野大納言（實名）・樞中納言（俊実）、五人なり」（正慶元年十一月、官司行幸）のように、記録上の必要で書かれることはあるが、その言動が具体的に描かれることはない。わずかに先と同年同月の日野家から出した五節の舞姫の局に、「制を固くせられて、櫛沙汰もなかりしを、無念なるとて、忍びて置かせ侍し也」とあるのみである。この他には、資名の出家にしても、「親同胞（おやほうから）も苔の衣に立ち返ぬと聞く」と言った程度の叙述であり、作者の父親としての姿が記されない。そういう点からも、記録的筆致は確認できる。

他方、時代を描こうとすれば避けて通れないことを、避けていること前述のとおりである。それらが、作者にとって最も深刻な体験と密接に結びついている事柄であることから、慎重に触れることを避けたものという推測が許されるであろう。

三 史実との齟齬

『竹むきが記』の構成表を作成してみると、おおむね事柄の時間に従って記事が配列されていることが確認できるが、その中にも、曖昧な日付の表記が続いたり、破綻なく配列されているように見えても他の史料から日付が前後していると判明する箇所などを見いだすことができる。本項では、その点について細かく確認することで、史実とこの作品に記載される事柄との齟齬を明かにしておきたい。

左に、『竹むきが記』の記述と他の史料から確認できる日にちが違っている箇所および記載順の不審な箇所などを一覧にして掲げる。なお、他の史料で確認できる日付を▽をもって示す（注5）。

上巻

A（元弘元年） 踐祚廿二日也。

▽九月二〇日 「元弘元九廿踐祚。」^{十九}（『本朝皇胤紹運録』光厳院条）・「元徳三年（中略）九月廿

日儲皇還御土御門殿。依有踐祚之儀也。」（『公卿補任』）他

B（同年）同じ廿九日、笠置を攻め落し聞えて、世、のゝしる程に、先帝、六波羅に入せ給。

▽九月二八日 「廿八日、梶原一族・栖山一族・小宮山一族等属長崎四郎（四郎）衛門尉之手、笠置寺（寺）懸于先陣致合戦、□□火城郷、奉追落 先帝了、」（『光明寺殘篇』同日条）他

▽一〇月三日 「今日先帝可奉迎六波羅之由風聞、然而無其儀云々、」

一〇月四日 「此曉先帝已奉入時益宿所云々、」（『花園天皇宸記』元弘元年十月別記、同日条）他
C（同年）劍璽いかゞと、世の大事なりつるに、（中略）我身受け取り聞ゆ。十月十日比にて侍しにや。

▽一〇月六日 「元弘元年十月六日。今日劍璽自六波羅亭（亭）可有渡御禁中。」（『劍璽渡御記』）

・「六日、晴、今日神璽・宝劔等自六波羅渡之、」（『花園天皇宸記』元弘元年十月別記、同日条）他
D（同年）廿八日、内侍所の御神樂にて行幸ならせ給し、典侍に参る。

▽一二月一七日 「今夜内侍所御神樂也、」（『花園天皇宸記』同日条）

E（元弘二年）四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる。女叙位侍しに、上階の事ありしかば、髪上の祿、勾当内侍に掛くる、（中略）祭の頃、内へ参る。（中略）祭の日は警固の姿どもをかしう見ゆ。

▽四月一日 「晴、今夕女叙位、執筆中宮大夫、従三位藤原禊子（禊子）「関白室」・藤原名子、「褰帳、資名卿女、御乳母也、」（下略）」（『花園天皇宸記』同日条）他

▽四月二二日 「晴、賀茂祭、午二点御幸、広義門院御同車、豊仁親王・朕又乗之（下略）」（『花園天皇宸記』同日条）

F（正慶二年）三月十六日、六波羅へ行幸御幸侍しは、我も人もたゞあきれまよふほかの事なかりしかば、僻事もあらむとて、書きもとめず。

▽三月一二日 「又正慶二年不及沙汰候歟、自三月十二日主上・上皇遷御六波羅、五月七日御没落

畢、」（『園太曆』文和四年四月一日条）他

G（同年）五月廿七日、御所さま都に返らせ給。

▽五月二八日 「同廿八日自江州還御於帝都。」（『皇年代略記』光嚴院条）・「廿八日庚申。」（中略）

此日。一院。院。先帝等自太平護国寺還幸京師。入御持明院殿。」（『統史愚抄』同日条）他

下卷

H 曆応四年四月、萩原殿の内親王、持明院殿へ入らせ給ふ。やがて院号ありて、徽安門院と聞ゆ。

▽建武四年二月七日 「徽安門院。寿子。花園女。母准三后從三位藤実子。入道大納言実明二女。」建

武四二三為内親王。廿。同七日准三后。同日院号。」（『女院小伝』）他

I（同年）神木、長講堂におはしつる、九月に御帰座あり。

▽八月一九日 「八月十九日春日神木帰座。」（『公卿補任』）他

J（曆応五年か）春の除目に中将になり給ふ。八歳なり。

▽前年一二月二二日 「曆応二正五正五下。同三八二從四下。同四十二廿二左中将。」（『公卿補任』

康永三年、実俊初出の項）

K（同年）今年御幸始、この山へ成らせ給。

▽曆応五年一月二八日 「廿八日 天晴除目又延引（中略）今日院御幸 北山殿」（『中院一品記』同日条）

▽曆応四年一月二八日 「廿八日、丙巳、天晴、（中略）今日御幸始云々、」・「（裏書）廿八日 後日

尋記之 北山殿 御幸」（『師守記』同日条）他

L 康永三年に改まりぬ。叙位に正階の事侍て、三月に拝賀を申さる。（中略）同じ月に直衣始なり。

▽貞和二年三月八日 「天晴、伝聞、西園寺三位中将実俊、直衣始云々」（『園太曆』同日条）

M (貞和三年) 故竹林院入道大臣、卅三年に当り給。御仏事の爲、広義門院御沙汰として、無量光院にて仏經供養あり。九月廿五日、院の御方御同車にてならせ給ふ。

▽九月二十四日 「廿四日、(中略) 今日上皇御幸北山殿、当御代初度敷云、是故竹中左府〔公衡公〕三十三年之間、被修仏事之故也、広義門院同御幸、」

九月二十五日 「廿五日、(中略) 今日故竹中左府三十三廻也、仍於広義門院於北山殿、被修御仏事、御導師澄俊法印參勤、」 (『師守記』同日条) 他

この他に、作品の記述上からも明らかに記載順に問題がある箇所もある。康永四年前後の記事の配列を次に示す。

康永三年に改まりぬ。叙位に正階の事侍て、三月に拝賀を申さる。……

同じ月に直衣始なり。……

かゝる紛れどもにて春も暮れぬるに、花の盛りを頼めつゝ訪はずなりぬる人に、五月一日比、……

年かへりぬるに、御幸、新御所へ成らせ給ふ。三位中納言も供奉せらる。……

この弥生に、広義門院、五種の行をこなはせ給。御逆修の爲と聞え侍ける。……

如月に賀茂の社に詣で侍に、下より上の宮に参る道に、蘆垣を囲ひたるに竹繁りて、……

神無月の比、八幡の宮に詣づるに、暁より雨かきくれて降り出でぬれど、……

正月中旬に、日野の中納言、春日に詣づる事あるに、誘ひ侍れば、頼もしき道連はいと嬉しく侍て、俄に思ひ立ちぬ。……

貞和の初の年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、……

貞和への改元は、康永四年十月二十一日である。また、実俊が供奉した康永四年の御幸始は、三月十六日のことであつた(『園太暦』・『中院一品記』他)。康永四年の記事は、三月(御幸始)↓「この弥生」↓「如月」↓「神無月」↓「正月中旬」↓「十二月十五日」という甚だ変則的な配列となっているのである。

跋文近く、貞和五年では、次のごとくである。

又年も返りぬ。靈鷲寺には詣づる事は変らねど、寺中の有様もよろづ見しにもあらぬ事多し。……

神明寺の山もとに草庵あまた侍に、如月の頃、別行と心ざして立ち寄りぬ。……

七月十三日に、日野の塔頭^{たとう}に詣でつゝ、經陀羅尼など、此彼と回向する数くもあはれになん。……

貞和五の睦月に、院・新院御幸始、この山へ成らせ給ふ。……

その年の春、除目に、三位中将、中納言になさる。参議を経ずして直任せらる。

同春の頃、宮にて療治めかしき事侍に、鷹司の老人^{おきな}語りて、珍しうのどかなるに、帰る名残をいかにと慕ひの給へる。……

この前の部分に、「貞和四年の弥生の暮に」とあり、「年も返」った「如月の頃」は、貞和五年の二月であることは明らかである。にもかかわらず再び「貞和五の睦月」として、一旦七月まで進んだ日付を正月に戻している。他の史料での確認ができないため、不審が残るものとして、例えば、正慶元年十一月の一連の公事の記事の配列を挙げることができる。

十一月四日、院の拍子合侍し。……

同じ月の七日、新院の拍子合なり。……

十一日、官司に行幸あり。……

丑の日（一一日）は帳台の出御なり。……

寅の日（一二日）、殿上の淵酔なり。……

卯の日（一三日）、標の山を引く。……御前の試には、舞姫昇りて座につく。童・下使は廊の内には入らず。

詠曲殿上人ども御前に召して、歌曲をつくす。殿上の淵酔は寅の日に同じ。御覧儀、上達部は御前に候す。

……廻立殿の行幸侍て、御湯の事あり。……

辰の日（一四日）より節会はじまる。

十五日、清暑堂御神楽、御遊也。

卯の日の章段は、一連の行事がすべてこの日に行われたかのような記述となっているが、他の史料では、十三日では、標山御見物しか確認できない上、この年の童御覧は、『花園天皇宸記』によると十七日に行われたらしい。また、「御前の試」は、『江家次第』などによると「十一月中寅」に行われることになっており、この故実のとおりであれば、「御前の試」の記事は、「標の山」の記事より前に位置していなければならないはずである。

これらは、作者の単純な勘違いですますことのできる問題であろうか。また、記述や表現の問題として解決できるものであろうか。この作品で作者は、有職故実にこだわる姿勢を見せている。その作者が、曖昧な記憶に基づいて不用意な記述をするとは考えにくい。これらの中には、記憶の誤りや勘違いとして片づけられない問題も含まれるのではないだろうか。

以下、先に掲げた齟齬や記載順の不審が何によって引き起こされたのか検討し、それを手がかりとして作者の意識を探ってみたい。

注

- 1 「竹むぎの記について」（『史学雑誌』第二二編第六号、明44・6）
- 2 『光厳院御即位記』（『統群書類従』巻第二百七十四、第十輯下）。なお、引用に際して、割注は「」に入れて示す。以下同じ。

3 『後宮職員令』第三（『令集解 第一』、『新訂増補国史大系』第二十三巻、吉川弘文館、昭51）

4 「『竹むぎが記』について」（『ミメーシス』4・5合併号、昭49・9）

調査の対象にした史料は左記のとおりである。

- 『本朝皇胤紹運録』（『群書類従』巻第六十、第四輯）
- 『光明寺残篇』（『群書類従』巻第四百五十四、第二十五輯）
- 『花園天皇宸記』（『史料纂集』古記録編）
- 『劔璽渡御記』（『群書類従』巻第四百五十四、第二十五輯）
- 『皇年代略記』（『群書類従』巻第三十二、第三輯）
- 『統史愚抄』（『新訂増補国史大系』第十三巻）
- 『女院小伝』（『群書類従』巻第六十五、第四輯）
- 『中院一品記』（天保三年書写宮内庁書陵部蔵）
- 『師守記』第一（『史料纂集』古記録編）
- 『園太暦』巻一（統群書類従完成会、昭45）

第二節 元弘元年暮の記事における史実との齟齬

一 記事の配列とその問題点

『竹むきが記』には、五九首の和歌がおさめられている。上巻所収の二二首は、作者自詠の一五首と夫西園寺公宗の七首である。本節では、特に元弘元年暮の記事を中心とし、これらの和歌がこの作品の記事を構成する上でどのような役割を担っていたのかについて考えてみたい。

『竹むきが記』上巻は、春宮（後伏見院皇子量仁親王）元服の記事から始められる。その折、次のような出来事があったと記している。

内裏の儀、指図さしづにて御日記に継がるべきを、官より参らせ、おびたしく広く侍しかば、小さく写しなすべううけ給しを、いかにすべしとも覚えざりしかど、とかくしつゝ一枚に写しなし侍しかば、いみじう御感かんありて御日記に継がれしかば、今に留とどまるらんかし。

指図の縮写を命ぜられて苦労したが、その出来ばえが後伏見院の御意に叶ったと自讃している。この記事にみられる作者の自己の職掌に対する自負と記録への意識の強さとは、『竹むきが記』を貫くものである。

さて、以下冒頭から元弘二年三月までの記事の構成を簡単に追っておく。記事の内容により章段に分け、私に番号を付す。各章段の内容は、その章段の書き出しの一文をもって示す。作者の執筆態度により、このような形で内容把握が可能であるからである。また、他史料の日付と本作の記述とが一致するものには○印を付す。一致しないものには、*印を付す。その他は日付が明確でないものである。

○ 1 元徳元年十二月廿八日、春宮御元服侍き。

- 2 内裏の儀、指図にて御日記に継がるべきを、
(下略)
- 3 御元服の後、仙洞にて御遊侍し。
- * 4 元弘のはじめの年、八月廿四日の夜、内裏見えさせ給はぬよし、
(下略)
- * 5 踐祚廿二日也。(九月)
- * 6 同じ廿九日、笠置を攻め落し聞えて、世、のゝしる程に、先帝、六波羅に入せ給。
- 7 同じ十三日、内裏に行幸なり。
- 8 玄上は朝餉の御厨子に置かるべきを、
(下略)
- 9 十一月朔日、日蝕なり。
- 10 月のくまなき夜、女房あまた御供にて蔵人町の方へ成らせ給しに、
(下略)
- 11 十一月、賀茂の臨時の祭、清涼殿にて行はる。
- 12 年も暮れぬるに、下の午の日、御髪上の典侍にて官の庁にむかふ。
- * 13 廿八日、内侍所の御神楽にて行幸ならせ給し、典侍に参る。
- 14 年かへりつゝ、珍しき玉の台に光をそへたる春の色なれば、
(下略)
- 15 二日、春の節になる。
- 16 女房の装束、元三の程は物具なるべし。
- 17 三月十三日、八幡の臨時の祭なり。
- 18 同十六日、由の奉幣にて神祇官に行幸なる。
- 19 同月廿二日、御即位行はる。

*印を付した章段のうち、4・5・6は、世情の混乱もあり、またこの作品の叙述も曖昧なので必ずしも齟齬と断定することはできないが、13は『史料綜覧』元弘元年十二月十七日の条に「内侍所御神楽、花園院御記」とあ

り、明らかに史実と齟齬をきたしている。

二 記事の構成とその分析

前節でみた13の元弘元年暮の内侍所御神楽を含む9段から14段について、以下、各段ごとに日記の本文を詳しく検討していく。

9 十一月朔日、日蝕なり。夜より雪降りていみじう積りしかば、褰み込められたる折節の御恨なるに、西園寺大納言殿籠り侍はせ給しかば、上の御局を少し開けられて御覽ぜらるべき由、聞へ給へば、成らせ給。人々も参り給へど、例の埋もれにたる身の癖は、ふとしも立たれず、火のあたり去らぬを、大納言殿、「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」などありしもをかし。後にさし出て見侍しかば、竹の台の、程なきに埋もれ伏して下折たるも、火焼屋のいとさゝやかに埋もれたるなど、めづらしうをかしくのみ見なさる。永福門院に御文など奉らせ給。紅葉襲なる薄様にて、砌の竹に付けらる。雪もさながら落すまじうぞ侍し。

この段は「十一月朔日、日蝕なり」と公的な日記の筆致で書き起こされている。しかし、この段の内容をみると、その書き出しにもかかわらず、記録的な記事ではなく叙情的な記述であることがわかる。それはこの段に公宗が初めて登場するということと関係しているのではないかと考えられる。「埋もれにたる身の癖」で動かずにいた作者に気づき、「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」と心遣いして言葉をかける公宗。権門の貴公子に注目されたことへの驚きと恥じらいと喜びとがないまぜになった作者の感慨を表すのが、「をかし」であろう。「十一月朔日」の「日蝕」は、この体験を呼び起こす指標として作者の記憶に刻みつけられていたのではないだろうか。他史料には『竹むぎが記』の記載期間中に日蝕はこの日の他に、正慶元年五月一日・康永二年四月

一日・同三年九月一日・貞和二年二月一日・同四年七月一日の五度、月蝕も計一六度（『史料綜覧』の「月食御祈」「曆二月食ヲ、載ス」などの記述の記事を含む）記録されている。なお、中断期間には、日蝕一度、月蝕二度が記録されている。これらがすべて正現したとは限らないが、作者がこの日のもののみを特記していることが、先の推測を示唆している。

元弘元年十一月一日の日蝕は、『続史愚抄』・『花園天皇宸記』で確認できるが、『花園天皇宸記』には降雪についても次のように記述されている。

雪降平地三寸余、日蝕諸道一揆、而不正現、当代始可謂佳瑞、尤珍重々、（下略）

「いみじう積」った雪のために下折れ伏した呉竹や「いとさゝやかに埋もれた」火焼屋の風情を、「めづらしうをかしく」と感覚的にとらえているが、その裏には、思いがけず公宗から声をかけられたという感情の揺らめきがたゆたっている。この記事は「十一月朔日、日蝕なり」という書き出しの記録的な形式にもかかわらず、作者の意識の中ではきわめて個人的な体験であったと思われる。前段8で、「竹林院入道左の大臣（おとこ）」、公宗の祖父西園寺公衡の支度した調度を「まことになをざりなるべきにもあらず。（中略）好ましげに美しかりき」と讚美しているのも、公宗に繋がる事柄であったからではないかと考えられる。

10 月のくまなき夜、女房あまた御供にて蔵人町の方へ成らせ給しに、安福殿・左衛門陣の方ざまなどはるかに見渡されていとおもしろきに、滝口（かへりあそび）の還遊の声聞ゆ。御まへたちとよぶ声さへをかし。こなたかなた、歌うたひ歩（あ）くに、摺（す）らるゝ杵の音までも雲井に冴ゆる心地して、をかしくのみぞ聞きなされし。

日付は不明としかいえないが、前後の配列と「月のくまなき夜」から、十一月中の満月に近い頃であろうか。視覚と聴覚とで臨場感あふれる描写をしている。「滝口の還遊」は『日中行事』（注）に次のとおり記述のある「返あそび」であり、臨時祭などの舞人・楽人の「還立」のことを指しているのではないだろう。

亥時に下がうし御簾をたれて。第二の間のとうろを内にとり入て。（中略）下格子の後。殿上の名たいめんの

事あり。藏人頭まごびさしの南のはしにしりをかく。殿上人は上の戸のくち。六位はかべのもとに候す。滝口北の戸より入て前庭にたつ。(中略)たれだれか侍るといふ。滝口つるうちして。をのく名のりをとなふ。(中略)北の陣よりはじめて。所ぐのもんしやく。御湯殿のはざま。殿上の口などにて申めぐる。(中略)返あそびに哥うたふ。

作者は、この段でも平素特に感興がわくはずのない歌声や杵の音までも「をかしく」感じたと記している。前段の情感をそのまま引き継いだ章段ともいえよう。

11 十一月、賀茂の臨時の祭、清涼殿にて行はる。御禊果てて、廂の御簾の際に、御椅子につかせ給。藏人頭、上達部を召せば、長橋のうちの座につく。使以下、滝の戸より参りて庭の座につく。上卿勸盃ありて、使以下に御酒賜ふ。重ね土器あり。公卿、挿頭を取りて使・舞人にさして後、簀子につく。事果てて神垣に引連れし程、庭火のかげもしめりはてぬ。峰の横雲しらみゆく空に、返立の山藍の袖ども、しほれはてて見ゆ。御引直衣・御物具、御椅子におはします御さま、明けゆく光にいとゞしくぞ見えさせ給。雪時くうち散りて、立ち舞ふ袖もいとゞしほれはててぞ見え侍し。

② 雪や猶かさねて寒き朝ぼらけ返す雲井の山藍の袖 (②は和歌の通し番号)

元弘元年の「賀茂の臨時の祭」は他史料にはみえないが、『古事類苑』賀茂臨時祭の項に、「十一月下ノ酉日之ヲ上下両社二行フ」とあり下酉日に行われるのが通例であるらしいので、この年は十一月二十六日に行われたと考えられる。前半は行事の次第について記録的に描く。「事果てて」、舞人たちが出かけた後の急に寂しくなった周囲の雰囲気「庭火のしめりはて」た様に見ている。還立の舞人の袖について、「しほれはてて見ゆ」「いとゞしほれはててぞ見え侍し」と重ねて同様に表現している。余程印象深かったのだろうか。「峰の横雲」以下では、「しらみゆく空」「返立」「山藍の袖」「明けゆく光」「雪」「立ち舞ふ袖」と、地の文に和歌②の表現を繰り返して用いている。その間に挿入された形で、主上の様子を讃美しているが、それは直接和歌に反映され

ない。

12 年も暮れぬるに、下の午の日、御髪上ごあげの典侍にて官の庁にむかふ。風吹あれてすさまじき夜のさまなれば、道すがら衣きぬの中に顔ひき入てゆくに、「この雪は。いとぐ埋うめもれなん」といふ声に驚おどろきて見れば、少し積りにけりと見る程もなく、いと深くなりしかば、所からも分きて色そふ心地するに、一人見るは甲斐なくぞ侍し。

③ ふりにける代々をかさねて大内や幾重つもれるみゆきなるらん

この年の「下の午の日」は、二十九日で大晦日にあたる。『東宮年中行事』(注2)の「十二月」には、「しものむまのひみぐしあげの事。このひ御めのと。もしはしかるべき上らう女房。御ぐしをあひぐして。宮づかさのびりやうにのりて。殿もんれうにむかふ。〔下略〕」とあり、「御髪上」は「下の午の日」に行われるのが通例であった。『花園天皇宸記』には、「〔廿九日、庚午〕今日追儺之次、有除目」と記すのみで、この「御髪上」の行事についての記載はないが、「御髪上」は通例に従って「下の午の日」、大晦日に行われたはずである。また、

『竹むぎが記』はほぼその事柄の起こった日時に従って記事が配列されている。とすれば、二十九日の行事が二十八日より前に置かれているのは不審である。「下の午の日」は、故実の知識に基づいて記されたもので、実際の日付を示しているものではないとも考えられる。これらのことから、作者が他の年の記憶を混同したか、あるいは意図的操作が施されたか、いずれかの可能性が推測できるのではないだろうか。

また、見る間に降り積もる雪に「所からも分きて色そふ心地」がし、その上、同行の者がいるにもかかわらず「一人見るは甲斐なくぞ」とまで思った作者の、この折に臨んでの詠歌が、単に御代をことほぐだけの公的儀礼的な趣の③であることに、どうしても違和感を抱かざるを得ない。「典侍にて」とあるので、この日は職務として出かけたのであろうが、これは雪に関する非常に個人的な感傷を描いていると受け取ることができる叙述である。ここでの和歌と地の文との繋がりには「雪」と「みゆき」でしかない。しかも、御髪上の行事には天皇の行幸

・出御はないことから、ここの「みゆき」は「御幸」とは懸けられず「深雪」の意味でしかあり得ないのではなからうか。大晦日であれば、「代々をかさねて」の感慨とより強く結びつくかもしれないが、少なくともこの作品の叙述・配列において、これは大晦日のこととされてはいない。和歌③から想定されるのは、雪が深く積った御幸のあった日のはずであるが、12段には御幸に関する記述はない。和歌③が、表面的には御髪上という歳末の行事にあたつての感慨という体をとつていても、地の文との遊離は覆うべくもない。その意味については、後述する。

13 廿八日、内侍所の御神樂にて行幸ならせ給し、典侍に参る。紅梅の匂・まさりたる単・紅打衣・萌葱の表着・赤色の唐衣、扇をさす。内侍勾当、柳衣・紅単・同じき打衣・葡萄染の唐衣。刀自、御幣を参らすれば、内侍より典侍に伝へて奉る。御拝の後、端なる御座に移りおはします。荒薦敷きたるさまも、いと神くし。庭火いと掲焉なるに、人長のさまもをかしう見ゆ。明方近き空の気配なるに、物の音もいとしく雲井に澄みゆく心地して聞えしかば、何となく思ひつゞけし、

④ いとゞ猶雲井の星の声ぞ澄む天の岩戸の明くる光に

先述の如く、『竹むきが記』では内侍所の御神樂が二十八日に行われたとしているが、『花園天皇宸記』は、「〔十七日、戊午〕今夜内侍所御神樂也」とする。明確に史実との齟齬を指摘できる章段である。ここでも、前半は行事の次第を記録し、後半に至つて叙景を交えながら感想を記するという11段と同様の構造となっている。それは、和歌と地の文との関係においても同じである。「明方近き空」「物の音もいとしく雲井に澄みゆく」が、和歌に対応する表現となっている。和歌④は類型的な詠歌である。参考歌として次の三首を挙げておく。俊成以外は、西園寺家の縁の人物の詠である（注3）。

文治六年女御入内の屏風に、十二月内侍所御神樂所

皇太后宮大夫俊成

ことわりやあまのいはともあけぬらむ雲るの庭のあさぐらのこゑ

（『風雅和歌集』卷八 冬歌・八八七）

題しらず

後一条入道前関白左大臣

春たつと霞みにけりなひさかたのあまのいはとの明ぼの空

（『新後撰和歌集』卷一 春歌上・三）

嘉元元年三十首歌めしける次に、夜神楽といへることをよませ給うける 伏見院御製

星うたふ声や雲ゐにすみぬらん空にもやがてかげのさやけき

（『新拾遺和歌集』卷十八 雑歌上・一七二三）

14 年かへりつゝ、珍しき玉の台に光をそへたる春の色なれば、おのゝ思ことなくぞ見交すべき。ほのゝと
とするに四方拝あり。清涼殿の南の第三の間を上げて御道となる。庭に大宋の御屏風を立てめぐらして、御
拝あり。御剣の次将、南に候ふ。御挿鞋の役人、西に候。小朝拝の程は清涼殿の廂の御簾を上げられて、母
屋の御簾を垂れらる。殿、御簾にて、出させおはします。北より第二の間に、御椅子につかせおはします。
殿上の淵酔、上の戸より御覧ぜらる。女房、五衣の単を裾被きて参る。三日は御膳につかせ給。朝餉にて、
女房陪膳なり。

明けて元弘二年（一一三二）正月の行事の次第を記録的に書き進める。「珍しき玉の台に光をそへたる春の色」
には、岩佐美代子氏のご指摘のとおり（「新大系」脚注）、富小路内裏に遷御後初めての春という意味が込めら
れている。前掲の「春たつと」の和歌を見ると、この和歌と同趣の発想のもとに和歌④の「明くる光」と「年か
へりつゝ、珍しき玉の台に光をそへたる春の色」とを結びつけるため、十七日であつた内侍所の御神楽を敢えて
二十八日のこととして、新年の記事の14段の直前にもつてきたのではないかと考えられる。この章段では「四
方拝あり」以下、急に記録的色彩の強い叙述となり、以後しばらく記録的叙述が続く。作者の感想の付記らしい
ものはあるもののそれまでのような感傷的な叙述が影を潜め、また和歌も記されない。それだけに9〜13段の叙

述に見られた叙情性がいつそう際だってくる（注4）。

以上、9～14段にかけて見てきたが、この部分には「雪」の場面が多く、それを核として記事が展開されているらしいことが注目される。『竹むきが記』における「雪」や「雨」などの天候に関する記事を調べてみると⁵、上巻において「雪」が集中的に扱われているのは、この部分だけである。そのことは、日蝕の日の公宗の作者への言葉「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」の重要性を再認識させる。9段から13段までの叙情性は、すべてこの言葉に端を発しているのではないか。作者は、元弘二年の記事を記し終えたところで、この公宗との逢瀬を回想している。

思ひかけず旅寝の床に夜を明かす事なん待し比、二月の初め、例の宿^{やど}りに立ちとまれるに、鳥の声、鐘の音、しきりに驚かしつゝ、車引出たる暁の空霞み渡りて、峰の横雲ほのかに白みゆく程なり。吹すさむ風につけて、其処とも知らぬ梅が香の匂ひたるなど、いと艶なりしも、心なき身にはさしも思ひわかれざりしさへ、思ひ出らるゝ端^{つま}にありける。

この「二月の初め」は前後の文脈から元弘二年二月のことと推定される。すでにその頃には二人の関係が深まっているようである。とすれば、その前年の暮には、作者の思いが公宗に懸けられていたと考えても不自然ではない。職務上の付き合いではなく、一人の女性として公宗と出会えたのが、9段の折ではなかったかと思われる。その点からも、この部分には、底流に「雪」の日の思い出にかかわる作者の特別な感傷があるのではないかと考えるのである。

今ひとつ指摘できる問題は、11・12・13段の構造における共通性である。これらの章段は、書き出して行事内容を標題のように掲げ、次にはその行事の次第を記録的に描き（前半部）、ついで自分の感慨を述べ、記事全体を集約するような形の和歌を配するという構造となっている。特に11段・13段では、和歌と地の文に、共通する表現が多用されている。このことは、詠草にしろ、記憶にしろ和歌をもとにして、地の文が構成されていたこ

とを示しているといえよう。上巻の和歌二二首の内、前半の九首は、おおむね同様の傾向を持つ^(註5)。12段は他の二段とほぼ同じ構造を持ちながら、必ずしも地の文と和歌とが緊密な関係を保っているとはいえない。しかも、先述の如く直後の13段は、史実との齟齬を指摘できる箇所である。そのこの意味については、項を改めて考える。

三 再構成の手法と和歌の役割

如上に9段から14段の配列について述べてきたところを一覧表にして示せば、次のとおりである。

段	日付(本記)	他史料	事項	天候	和歌
9	十一月一日	同上	日蝕で謹慎	積雪	
10	?		内裏内での御幸	月のくまなき夜(晴)	
11	十一月下酉日	二六日	賀茂臨時祭	明け方、時々降雪	②
12	(暮)下の午の日	二九日	御髪上	夜、吹雪・積雪	③
13	(十一月)二八日	一七日	内侍所の御神楽	晴天	④
14	年かへりつゝ	一日	四方拝 他	晴天	

事柄の起こった日にちに忠実であれば、9 ↓ 10 ↓ 11 ↓ 13 ↓ 12 ↓ 14であったはずである。それを、実際には十七日であった内侍所の御神楽を二十八日とし、「下の午の日」に行われた御髪上の後のこととして置いている。どうしてこのような配列をしたのだろうか。その理由を推測すると、先に触れたように元弘二年元旦の「年かへりつゝ、珍らしき玉の台に光をそへたる春の色」の新しい内裏での初めての新春をことほぐ感慨に、和

歌④の「明くる光」を響かせ、より一層のめでたさを加えようとしてのことではないかと思われる。仮にそうだとすれば、吹雪いて見る間に深く積もったという御髪上の日（下午日）は本来の位置にはもってこられなかったのである。したがって御髪上は実際の下午日（二十九日、大晦日）を繰り上げて二十八日より前の、しかも歳末近くの位置に置かざるを得なかったのだと考えられる。さらに、13の書き出しに、「内侍所の御神楽にて行幸」と記すことで、直前の和歌③の「みゆきなるらん」とも関連性を持たせることができ、また、この「みゆき」は、その前段の和歌②の「雪や猶」とも響きあっていることにもなるのである。

右の観点から改めてこの配列をとらえ直してみる。9と10とは、日蝕で謹慎し籠っている夜の積雪と月の明るい夜のお出ましと、明らかに対比される状況の記事ではあるが、10は9の情感をそのまま引きずっていることをみると、作者の中では同じ公宗への思慕で繋がった記憶であったのでここに置かれたと考えてもよいかもしれない。11の状況の降雪、和歌②の「雪」と「かさねて」「雲井」は、次の12の状況の吹雪、和歌③の「かさねて」「大内」「みゆき」と関連している。そして和歌③の「みゆき」は、13の「行幸ならせ」と関連し、13の和歌④の「明くる光」は、14の「珍しき玉の台に光をそへたる」に関連している。このように11から14の配列は主として和歌に用いた言葉の連鎖としてとらえることができる。このことは、一つ一つの記事が同様の構成となっていることを考え併せると、作者が和歌をもとにその記事の地の文を構築していったと同時に、記事の配列作業の上でも和歌の表現を利用していたということを示すものといえるのではないだろうか。そして、9・10と11から14を結びつける存在として雪がある。その雪は、公宗との恋愛の発端という作者の特別な思い出に繋がり、公宗への思慕の表象であった。一見何の破綻もなく単に行事が記録されているようにみえるが、そこには、より密接な関連性を持たせた形で配列してゆくという作者の操作があると推定できる。

次に、12段の内容に絞って検討する。しかし、まずは記事そのものの持つ問題について触れておく。14段の元弘二年元旦が晴天であったことは『花園天皇宸記』に「天顔快霽、日脚和暖（下略）」とあり、追認できる。管見

の及ぶ範囲では、元弘元年大晦日の降雪・積雪を確認する史料もなく、また元弘元年前後で御髪上の日に積雪をみた年を他史料から探し出すこともできなかった。したがって以下は推測の域を出ないが、花園院が、二十九日についての天候を記されていないので、『竹むきが記』の描くような積雪が果たして二十九日の夜にあったのかどうか疑わしくなってくる。もし降雪も積雪もなかったとすれば、別の年の「御髪上」の記憶がここに置かれたことも一つの可能性として考えられる。

さて、和歌③から想定できるのは積雪のあった御幸の日であるはずなのに、この段には御幸に関する記事が全くないと先述した。また配列からいうと、和歌③は、「みゆき」の縁で前段と後段とを結んでいることも確認できた。そして何よりも、この和歌は地の文の「所からも分きて色そふ心地するに、一人見るは甲斐なくぞ侍し」という個人的な感傷を全く反映していない。このことは一体何を意味するのだろうか。

一つには、作者の思いが、和歌③に詠まれるような降り積もる雪によそえた御代の永続を喜ぶ、その思いだけであったという事が考えられる。しかし、それならば作者が「この雪は。いとど埋もれなん」という声に驚いた人物と分かち合えるはずである。それをわざわざ「一人見るは甲斐」なしと記しているのは、作者の念頭に同行の者とは別の人物がいたらしいと思わせる叙述である。

ここで、次段の和歌④の場合をみる。直前の地の文「物の音もいとどしく雲井に澄みゆく心地して聞えしかば、何となく思ひつゞけし」では、「思ひつゞけ」たのは、直接には和歌④ということになるが、表現では共通するものがあるものの和歌に詠まれている以上の思いが地の文にあるように受け取ることができる。思い続けた内容は、神楽の荘厳さへの感激ばかりではないと思わせるような叙述となっている。

「何となく思ひつゞけ」という表現を、作者は他に一度だけ用いているが、それは正慶二年（一三三三）「卯月廿日余り」公宗との不安を抱きながらの後朝の別れに際して、次のような思いにとらわれる記事である。

明けはなるゝ気色なれば、鬢櫛^{びんくし}など召して立出給。端^はもさながらにて打臥しつゝ猶ながめ出でたるに、俄に

空さへかき曇りて、わづかに残りつる月影も見えずなりぬれば、何となく思ひ続けられしをかし。

⑯ いかにせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬぐの空

④と同様に、和歌に用いている表現が地の文にも見られる。思い続けたのはこの和歌に詠まれている公宗への思慕の情である。この記事の場合は、地の文の叙情性と和歌のそれとが同一であり、作者は素直に自己の思いを和歌に詠み込んでおり、13段とは趣を異にしているといえる。13段では、厳肅な御神樂に触発された思い、それはおそらく9段からずっと揺曳している公宗への思慕であろうが、それが地の文の底流に存在するのではないかと思われる。しかし、それは決してそれとわかる形で表出されない。11段では、本文の引用時に触れておいたが、和歌②には、地の文で繰り返して描いている袖のしおれ果てた様も、主上への讃美も直接に反映していない。この場合は、主上への讃美が還立の舞の叙述に入り込んできたためと考えられる。

また、「御雪」と「御幸」とを懸けるのは和歌の常套的手法であるので、和歌③を一首として独立させて見れば何の不都合もない。ただ12段の記事には御幸がないということが問題となるのである。また、地の文の持つ雰囲気と和歌③の趣とはあまりにかけ離れていると言わざるを得ない。「御髪上」と「ふりにける代々をかさねて大内や」との繋がりも直結がたいものがある。公的儀礼的な和歌③の在り様は、「ふり」―「代々」―「かさねて」―「大内」―「幾重」―「つもれる」―「みゆき」という語の繋がりがからみて、大内裏での行事で御幸があり、かつ降雪・積雪があった折にこそふさわしい。御髪上には天皇の行幸・出御はないのであるから、和歌③は、12段とは別の機会に詠まれたものと考えられることも可能である。別の場で詠まれた和歌③が、配列の都合上ここに移され利用された可能性も指摘できるのではないだろうか。

『竹むきが記』を通してうかがわれる作者名子の性向は、自分の感情の起伏を露わに表出することをしない理智的なものである。それは彼女の詠歌の性格にもよくあらわれているが、それにしてもこの章段の地の文と和歌との違和感は拭えない。そこで別の場での和歌が移された可能性を推定してみたのである。そのような操作をし

たのは、この吹雪の夜の感慨を、密やかな心中の思いを、それと知られぬ様に、しかし是非とも書き残したかったためなのではないか。12段では「典侍にて」、13段では「典侍に参る」と、ことさら自らの女房としての職務の記録の体をとっているが、本当に書き残しておきたかったものは、その行事の間に心中をよぎった密やかな思慕の情ではなかったかと考える。それが9段から13段までの叙情性となってあらわれているのではないだろうか。作者は、和歌をもとに記事を構成していく際に、公宗との出会いの表象である雪を核としながら、それに和歌の表現を絡ませるという手法を採ったのではないかと考えた。そこには、公宗との出会いから揺曳する感情を思ひ出の雪を据えることで、露わには表出しないながらも自己の意識の中では密接な形で結びつけて配列しておきたいという作者の意図があったといえるのではないだろうか。

本節では、作者の執筆意図を探る一環として元弘元年暮の記事を中心として分析を試みた。他に確証も傍証も得ることができず本文の解釈のみに頼らざるを得ないため、種々の仮説の提示にとどまってしまった。しかし、その中でもおぼろ気ながらつかめたのは、作者が冒頭から典侍としての己の立場を明確にし印象付け、女房として宮中の行事を記録し、その立場で持明院統の皇統の永続をことごとくといういわば表側の意図と、公宗との交情の機縁であった雪の連関で記事を配列し、その裏側、底流に己の密やかな心情を綴っていくこうとする意図との二つの意図があったのではないかということである。

注

- 1 『日中行事』（『群書類従』巻第四百六十六、第二十六輯）
- 2 『東宮年中行事』（『群書類従』巻第八十八、第六輯）
- 3 和歌および和歌番号は、『新編国歌大観』による。伏見院の母は、玄輝門院、西園寺（洞院）実雄女であり、中宮は、

西園寺実兼女鐙子（永福門院）である。後一条入道前関白左大臣は、一條実経のことで、母が西園寺公経女輪子である。

4 岩佐氏は、『京極派歌人の研究』（笠間書院、昭49）において『竹むきが記』の性格を次のように規定されている。

このような意味の家門意識を持つ女性―しかもかくまで愛し愛された夫を非業に失い、家門も危殆に瀕する中で、遺孤をかかえ家門に関する全責任をになう羽目におちいった女性を書きつづった日記に、王朝女流日記のような自己の心の奥深くにひそまて行く自照性を要求しうるであろうか。本記はそのような性格のものではない。

5 『竹むきが記』における天候に関する記事は、左記のとおりである。

雪…上巻は本稿で対象とした箇所／下巻 実俊の幼い和歌（暦応三年）・雪の朝、女院（永福門院）から実俊の将来を予祝する和歌・方違の御幸で実俊の名誉（暦応三年暮）・実俊元服の翌日、別当と和歌の贈答（暦応四年十二月八日）・霊鷲寺の談義への聴聞後女院（広義門院か）との和歌の贈答（貞和元年十二月十五日）・九月尽の雪、足利直義室と和歌の贈答（貞和三年九月）／雪の朝志葉へ雉の子を贈る・神明寺の草庵にて（貞和五年二月）

霰…上巻 御前の試（正慶元年十月）

雨…上巻 廻立殿の行幸／下巻 八幡詣で激しい雨（康永四年十月）・初瀬詣（貞和三年正月）・神明寺の草庵を訪れた夜（貞和五年二月）・鷹司の老人と北山で花見、和歌の贈答（貞和五年春）

時雨…下巻 大納言との和歌の贈答（貞和三年九月頃）

6 後半の和歌一三首は、公宗との贈答歌他二人の交情を中心としたもので、その位置付けも前半とは別のものであるが、それについての考察は第二章に譲る。

第三節 北山第御幸の記事における史実との齟齬

一 北山第への行幸・御幸の記録

『竹むきが記』の作者名子は、典侍としての公的生活を経験しており、上巻においても公事の記事が多く採録されている。そういった場合、作者は記録することをかなり明確に意識しており、加えて公事の次第や装束に関する詳細な記述からは、作者がその記録を正確なものにしようとする意図が窺われる。その姿勢は、公的日記を執筆する態度に近いといえよう。これは私事が多くなってくる下巻においても変わらず、作者の基本的な執筆姿勢であると考えられる。にもかかわらず、一見公的記録の羅列とみえる記事の行間や取捨選択に、作者の生の感情が込められている場合がある。簡潔に見える表現の裏に作者の真情を読み取ってゆかなければならないことは、すでに先学が指摘されるところである。

そこで、『竹むきが記』における記事の構成法に注目してみた。他史料から確定できる史実とこの作品の記述との齟齬を分析することで、そこに作者の構成意図を明らかにするための手がかりが見つけられるのではないかと考えるからである。本節では、その中で特に北山第への行幸・御幸に絞り、作者の執筆態度の一端を考察してみたい。

『竹むきが記』の記事は、ほぼその事柄の起きた時間に従って配列されているが、中には曖昧な日付の表記の続く箇所があり、また破綻のない配列に見えて実は日付が前後している箇所を見いだすこともできる。それらについては先に一覧にして掲げた（第一節三項）。特に次の四例が、その主なものとして挙げられる。

1 廿八日、内侍所の御神樂にて行幸ならせ給し、典侍に参る。

（上巻・元弘元年十二月）

『竹むきが記』では二十八日としているが、『花園天皇宸記』同年十二月十七日の条に「今夜内侍所御神樂也」とある。この記事前後は、日付の不明確な箇所もあり問題があると考えられるが、これについては前節で考察した。

2 暦応四年四月、萩原殿の内親王、持明院殿へ入らせ給ふ。やがて院号ありて、徽安門院と聞ゆ。（下巻）
萩原殿（花園院）の皇女寿子の女院宣下を、他史料ではすべて建武四年二月としている。一例として『女院小伝』を挙げておく。

徽安門院。寿子。花園女。母准三后從三位藤実子。「入道大納言実明二女。」建武四二三為内親王。廿。同
七日准三后。同日院号。

3 春の除目に中将になり給ふ。八歳なり。（下巻）
文脈から、この春の除目は暦応五年を示しているが、『公卿補任』康永三年の実俊初出の項は、次のように付記している。

西園寺藤実俊十（中略）暦応二正五正五下。同三八二從四下。同四十二廿二左中将。康永元正五從四上（院当年御給）。（下略）

これによると、実俊が左中将に任ぜられたのは、暦応四年十二月二十二日である。

4 今年御幸始、この山へ成らせ給。（下巻・暦応五年）

暦応五年正月二十八日に北山への御幸があったことは『中院一品記』により確認できる。しかし、北山第への御幸始が、その前年の同日にもあったことが、同記ならびに『師守記』により確認できる。

以上のように見えてくると、これらの『竹むきが記』の記述と史実との齟齬には、単純な記憶違いとか誤写とかで片づけられない問題が潜んでいるように考えられる。そこで、4の北山第への御幸を中心にして、この問題について検討してみたい。

まずはじめに、『竹むきが記』における北山第への御幸に関する記事を確認しておきたい。

I 元弘二年（一二三二）一月二日

二日、春の節になる。御方違の行幸・御幸、同じく北山殿にならせ給。御方く、所くにしつらひ置かる。

II 暦応三年（一二四〇）暮

その年の暮に、御方違の御幸あり。女院の御方へ内、成らせ給ふ儀なれど、設けの事どもは本所の沙汰也。主も参り給。

III 暦応四年（一二四一）八月

八月に御幸始、この前なる永福門院の御方へ成らせ給ふ儀なるべし。院の御方も成らせ給へれば、主も参りぬ。

IV 暦応五年（一二四二）一月

今年御幸始、この山へ成らせ給。

V 康永元年（一二四二）春の末く五月

永福門院、例ならぬ様に聞えさせ給へど、（中略）日々に重らせ給て、院・女院御幸ありて見奉らせ給。

VI 貞和二年（一二四六）十月

同じ年の神無月の比、俄に女院の御方・一品宮ならせ給ふ。紅葉御覧ぜらるべき御心ざしなるべし。

VII 貞和三年（一二四七）九月

故竹林院入道大臣、卅三年に当り給。（中略）九月廿五日、院の御方御同車にてならせ給ふ。

VIII 貞和五年（一二四八）一月

貞和五の睦月に、院・新院御幸始、この山へ成らせ給ふ。

以上八カ所が北山第への御幸の記事である。このうちIのみが上巻で、以下はすべて下巻に入ってからのも

である。

それでは、実際に北山第へほどの程度の行幸・御幸があつたのであろうか、他史料から確認する。左に『竹むきが記』の記載期間と考えられる元徳元年から貞和五年までに限って、『史料綜覧』により項目を列挙する。その際、『竹むきが記』における記事に対応するものには、その記事番号を「↓」をもつて示した。

元徳二年 一月 九日 後醍醐天皇、権中納言藤原公宗の第に御方違行幸

元弘元年 三月 三日 中宮禧子、北山第に行啓

同 三月 四日 後醍醐天皇、北山第に行幸

同 七月 一三日 後醍醐天皇、北山第に行幸

同 一二月 五日 光厳天皇、永福門院の宮に行幸（北山か）

元弘二年 一月 二日 光厳天皇、花園上皇と共に、北山第に御方違行幸 ↓ I

同 一月 一五日 後伏見、花園両上皇御幸始（注）

同 一月 二〇日 後伏見、花園両上皇、北山第に行幸

同 二月 一六日 光厳天皇、北山第に御方違行幸、後伏見、花園両上皇も之に御幸

建武元年 五月 九日 後醍醐天皇、御方違として北山第に行幸

同 一〇月 一四日 後醍醐天皇、北山第に行幸、笠懸御覧

暦応三年 一二月 光厳上皇、御方違として北山殿に御幸 ↓ II

暦応四年 一月 二八日 光厳上皇、御幸始、北山殿に御幸

暦応五年 一月 二八日 光厳上皇、北山殿に御幸 ↓ IV

貞和二年 一〇月 広義門院、北山に行啓 ↓ VI

貞和三年 九月 二四日 光厳上皇、広義門院と共に、北山第に御幸、門院父公衡三十三回忌仏事修行 ↓ VII

貞和五年 一月二九日 光嚴、光明兩上皇、薨御幸始、北山殿に御幸 ↓Ⅶ

このうちⅡとⅥは、『竹むきが記』の記事のみを史料とする事項である。この一覽中には、ⅢとⅤに対応する項目が見られない。Ⅲの徽安門院女院宣下は、他史料と四年余りも食い違っているので、史実として採りあげていないのである。また、Ⅴの永福門院御見舞の御幸に関する『竹むきが記』の記事は、『大日本史料』第六編之十一の補遺には「五月七日、伏見天皇ノ中宮永福門院崩御ノ条」として引載されている。公宗誅殺事件（建武二年八月二日）以後の北山への御幸では、暦応四年の御幸始だけが『竹むきが記』に記事として採られていないことが注目される。

暦応四年と五年の御幸に関する他の史料は次のとおりである。

暦応四年 一月二八日

『師守記』 廿八日、丙^ち巳、天晴（中略）今日御幸始云々、「北山殿歟云々」供奉人可尋記、

（裏書）廿八日後日尋記之 北山殿 御幸 公卿 按察大納言 殿上人 忠季朝臣 宗雅朝臣（下略）

『中院一品記』 廿日自仙洞被進 勅書於入道殿 御幸始 通―供奉事也即被申領狀了叙位執筆事有歡感可

自愛歟（中略）兼又廿八日御幸始供奉事 相構く何とも被沙汰立候へかしと覚候（下略）

暦応五年 一月二八日

『中院一品記』 廿八日 天晴除目又延引（中略）今日院御幸 北山殿「永福門院御座」供奉公卿春宮權大夫

「実夏 香符衣」（下略）

『統史愚抄』 廿八日庚子。院幸某所。即還御歟。

『竹むきが記』はなぜ前者の暦応四年御幸始を記さないのだろうか。また、後者の暦応五年の御幸をどのように描いているであろうか。次項で検討する。

二 暦応五年御幸始の記事

本項では、具体的に本文を分析しながら、作者の叙述の在り様を明らかにしてみたい。引用に際しては、仮に段落に分け、私に段落番号を付す。また日付は点線で囲み、作者の心情を描く箇所には波線を施す。紙幅の都合で、完全な引用ができず一部省略したので文脈を辿りにくい箇所があるが、ご了承いただきたい。

(1) 暦応三年五月の比、新女院、仁和寺の准后の御許にて御出家の由聞えさせ給ふ。いとあさましき御事にぞ侍ける。

「新女院」は『師守記』などによると宣政門院權子のこと、後醍醐皇女、光嚴院妃、母は永福門院の異母妹後京極院である。突然の出家もこの微妙な立場によるものであろうか。前年八月十六日の父帝崩御も影響しているかもしれない。

(2) 同六月、東北院の僧正わづらひ給事侍て、十九日、朝の露と消え給ぬ。あはれにいみじとも言へばさなり。

ここでは、永福門院同腹の弟寛円の死去に触れている。(1)とともにほかない世の出来事として挙げているようであるが、西園寺家、特に永福門院の縁の人々についての記事でもある。

(3) かゝる程に、侍従の君移り住み給べう、女院の御方急ぎ立たせ給ふ。やがて添ひ聞ゆべうあれば、さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ事しあれば、二位殿にて女院の御方さまへもこの趣を聞えたるに、いと僻くしき事と諫めさせ給つゝ、差し放つべきにはあらぬ由、さまぐにのたまへるも御理なれば、心弱く思ひ立たれぬ。(中略)北殿にこそ住み給べきを、近ぐにて御伽仕ふまつらせ給べく、女院の御方聞え給へば、そのまゝにて南殿になを住み給。朝夕召し纏はせ給つゝ、翫ばさせ給さま、かねて思ひ聞えしにも過ぎて、よろづ疎かならぬ御様にぞ侍ける。

これは、実俊の北山移住についての記事である。かつて公宗の正室として住んだ北山第への移住であるだけに、複雑な思いにとらわれる自身の姿と女院の実俊愛育の様子が描かれている。「かゝる程に」に、岩佐美代子氏は「さきに兼季、今また覚円の二人の愛弟の死を見て、寂寥と家門存廃の危惧から、矢も楯もたまらない気持で実俊引きとりに踏みきった」永福門院の心理を読み取っておられる^(注2)。名子はその女院の気持を付度しての表現ということであろう。過去の経緯から躊躇する名子を「いと僻くしき事と諫め」つつ様々に言葉を尽くして迎え入れていることから、この移住が女院の強い意向によるものであったことは否めない。

(4) 雪の朝に、日毎の所作なる文を、人く読ませ聞ゆるに、詠み給へる、

(5) 雪降りて寒き朝に文読めと責めらるゝこそ悲しうはあれ

女院の御方に聞かせ給て、

(26) 踏み初むる和歌のこしぢの鳥の跡になをも絶えせぬ末ぞ見えける

又雪の朝、女院の御方より、

(27) 栄ふべき宿の主の幾年か絶えぬ御幸のあとを見るべき

(28) 消ぬが上に降り積む雪の情にも宿の主を待つと知らずや

(3) を承ける形で、実俊の幼いほほえましい和歌と、それにつけての女院の実俊の将来を予祝する和歌を配している。女院の和歌には、北山の雪にかこつけて「絶えせぬ末」・「栄ふべき」・「絶えぬ御幸」と西園寺家の復興と繁栄とを望む思いがありありと詠み込まれている。

(5) その年の暮に、御方達の御幸あり。女院の御方へ内々成らせ給ふ儀なれど、設けの事どもは本所の沙汰也。

主も参り給。

(中略)

「亭主いみじく答へ聞えたる」と、いみじう興ぜさせ給ふさまも、おかしう聞ゆ。御盃、御酌にて賜はせなど、いみじくもてはやさせ給へし。^(下略)

この暦応三年暮の御幸は、「女院の御方へ内々」のものであったと、わざわざ断っている。その折、実俊の対応

を光嚴院が誉められたことを記している。

(6) 曆応四年四月、萩原殿の内親王、持明院殿へ入らせ給ふ。やがて院号ありて、徽安門院と聞ゆ。

次の徽安門院御幸始の導入部と考えることも可能である。先述の如く、徽安門院の入内の時期については、宣政門院の突然の出家以後との見解^{（註）}もある一方で、興仁親王（後の崇光）降誕、建武元年四月二十二日以前という推定もある^{（註）}。そのどちらを是とすべきか、いまだ明確な解答を得るに至っていない。

(7) 八月に御幸始、この前なる永福門院の御方へ成らせ給ふ儀なるべし。院の御方も成らせ給へれば、主も参りぬ。「行末も頼もしきさまなるは、心安く、喜び思さるゝ」など、女院の御方へも様々聞えさせ給由うけたまはるぞ、いと嬉しう侍ける。

この御幸の折も実俊が誉められたと女院から聞かされ、その感想を記している。

(8) 神木、長講堂におはしつる、九月に御帰座あり。藤氏の人々供奉せらる。^{（中略）}棧敷の事、季教よろづ奉行し侍り。女院の御方も成し聞ゆ。出車あまた、本所の人々も残りなくぞ参れる。事故なく帰座侍る、いとめでたくな。

この神木帰座の記事を入れたのは、徐々に落ち着きを取り戻しつつある西園寺家の周辺を描く為であったと考えることができる。また、当時、永福門院・広義門院・徽安門院が在世しているが、この前後の文における「女院」の用例から帰納して、右の「女院の御方」も永福門院と考えられるので、その関係から、この記事を選んだとも考えることができる。「いとめでたくな」という感慨には、再び訪れた安寧を喜ぶ名子の心情が込められている。この神木帰座は、史実では八月十九日であったが^{（註）}、それを九月としたのは、(7)八月―徽安門院御幸始、(8)九月―神木帰座、(9)十月―実俊の縁談という整然とした記事の配列とするためかとも考えられる。

(9) 院の御方の姫宮、入聞ゆべうのたまはするを、「いたくさやうの例もなきを」と人々申侍れど、しきりに承り侍れば、永福門院も、たゞ我そばもとへの儀にてもあるべうのたまはすれば、十月にぞ入らせ給ぬる。

ここでも、永福門院が実俊のために心を砕いておられる姿を描いていることに注意しておきたい。

- (10) 同十二月七日、元服の事あり。(中略)寝殿の間の障子を取りて、簾を掛く。これに女院の御方御座あり。

公卿の座上、東の御簾の際、加冠の座を敷く。北面の間、着袴の間とす。簾を上げて西東に高灯台を立つ。

これにて袴着あり。水干、裏濃き蘇芳唐織物、萌葱、文鶴菱、松樺の栢、紅梅の浮織物の二小袖、白織物の肌小袖

文、水干に同じ、院の御直衣御指貫に改む。(下略)

実俊の元服の様子を、次第・装束・しつらいの様などから詳細に描いている。この部分は記録的筆致といえ、

「雑具の上下、説くありといへども、これは上に置けるなり」などと有職故実へのこだわりをみせることも、また上巻の公事を記録していた態度に相通じるものといえる。

- (11) その夜、雪いみじう降り積りぬるに、朝いと疾く、別当、昨夜の儀よろづいと由しう、昔に恥ぢざる由など、様ぐくに賀侍て、

- (29) 栄ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる

返事に添へ侍ける、

- (30) 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし

元服の翌朝の別当(柳原資明)と作者との祝儀の和歌の贈答である。ここに、実俊の将来を頼もしく見つめる母の姿をわずかに見いだせるが、それも儀礼的返歌の域を越えるものではない。

- (12) まことや、將軍より馬・太刀奉らる。先例にも叶へれば、更にめでたくぞ侍。

「まことや」と殊更何気ない様に書いてはいるが、將軍、足利尊氏との繋がりを示し、それが西園寺家嫡流としての先例にも叶っているのだなおさら「めでたくぞ侍」と重ねて祝意を強調している。ここには西園寺家当主実俊の母としての誇らしさが滲み出ている。

- (13) 春の除目に中将になり給ふ。八歳なり。

中将昇進の年齢を、わざわざ「八歳なり」と記している。実は実俊が中将になったのは、前年暮の臨時除目、七歳の折であることは先に確認した。「春の除目」に従四位上に叙されていることから、それを勘違いしたという可能性もないわけではない。

(14) 今年御幸始、この山へ成らせ給。「いつしかかゝる御光を待ち受け奉らせ給ふも猶異なりける御家の名残にこそ」など、世人も申侍とかや。元服の後禁色宣下ありしかば、織物の直衣指貫也。大御酒、内々の儀也。御馬・御牛、例にまかせて参る。御覧あり。然るべき殿上人、口を取る。常の如し。其儀、夜にぞ入ぬる。久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを、外様ばかりはあかぬ心地して侍れば、宝蔵をたづぬるに、三尺余ばかりなる花立を一对求め出ぬるをぞ奉る。「色も姿もなべてならず、いと由しう」など、様ぐの御沙汰どもにぞ及び侍ける。「主の作法進退、末頼もしき様なれば、朝家の為家の為、悦し召さるゝ」などさへ仰事賜はせぬる、いとめでたかりき。後にも女院の御方へ、くれぐれ聞えさせ給ぬるを、「かばかりめでたき勅書なれば」とて給はり置き侍ぬる。

さらに、この御幸始の記事で、重ねて西園寺家の慶事を記している。二重傍線部Aでは「元服の後禁色宣下」としている、この御幸は(10)「同十二月七日」以降でなくてはならない。「同」とは暦応四年のことであり、したがって(13)「春の除目」と(14)「今年」とは、この文脈からは、まさしく暦応五年をのみ意味する。

ところが、ここで問題となるのは、二重傍線部B「久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを」である。その感慨から、わざわざ宝蔵を探して花立を選び出し献上したという作者の行為は、当主の母としての自負を垣間見せるものであろうが、(5)の御幸を内々の御幸と記していることを考慮すると、西園寺家として内々でない御幸を迎えることは、この年まで絶えてなかったと受け取らざるを得ないのである。しかし、先に確認しておいたように、その前年の同日に光厳院は御幸始として北山第に幸せられている。「御幸始」には「讓位後御幸始」の他、「年始御幸始」などもあるが、史料により確認できる範囲では、暦応四年のそれは、光厳上皇の讓位後初めての

北山第への御幸であるので、「久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事」と書かれるにふさわしいのは、やはりこの年の御幸始であろうと考えられる。しかも、『中院一品記』によると、暦応五年は永福門院御座への御幸であったことも、『竹むきが記』の記事に該当する「御幸始」は四年のものであることの傍証ともなるであろう。

以上のように考えてみると、少なくともこの作品の文面からは、名子が暦応四年と五年の二回の御幸をまとめて一つの記事にしていることが明らかになってくるのである。このことは名子の単純な思い違いや記憶違いによるものとは思えない。その根拠を簡単にまとめて次に示す。

- 1 実俊元服の記事などの詳細さから、作者の記憶がかなり正確であったと推量できる。
- 2 この前後の記事が比較的細かに日付を明示していることから、意図的な配列と見なすことができる。
- 3 下巻においては、先の史実との照合に明らかのように、暦応四年以外の北山第への御幸はすべて網羅されている。

4 永福門院御座への御幸の場合(5)・(7)、わざわざそれと注記しているにもかかわらず、この(14)ではそれについて一切触れていない。

5 (14)で女院宛の光厳院の消息を、女院自身からこの上なく貴重な記念として「給はり置」いた名子が、その年月を錯誤するとは考えにくい。

以上の事柄から、この四年・五年の御幸の混同は、作者名子の意識的な操作、あるいは潜在的な願望のなせる操作ではなかったかと考えることもできるのではないだろうか。

三 暦応四年御幸始の記事がないことの意味

次には、基本的に記録的態度を保ちながら、敢えて暦応四年御幸始の記事を五年のものに取り込んでしまった

名子の意識を探ってみなければならぬだろう。

前項で見た如く、この部分の記事は、基本的には実俊を中心に構成されている。実俊がその利発さや対応の立派さを賞賛されたという名誉は、西園寺家の名誉であり、再興の兆しであり、未来への展望でもある。それと同時に、これらの記事の裏には、実俊の力強い後援者であった永福門院への名子の思いが流れていると考えられる。太い傍線で示したように、実俊と永福門院（「女院の御方」）が頻りに登場する。ことに「永福門院」の名は、上巻の一例（公宗初登場の段）を除いて他の五例がこの部分の周辺に集中している。そして、記事はこの後、在りし日の公宗や後伏見院の追憶から女院の崩御へと配列されているのである。崩御の記事では女院を失った悲しみを、「いとゞあはれに悲しうなん」「朝夕の事わざにつけても頼もしき御事なりつれば、一方ならぬ御名残も言はんかたなし」「女房たちも変らぬさまなるも、皆己がさまぐに行き別れ給ふ程ぞ、更に又かきくれ侍ける」などと重ねて記していることが注目される。これらのことから、ここには実俊に象徴される西園寺家再興への歩みとそれに尽力する永福門院の姿とを記録しておきたいという作者の意図が、明らかに看取される。

(14)の記事には、久方ぶりの御幸を迎える西園寺家の晴の行事を、その当主たる実俊の慶事と重ねることにより高らかに謳い上げたいという名子の願望があるように思われる。名子は、どうしてもこの御幸を、実俊を当主とする西園寺家の名誉の復活の象徴的な出来事として記録しておきたかったのであろう。そのために、実俊がその進退の確かさを院に賞賛される状況に加えて、将来の展望の現実性をより濃く付与する形で描きたかったのでないだろうか。実俊が元服し中将に任じられている暦応五年正月が、暦応四年正月の時点よりも、はるかに名子の意図に添うものであったといえるだろう。そのように考えてみると、(13)の「春の除目」の記事も勘違いなどではなく、西園寺家の「春」に集中させるため、意図的にこの年の「春」に動かしたと考えることもできよう。この記事ですでに「八歳なり」と記しているにもかかわらず、この後七月二十五日の中将拝賀の記事において、再びわざわざ「今年八歳にぞおはすべき」と繰り返して、念押ししているのも、それを補強したいという意識のあ

らわれではないかと考えられる。

たとえそれが意図的操作ではなかったとしても、名子にとつては、実俊が元服し一人前の当主として遇されるようになった暦応五年こそが、西園寺家として再び御幸を迎える名譽を担う機会として最もふさわしいと、強く意識されていたのである。そのことが、事実上「久方ぶり」の「御幸始」であつた暦応四年の御幸が、暦応五年の御幸に取り込まれてしまった事由であらう。

以上、作者の執筆態度からいつて当然描かれていなければならないはずの暦応四年御幸始の記事が、それとして採られていないことについて分析・検討を加えてみた。記録に厳格でありたいと努めている作者が、このような操作ともいえる選択をしたのであれば、それは作者のやむにやまれぬ気持がそうさせたと考えられないのではないだろうか。それは、作者の執筆動機・主題といったもののへ繋がつてゆく問題でもある。

作者が、どの程度意識的に記事を選択し配列していったかを確定することはできない。しかし、このような微少な問題からでも、作者の真情に少しでも近づくことが可能となるのではないかと考えている。特に『竹むきが記』においては、同様の考察を積み重ねて行くことでしか、作者の真の意図には迫れないとの思いが強い。敢えて単一例を扱ってみた所以である。

注

1 『花園天皇宸記』同年正月二十日条に「御幸北山殿也（中略）十五日并今日一向女院御所之儀也」とあり、この日の御幸始も北山第へのものであつたことがわかる。

2 「『竹むきが記』私注（下巻）」（『国語国文』第四一巻第三号、昭47・3）

3 岩佐氏は、「本記の成立を本文中にいう如く貞和五年とすれば、暦応四年はわずか八年以前の事であり、建武四年は

更に遡ること四年である。宮仕え体験の豊かな、そして家門の繁栄のためにも常に宮廷内―特に後宮の動向には注意を怠らぬはずの女性として、この程度の過去の事実をこれだけ大きく誤認するという事は一寸考えにくい」、また、「すでに正妃として後醍醐天皇女の居られる光厳院後宮に、更に花園院皇女を納れるという事は、当事者のいずれに対しても不穏当な措置である。おそらく徽安門院は、宣政門院の突然の出走・出家によって然るべき后妃を失った光厳院後宮に、本記に記すごとく暦応四年四月正妃の資格で入ったものであろう」としておられる（『京極派歌人の研究』第三章「後期の歌人」第四節「竹むきが記者と登場歌人達」 笠間書院、昭49）。

4 赤松俊秀「光厳天皇の御生涯」（常照皇寺発行『光厳天皇遺芳』、昭39 所収）

5 『春日神社文書』『公卿補任』などによる。

第四節 『竹むきが記』の構成法

一 史実との齟齬からうかがわれる意図的操作

前節までに、上巻ではDの元弘元年暮の記事を中心に、下巻ではKの北山第御幸始の記事を中心に、それぞれの配列の問題とそのような配列にした作者の意図を探ってみた。本節では、その他の箇所について検討を加え、作者の意図的操作の方向から、『竹むきが記』の構成法についての考察を総括する。

まず、元弘元年践祚の記事(A)・同年笠置落ちの記事(B)については、世情の混乱のせいかと述べたが(第二節)、Bと同年劔璽渡御の記事(C)との間に「その程の事は書きもとめず」と作者自身が記していることから、後醍醐天皇の倒幕計画の露見という政情の混乱で、手控えのようなものも十分ではなく、また作者の記憶も混乱していたらしいと推測できる。正慶二年、主上・上皇六波羅遷幸の記事(F)の場合も、「僻事もあらむとて、書きもとめず」との文面から同様の事情が考えられる。

また、正慶二年光厳天皇の都への還御の記事(G)は、一日の違いでもあり、誤写あるいは作者の記憶違いの可能性が高いと思われ、この一日の違いが意味を持つているとは考えにくい。下巻では、公衡の三十三回忌の記事(M)において、『竹むきが記』では二十五日とされている光厳院・広義門院両院の御幸が、実際には法事の前日二十四日であったということがある。しかし、これもGの場合と同様に一日の違いであり、誤写か作者の記憶違いと考えられる。これらの齟齬は、作者の執筆態度や意図と直接関連していくような問題ではないと考えられる。

次にそれ以外について、本項では、史実との齟齬を有する章段について、本文に即して検討する。

(1) 正慶元年、大嘗会関連の記事

神無月に御禊の行幸あり。前の日、河原へ御幸侍て、内侍習礼などあり。御見物の御幸ならせ給。(下略)
十一月四日、院の拍子合侍し。所作人、(下略)

同じ月の七日、新院の拍子合なり。所作人、(下略)

十一日、官司に行幸あり。後房・朝所あいたんじょう、御所にせらる。造合つくりあひのそば、女房の局になる。五節沙汰人々、花山・西園寺殿・日野大納言資名・権中納言俊美、五人なり。参りは西園寺殿より也。(下略)

丑の日は帳台の出御なり。御指貫を奉る御下袴、御褌を出さる。舞姫、台に昇る。御覧あり。(下略)

寅の日、殿上の淵醉なり。蔵人頭をはじめ、直衣どもにて、色々の桂、皆褌を出だす。三献に肩脱ぎて、万歳楽はやして乱舞す。(下略)

卯の日、標の山を引く。両行事弁・国司以下供奉す。朱雀門を入れて、官の南門より南庭に立。

御前の試には、舞姫昇りて座につく。童・下使は廊の内には入らず。(中略)殿上の淵醉は寅の日に同じ。御覧儀、上達部は御前に候す。(中略)風吹さえて、袖に玉ちる霰の気色など、いと面白くぞ侍し。

⑧ 唐玉の挿頭と見えて乙女子が立ち舞ふ袖に降る霰かな

廻立殿の行幸侍て、御湯の事あり。帛の御袍を召す。供奉人、小忌おみを着る。暁になりて帰り入らせ給に、雨降りて、人々もいたくしほれたるに、殿の御下襲、あるにもあらねば、今日の御参りの障りにやと、三位殿、忍びて侘び給もをかしかりき。されどもことさらにうるはしきさまにて、いと疾くぞ参り給し。

辰の日より節会はじまる。

十五日、清暑堂御神楽、御遊也。(中略)五節所御覧侍に、里のに、打乱の筥に薄様敷きて、櫛どもつみ入て、二階の下にかくし置けるを御覧じつけさせ給て、いみじう興ぜさせ給。(下略)

時は井殿に推参の参る日々は、夜中暁となく、彼方此方と通ひ参りつゝ、身も苦しきまでぞ覚え侍し。標

の山を、後房には曳かせて、御覽ぜられ侍し。

いつの夜にか、清暑堂に成らせ給しに、いさゝかも雲の迷ひも見えず、ことさらに空澄みて、(中略)いと臭き匂ひの燻り出しかば、いと疾う返入らせ給しも、残り多くぞ侍し。

午の日は豊明の節会にて、高御座に出御なれば、舞姫昇る。殿上人、登廊にて、びんたゝら、二度乱舞す。

(下略)

この部分では、日付の特定できない「時は井殿に推参の参る日、は」以下と「いつの夜にか」以下の章段を除き、ほぼ日時に従って記事が配列されているように見える。ところが、『花園天皇宸記』には、次のような記述がある。煩雑の感は免れないが、『宸記』の同じ日にちを簡単に追ってみる。

四日、庚午、晴、今日被召采女等、行烈有習礼、(中略)今夜行幸還御以後、可有拍子合、仍殊被迄之、亥一

点有出御(中略)、御神楽御遊等如例、及寅剋事了、所作人 神楽 本拍子冬定卿、(下略)

七日、「癸酉、」有拍子合事、丑剋許所作人等参集、(中略)次第又如四日、寅剋事畢、所作人 神楽 本拍子 洞院中納言(下略)

十一日、「丁丑、」晴、内々為覽女工所、有御幸、申剋出御、(中略)立御車於官司南門前、被御覽西庁修理、親王於此處乘御車、即還御、(中略)「帳台出御如例云々、供奉公卿、」今夕五節参入、西園寺大納言・日野大納言・花山院中納言、和泉国「(坊城)俊実卿、」・長門国「(吉田)定房卿、」西園寺大納言舞姫参入、自余四个所密参云々、

十二日、戊寅、晴、今日為斎場所御覽御幸也、申剋出御、(中略)今日広義門院・公卿淵醉也、(下略)

十三日、己卯、晴陰不定、雨脚或降、日景間見、為標山御見物有御幸、朕可参御車後也、(中略)到朱雀門前、引標如例、檢非違使等過之間、己及昏黒、仍立明、行列等不及委記、過了即還御(中略)、還御之間、於路頭雨灑、仍供雨皮、而還御之間晴了、(中略)於今者可御幸之由有仰、仍即参御車後、(中略)於官司西方、

欲立御車之處、廻立殿方有火光、仍被相尋之處、己以行幸成了云々、仍即還御、于時子終丑始歟、天雖陰月光不隱、後聞、丑剋行幸、辰一点主基事了還御、主基神膳間雨灑、幸路雖潤不及違乱云々、(下略)

十四日、庚辰、晴、入夜雨下、今日節会、内弁内大臣領狀、而此曉降雨、衣裳潤之間、難參之由内々申之云々、(中略)尚可及遅々之由申之、然者納言可為内弁歟、而辰日節会、納言内弁先例無之云々、然而遅々之条旁不可然、(中略)如此往反之間、及日没被始行歟、

十五日、辛巳、晴、今日節会、(中略)清暑堂御神樂曉天〔卯剋〕、被始、及日出事了云々、御神樂 本拍子

二条前中納言資親 (下略)

十六日、壬午、晴、踏歌節会、(下略)

〔宸筆本欠ク、写本ニ依リテ補入ス、〕

十七日、甲未、入夜二棟弘庇、有童女御覽、(下略)

右により確認できることは、十一日に御幸・帳台出御があつたこと、十二日に御幸、広義門院・公卿淵醉があつたこと、十三日に標山見物・殿上淵醉があり時折雨が降つたこと、十四日に節会があり、夜になって雨が降つたこと、十五日には節会・清暑堂御神樂があつたこと、十六日に踏歌節会(豊明節会の誤りか)があり、十七日に童女御覽があつたこと、『竹むきが記』には四名しか名前が挙げられていない五節舞姫を出した人物の残りの一人が吉田定房であると判明することなどである。このうち、『竹むきが記』と明らかに齟齬をきたすのは、「童女御覽」である。「童女御覽」は、通常『竹むきが記』の記すごとく卯の日に行われる。『宸記』の十七日の条には、宸筆本にはこの日の記載分はなく写本による補入である旨の注記があるので、果たして本当にこの年は「童女御覽」が十七日まで延期されたのかどうか、注意しておく必要もあろう。

また、「御前の試」は、寅の日に行われることになっている(『江家次第』・『雲図抄』・『建武年中行事』他)。

これは『花園天皇宸記』に記載されず史実の確認はできないが、もし故実どおりに行われたとすれば、『竹むき

が記』の記述とは齟齬をきたすことになる。先例と異なることについて、度々悲憤を漏らしておられる花園院が、「御前の試」について一切触れておられないところを見ると、故実と違う日程で行われたとは考えにくいのではないだろうか。

さらに細かい点を言えば、『竹むきが記』で「風吹さえて、袖に玉ちる霞の気色など、いと面白くぞ侍し」という卯の日の天候について、『花園天皇宸記』では、雨についてしか触れられていないことも挙げられよう。

作者の父資名も、その頃はすでに作者が想いを懸けていたであろう西園寺公宗も、五節舞姫を出している。しかも、資名は、『花園天皇宸記』によると大嘗会和歌の悠紀方を仰せつかっている。作者は、光厳天皇の即位式で典侍として名譽な裏帳の大役をこなしている。この大嘗会は、作者にとって、いろいろな意味で特別であつたはずである。

その大嘗会に関わる公事を、ここでは連日記録している上、ほとんど私事を紛れ込ませないで記している。このような形の記録は、この作品の他の箇所にはない。それにもかかわらず、その記録が史実と齟齬をきたすようなものであるということにはどのような意味が隠されているのであろうか。

先述のごとく作者にとって、即位式の裏帳の役は、生涯忘れることのできないことであつたに違いない。それは、『竹むきが記』が元徳元年の春宮（量仁、のちの光厳天皇）御元服から始められていることと無関係ではあるまい。持明院統の宮廷に出仕していた作者にとっては、我が身の名譽もさることながら、慌ただしい政情の中でまがりなりにも行われた踐祚と即位は、いかにしても記録しておくべき重要な事柄であつたと思われる。花園院はこの行事中の違例のことについて幾度か言及しておられる。次に一部を挙げてみる。

四日 院拍子合の条

冬定卿誤而多略之、如代々新院拍子合目六、是違失也、

十二日 公卿淵酔の条

郢曲無人数之上、未練之間、太以無興、維成依咳氣無声、能行大略一人也、尤冷然、雅朝・敦有未練之故也、
十三日 標山御見學御幸の条

抑公卿列可為北上東面、而有光卿立北面東上、不知先例歟、(中略)就中今度諸国亡弊之上、依兵乱、段米等
有名無実、及今月上旬、行事官等不可叶旨度、申切了、然而種々沙汰無為被遂行、併宗廟之助也、公私心勞
無極、然而面々奉行不存公平、只有私曲、而依仁政無嚴密之沙汰、仍弥如此歟、而今此大祝無為之条、真実
非天之冥助、爭被遂此大祝哉、向後運命猶有憑事也、

十六日 踏歌節会の条

是上首大納言以下数輩、皆早出之故云々、続内弁尤下臈納言所庶幾也、而見上首退出競出、不知公事之故也、
在其職不知其事、尸禄尸位之甚也、可彈指者也、

十七日 童女御覽の条

今度大祝無為無事、天下之大慶、心中喜悅、短筆難單、今度之儀、每事違乱、難被遵行、而遂以無為之条尚
々宗廟之助也、今度每事無違例、而叙位執筆先参女院淵醉之間、叙位及翌日未剋、清書上卿・参議等不参、
適及辰日被行之、此事今度之違例歟、諸人不知公事之法、作法等違失、不可勝計、就中資名卿取叙位箇文間
作法、君臣莫不解頤、未代之法可嗟歎者也、

特に十三日・十七日の条での「嗟歎」と宗廟の助により無事に済ませることができたという安堵とは、このあた
りの行事がいかに混乱のうちに行われたのかをよく物語っている。これによつて、公事の作法(故実)をよく知
らない者が知らないままに何とか行事をこなしていったという当時の有様が十分に想像できよう。

翻つて、『竹むきが記』の整然とした記事の配列は、それ故にかえつて、その混乱を敢えて無視したかのよう
な書きざまにも受け取ることができよう。父資名が儀式の作法について失笑をかつたという話が作者にまで伝わ
つたかどうかは別にしても、顧みれば彼女にとって、即位式から続く一連の公事は典侍としての女房生活の中で

最も輝かしい思い出であったはずである。その最も重要で名誉な役割を果たした一連の行事であるからには、己の立場、その存在の意味を失わないためにも、種々の混乱は十分に記憶していながら、敢えてこれらの公事が立派に執り行われたと記録しておく必要がある、あるいは立派に執行されたとしておきたい願望が、作者にはあったのではないだろうか。そこで故実に則った形で、記事を整理していこうとしたということも推定できるのではないだろうか。

ただ、「御前の試」に関する章段は、「殿上の淵酔は寅の日に同じ」という叙述から、どうしても「卯の日」の行事として記しているとしたか考えられないので、不審である。ここは先に指摘しておいた「霰」とのかかわりで、天候が不順であった（『花園天皇宸記』では「晴陰不定」とする）という卯の日に移された可能性もないではない。『花園天皇宸記』によると寅の日の天候は「晴」であったらしいからである。この章段には、次のような地の文を伴った作者自詠の和歌が記されている。

下使、庭上にて六位など扶持す。風吹さえて、袖に玉ちる霰の気色など、いと面白くぞ侍し。

⑧ 唐玉の挿頭と見えて乙女子が立ち舞ふ袖に降る霰かな

この和歌と発想の通じる五節の舞に関する和歌は多い。例えば、

あられふる雲のかよひぢ風さえて乙女のかざし玉ぞみだるる
(源義氏、続拾遺和歌集・六四九)

あまつ袖ふるしら雪に乙女子が雲のかよひぢはなぞちりかふ
(家隆、新後撰和歌集・四七六)

をとめ子が雲のかよひぢふくかぜにめぐらす雪ぞ袖にみだるる
(為藤、風雅和歌集・八八二)

雲のうへあまつひれふる乙女子がかざみの袖にあられ玉ちる
(宗重、新続古今和歌集・七二三)

などである。宗重は、中御門冬定男、宗兼兄である。冬定・宗兼父子は、『竹むきが記』に拍子台等の所作人として何度かその名が登場する。入集の歌集は、成立が遅いが挙げた。

作者がここで「唐玉」という詞を使っているのは、自身が即位式の様子を「唐めきたる装ひども、我世の事と

も見えず、いと珍し」と描いていることに通じるものであろう。

さて、これらの和歌は、むろん次の良岑宗貞の和歌をふまえてのものである。

あまつかぜ雲のかよひち吹きとちよをとめのすがたしはしとどめむ（古今和歌集・八七二）

また、これらの発想の背景には「廻雪の袖」のイメージがある。それを踏まえて、実景であろうとなかろうと詠まれるものであるが、作者は「雪」ではなく「霰」を用いている。地の文に「袖に玉ちる霰の気色」とあることを重んずれば実景であつたものであろうし、逆に和歌の表現に基づいて地の文が再構成されたものであつたとすれば、先行する和歌があるとはいえ、感覚的に新しいものを求めていることであつたとも思われる。その表現に引かれての日にちの移動という可能性も捨てきれないのではなからうか。

(2) 康永三年三月の記事

康永三年に改まりぬ。叙位に正階の事侍て、三月に拝賀を申さる。贈物、新女院の御方の台盤所にて給はり給箇、袋に入へし。女房出さる。同じ月に直衣始なり。直衣後、相二両萌葱、綾、打衣紅、単紅、指貫濃き紫の鳥襷、だすき下結、腹白あり、下の袴、笏を用ゐらる。

この記述を見る限り、特に何の問題もないと思われる箇所である。しかし『園太暦』では、実俊の直衣始は、次に掲げるように貞和二年三月八日のこととしている。

八日、天晴、伝聞、西園寺三位中将実俊、直衣始云々、直衣・鳥襷浮織物指貫・紅打衣・萌木柏・紅単・腹白如例、帶劔、笏、毛車、衣冠諸大夫一人、侍二人、「上結、帶劔、」如木雜色二人、烏帽子下結・沓、

この記事の信憑性を疑う積極的な理由はない。『園太暦』は康永三年正月の実俊の叙位（従三位）を記している。さらに、同年三月二十二日に行われた内府拝賀の扈從の公卿の中に実俊の名も記すが、「此外西園寺三位中将実俊、兼日領状、俄所勞云々」としている。この他『園太暦』康永三年三月には、実俊に関する記事は見あたらない。

ここには実俊の直衣始についての記事は、載せられていないのである。

「直衣始」とは、「直衣姿での参内を許された人が、初めて直衣を着て、参内する儀式」、「また、ある官職についてから初めて直衣を着て出仕する儀式にいう場合もある」（『角川古語大辞典』）とある。では、実俊の場合はどうであつたのであろうか。『公卿補任』康永三年実俊初出の項には、次のようにある。

非参議 従三位 西園寺藤実俊十 〔正月五日叙。左中将如元。同廿四日兼美作権守〕

〔故正二位行権大納言公宗卿男。母故入道権大納言正二位藤資名卿女〕

建武四十八従五下（于時実名）。――従五上。（中略）同（曆応）四十二廿二左中将。（中略）同二正五正四下。続いて、公賢が実俊の直衣始を記す貞和二年三月までの実俊の官職を追ってみる。

康永四年 非参議 従三位 西園寺同実俊十一 〔左中将。美作権守。三月十九日去権守。〕

※ 十月二十二日 改元為貞和元

貞和二年 非参議 従三位 西園寺同実俊十二 〔左中将。〕

右のように、康永三年から貞和二年まで、実俊の官職に異動はない。貞和二年時点での直衣始もあり得るのである。逆に、実俊は、康永三年に初めて三位に叙されているのであるから、『竹むぎが記』の記す如く康永三年三月に直衣始を済ませていたとすると、『園太暦』の貞和二年の直衣始は、どちらの意味でもあり得ないことになるのである。

以上のように考えると、やはり『園太暦』の記事は信用せざるを得ない。それでは、なぜ作者は貞和二年三月であつた実俊の直衣始を康永三年三月として記したのであろうか。水川喜夫氏は、これについて次のように述べておられる（注）。

恐らく、康永三年三月に「拝賀」があつたので、同じ三月の「直衣初め」が続いて記されてしまったものであろう。誤記憶と言うべきか。但、「日次の記」を書く堅い決心によって記されたものでもないようなので、

意識的に続けたとも言える。また、メモに“年”を記しておかなかった（これは、メモにありがちなことである）ために、整理の段階で、もっとも関連の深い「拝賀」に結びついて書かれてしまったとも考えられよう。これらは、他の、これに類似した場合にもあてはまるだろう。

しかし、作者にとって我が子実俊の「直衣始」という慶事である。同じ三月だからといって、二年もの隔たりのあるものを誤記するとは考え難い。この場合も、北山第御幸の記事の場合と同様に（前節で述べた）、「上階」、「拝賀」、「直衣始」という実俊の慶事を集中的に記すことによって祝意を一層強調しようとする作者の意図的操作ととらえることができるのではないだろうか。

本項の最初に検討した正慶元年大嘗会関連の記事で、作者は生涯で最高の名誉であった公事を、己の存在の意味をかけて整然と行われたように配置するという意図的な操作を試みている。また、同時に和歌の表現に引かれて記事の移動を行った可能性も指摘できる。この康永三年直衣始の記事でも、実俊の慶事を重ねて記すことでそのめでたさを強調しようとする作者の意図が探れたのではないかと思う。このように、決して思い違いや記憶違いではなく、おそらく十分に記憶しているながら、自分の心情に添った形に、あえて記事の配列を換えるという作者の操作を確認できるのではないだろうか。

二 日付の混乱からうかがわれる意図的操作

本項では、史実との齟齬を指摘できるわけではないが、日付の順に混乱の見られる箇所、作品の記述上では問題のないように見えながら、史実に照らし合わせることによって、実はその記事の位置が史実の順に従っていないと判明する箇所について、前項と同様、本文に即して作者の意図を探ってみたい。

(1) 元弘二年、正慶への改元の記事（E）

三月十三日、八幡の臨時の祭なり。(下略)

同十六日、由の奉幣にて神祇官に行幸なる。(下略)

同月廿二日、御即位行はる。(下略)

四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる。女叙位侍しに、上階の事ありしかば、髪上の祿、勾当内侍に掛くる、卯花の五、生絹の単、平褰にて長櫃に入。得選が祿、二衣、色く筋、又白絹五反とかや、あるべき事とてそへ遣はすとぞ聞きし。

祭の頃、内へ参る。雑色・侍など、ことに引きつくろふ。菖蒲の匂の袷の衣、生絹の単、朽葉の唐衣、紅梅の二小袖など也。祭の日は警固の姿どもをかしう見ゆ。北陣、黒戸にて御覽ぜらる。殿も候はせ給。女房はさるべき四五人ばかりぞ侍し。女使は小大納言典侍殿にてぞをはせし。

七月に、常磐井殿にはじめて行幸ならせ給。(下略)

女叙位は、史実では四月十一日である。またこの年の賀茂祭は四月二十二日であった。このことから、「四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる」の一文が、本来の位置よりも前に置かれていることがわかるのである。この部分の作者の意識の流れは、前段の光厳天皇の即位式から連なっている。改元の記事が、本来入るべき七月の常磐井殿への御幸始の記事直前ではなく、即位式の記事直後に置かれたということは、作者の意識の重点が御代が替わったことにおかれていることの証左であろう。ここに、単なる記録ではなく、強調しておきたいと思う事柄を効果的に配そうとする意図を読み取ることができないのではないだろうか。敢えて日付の順を実際と違ったものにしても、この位置に改元の記事をもってきた作者の態度に留意しておきたい。

(2) 正慶二年、春

里に侍し年、春立つ日、人の許より、紅の薄様に匂ひいたくしめつゝ、(下略)

正月十二日、春の節なりしに、御方違、別殿にならせ給とて、あからさまにも参るべう度く、の給はせしかば、思立つを、言ひ留むる人ありしかど、参りぬ。菴紅梅の五なりし。新典侍殿、仁寿殿に参りまうけて、御剣取り入れらる。(中略)暁出で侍に、車、長橋に立て置きたれば、其方へ行くに、明はなる、横雲の空、いとをかし。送れる人々にも、廿日頃より参るべく契置きつゝ出でし。それを限りの百敷なりけるも、いとあはれにぞ侍ける。

十二日には女院の御方御入内なり。(下略)

白馬節会、午の時にはじめらる。髪上勾当・少将、威儀八人。

十六日もいと疾くはじめらるべし。

廿日よりは内にさまべかりしを、障る事ありて延びぬるに、その廿日の朝、世中とかくにがくしう聞えて、大納言殿も御前参る。(中略)その春、梅の枝に子日の松を引きそへて、観音の御前に奉るべきこととかや書付の侍しを、例の紛れ出たる夜、人数相手など定められけるも知らず、その朝さし出たるに、(中略)「夜部尋られしかば、見えずとや。されど人数には入られぬるを」との給はするに、顔の置き所なきとかや、いとわびしう思ひ居たるに、北山殿より御丑末の事まいれるとて、(中略)「この返事聞えよ」との給はするは、折しもいとわびしく、筆取るべうも覚えざりしかば、とかく紛らはしつゝすべり出侍し、心の鬼もをかしと思ひ出でらる。

後二月のはじめつ方、悩ましき事侍て里に出でぬ。さしたる事にはあらざりしかど、長くしきさまにて、立ち寄り給人にも臥しながらぞ聞えし。廿日余りの程にはよろしき心地にて、常磐井殿に参りぬ。「猶例様にもあらず」など人々もの給に、新院の御方、「いかなる心地にか、いとあやしきを、脈なんゆかしき。心み給はん」などの給はするを、「何心地にか侍らん、ありし風の名残に侍れば」などすべり退くを、猶とらせ給て、療治すべきやうなどとかくの給はせしも、いとをかしうぞ侍し。医師・陰陽師などの道も御沙汰あ

りしかば、占を問ひ聞へなどせしもをかしかりき。

正慶二年の立春の日、公宗から求婚の和歌を贈られて以後の春の出来事を記す部分である。この年の立春は十三日である。また、「白馬節会」は、毎年正月七日に行われる。さらに、この年の初子日は十一日、観音供は十八日であった。なお、十七日には後伏見院の御幸始があつたが（『統史愚抄』）、それについては記さない。

次章でも触れることになるが、この部分の直前で作者は、公宗との交情を回想し、また、常磐井殿で少将に後朝であることを見破られてからかわれた思い出を記している。それを承けての公宗の求婚の和歌なのである。ここでの作者の主意は、公宗との交情を中心として、我が身に起こった境遇の変化と、出仕先で公宗とのことをかわられたという思い出を記すことにある。そのことと日付の混乱とは無関係ではないだろう。

公宗の求婚は、作者にとつて一生の大事であつたことは自明である。正慶二年の立春の日、正月十三日は忘れようのない日となつたはずである。作者は、まずそのことを第一に記しておこうとしたのではないだろうか。その後の記事を追つていくと、正慶二年は混乱する政情の中で、作者が正式に北山第に入る夏までの経緯を記していることがわかる。作者の人生にとつて大きな転換の年であつたのである。その正慶二年の冒頭の記事は、作者自身にとつて最も重要と考えられるものにしたのではないだろうか。そのことを起点として、以後の記事は記されているのである。

そのような視点でこの部分を見直してみると、すでに「里に侍し」身となつていた作者に、公宗からの求婚の和歌が届けられた日の、まさに前日、「正月十二日」は、春の節の方違行幸であるからといつて参内を度々要請されたので、作者は出かけていったが、それが今にして思えば「それを限りの百敷」、最後の参内ということになつてしまつたのであつた。このような連想の展開が、「里に侍し年、春立つ日」の章段と「正月十二日、春の節なりしに」の章段との間に存在すると思われる。そして、この正月十二日が最後の参内であつたということを書き留めておいて、その最後の日に何があつたのか、改めて「女院の御入内」を書き記したものではあるまいか。

前者の「正月十二日」が書写段階での傍注の混入という可能性もないとはいえないが、ここは作者の意識の中では、「正月十二日」と「十二日には」とは一旦切れたものであったので、日付の重複も意に介さずに記したのではないだろうか。

「白馬節会」と「十六日」の踏歌節会の記事について水川氏は、「そして、同じ公事の連想から⑬（女院御入内―筆者注、以下同）へと続き、さらに⑭（白馬節会）へともどり、⑮（十六日）へと続いたのではなからうか」と推測しておられる^註。たしかにそういった側面もあるのであるが、「正月十二日」方違行幸の記事における作者の主旨は、公事の記録ではなく最後の参内となったことを記すことであつたと考えられるから、この白馬節会・踏歌節会の二つの記事は、節会関係の記事としてまとめて記した挿入的章段と見るべきではないだろうか。敢えて公事関係の連想といえは直前の「女院の御方御入内」との関係であろう。節会関係の記事がまとめてこの位置に挿入されなければならなかつた意味は種々考えられるが、今は、確定する材料を持たない。

さて、作者はこの記事の後、緊迫した政情から逢瀬もままならない公宗との和歌の贈答を記した上で、「子日の松」の行事にかかわつて後伏見院にからかわれた思い出を記す。この記事が十一日あるいは「御丑未の事まいれる」から十八日のことであれば、ここでも前段の「廿日の朝」から遡ることになる。しかし、後段の「後二月のはじめつ方」でも、花園院に体調不良を妊娠かと揶揄された思い出を記していることから、ここは公宗とのことを親しくからかわれる程、後伏見院や花園院に認められていたのだということを記しておきたかつたのだということがわかる。この部分では、政情の混乱の中にあつても深まってゆく公宗と自分との関係について記すのが作者の心意であつたと考えられるのである。したがつて、敢えて「その春、梅の枝に子日の松を引きそへて、観音の御前に奉るべきこととかや書付の侍しを、例の紛れ出たる夜、人数相手など定められけるも知らず、その朝さし出たるに」といった、日付を明確にしない表現をとつたのではないかと考えられる。

(3) 暦応二年から三年にかけての記事

暦応二年にもなりぬ。前右大臣殿、いたはり給事おはしつる、同正月に失せ給ぬる、いとあへなくあはれになん。かゝるに、家門の事、いとわづらはしき事どもありしかど、なる事なく静まりぬ。

今年は深ふか鍛かたあるべきを、永福門院に聞ゆべうやなど思ふ程に、年の内に御覽すべき由侍れば、わざともさるべきにて、十二月廿八日に北山におはします。二位殿、具し聞え給。(中略)物騒がしさもあかぬ御事なる上、年の内泊り初はつあるべう、女院の御方の給とて、俄に留まり給て、次の日帰り給。(中略)伏見院の御自筆一卷、松の打枝に付けられて賜はらせ給ふ。

如月の中旬に、さるべき人く伴ひて天王寺に詣づる事あり。(下略)

暦応三年五月の比、新女院、仁和寺の准后の御許にて御出家の由聞えさせ給ふ。いとあさましき御事にぞ侍ける。(下略)

ここでの日付は、暦応二年正月から同年「十二月廿八日」とも見える。とすれば、「如月の中旬」は暦応三年と考えられ、その後の「暦応三年五月」というわざわざの表記が不審ということになる。『竹むきが記』の年号表記については、作者自身によつて為されたのであれ、後代の注であれ、傍注が書写の過程で本文に紛れ込んだ可能性を考えなければなるまいが、この「暦応三年」はその可能性は低いと思われる。ここは、文脈からいえば、「深ふか鍛かたあるべき」「今年」とは暦応二年を指しており、永福門院の「年の内に御覽すべき由」という要請により、その前年の暮に、予定を早めて実俊が北山へ出かけて行ったという事情を説明していると考えられる。「十二月廿八日」は暦応元年の暮と考へても不都合はないであろう。この章段の記事内容は、永福門院が実俊の様子を、「推し量らせ給へるにも過ぎて、行末頼もしきさまに」などいみじう喜びの給ふ。

『『直人ただにはあらじ』と不思議がらせ給て、いみじう興ぜさせ給ける』など、(下略)

などと、手放しで喜んでいる様が中心となっている。西園寺家当主たるべき実俊への永福門院の期待の大きさを

描いているといえる。そうであれば、父資名死去の記事（建武五年五月二日）に続けて、日付の順でいえばそこにあるべき、暦応二年への年がわりの記事直前の位置にこの記事を配するよりも、本来深鍛を行う予定であった暦応二年の時点から、それが永福門院のたつての希望で早まったのだと記す方が、その期待の大きさをより強調することができるであろう。しかも、「前右大臣殿」（兼季）の死によって引き起こされたい「家門」にまつわる騒ぎも一段落ついたと記した直後である。西園寺家の正統の嫡子として、誰でもない永福門院に将来を囑望されていることを暗に示す記事は、作者にとっては、この位置にこそ入れられるべきであつたのであろう。記事の構成の上で、作者が己の心意に基づいて工夫をしていることがわかる箇所の一つである。

(4) 康永三年から四年

康永三年に改まりぬ。叙位に正階の事侍て、三月に拝賀を申さる。（下略）

かゝる紛れどもにて春も暮れぬるに、花の盛りを頼めつゝ訪はとずなりぬる人に、五月一日比、（下略）
年かへりぬるに、御幸、新御所へ成らせ給ふ。三位中納言も供奉せらる。（下略）

この弥生に、広義門院、五種の行をこなはせ給。御逆修の為と聞え侍ける。（中略）院の、ふと入らせ給。わびしけれども退くべき方なきに、わざとも見参けざん取るべうの給はすれば、わびしながら候ふに、「今までいぶせかりつるに、序嬉しう」などの給ふに、御時はじまれば、「又心のどかにぞ」とて道場にならせ給ふ。竹林院殿御供に勤め給。その後、院の御方より、「物騒がしながら序嬉しうしく」などのたまはせて、花びら一裏給はせぬる、置所なきまでにぞ覚え侍。

如月に賀茂の社に詣で侍に、下より上の宮に参る道に、蘆垣を囲ひたるに竹繁りて、梅の梢も所く咲き匂へるに、鶯のはなやかに鳴きたるなど、いとおかしきにも、昔この垣根に御目止めさせ給て、御傍統にをはせらるゝなど思ひ出づるに、なつかしうさへ覚ゆ。（中略）西行が「四手に涙の」と詠みけん古言もこの御

前ならんかしと思ひ出でらる。昔、御生みあれの比、兵衛督君といひし人に参あひて侍しに、片岡の御前より出でがてにやすらひつゝ、「声待つ程は」とかや口ずさまれしなど、面影浮びつゝあはれにぞ思ひ出でられ侍ける。（下略）

神無月の比、八幡の宮に詣づるに、暁より雨かきくれて降り出でぬれど、今になりて止まらんも事のわづらひなるべく人く申侍れば、なを思ひ立つに、さらに小止みなし。（下略）

次の日は舟にて上る。量衡奉行にて、水の御牧の舟を設く。破子やうの物など小舟に設けつゝ、菊紅葉をかざしたる、昨日に変わる空の気色、ことさら風をさまり波静かなる眺めの末、いとおかし。心あらん人に見せまほしく、あかぬ心地するに、程なき淀の渡りにて鳥羽に着きぬ。（下略）

正月中旬に、日野の中納言、春日に詣づる事あるに、誘ひ侍れば、頼もしき道連はいと嬉しく侍て、俄に思ひ立ちぬ。（中略）宇治の泊りは保光知れる所とかや、いといたく経営けいぎし騒ぎたり。明けぬれば舟にてさし渡り、川風吹き冴えていとすさまじ。さすが時知る色とや、霞みこめたるなど、おかしう見ゆ。

④ 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと

伏見に漕ぎ寄せて御所の方見廻るに、折くの御式ども、此処も彼処も御面影浮ぶ事ども多し。月見殿に、昔、月日のさす方に荒海を画かかせられて、大きな鏡を打たれて侍しかば、光を交はして見えしなど思ひ出づるに、荒れ果てぬるもいとあはれになん。彼方此方と見廻りつゝ、御酒などありて、いたく暮れぬるにも見捨てがたき眺めの末にぞ侍ける。

貞和の初年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、折しも雪いみじう降りて、二尺余ばかり積れる、分けがたきさまなれど、ことさらに心ざす事しありて、例の老人誘ひ聞えつゝ思ひ立ちぬ。（中略）駒の足を進むる音すれば、聴聞の人にやと聞くに、持明院殿よりの御使に、いゑかげ分け入ぬるなりけり。女院の御方の御文にて、この雪をとほせ給へり。（下略）

貞和二年五月廿五日、大宮入道右大臣殿失せ給ぬ。今更ならぬ世の慣ひも、差し当りてあへなくあはれに
なん。昔、この御子になすべくなどありしも、何となきあらまし事と思ひし程に、まことしう思^{おほ}し定めて聞
えさせ給とてありし頃しも、乱れ出で来待しかば、いかにとも聞かずぞなりにし。(下略)

康永四年の御幸始は三月十六日であつた。また、貞和への改元は康永四年十月二十一日であつた。このことから、
ここは、康永三年三月から同五月、康永四年三月、同年「弥生」、同年二月、同年十月、同年正月、貞和元年十
二月、貞和二年五月の順に記事が配されていることになる。とすれば、ここで問題となるのは、三月の御幸始や
弥生の広義門院五種行よりも如月の賀茂社詣が後に記されていること、神無月の後に正月中旬の春日詣の記事が
配されていることの二点である。

しかし、康永四年の御幸の記事の「年かへりぬるに、御幸、新御所へ成らせ給ふ」という叙述からは、新年早
々の御幸という語調を感じ取れはしまいか。史実で確認することができなければ、この御幸は正月のことと受け
取ってしまうであらう。この御幸は、光厳院の襲御幸始であつたが、『園太暦』三月十六日条には次のように記
されている。

十六日、天晴、今日上皇襲御幸始也、依御不予今春未及御幸也、西園寺三位中将実俊、始供奉、彼卿今年十
一歳也、年少出現雖非無斟酌、掌一流正統、相待成人籠居、非無事恐之上、上皇・広義門院頻可出仕之旨
被仰、仍可構参之旨、先日母儀被談之、何事之有哉之由報了、(中略)新御所近々也、仍歩儀如去年云々、

光厳院の病気の為、この年の御幸始がこの時まで延期されていたのである。作者の中には、本来新春に行われる
べき御幸という意識があつたのではないだろうか。しかも作者は、年若い実俊のことを案じて公賢に相談をして
いる。それ程までした我が子の初めての御幸への供奉であつた。「色くなる水干ども、えも言はず。徒歩の御
幸なれば、中くいと珍し」という感想を記している。公賢によれば、前年も同様に徒歩の御幸であつたのであ
る。作者が前年の御幸も徒歩であつたことを知らなかった可能性もあり己の経験と照らし合わせての感想かもし

れないが、そこには母親として実俊を見守っている視線が密やかに込められているようである。実俊の初めての供奉は、作者にとつては、それが三月に行われたものであったとしても、本来の位置でもある年頭に置かれるべきものとして意識せられていたのではないだろうか。

この後に記される広義門院の五種行の修行は、前段の御幸始と同様公事として先行して記されたようでもあるが、この記事中に、光厳院から親しく声を掛けられ、「花びら一裏」まで賜つて感激する己の名譽を記していることから、公事からの連想というよりも、光厳院・広義門院から実俊の供奉を強く要請せられたことと同様に、しかし、そのことは作品中には記されない、それだからこそなおのこと、西園寺家への特別な重用を記しておきたかつたのではないかと考えられる。

次に「正月中旬」春日詣の章段を康永四年の正月と考えれば、この長い章段が日付を遡つて挿入されたことになる。別の解釈として、この章段を貞和二年正月と考えることができるであろうか。その場合は、その後の「貞和の初めの年、十二月十五日」の靈鷲寺談義聴聞の記事が、貞和二年の記事中に挿入されていることになる。

しかし、「貞和の初めの年」は、十月の改元を十分意識した叙述ともとらえられようから、やはりここは康永四年正月の記事が遡つて挿入されたと考える方が自然であろう。では、なぜこの位置に配されたのであろうか。水川氏は、「^{③④}（神無月の八幡詣―筆者注）の参詣と旅とによつて連想され、戻時して記録されたものであろう」としておられる^{③④}。氏は、連想の内容について具体的には触れておられないが、それならば、ここは何の連想によつたものであろうか。ここで「眺めの末」という言葉に注目したい。「眺めの末」は、作者が親しんだと考えられる京極派歌壇で好んで用いられた句である（第二章第一節に後述）。この句が十月の八幡詣の章段と正月の春日詣の章段と、それぞれに使われているのである。この句に導かれて二つの章段を見較べると、双方の参詣の旅に共通するものが舟で川を渡つたという体験であることがわかってくる。「心あらん人に見せまほしく、あかぬ心地」した淀川の回想から、同じ舟で宇治川を渡つた折の感興がよみがえってきたのではないだろうか。こ

こでも作者は個人的な体験を回想するに際して、あまり日付にはこだわってはいないようである。特に史実と齟齬をきたしている箇所ではないが、日付の順が乱れており、そのことから作者が記事を選び記していった過程を探ることができる一例として取り上げてみた。

(5) 貞和四年から五年

貞和四年の弥生の暮に、三位中将、梅尾に詣で給ふ。(下略)

その年の四月、後伏見院御十三年に当らせ給。御仏事の為、持明院殿にて、五種妙典行はる。(下略)

靈鷲寺の長老、春の頃よりわづらひ給し、日々に弱りつゝ、仏日すでに涅槃の山に入なんとす。(中略)

遂に七月八日未の刻に滅に入給。(下略)

その年の九月に、持明院に行幸あり。三位中将供奉し給。劍璽の役勤めらるべき習礼など、紛れくらす。

月立たば御国譲りあるべきにて、御名残の度なれば、取りつくるはる。(下略)

神無月には御国譲りあり。二条殿に行啓侍て、御讓位の儀あり。春宮立も同日なれば、二条殿より卿相雲

客、悉く引きわたさる。かくめでたき事どもにて過ぎ行に、十一月、法皇御崩れかくの由聞えさせ給。院・新院、

いみじう御歎きども、疎きうかならずぞ聞えさせ給ふ。

又年も返りぬ。靈鷲寺には詣づる事は変らねど、寺中の有様もよろづ見しにもあらぬ事多し。繁かりし人の跡も稀なれば、草深き山ちとぞなりにける。(中略)まことに鷲の峰には思ひあらはれつゝ、あはれにぞ侍ける。

神明寺の山もとに草庵あまた侍に、如月の頃、別行と心ざして立ち寄りぬ。(中略)事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし。(下略)

七月十三日に、日野の塔頭に詣でつゝ、経陀羅尼など、此彼と回向する数くもあはれになん。(下略)

貞和五の睦月に、院・新院御幸始、この山へ成らせ給ふ。(中略)その後、御対面あるべき由、御使度くあれば参りぬるに、今日の儀、よろづ昔に返りぬる沙汰ども、さまざま御感どもありて、「今よりは常に成らせ給べき御あらまし」など、いとこまやかにぞのたまはする。女房の中へ、引合二間贈り聞ゆ。

その年の春、除目に、三位中将、中納言になさる。参議を経ずして直任せらる。

同春の頃、宮にて療治めかしき事侍に、鷹司の老人語りて、珍しうのどかなるに、帰る名残をいかにと慕ひの給へる。無量光院の花、いみじう盛りなれば、我も人も、いかに玩ぶべきにかなど、御酒すゝめつゝ眺めくらしたるに、雨さへしほくと降り出でぬれば、「いと山路たどくしうなりぬ」と人く急がせば、眺め捨てつゝ、彼より、(下略)

この作品の最終部である。この後、鷹司の老人との和歌の贈答を記し、最後に自詠の和歌二首を添えて攔筆する。やや長期間にわたつて本文を引用したのは、この日付の混乱が攔筆の事由と関係するかもしれないと考えたからである。

貞和四年の記事は、日付の順に乱れはない。記事内容は、七月の靈鷲寺の長老の入滅以外は、実俊関係か公事である。この年で注目すべきは、九月の持明院殿行幸への実俊供奉の記事であろう。作者は、実俊の供奉の様子について次のように記している。

劍璽の役は事繁きやうなればにや、いと目馴れたる人も迷ふやうなる事なれば、いかならんと思ふに、異なる事なきのみならず、進退作法、ことさらに由しう聞ゆ。大將殿、目驚かれたる由、さまざまにのたまふとかや。御所くより、御感どもなのめならねば、いとめでたき事にぞありける。

康永四年、実俊が初めて御幸へ供奉した時には、作者は公賢に相談までして案じていた(『園太暦』康永四年三月十六日条)。

十六日、天晴、今日上皇褻御幸始也、依御不予今春未及御幸也、西園寺三位中将実俊、始供奉、彼卿今年十一歳也、年少出現雖非無斟酌、掌一流正統、相待成人籠居、非無事恐之上、上皇・広義門院頻可出仕之旨被仰、仍可構参之旨、先日母儀被談之、何事之有哉之由報了、御劔役など年少不便、春宮大夫出仕加扶持哉之由同被命之上、母堂又有其命、予小女可為一對之由約了、未遣彼家之間、雖可有傍難、一家事也、相憑之条難処之外、仍可参旨示大夫了、且依上皇仰、大略相副扶持云々、(中略)新御所近々也、仍歩儀如去年云々、

しかし、作者はこのことに全く触れることなく、単に「三位中納言(中将の誤りか)も供奉せらる。(中略)御劔の役を務め給」とだけしか記していない。また、西園寺公衡三十三回忌の翌日北山第へ御入堂あつて、その折にも実俊は御劔の役を勤めているが、「三位中将、御供にて御劔持ち奉らる」とだけ記している。もともとこの場合は、晴の役目ではないことも関係しているのかもしれない。ともあれ、そういった母親としての感情を露わにできなかった作者が、この行幸の記事では、比較的率直に己れの感情を表しているのである。それ程に、実俊のこの四年ばかりの成長ぶりがめざましかったのであろうが、作者が己の安堵の気持ちを垣間見せているところでもある。その態度の微妙な変化に、作者の心境の変化を重ね合わせてみることはできないであろうか。

この直後、貞和四年十月二十七日には、「今日儲皇冠儀并讓國・立坊、重疊嘉礼之日也」(『園太暦』)とされる光明天皇の禪位と崇光天皇の元服・踐祚が行われた。春宮の元服には実俊も伺候している。しかし、『竹むきが記』のこの事に関する記事は、思ひの外素っ気ない(一〇一頁に引用)。引き続き花園院の崩御に関しても、「聞えさせ給ふ」と伝聞の形を繰り返して、距離を置いた言い方をしている。しかもここには作者自身の感想も記されていない。それまでに触れてきた父資名、覚円や永福門院など七人の死には必ず作者自身の感想が添えられており、それらが作者の仏道修行への思いを触発さえしていたことを考えると、不可解な叙述である。西園寺公宗の室となり出仕を辞めて以来、疎遠になっていたからであろうか。しかし、花園院は、彼女にとっては懐か

しい思い出の人の一人であつたはずである。上巻の叙述から、そのことは感じ取ることができる。また、光厳院の元服・踐祚・即位については、あれほど熱心に書き記した作者が、崇光天皇に関しては冷淡ともいえる程の簡略な叙述しかない。作者にとつて、これらのことが熱意を持って書き記す対象ではなくなっているということ、何を意味するのであるうか。このあたりにも、作者の心境の変化が反映しているのではなからうか。

遡つて、下巻冒頭の記事は、

今年、この君真魚の事あり。十二月廿一日に右大臣殿に渡り給。(下略)

と実俊の真魚始から始まる。後文から、「今年」は建武四年を指すと考えられるが、この記事直後の十二月二十八日には光明天皇が即位されているのである。このことについて、作者は全く触れていない。そこで、下巻においてどの程度、公事や皇族について言及しているかを調べてみた。次に示す。ただし、その時点で回想として語られていると考えられるものは除く。

・建武五年三月 資名邸火災

若君（光厳院第二皇子弥仁親王―筆者注、以下同）入らせ給べき心設けありつるも、打ちさましぬ。(中略)
宮の御方（弥仁親王）も侍従の君（実俊）も、その程は二位殿の御里にぞおはします。

・暦応三年暮 光厳院北山第御幸

その年の暮に、御方達の御幸あり。女院の御方へ内々成らせ給ふ儀なれど、設けの事どもは本所の沙汰也。
主も参り給。(下略)

・暦応四年四月 徽安門院入内

萩原殿の内親王（花園院皇女寿子）、持明院殿へ入らせ給ふ。やがて院号ありて、徽安門院と聞ゆ。

・同八月 徽安門院、北山第へ御幸始

八月に御幸始、この前なる永福門院の御方へ成らせ給ふ儀なるべし。院の御方（光厳院）も成らせ給へれ

ば、主も参りぬ。(下略)

・同十月 光厳院皇女、永福門院許へ

院の御方の姫宮、入聞ゆべうのたまはするを、「いたくさやうの例もなきを」と人々申侍れど、しきりに承り侍れば、永福門院も、たゞ我そばもとへの儀にてもあるべうのたまはすれば、十月にぞ入らせ給ぬる。

・暦応五年 光厳院北山第御幸始

今年御幸始、この山へ成らせ給。「いつしかかゝる御光を待ち受け奉らせ給ふも猶異なりける御家の名残にこそ」など、世人も申侍とかや。(下略)

・康永元年春 永福門院方へ見舞いの御幸

永福門院、例ならぬ様に聞えさせ給へど、取り立てたる御事おはしまさざりつるに、春の末よりはまことしくならせ給へばいとあさましく思ひ聞ゆるに、日々に重らせ給て、院(光厳院)・女院(徽安門院)御幸ありて見奉らせ給。(下略)

・同七月 実俊中将拝賀

七月廿五日、中将の拝賀なり(中略)。まづ持明院殿へ参らる。院の御方(光厳院)の御贈物、御琵琶後西園寺殿より参れるやうゆうなり。女院の御方よりは笛袋に入、一条今出川なる二位殿の御里を中宿にて、それより参内也。(中略)御所さま(光厳院)、中門に出でさせ給ひて御覧侍けるとかや。(下略)

・康永三年三月 実俊拝賀

康永三年に改まりぬ。叙位に正階の事侍て、三月に拝賀を申さる。贈物、新女院の御方(徽安門院か)の台盤所にて給はり給笛、袋に入べし。(下略)

・康永四年 新御所へ光厳院、褻御幸始

年かへりぬるに、御幸、新御所へ成らせ給ふ。三位中納言も供奉せらる。(下略)

・同三月、広義門院五種の行

この弥生に、広義門院、五種の行をこなはせ給。御逆修の為と聞え侍ける。(中略) 聴聞すべく度くのたまへれば、とかく助けて末さまに参りぬ。(中略) 院(光厳院)の、ふと入らせ給。(中略) わびしながら候ふに、「今までいぶせかりつるに、序嬉しう」などの給ふに、御時はじまれば、「又心のどかにぞ」とて道場にならせ給ふ。竹林院殿御供に勤め給。その後、院の御方(光厳院)より、「物騒がしながら序嬉しく」などのたまはせて、花びら一裏給はせぬる、置所なきまでにぞ覚え侍。

・貞和元年十二月 靈鷲寺談義聴聞に女院より雪見舞

貞和の初の年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、(中略) 駒の足を進むる音すれば、聴聞の人にやと聞くに、持明院殿よりの御使に、いゑかげ分け入ぬるなりけり。女院の御方(広義門院あるいは徽安門院か)の御文にて、この雪をとはせ給へり。(中略) 御目一つにはあかず思さるれば、さながらあの御所(光厳院あるいは広義門院か)へ奉られける御返事とて、竹に付けさせ給ふ。(下略)

・貞和二年十月 女院・一品宮北山行啓

同じ年の神無月の比、俄に女院の御方(広義門院か)・一品宮(光厳院皇女光子内親王か)ならせ給ふ。紅葉御覽せらるべき御心ざしなるべし。(下略)

・貞和三年九月 公衡三十三回忌

故竹林院入道大臣、卅三年に当り給。御仏事の為、広義門院御沙汰として、無量光院にて仏経供養あり。

九月廿五日、院の御方(光厳院)御同車にてならせ給ふ。(下略)

・貞和四年三月 実俊梅尾詣

貞和四年の弥生の暮に、三位中将、梅尾に詣で給ふ。若宮の御方(光厳院皇子弥仁親王)、御年少の御事なれば、女房に紛らかし聞えて、成し奉る。(下略)

・同四月 後伏見院十三年

その年の四月、後伏見院御十三年に当らせ給。御仏事の爲、持明院殿にて、五種妙典行はる。花びらの事、内裏よりうけたまはる。(中略)御供養の序に、御回向の数ばかりにも、ことさら御心ざし侍由、女院の御方(広義門院)へ聞ゆ。(中略)「思ひ寄り聞えける御心ざし、ありがたくあはれに」など、さまざまにその給はせたる。

・同九月 持明院へ光明天皇行幸

その年の九月に、持明院に行幸あり。三位中将供奉し給。(中略)院(光嚴院)の御車立てらる。(中略)御所くより、御感どもものめならねば、いとめでたき事にぞありける。

・同十月・十一月 讓位と花園院崩御

神無月には御國讓りあり。二条殿に行啓侍て、御讓位の儀あり。春宮立も同日なれば、二条殿より卿相雲客、悉く引きわたさる。かくめでたき事どもにて過ぎ行に、十一月、法皇(花園院)御崩れの由聞えさせ給ふ。院(光嚴院)・新院(光明院)、いみじう御歎きども、疎きろかならずぞ聞えさせ給ふ。

・貞和五年一月 北山第へ御幸始

貞和五の睦月に、院(光嚴院)・新院(光明院)御幸始、この山へ成らせ給ふ。(下略)

私事の記録が多い下巻にも、相当数の公事関係の記事が存在することが確認できるのであるが、通覧すると、ほとんどが光嚴院にかかわる事柄であることが明白となる。花園院については、徽安門院入内の記事に「萩原殿の内親王」と説明的に出てくるにすぎない。下巻開始早々に御代は、光嚴院から光明天皇へと移っていた。それにもかかわらず『竹むきが記』には、光明天皇は単独では一箇所、実俊が供奉した持明院殿への行幸の記事のみに登場するだけである。しかも、この記事の要は、光明天皇ではなく実俊にある。

北山第への御幸あるいは実俊を介してしか公事に接することのできない立場になってしまった作者であつてみ

れば、記事内容が自ずから制限されてしまうのは当然の結果かもしれない。しかし、例えば、貞和四年十二月十七日、光明院の持明院殿への御幸始には後騎人として実俊が供奉しているし、同じ二十八日の崇光天皇の土御門殿への還御にも実俊は急遽供奉しているのであるが、それらについては記していない。このことをどう考えればよいのだろうか。

主観的という誇りを恐れずあえて推測すると、光厳院は、作者にとつて栄光の時代を象徴する存在だったのでなかろうか。それは、作者の個人的な実際の親疎の感覚や距離を超えたものであったのではないかと思うのである。作者の人生の中で、栄光の極みであったはずの即位式での幕帳の勤め、それは他ならない光厳天皇の即位でのものであった。上巻の記述からうかがわれるのは、親愛の情と呼んでもさしつかえないような作者の後伏見院や花園院への近しさである。一方、下巻で光厳院から親しく声をかけられた折の作者は、感激、恐縮するばかりである。そのことには、無論公宗の斬罪が影響している。しかし、作者が畏まって仕えるべき天皇は、後伏見院でも花園院でもなく光厳院であったということではなかろうか。そういう大きな枠で、この作品を俯瞰してみると、上巻が春宮量仁親王御元服から始められていることに大きな意味を見いだせることになる。

これは、先述した貞和四年の光明天皇持明院殿行幸の折の実俊の様子が「作法進退、ことさらに由ゝし」いものであったと聞き、それについて「大将殿、目驚かれつる由、さまざまにのたまふとかや」と聞き、「御所くより、御感なのめなら」なかったとも聞いて喜んでいることも絡んでくるのではないかと思うのである。つまり、作者は我が子が立派に役目を果たせたと聞いたことで、実俊の時代が始まることを予感して安堵したと同時に、もはや自分の時代は終わったと、ふと、しかし強く感じさせられたのではないだろうか。しかも直後の国譲では、御代は、光明院から崇光天皇へともう一代替わってしまったのである。光厳院の御代はますます過去へと遠ざかっていった。この章段の「大将殿」を諸注、当時大納言兼右大将であった竹林院公重とし、岩佐美代子氏は「但し名子との関係からして存疑」とされている（「新大系」脚注）。たしかに家門の争いを続けているらし

い公重が実俊の成長を素直に認めるとは考えにくい。ではあるが、それだからこそ余計に作者には価値のある伝聞であつたとも考えられるのである。西園寺家再興の道筋が、やっと見えてきたというところであらうか。

花園院の崩御に素っ気ないのは、そのことに一つの時代の終わりを感じ取り、一抹の寂しさが胸に宿つたためかもしれない。そのことが、『竹むぎが記』そのものの終焉を予感させはしまいか。今は、甚だ恣意的な読みによる推測のみを提示しておくにとどめる。

さて、貞和五年に入ってから、靈鷲寺のその時点での有様から神明寺の草庵への別行、靈鷲寺の跡を継いだ長老の来訪と、己れの仏道修行に関する記事を並べている。執筆を終えるにあたって、まずその時点で最も関心のあつた仏道修行について現時点での心境を、

事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし。

と記しておきたかつたものと思われる。

次いで、七月十三日、日野の塔頭詣の記事が睦月の記事に先んじて配されている。

七月十三日に、日野の塔頭に詣でつゝ、經陀羅尼など、此彼と回向する数くもあはれになん。親の親とか言ふべきを、はじめて手向くる水の玉ゆらに結べる蓮葉の露を見つゝも、闇路の光なるべくとぞ、分きて思ひ送られける。

⑤② 迷ふらん闇路を照せ法の水結ぶはちすの露の光に

日野家の氏寺を訪れた折の感慨を歌にして記している。本文によると作者はこの時初めてここを訪れたようである。西園寺家の将来がある程度見通せるようになったことも、己の実家にまで目を転じる余裕を見せる理由の一つなのかもしれない。日野家から西園寺家に嫁した女として、幼い頃薫陶を受けた祖父俊光をはじめとする人々にひそやかな報告をしたものであらう。

「親の親」とは俊光に代表される日野家の祖先を指していると思われるが、彼らの迷いの闇路を照らして導いて欲しいと念じている作者の念頭には、もう一人の人物があつたのではないだろうか。それは、作者が敬慕してやまなかつた亡き靈鷲寺の長老である。この章段の直前に靈鷲寺の跡を継いだ長老が、別行を志す作者の許へ立ち寄つたことを記している。そこには、「昔ながらに待ち付け聞えましかば、耳を喜ばしむる言葉の末もあらましをと、なをそのかみぞ偲はれ侍ける」と、未だに故長老を慕う気持ちが強いことをあらわす心境が述べられている。この長老の寂滅が前年の七月八日であつたので、日野の塔頭詣は、ちょうど一周忌を済ませたばかりの頃ということになる。貞和五年の記事が靈鷲寺の現在の有様から語り出されていることとこのことを勘案すると、この記事で仏道修行についての己の境地を語り終えようとしての配列であるということが推定できよう。そこに一区切りをつけておいて、改めて、正月に遡つて御幸始の記事を記したのではなからうか。

院・新院の御幸始の記事は、両院と作者との対面の場面で終えられる。

その後、御対面あるべき由、御使度くあれば参りぬるに、今日の儀、よろづ昔に返りぬる沙汰ども、さまざま御感どもありて、「今よりは常に成らせ給べき御あらまし」など、いとこまやかにぞのたまはする。女房の中へ、引合二間贈り聞ゆ。

西園寺家が権勢を誇つていた、その「昔に返りぬる」と言われることがどれだけ作者の喜びであつたか想像に難くない。作者にとつて「昔」とは、宮仕えしていた公宗存命の頃に限定されたものであつたかもしれない。それに加えて、他ならぬ光厳院から、以後再び度々の北山第への御幸を約されたことは、西園寺家再興の象徴と思われたはずである。次いで、「その年の春、除目に、三位中将、中納言になさる。参議を経ずして直任せらる」と簡単に記すが、その名譽は作者にとつて、もはや自明の事態であつたということであろうか。しかし、このことは是非とも書き記されなければならなかつた。

最後に作者は、歌に詠われる程有名な北山第の桜を題材にして鷹司の老人との和歌の贈答を記して、静寂とも

いえる心境を吐露する。最後に添えられた次の二首は、筆を擱く際の謙辞ともとれるが、それ以上に、ここまで生きてきた自身の思いが込められているようである。

⑤⑧ 藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

⑤⑨ なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

このように作者は、擱筆にあたり、自分にとって重要な事柄についてそれぞれ作者なりの決着を付けようとしている。そのために日付の順を、いわばないがしろにした形の配列となってしまうのではないだろうか。『竹むきが記』の末尾はいささか唐突な終わり方をしているように見えるが、決して途切れてしまったものではない。初めからこの時点で終えようという決意をもって擱筆されたのである。最後の部分の日付の混乱の背景に、作者の意志を読み取ることができないのではないだろうか。

以上の箇所からは、作者が己の情念や心意を優先させて、それを強調するために効果的に記事の配置をしようと工夫したり、自分にとって重要な事柄を先行させたりしていることが判明する。また、その中には、個人的体験を綴る際には日付にあまりこだわらない姿勢を見せるところや、連想の繋がりによって、その流れのままに記した為に結果的に日付の順に乱れを生じたところもあることが確認できるのである。

三 意図的操作と構成意識

ここまで、『竹むきが記』の記述と史実との齟齬が見いだせる箇所、作品の記述上も日付の順に従っていない箇所などを手がかりとして、記事をこのような配列にした作者の意図を探ってみた。主として本文を読み込む作業に基づいて行わざるを得ないため、主観的なものに偏らないよう心がけたつもりである。その結果、『竹むきが記』の記事の選択あるいは配列には、次のような特徴があることを明らかにできたのではないかと思う。

一、『竹むきが記』は明らかに記録的態度に基づいて執筆されている。それは、宮廷女房であった作者のもつ基本的な姿勢である。従つて最後まで記録的筆致は保たれている。

二、個々の記事の配列を見ると、記録的な中にも、そうでない要素を含んだ配列が多々見いだせる。これを、その要素別に分類すると、左の如くなる。

(1) 史実と齟齬をきたすような変更

史実と異なる日付や記事の配列

例…元弘元年十二月 内侍所御神楽 (十七日であつたはずのものを二十八日としている)

正慶元年十一月 大嘗会関連の記事 (十七日に延期されたい「童女御覧」を、故実どおり卯の日、十三日に行われたとしている)

歴史的事実として当然記載されていてもよい事柄を載せない

例…暦応四年 北山第御幸始

建武四年十二月 光明天皇即位

(2) 必ずしも日付を最優先しない配列

日付の順が前後する配列

例…正慶元年四月 (四月中の一連の行事の内、改元の記事を先に記す)

暦応四年 (正月の春日詣が十月と十二月との記事の間に配される)

日付を明確にしない記述

例…暦応四年三月 実俊御幸始に初供奉 (新年早々であつたかと思わせるような叙述をする)

右の諸要素は、誤記あるいは記憶違いなどによる以外では、およそ女房日記ではあり得ないことである。そして、これらは、作者が自身の情念を優先させて、それに基づいて記事の選択・配列に工夫を加えたための結果に他な

らないのである。これこそまさに『竹むきが記』が、当初は女房日記の体裁を取りつつも、単なる記録を超えるものを獲得している証である。巧みに隠された作者の真情を読み取る時、それだからこそ作者が作者なりに心血を注いでこの日記を執筆したのだということを思い知らされずにはいられない。高い文学性や虚構性を求むべくもないことは早くから指摘されている。しかしだからといって放置されるべきものでもない。この短い作品の中に、作者の人生が凝縮して収められているのである。

それでは、このような構成を取らざるを得なかった作者の必然とはどのようなものであったのか、作者の情念の具体像はどのようなものであったのか、これまでに述べきいたところをまとめておきたい。

ここまで検討を加えた箇所から読み取ることができる作者の意図的操作の方向は、当然のことながら大きく二つに分かれている。それは公宗との関係という方向と実俊を中心とする西園寺家再興への方向とである。その大きな流れの他に、自身の名譽あるいは持明院統の皇統（特に光厳院）の名譽を重んずることが加わっている。

公宗との関係では、公宗への思慕の情を底流としつつ、表面上は公事の記録という体裁を取るという手法を用いている場合がある。公宗との交情が比較的叙情性豊かに語られるのは、正慶元年十一月の大嘗会関連の記事と翌年立春の日、公宗から求婚の和歌を送られる章段との間に挿入された二月初旬の章段と、正慶二年四月二十日過ぎの慌ただしい情勢の中での逢瀬を記す章段だけである（第二章第二節に後述）。しかも、その章段でも公宗の名は出ない。臃化された表現といえそうであるが、ことさらに「西園寺大納言殿」・「西園寺殿」・「北山殿」といった公的な呼び名で公事の記録中の所々に公宗の名が登場している。作者の公宗への視線を感じ取ることができるのであるが、それは個人的な感情によるものとしては語られていないのである。

また、公宗との関係が半ば公認の事実とされてからは、そのことに関する回想を主として、その事柄の起こった日にちには重きを置かない態度で配列をしている場合もある。

実俊の慶事を重ねて強調することの趣旨は、西園寺家の未来への展望をより堅固なものとして印象付けたいと

いう点に集約されよう。それは、暦応二年暮の実俊の深綴の記事の位置を翌年の記事の中へ動かしていることにも、康永四年の実俊が初めて供奉した御幸始をあえて新年に行われたと読み取れるような記述にしていることにも通じることなのである。

自身の名譽、持明院統の名譽に関する作者の思いは、混乱の内に行われたらしい光厳天皇即位後の大嘗会に関する一連の行事を、有職故実に則った形に整えて記していることに象徴される。作者は、即位式の奏帳典侍として、生涯最高の榮譽を担ったのである。その即位に関する事項は、何よりも優先されるべきものであったはずである。代替わりに伴う改元の記事が、日付を無視する形で女叙位や賀茂祭に先んじて記されたのは、作者がそういった己の意識の繋がりを尊重したからに他ならない。

この意識に支えられていたからこそ、『竹むぎが記』は、春宮量仁親王御元服から書き始められたのではなからうか。そのように受け取ると、擱筆された理由は、作者を支えていたそういう意識が消失した、あるいはその意識の対象そのものの存在が消失したためとも考えられよう。

実俊は順調な昇進を続けていたとしても、家督を争う相手、公重はまだ大納言として北朝に仕えており、貞和五年九月には内大臣に任ぜられている（『公卿補任』）。後のことになるが正平七年（観応三年・一三五二）には、北朝の一時的な衰退もあり、実俊は北山第から芝禅尼の許に移った上、西園寺家の家門を一時的にはあるが公重に譲ったりしているのである（『園太暦』観応三年二月十六日条）。こういった点を見ると、実俊の家督相続も不安定な政情と相俟って決して安泰とは言い難く、依然として不安定な要素を多くはらんでいたと思われる。このような状況であるから、実俊の昇進に西園寺家の先行きの安泰を見て安堵したことのみをもって擱筆の理由とは考えにくい。

『竹むぎが記』がいつ執筆されたのか、今は確定できる材料を持たない。日付の明らかな最終記事である貞和五年七月十三日以降、間もないことであるのか、それよりもっと時間を経てからのことであつたのか。それに

よつても理由は様々に考えられる。例えば、この後政情の激変により、西園寺家の拠り所とする持明院統の皇統自体が弱体化する。このような事態に立ち至つては、書こうとしても書くわけにはいかなかったということも理由の一つとして考えられる。また、これらの周辺の状況の変化の他にも、作者自身の内面の変化、作者を信仰へと向かわせているもの、それは作者が「心の闇」と呼ぶものであると思われるが、その内実の変化が摺筆に作用しているのかもしれない。作者がこの時点での摺筆を決意した大きな理由として、そこに西園寺家再興の確固とした証を感じ取り、当主実俊の母としての重責から解放されたということは想定し得るであろう。しかし、先述のとおりそのみをもつて理由とはし難いようである。このことについては、次章以下の考察を踏まえて結論したい。

注

- 1 『竹むきが記全釈』（「付録」、「年立」問題点についての考察） 風間書房、昭47
- 2 前掲注1。
- 3 前掲注1。

第二章 『竹むきが記』の表現様式の特質

第一節 作者の教養の基調にあるもの

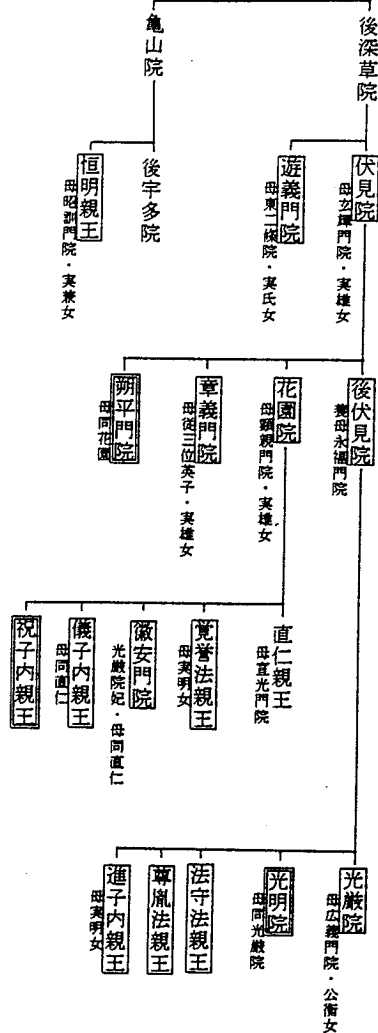
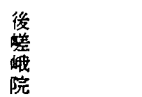
一 作者の和歌的環境

『竹むきが記』の作者が基本的には記録的態度を保ち続けているために、当初はこの日記は史料として扱われていた。しかし、子細に記事内容を追っていくと、その中に、単なる記録を超えた表現・叙述が随所に見られることがわかる。本章では、従来顧みられることの少なかった『竹むきが記』の文学性について、この作品の表現様式の特質という観点から考察する。その際の指標として、まず和歌を据えたい。和歌が当時の代表的な文学様式と考えられていたからである。当然のことながら、和歌的叙情をもつてのみ文学性がとらえられる訳ではない。この作品の文学性を支えるものとして、和歌を基盤とした表現様式、作者独自の感情表現の方法、思想内容としての道心が考えられるが、本章では、まず表現様式に絞って、前二者について考察しようとするものである。それは、『竹むきが記』という作品の記録的叙述というものを再評価する試みにもなるであろう。

作者がどのようにこの作品を綴っていたのか、作者の採った表現様式とは何かについて検討するためには、まず作者の教養の基礎にあるものについて明らかにしておく必要がある。本節では、その基礎作業として作者自詠の和歌および地の文における和歌的な表現について検討し、作者の教養の一端について考えてみたい。

まず、作者の教養の基礎を探る為に、作者がどのような環境にいたのか、その位置について、関係する系図から確認しておく（註一）。

公經
太政大臣
号一條入道大相国
又号西園寺



作者の和歌について、水川喜夫氏は「歌の傾向の流れの上から新古今的ではあっても、新古今風の展開としての、京極家風な新古今的であったとは言えないように思われる」^(注3)とされ、渡辺静子氏は、「総括的にいえば、歌材の領域が非常に狭く、修辭技法も単純ということにしほられよう」^(注4)とされた。『竹むきが記』における引歌について、岩佐氏は「具体的に数をあげつつ調査して行くと、その分布の偏りにも、また引歌の性格にも、作者名子の心情が如実に反映している事が知られる」とされ、また「存在する引歌についての考察と同時に、引歌のない事に関する考察もまた、本記の場合重要な事柄である」^(注5)とも指摘しておられる。このような先学のご指摘を参照しながら分析を試みたい。

京極派和歌の歌風について先学の指摘するところを概観すると、まず、福田秀一氏は、題材・発想・手法・表現の四つに分ち諸説をまとめておられる^(注6)。題材については、「叙景と抒情をよく分離してゐる。即ち叙景歌は自然の観照に、抒情歌は感情の観照に、それ〴〵徹してゐるものが多い」こと、「光線や明暗の感覚を捉へたものが多く、その中でも薄明を好」むこと、「色彩感覚の鮮かな歌も多い」ことを挙げられる。発想については、「風景や感情の時間的な推移や経過を歌」うこと、「対象を動的に把握したものがある」こと、「対象やその動きを、対比的・対照的に捉へた作も多い」ことを挙げられる。手法については、「対象の本質を凝視し、写実に徹しようとする」、「感覚的に鋭い」、「閑寂な情趣を詠じ」ることを、さらに表現(声調・修辭)については、「係助詞『ぞ』の頻用」、「双貫句法(対比・列挙の句法)」、「万葉の語句を採つたものも多い」ことを挙げておられる。また、井上宗雄氏は、「自然美を立体的・聴覚的にとらえて表出し、その時間的推移を叙し、表現の上では字余が多い」^(注7)とされ、岩佐氏は、その特色を次のようにまとめておられる^(注8)。

A 実景、特にその光と動きを目に見るように迫真的に描写する叙景歌

B 心の深層を「心が心を見る」形で観照分析し、その様態を詳細正確に表現する抒情歌

C 散文的抽象的思念を、正面から堂々と詠み据える思想歌

D そのすべてにわたり、伝統的詠歌の規矩にとらわれぬ自由な発想表現——「心のままに詞の句ひゆく」詠風「心のままに詞の句ひゆく」とは、次に挙げる京極為兼の歌論『為兼卿和歌抄』の一文を採られたものである（註）。

「必ずよく四時に似たるをもちひよ、春夏秋冬の気色、時にしたがひて心をなして、これをもちひよ」とも侍れば、春は花のけしき、秋は秋のけしき、心をよく叶へて、心にへだてずなして言にあらはれば、折節のまこともあらはれ、天地の心にも叶ふべきにこそ。「気性は天理に合ふ」とも侍るにや。（中略）万葉の比は、心の起る所のまゝに、同じ事ふたゝびいはるゝをも憚らず、襲晴もなく、歌詞・たゞのこと葉ともいはず、心の起るに随ひ而、ほしきまゝに云ひ出だせり。心自性をつかひ、中に動く心を外にあらはすに巧みにして、心も詞も体も性も優に、勢ひもをしなべてあらぬ事なる故に、高くも深くも重くもある也。（中略）花にても、月にても、夜の明け、日の暮るゝけしきにても、う事に向きてはその事になりかへり、そのまことをあらはし、其のありさまを思ひとめ、それに向きてわが心のはたらくやうをも、心に深くあづけて、心に詞をまするに、有^り興おもしろき事、色をのみ添ふるは、心をやるばかりなるは、人のいろひ、あながちに憎むべきにもあらぬ事也。こと葉にて心をよまむとすると、心のまゝに詞の句ひゆくとは、かはれる所あるにこそ。

為兼の思想が『和歌抄』のみではかれるはずもないが、ここで強調しているのは「心」の重視であろう。

先学の所説から大略つかめるのは、天象・微光・色彩・対象の動きなどへの関心、また対比的対照的な捉え方（例えば遠と近、浅と深など）、身体感覚による実感的表現、また「むらむら」「しらめる」など特異な語やその語の組み合わせによってもわかるような自由な発想・表現などではないかと思われる。このような京極派の活動が作者にどのような影響を及ぼしているのか、次項で具体的に検討する。

二 作者自詠の和歌とその参考歌

『竹むぎが記』には上巻二二首、下巻三七首の和歌が収載されている。和歌には、私に①～⑤⑦の通し番号を付す。上巻の詠者は作者と夫公宗のみであるのに対し、下巻の詠者は作者以外に永福門院・資明・実俊・「鷹司の老人」^{（まろ）}などと多くなってくる。詠歌内容も、上巻は、公事つまり典侍としての職掌に関わるものと、公宗との贈答歌にほぼ二分できるのに対し、下巻では、詠者の多様さに示されるように季節の贈答、旅情、家門の繁栄、仏道修行への思いなど様々である。下巻は上巻に比して記事内容が複雑で広がりがあることを反映し、和歌も多彩な内容を持っているのである。

右のうち作者自詠の和歌は、上巻一五首と下巻二〇首である。これらの和歌を検討するにあたり、明確な区別は困難ながら一応のめやすとして、詠歌内容に応じ公事・恋・羈旅・物詣・天象・贈答・述懐の七つに分類する。使用語句は、京極派の関心の強かった天象・自然に関するものが、詠歌内容にかかわりなく広く使われている。例えば、「公事」②・③の雪、⑧の霞、⑨の霜・月影、「恋」では⑬の月、「羈旅」では④の霞などである。紅葉などの植物や象徴的な意味合いの「花」、また「山陰」などをも含めると、天象・自然に関する語句は延べ五五例二六首に使われている。それに対し、心情を直接的にあらわす語句は少なく、「公事」①の「かしこけれ」、「天象」⑤の「心ぼそく」、「贈答」③⑦の「頼もし」など、併せて八例七首のみである。

以下に、本歌・引歌といった直接的な影響に限ることなく、広く発想・表現・語句などの点から、作者の自詠と共通する感覚を持つ和歌を参考歌（参）として掲げる。ただし、紙幅の都合で、なるべく作者により関連深い歌人の詠に絞った。なお、作者の自詠には、その詠歌事情を簡潔に付記し、また必要に応じて地の文を添える。

【公事】

公事に関する和歌は、上巻前半に集中している。「天象」に分類した⑦も、天皇に近侍する女房として詠んだものである。

① 手になるゝ契さへこそかしこけれ神代古りぬる君が守りは

— 元弘元年十月・剣璽裏みかえ —

② 雪や猶かさねて寒き朝ぼらけ返す雲井の山藍の袖

— 同十一月・賀茂臨時祭 —

③ ふりにける代々をかさねて大内や幾重つもれるみゆきなるらん

— 同十二月・御髪上 —

④ いとゞ猶雲井の星の声ぞ澄む天の岩戸の明くる光に

— 同十一月・内侍所御神樂 —

⑤ 今日やさは唐国人も君が代を天つ空ゆく雲に知るらん

— 元弘二年三月・光厳天皇即位 —

⑥ 君が代の千世のはじめと高御座雲の帳をかゝげつるかな

— 同右 —

〈参〉たかみくら雲のとばりをかかぐとてのぼるみはしのかひもあるかな

(実兼、玉葉・一〇九〇)

⑥は、即位式に作者が褰帳の典侍として役目を果たした折の感慨を詠んだもので、参考歌は、西園寺実兼(公宗曾祖父)が花園天皇の即位式の折に同じ役目を勤めた為子(京極為兼姉)へ贈ったものである。実兼、為子とも京極派歌人である。

⑧ 唐玉の挿頭と見えて乙女子が立ち舞ふ袖に降る霰かな

〔参〕雲のうへあまつひれふる乙女子がかざみの袖にあられ玉ちる

（宗重、新統古今・七二三）

五節の舞に関する類想歌は多い。参考歌の作者宗重は、中御門冬定男、宗兼兄で、冬定・宗兼父子はこの作品に拍子合等の所作人として何度かその名が登場する。

⑨ 更くる夜の雲の通ひ路霜冴えて乙女の袖にこぼる月影

— 同十一月・豊明の節会 —

〔参〕さゆるよの霜をかさねて袖の上にやどれば氷る月のかげかな

（時光、新拾遺・六三〇）

時光は、作者の兄弟である。

恋

⑪ 行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず

〔参〕ゆくすゑのふかき契もよしやただかかるわかれのいまなくもがな

（遊義門院、続千載・一三四九）

かくばかりうきに成りける契しもなどかあはれと思ひ初めけん

（永福門院、続後拾遺・九二一）

公宗の求婚の和歌⑩「新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春」への返歌として、この詠みぶりは重苦しく暗い。それは、この贈答の直後の文「ことなる障りならでは待ち見る事となりぬるも、ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し」という己の境遇の変化への不安を反映したものであろう。

⑮ 定めなき昨日の暮のならひには明日の契もいかゞ頼まん

（参）さらにこそあすのちぎりもたのまれねすすまぬかたのさはりと思へば

（尊胤、風雅・一〇六七）

偽のあるよとたれもしりながらちぎりしまをたのむはかなさ

（資明、風雅・一〇七一）

公宗の⑭「さても猶契し末のかはらずは明日の夕や頼みなるべき」を受け、「昨日の暮のならひ」と「明日の契」とを対比させて詠んでいる。資明は作者の叔父で、尊胤法親王とともに京極派歌人である。

世中今日やくと思ひつゝ、卯月廿日余りになりぬ。事の序をなん求められたるとて、まだ宵の程に立ち寄り給へる、程なく鳥の声、鐘の音、此方彼方に聞ゆ。「そら音にこそは」などおぼめき給さまなるに、明けなばいと便悪しかるべきをと度くおとなへば、妻戸押し開けられたるに、有明の月いとさやかにて、軒近き萩の葉も、なべて此頃の程にもあらず高やかなるに、ひまなく置き渡して下葉もかくれなき露の光など、秋の空めきたる暁の眺めは、さらでもあはれるべきを、これや限りとなべて世を思ひ乱れたる折からのあはれに、まして行くもとまるもいと心細し。

明けはなるゝ気色なれば、髪櫛など召して立出給。端もさながらにて打臥しつゝ猶ながめ出でたるに、俄に空さへかき曇りて、わづかに残りつる月影も見えずなりぬれば、何となく思ひ続けられしをかし。

⑯ いかゞせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬぐの空

— 正慶二年か —

あまたたびとりはやなきてあくるよにうちおくれたるかねのこゑこそ

（俊光、集・五〇三）

いかにせむくずのうらふく秋風にしたばのつゆのかくれなき身を

(相摸、新古今・一二六六)

あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

(源氏物語・一三五)

あふたびにこれやかぎりとおぼえしをげにありはてぬ中となりぬる

(遊義門院、玉葉・一八一六)

見るままにこれやかぎりとかなしきはわかるる袖のあり明の月

(後宇多院、続千載・一三六三)

かたみかな行くもとまるもきぬぎぬの涙にわくる袖の月影

(実重、文保百首・四七九)

かへるさは面かげをのみ身にそへて涙にくらす有明の月

(皇嘉門院別当、玉葉・一四四八)

いかがせんまだ夜はふかき鐘のおとに名残つきせぬ暁の空

(為兼、新千載・一四〇七)

⑯は、公宗への思いを後朝の別れに独詠したものである。恋の独詠はこの歌のみで、他はすべて公宗への返歌である。参考歌を多数挙げ得るように、地の文には物語的ないし和歌的表現が用いられて、抒情的な叙述となっている。参考歌最後の為兼詠は「別恋の心」を詠んだもので、この章段の情調に通うものがある。

⑳ 浅き江に引くや菖蒲あやめのうきねをも長きためしと我や掛くべき

㉑ 残し置く形見ときけば見るからに音のみなかるゝ水茎のあと

(参) 書きとむるこの水茎のかはらずはなからん跡のかたみともみよ

(伏見院、新拾遺・一七九五)

『竹むきが記』における公宗との最後の贈答であり、公宗から贈られた次の三首に対する返歌である。

①⑦ 沼水に生ふる菖蒲の長き根も君が契りのためしにぞ引く

①⑧ 掛けなれし袖のうきねは変らねど何のあやめも分かぬ今日かな

①⑨ 忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと

この返歌は、類型的修辞といえる。参考歌の伏見院御製は、詞書に「竹林院入道左大臣いまだ右大将に侍りける比御製をあまたあそばしてたまはせける奥に」とあり、院から公宗の祖父公衡へ贈られたものである。

羈旅

明けぬればこの泊りも起き別るとて、書き置きしもいとをかし。

②③ 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん

泊り取りつる旅人ども、わづかに釣舟にて己がさまぐに漕ぎ行も、何処をさしてとあはれに見ゆ。

②④ 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方に別る、沖の釣舟

— 暦応三年か、二月中旬、天王寺詣 —

（参）あすも又おなじみちにとちぎるかなとまりかはらぬよはの旅人

（聖尊、風雅・九三〇）

とまりする一夜のちぎり漕ぎわかれおのがさまざまいづるふな人

（後鳥羽院、玉葉・一二三七）

かぢ枕一夜ならぶるとも舟もあすのとまりやおのがうらうら

（伏見院、玉葉・一二三八）

和歌②③は、「書き置き」したもので、内容は直前の地の文の叙景（次項三—1・一三六頁）とはかわりなく旅

情を詠んでいる。

④ 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと

— 康永四年か、一月中旬、春日詣 —

（参）うちわたすうぢのわたりの夜ぶかきに川音すみて月ぞかすめる

（為兼、風雅・一二二）

あさ日山まだかげくらきあけぼのに霧のした行く宇治のしば舟

（資明、風雅・六五七）

伏見山すそのをかけてみわたせばはるかにくだるうぢの柴舟

（永福門院内侍、新後拾遺・一二七六）

この和歌は、作者には数少ない叙景歌である。渡辺氏は、光厳院の「目にちかき軒のうへよりしらみそめて木ずゑかほれる雪の曙」を挙げられた上、「第三句字余りの歌である。名子の歌と全く類似していることを知るのである。『霞こめて河をとしつむ』と『しらみそめて木ずゑかほれる』が同系の語法であり注目される」としておられる^{（注）}。しかし、④の歌は、雪の曙を詠んだ院の歌とは情景が離れすぎており、同意し難い。「霞こめ」は勅撰集には六例あるが、「霞こめて」は用例がない。「霞」は京極派の好んだ題材と思われるが、それでも「霞こめ」「霞こめて」の使用は多くない。伏見院に「桜花さけるやいづこみよしののよしの山はかすみこめつつ」（新後拾遺・七七）、「おしなべての山のどかにかすみこめてはなのひもとくきさらぎの雨」（御集・七九八）、俊光に「そことなくのきばのそらはかすみこめてかげかすかなるゆふぐれの月」（集・五〇）、その他、実明女（京極派歌人）に「いとはやも日影うららに霞こめてはなる色ぞよみにみちぬる」（延文百首・二〇二）一首がある程度である。また、「河音しづむ」も特異な表現で、勅撰集でも「河音すみて」や「河音たかし」はあるが、「しづむ」の用例はない。宇治の柴舟という一般的な素材を、聴覚と視覚とで独特な臨場感溢れ

る描写の一首とすることに成功している。

【物語】

「羈旅」と同様に旅先での詠ではあるが、旅情の詠出ではなく神仏への帰依を表明したものを、別項目としてたてた。

③⑨ 世を照らす同じ八千世も三笠山おなじ光と月ぞさやけき

④⑩ 頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手

— ④⑩と同じ、春日詣 —

〈参〉みそぎするちかひししらばゆふしでのなびくころもなかなからむ

（俊光、集・四二二）

④④ 神や知る引く注連縄の打延へて一筋にのみたのむ心を

— 貞和三年、初瀬詣の途次、春日の大宮にて —

〈参〉一すぢに世をながれと祈るかなたのむみかさのもりのしめなは

（実兼、新後拾遺・一五二二）

ひとすぢにたのむ心をみかさやま神もあはれとめぐまざらめや

（公賢、集・三四二）

⑤② 迷ふらん闇路を照せ法の水結ぶはちすの露の光に

— 貞和五年、日野の塔頭に詣でて —

〈参〉法の水ふかきさとりを種としてむねのはちすの花ぞひらくる

（慶政、玉葉・二七一五）

⑤②は、手向けた水の露に「法の水」を見て、先祖の迷っている闇路を照らせとの独特な発想で類例に乏しく、参

考歌もこの程度しか挙げ得なかった。

天象

⑦ 秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月

— 正慶元年、供花の後、内裏の夜 —

〈参〉雲のうへやいづくはあれどのきあひのひまもる月のかげぞさやけき

（弁内侍日記・二五〇）

「軒合の月」は、勅撰集には用例のない表現である。参考歌には、宮廷女房の生活に即した題材であり、同じ露台の月を詠む『弁内侍日記』を挙げた。

④⑧ 一入^{ひしほ}を惜しむにあらじ紅葉^{もみぢ}をさそひて見する時雨成けん

〈参〉神な月しぐれにまじるもみぢばはちりかふほども色やそふらん

（賢俊、風雅・一五九〇）

叔父資明の④⑦「一入の色や染むると見るほどに時雨と連れて降る紅葉かな」への返歌である。紅葉がはらはらと散り舞う様が浮かぶようなやりとりで、資明と同じく作者の叔父賢俊の風雅集入集の詠と通じる感覚をもっている。

⑤⑩ 山陰や杉の庵^{いほつ}の明方に心ぼそくも出づる月影

— 貞和五年如月、神明寺の山もとの草庵にて —

〈参〉又たぐひ嵐の山のふもとでらすぎのいほりにありあけの月

（俊成、玉葉・七一八）

むら雲のすぎのいほりのあれまより時雨にかはる夜はの月かげ

(有家、玉葉・八五六)

いなり山にしにや月のなりぬらん杉のいほりのまどのしらめる

(頼政、風雅・一七七九)

「杉の庵」は、勅撰集では参考歌として挙げた玉葉集・風雅集の三例にのみ使用されている語句である。

贈答

③⑩ 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし

実俊元服の翌朝、資明からの祝いの和歌②⑨「榮ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる」を贈られた。その和歌への返歌である。

③⑤ 頼めてもとはれぬ花の春暮れてたれ松山とかゝる藤波

③⑥ とへや君山時鳥をとづれて小田の早苗も取りそむる比

五月、「花の盛りを頼めつゝ訪はずなりぬる人」へ贈った歌であり、それへの返歌は次の二首である。

③⑦ 頼め来し花の盛りは過ぬれど今も心にかゝる藤波

③⑧ 時鳥さこそ五月の己が比鳴くや山路を思ひやりつゝ

清原元輔の有名な「ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつすゑのまつ山なみこさじとは」(後拾遺・七七〇)を踏まえた贈答である。ここでは、別に「いつはりの花とぞみゆる松山のこずゑをこえてかかる藤なみ」(為家、続拾遺・一四〇)も意識されているかもしれない。また「花の春」は、為兼の「思ひそめき四の時には花の春はるのうちにも明ぼの空」(玉葉・一七四)が想起されていることかもしれない。

次は、公衡三十三回忌で御幸を仰いだ、その九月尽の初雪によそえた「鎌倉の右兵衛督の御前」(足利直義室)との贈答である。

- ④5 御幸そふ宿の紅葉の八千入に君ぞ幾代の色をかさねん (作者)
④6 幾代見ん君が心の色そへてみゆきふりぬる宿の紅葉、 (直義室)

(参) 色そへんみゆきをぞ待つ紅葉ばもふりぬる宿の庭のけしきに

(伏見院、新拾遺・一六六二)

伏見院詠は、十月の持明院でのもので北山を詠んだものではないが、類似の発想をみることができる。また、西園寺の花を詠んだ頼朝の「ためしなきあまたみゆきのけふに逢ひて花はやちよの色に出づらん」(続拾遺・七三〇)も参考にできよう。

述懐

- ②2 かくてだに捨てぬならひの身の憂さは思ひしよりもあられるかな

— 正慶二年五月、氏光負傷への公宗の見舞いに対して —

(参) 身のうさを思ひしらずはいかがせむいとひながらも猶すぐすかな

(寂蓮、新古今・一七五三)

上巻最後の和歌で、下巻の跋に掲げられる二首⑤⑧(一三五頁に掲出)と密かに呼応していると思われる。この、厭うべき世をたやすくは捨てられないという理は、多くの和歌や物語などでいわれてきており格別新しいことではない。しかし、ここでは作者の体験に基づく実感として、頭で理解する理を越えたものを感じさせる。兄氏光の負傷は、近江国馬場に於ての五辻宮守良親王勢との交戦の折の出来事と考えられる。この後、光厳天皇と後伏見、花園両上皇は伊吹に移された上、天皇は廃位とされる。このような騒然とした世情を踏まえた公宗への返歌とはいえ、この和歌にはその状況以上の作者の思いが込められていることが下の句「思ひしよりもあられるかな」に感ぜられる。その上、この和歌の直後では、先の政情により作者の父資名が出家したことに引き続いて、

夫公宗までも出家の意向を漏らすという自身の周辺に迫る不安な状況に困惑する様が語られる。さらにこの日記が、夫公宗の刑死という体験を経たのちに綴られたとすれば、この一首の作者にとつての意味はより深長なものと考えられてもよいであろう。

弥生の比、若宮に詣でたるに、長講堂近く見やらるれば、車さし寄せて見巡る。昔供花の折など、心に浮ぶ事多し。花の下に立ち寄れるに、変らぬにも、見し世の春にめぐり逢ひぬる心地して、思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ慣ひさへぞ恨めしかりける。何時の年なりしにか、御八講の比（中略）をのく並み候ひし人々此彼と思ひ出づるに、同じ世なるも少く、或るは苔の袂のあらぬ世に立ち返、さらでも己がさまざまに、よしあしにつけつゝ身を変へぬるなど、取り集め思ひ続けるに、涙さへこぼれぬ。

③ 宿もそれ花も見し世の木の下になれし春のみなどかとまらぬ

— 暦応の頃か —

（参）はなのもとのむかしのなさけあとふりてあはれみし世のともぞすくなき

（伏見院、御集・二二二）

花のもとのなさけすむるともをなみなれこしもとの春ぞ恋しき

（同右・一一一八）

なに事も昔がたりになりゆけば花もみし世の色やかはれる

（上西門院兵衛、風雅・一九六四）

この作品には珍しく感情を露わにしている章段である。「花物言はぬ慣ひ」には、「誰謂花不語」（菅三品、和漢朗詠集・一一七）や史記の「桃李不言下自成蹊」を踏まえた「ふるさとのはなものいふよなりせばいかむかしのことをとはまし」（出羽弁、後拾遺・一三〇）などが想起されるが、この章段には、伏見院御集の一連の花の下での懐旧の詠と非常に類似した発想を見いだすことができる。右には、御集からは二首のみを挙げた。

③④ あはれこの眠らぬ床に見る夢を覚ます現の暁もがな

— 冬の夜、一人起き居て —

〈参〉のりのこゑにききぞわかれぬながき夜のねぶりをさますあかつきのかね

(高弁、玉葉・二七二六)

ひとりあかすよもの思ひはききこめぬただつくづくとふくる夜の雨

(後伏見院、風雅・一六九二)

⑤① あはれなり柴の庵の柴の垣うき世中の隔^{へだ}てと思へば

— 神明寺の山もとの草庵にて —

〈参〉ただひとへあだにかこへるしばのかきいとふこころに世をばへだてて

(俊実、風雅・一七五〇)

③④・⑤①ともに、仏道修行に関する述懐である。「眠れぬ床」ではなく「眠らぬ床」は、意志的な修行の様をあらわし、他に類似の発想のみられない表現である。俊実は作者とほぼ同時代に生きた京極派の歌人である。

同春の頃、宮こにて療治めかしき事侍に、鷹司の老人語りて、珍しうのどかなるに、帰る名残をいかにと慕ひの給へる。無量光院の花、いみじう盛りなれば、我も人も、いかに玩ぶべきにかなど、御酒すゝめつゝ眺めくらしたるに、雨さへしほくと降り出でぬれば、「いと山路たどくしうなりぬ」と人々急がせば、眺め捨てつゝ、彼より、

⑤③ 慕ひ見し山路^ちの花の木のもとにとめし心の程は知らずや

⑤④ 馴^なれしよりかゝる別れのあらんとは思ひながらも猶ぞおどろく

⑤⑤ 名残思ふ涙の雨のかきくれて花もしほれし帰るさぞ憂き

返事にそへて、

⑤6 思ひやれ雨も涙もかきくれて名残しほれし花の本本

⑤7 いとせめてあかぬ名残の悲しさに馴れしさへ憂き恨みとぞなる

⑤8 藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

⑤9 なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

〔参〕 おもひやれ老いてなぐさむ花だにもしをる今朝のあめのつらさを

〔覚助、新後撰・一二三二〕

思ひやれ空もひとつにかきくれて雨も涙もしぼる袂を

〔行済、新拾遺・八七八〕

あさましやなどかきたゆるもしほ草さこそはあまのすさびなりとも

〔読人不知、金葉二・三七二〕

すつる世の跡まで残るもしほ草かたみなれとやかきとどめけん

〔宗尊、玉葉・二四七四〕

かきすつるもくづなりとも此度はかへらでとまれ和歌の浦波

〔高氏、続後拾遺・一〇八四〕

右がこの作品最後の章段で、北山での花見を雨のため途中で切り上げた際の贈答歌と作品全体の跋ともいうべき二首とを記して作者は擱筆する。北山の花はよく詠まれるが、ここは花見の余韻というよりも、それにかこつた悔恨の情といった趣が強く、その想いはそのまま最後の二首へと連なつてゆく。渡辺氏は、⑤9に公宗詠①9「忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと」との明確な照応を見ておられる^{〔註〕}。であるとするれば、これはこの日記を終えるにあつた謙辞ばかりではなく、公宗亡き後一人で生きることを選んだ作者の感慨をも込めたものとも考えられる。

三 地の文の和歌的叙述

前項で作者自詠の和歌について見てきた。その結果、予想よりも遙かに多くの京極派あるいは玉葉・風雅兩集からの参考歌を抽出することになった。次には、地の文について見ておきたい。

1 仮寝^{かりね}の草の枕もなを結ぶ程なく、夜深く立ちて芦屋^{あしや}の里といふわたりに留^{とど}まる。暮れ行くまゝに、浦風^{うら}すさまじく吹冴^さえたるに、さすがに春のしるべとや、霞める月影は海面遙^{はづ}かに見渡されつゝ、繫^{つな}がぬ舟の浮きたる例もげにあはれに見ゆ。いたく旧^{ふる}りぬる蘆葦^{あしや}の小屋は、八重にもあらぬにや、漏り来る月影、隙^{ひま}多くぞ見えける。明けぬればこの泊りも起き別るとて、書き置きしものとをかし。

②③ 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん

泊り取りつる旅人ども、わづかに釣舟にて己^{おの}がさまぐに漕ぎ行も、何処をさしてとあはれに見ゆ。

②④ 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方^{よも}に別るゝ沖の釣舟

— 下巻・暦応三年二月中旬、天王寺詣 —

「仮寝の草の枕もなを結ぶ程なく」は、西園寺公相詠「あらしふくみねのささやの草枕かりねのゆめはむすぶともなし」（続後撰・一三〇二）を意識したものであるかもしれない。「繫がぬ舟の浮きたる例」、「八重にもあらぬにや」もすでに指摘されている如く『源氏物語』「帚木」や「つのくにのこやとも人をいふべきにひまこそなければあしのやへぶき」（和泉式部、後拾遺・六九一）を踏まえた叙述である^{まじ}。また、「浦風すさまじく」の「すさまじ」は、勅撰集では玉葉集・風雅集に限って用いられ、伏見院御集にも多く見られる語句である。

『竹むきが記』にはこの他「雲の色」・「眺めの末」など京極派の好んだ語句が地の文によく見られる。ここでは、「霞める月影は海面遙かに見渡され」と遠景を、「漏り来る月影、隙多くぞ見え」と近景を同じ月影を使っ

て表現している。このような遠近への視点の動かし方は京極派の影響かとも思われる。

2 下向には日吉にと心ざして、志賀の浦へ出でたるに、其処となく霞み籠めて、さし昇る日影は波を分くるかと見ゆ。唐崎の松も昔旧りぬるにや、いと小さきぞ見えける。男子どもは舟にてさし渡るもありけり。右にめぐり左に返みるにたゞはるぐとして、岸打つ波の寄せ返つ、其処とも見えず果も知られぬ眺、おかしければ、過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ待ける。

— 下巻・曆応五年二月、石山詣 —

〔参〕相坂の山こえはててながむればかすみにつづく志賀の浦波

（良経、続後拾遺・三一）

そことなくなみちのすゑはかすみきえてそらけぢめなきうらのあけぼの

（俊光、集・一七）

われみてもむかしはとほく成りにけりともにおい木のから崎の松

（為家、続拾遺・一一〇〇）

松かぜもきしうつなみももろともにむかしにあらぬおとのするかな

（恵慶、後拾遺・一〇〇〇）

3 暁方には少し小止みつゝ、檜原を払ふ峰の嵐、いとすごう聞ゆ。明けぬるになを雨うちそゝけば、慌しながら見廻りつゝ、北野の天神の跡垂れましますなると喜の御社に詣づるに、音に聞きわたりし初瀬川、げにいとおどろくしく岩切り落ちつゝ、麓を廻れる山には花より外の木ずゑもなし、八入の岡には紅葉ならでは混る木も見えず。春秋の色、己が山くくに分けける心も珍し。

— 下巻・貞和三年一月、初瀬詣 —

〔参〕初瀬山ひばらがあらしかねのこゑ夜ぶかき月にすましてぞ聞く

(為子、玉葉・六四四)

初瀬川さよのまくらにおとづれてあくるひばらに嵐をぞ聞く

(慈鎮、玉葉・一一九三)

初瀬川るでこす波の岩のうへにおのれくだけで人ぞつれなき

(良経、玉葉・一二八六)

芳野川いはきりおつる滝つせのいつのよどみに氷りそむらむ

(実伊、新後撰・四八七)

くれなるのやしほのをかのもみぢばをいかにそめよと猶しぐるらむ

(伊光、新勅撰・三四〇)

はなのはるもみぢの秋のいろいろもよそにみどりのみ山木のかげ

(伏見院、御集・一一八三)

2・3ともに参詣の途次の光景を描写した章段である。傍線を施した箇所に参加歌と共通する和歌的な表現が見いだされる。そういった中には、京極派の和歌も参考歌として挙げるができる。

4 暁、北の庵に立ち寄れる事侍に、其処となく霞みたるに、軒端の梅の匂のみ、隠れぬ物とや、うち薫れるなど、いと艶なる暁の空なり。雲間に残る有明もいと心細く見ゆ。

⑤⑩ 山陰や杉の庵の明方に心ばそくも出づる月影

— 下巻・貞和五年二月、神明寺別行 —

(参) 風になびく柳のかげもそことなく霞みふけゆく春の夜の月

(実明女、風雅・一二三三)

そことなき霞の色にくれなりてちかき木ずゑの花もわかれず

(微安門院、風雅・二〇四)

かすめどもかくれぬ物は梅のはなかげにあまれる句なりけり

(為家、風雅・八〇)

しぐれふる山のはつかの雲まよりあまりて出づるありあけの月

(為家、玉葉・九一〇)

「其処となく」が風雅集に実明女の一例のみ、「そことなき」も参考歌の他、花園院・公賢に各一首の語句であるが、伏見院御集には「そことなきはなのかをりにかすまれてはるものふかきやどのあけぼの」(一二七・二二七)他「そことなく」「そことなき」各一首、俊光にも「そことなく」四首使用例がある^(註)。⑤の「杉の庵」が玉葉集・風雅集にしか用例のない語句であることは先述した。

5 月のくまなき夜、女房あまた御供にて蔵人町の方へ成らせ給しに、安福殿・左衛門陣の方ざまなどはるかに見渡されていとおもしろきに、滝口の還遊の声聞ゆ。御まへたちとよぶ声さへをかし。こなたかなた、歌うたひ歩くに、摺らるゝ杵の音までも雲井に冴ゆる心地して、をかしくのみぞ聞きなされし。

— 上巻・元弘元年十一月か —

〈参〉われならぬ人もさこそはききつらめあかつきがたのたきぐちのこゑ

(弁内侍日記・六〇)

たきすすぶ霜夜の庭火かげふけて雲ゐにすめる朝倉のこゑ

(隆教、玉葉・一〇一九)

6 いつの夜にか、清暑堂に成らせ給しに、いさゝかも雲の迷ひも見えず、ことさらに空澄みて、御垣の内はるゝと冴え渡れる月影、所からに分きける光にや、いふ方なかりしに、番衆ども囲み居たる垣の内より、いと臭き匂ひの燻り出しかば、いと疾う返入らせ給しも、残り多くぞ侍し。

5・6は、いずれも年次の明確でない回想である。5は、劍璽の褰みかえという典侍としての大役を果たした記録に引き続いての十一月一日の日蝕の降雪の思い出、そこには密やかな作者の公宗への思慕の情を読み取るこ
とができる^{（注15）}が、その章段と、賀茂臨時祭の記事との間に配列されている。前段の抒情性をそのまま引きず
った叙述といえるが、視覚・聴覚で臨場感あふれる描写をしている。6は、十一月の一連の宮廷行事を記す間に、
清暑堂御神楽からの連想で記されたものと思われる。ここでは、視覚でその夜の情趣を描写した後、それと正反
対の「いと臭き匂ひ」という嗅覚による思い出を記しているが、これらの描写は、4の視覚・嗅覚を用いた描写
とともに京極派の感覚的な表現形式に通じるものをもっているといえるのではないだろうか。

以上のように地の文にも京極派の影響を看取することができるといえよう。

ところで、2では「過ぐる名残も慕はるゝ」、3では「心も珍し」としながら、作者は和歌を書き記してい
ない。特に3の初瀬詣は「夢想の事あるに驚き」思い立ったものであるにもかかわらず、和歌は春日大社での④を
記すのみで、旅の途次での詠が全くない。このような地の文で和歌的素養を垣間見せながら和歌を配さない章段
が少なくない。その逆に和歌がありながら、地の文が簡略であったり、記録的なものに終始したりする場合も相
当数ある。また、特に下巻の記事の行間からは、作者の西園寺家復興への執着ともいえるべき思いを読み取るこ
とができるが、これに関する自詠の和歌は、実は実俊元服に際しての資明との贈答歌③のみなのである。それも儀
礼的なもので母親の率直な喜びは詠まない。加えて、下巻では、父資名を始め、永福門院、花園院など身近な人
々の死を記録しているにもかかわらず哀傷歌を一首も書き残さない。これらのことから推測して、作者にとって、
和歌が必ずしも最も切実な表現手段ではなく、むしろ他の表現形式においてより自在に己れを表現できたのでは
ないかと思われるが、この点についてはさらに考察を加える必要があろう。

四 作者の教養の基盤

今回の作業では、特に京極派に絞って参考歌を探したわけではないが、先述した如く、同趣の発想のものや表現の類似するものなどを探してゆくと、結果的に京極派歌人たちの和歌が目立ち、その他の歌人の場合も玉葉集・風雅集の入集歌が多くなったのである。地の文においても先に指摘したように、発想や表現に京極派の影響を見いだすことができる。これらの事実は、作者の教養の基調に京極派の歌風があったことを十分に推測させるのではないだろうか。

作者と京極派歌風とのつながりを考える時の接点として、まず第一にこの作品の記述から作者が実俊を通して親しみもし、また心強い後援者として敬慕したであろう永福門院の存在が考えられる。しかし実際の作業の結果は、永福門院の詠歌よりもむしろ伏見院の詠歌を参考歌として多く見いだすことになった。伏見院は詠歌数も多い上、その身分柄も自在に独特な表現を多く生み出し、京極派歌壇ではその表現を取り入れることが多く行われたとのことである^(註16)。作者が出仕していたのは後伏見院・花園院の時代で、伏見院に直接仕えたわけではない。しかし京極派歌壇で重視された伏見院の詠歌であつてみれば、作者にも、直接院の御製を目にし、あるいは院の和歌について間接的にも聞く機会が数多くあつたと想像される。一方、先述した如く永福門院の最晩年は、実俊養育にあたられる日々であつたことが『竹むぎが記』からも推測される。そういう時期を共に過ごした作者への文学的影響があまり顕著ではないようにみえることは、作者の教養が、かなり年若い頃から修得せられてきたものであることを示していよう。

そこで、伏見院と並んで作者の祖父俊光の詠歌が、作業の過程で参考歌として数多く抽出されたことに注目したい。俊光は伏見・後伏見両院の近臣で、父祖の極官を越えて大納言にまで昇った日野家興隆の祖であつた。その家集『俊光集』は、「前権大納言」(日野資明)の奥書に「一家之人外更不可多用」^(註17)と記されており、

日野一族で尊重されたものであった。名子も、その家集に大いに親しんだものと思われるのである。

作者自詠の和歌の参考歌として、この二人の詠歌を数多くあげることになった事情として以上のようなことが考えられる。これらの、作者からいえば世代が上の周辺歌人、特に京極派の人々から影響を受けつつ、作者は幼少からの教養の基礎を培っていったのではないかという推測が許されるであろう。

注

- 1 『尊卑分脉』・『本朝皇胤紹運録』を基本とし適宜加除した。
- 2 『京極派歌人の研究』（終章、第二節「京極派歌人一覧」 笠間書院、昭49）
- 3 『竹むきが記全釈』（「解説」、『新千載集』所収の名子の和歌 風間書房、昭47）
- 4 『中世日記文学論序説』（第三章「鎌倉後期の女性の日記」第二節「『竹むきが記』の歌とその周辺」 新典社、平1）
- 5 「『竹むきが記』の引歌」（『女流日記文学講座』第六巻『建礼門院右京大夫集 うたたね・竹むきが記』 勉誠社、平2 所収）
- 6 『中世和歌史の研究』（第二篇「歌人と歌壇」第七章「歌人叢考」 角川書店、昭50）。福田氏が挙げておられる例歌を左に掲出させていただく。

光線や明暗の感覚

山の端も消えていくへの夕霞かすめるはては雨になりぬる（「玉葉集」春上、伏見院）

浪の上に映る夕日の影はあれど遠つ小島は色暮れにけり（「玉葉集」雑二、為兼）

色彩感覚の鮮かな歌

梅の花くれなるにほふ夕暮に柳なびきて春雨ぞ降る（「玉葉集」春上、為兼）

みどりこき日かげの山のはるぐとおのれまがはず渡る白鷺（「風雅集」雑中、徽安門院）

時間的推移

日にそへて思ひのみそふ身のはてよ惜しからぬしもあはれなるかな（「玉葉集」恋三、從三位親子）

対象の動的把握

宵のまのむら雲づたひかげ見えて山の端めぐる秋のいなづま（「玉葉集」夏、伏見院）

閑寂な情趣

吹きしをる嵐をこめて埋むらしふけゆく山ぞ雪にしづまる（「為兼卿記」十月四日、為兼）

7 『中世歌壇史の研究 南北朝期』（第一編「鎌倉末期の歌壇」第三章「延慶・正和期の歌壇」 明治書院、昭62）

8 『玉葉和歌集全注釈』別巻（「解題」五「内容」 笠間書院、平8）。岩佐氏は、別に「唯識説と文学―京極為兼

の和歌―」（『仏教文学講座』第二巻「仏教思想と日本文学」 勉誠社、平7）において、京極派の歌風の特徴を為

兼詠で示しておられるので、その一部を抄出させていただく。

A 叙景歌

露おもる小萩が末はなびき伏して吹きかへす風に花ぞ色そふ（玉葉、五〇一）

吹きさゆる嵐のつての二声にまたは聞えぬ暁の鐘（風雅、七八六）

B 抒情歌（心理分析的恋歌）

まぎれすぎてさておのづからあらるるを思はれたちて後の夕暮（金玉歌合、三七番右）

頼まねば待たぬになして見る夜半の更けゆくままになどか悲しき（風雅、一〇四八）

C 思想歌（非具象的思念歌）

木の葉なきむなしき枝に年暮れてまためぐむべき春ぞ近づく（玉葉、一〇二二）

物としてはかり難しなよわき水に重き舟しも浮ぶと思へば（風雅、一七二七）

D 自由な発想表現

をりはへて今ここに鳴く時鳥清くすずしき声の色かな（風雅、三二二）

ねやの上は積れる雪に音もせでよこぎる霰窓たたくなり（玉葉、一〇一〇）

空しきをきはめ終りてその上に世を常なりとまた見つるかな（玉葉、二七二二）

- 9 『為兼卿和歌抄』の本文は、久松潜一氏校注『為兼卿和歌抄』（『日本古典文学大系』65『歌論集 能楽論集』岩波書店、昭36 所収）による。

- 10 岩佐氏は、「鷹司の老人」を、名子の伯母伏見院中納言典侍（鷹司家雅室）と推定しておられる（前掲注2、第三章「後期の歌人」第四節「竹むきが記作者と登場歌人達」）。

- 11 前掲注4。なお、この光厳院詠は「光厳院御集」（常照皇寺発行『光厳天皇遺芳』昭39）所収による。

- 12 前掲注4。

- 13 「繫がぬ舟の」は、『源氏物語』「帚木」雨夜の品定めでの左馬頭の言葉「繫がぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし」による。

- 14 花園院 風雅・一二五四 「そことなきうらみぞつねにおもほゆるいかにぞ人のあらずなる比」

公賢 新拾遺・一二二 「そことなき花のところも山ふかみ空にしられてにほふ春風」

伏見院 御集・三四 「ながめやるかすみのしたのべとほみただそことなき夕ぐれの春」

同 ・ 一六二四 「ゆふぐれやしづまるままにそこなくこゑこゑしるきをちこちのおと」

俊光 集・一七 「そことなくなみちのすゑはかすみきえてそらけぢめなきうらのあけぼの」

同 一八 「そことなかくすむゆふべのなにはがた入江の浪のおとぞのどけき」

同 五〇 「そことなくのきばのそらはかすみこめてかげかすかなるゆふぐれの月」

同 五四 「そことなくかすみであくるしのめにゆくかた見えぬかりの一つら」

- 15 拙稿「『竹むきが記』の構成と和歌の役割——元弘元年の暮の記事を中心に——」（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』創刊号、平10・3）。〔本論第一章第二節参照〕

- 16 岩佐氏のご教示による。

- 17 『私家集大成』第五卷所収による。同奥書によると、玉葉集撰集の時に俊光が自撰したものを、風雅集撰集にあたり、資明の息宗光（俊光孫）が書写したという。

第二節 上巻の和歌のあり方と地の文の叙述

一 上巻収載の和歌

『竹むきが記』には、五九首の和歌が収載されている。そのうち上巻の和歌二二首の詠者は、作者名子と作者の夫となる公宗の二人のみである。持明院統の宮廷に出仕していた作者が、女房の常として、例えば『中務内侍日記』の如き和歌の贈答による交流を全くしていなかったとは考えにくい。下巻では、作者も折に応じて様々な人々と和歌の贈答をしていたことが記されており、作者がそういった点に全く関心がなかったとはいえない。このことから上巻での和歌が非常に限定された形で選出され記されていることが推測できるのである。本節では、作者が『竹むきが記』執筆にあたって和歌をどのような思いから選出記したのか、上巻、特に公宗にかかわる和歌を地の文の叙述と絡めて検討してみたい。

まず上巻所載の和歌を掲げる。和歌には、私に①②の通し番号を付し、詠者を和歌の下に（ ）をもって示す。

- ① 手になるゝ契さへこそかしこけれ神代古りぬる君が守りは (名子)
- ② 雪や猶かさねて寒き朝ぼらけ返す雲井の山藍の袖 (同右)
- ③ ふりにける代々をかさねて大内や幾重つもれるみゆきなるらん (同右)
- ④ いとゞ猶雲井の星の声ぞ澄む天の岩戸の明くる光に (同右)
- ⑤ 今日やさは唐国人も君が代を天つ空ゆく雲に知るらん (同右)
- ⑥ 君が代の千世のはじめと高御座雲の帳をかゝげつるかな (同右)

- ⑦ 秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月 (名子)
- ⑧ 唐玉の挿頭と見えて乙女子が立ち舞ふ袖に降る霞かな (同右)
- ⑨ 更くる夜の雲の通ひ路霜冴えて乙女の袖にこぼる月影 (同右)
- ⑩ 新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春 (公宗)
- ⑪ 行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず (名子)
- ⑫ いかにせむ偽ならぬいつはりを猶いつはりと思ひなされば (公宗)
- ⑬ 偽の誰がならはしぞ独寝はさしも夜なくされじと思ふに (同右)
- ⑭ さても猶契し末のかはらずは明日の夕や頼みなるべき (同右)
- ⑮ 定めなき昨日の暮のならひには明日の契もいかゞ頼まん (名子)
- ⑯ いかにせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬぐの空 (同右)
- ⑰ 沼水に生ふる菖蒲の長き根も君が契りのためしにぞ引く (公宗)
- ⑱ 掛けなれし袖のうきねは変らねど何のあやめも分かぬ今日かな (同右)
- ⑲ 忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと (同右)
- ⑳ 浅き江に引くや菖蒲のうきねをも長きためしと我や掛くべき (名子)
- ㉑ 残し置く形見ときけば見るからに音のみなかるゝ水茎のあと (同右)
- ㉒ かくてだに捨てぬならひの身の憂さは思ひしよりもあられるかな (同右)

上巻の和歌はその内容から二分できる。①から⑨までが、宮廷女房として参加した公事における感慨や天皇に近侍した折の感興を詠んだもので、⑩以下が公宗にかかわるものである。ただし上巻前半の和歌の中にも、②③④のように公的儀礼的詠みぶりの裏に作者の公宗への想いが密やかに込められているものもあると考えられる(注1)。

したがって、単純に表面的な内容だけでは理解できないこともあり得る。本節では、この点に留意しつつ、上巻

後半部に集中して記されている公宗とのかかわりで詠まれた和歌を見てゆく。その際、この作品の中では比較的叙情性の濃い二つの章段を検討の対象とする。

二 対象とする二つの章段

作者が『竹むきが記』において初めて公宗とのかかわりを唐突に語り出すのは、元弘二年（一二三二）十一月の午の日に行われた豊明節会における「夜のさま」を詠んだ和歌⑨の直後からである。その章段を次に引用する。

思ひかけず旅寝の床に夜を明かす事なん侍し比、二月の初め、例の宿りに立ちとまれるに、鳥の声、鐘の音、しきりに驚かしつゝ、車引出たる暁の空霞み渡りて、峰の横雲ほのかに白みゆく程なり。吹きすさむ風につけて、其処とも知らぬ梅が香の匂ひたるなど、いと艶なりしも、心なき身にはさしも思ひわかれざりしさへ、思ひ出らるゝ端にありける。

公宗との逢瀬の後朝の情感を物語的和歌的に叙述している。傍線部分が次のような参考歌（直接的な影響に限らず発想や表現に類似する感覚をもつ和歌）を踏まえていると思われるが、この章段に和歌は記されていない。

しづかなるねざめ夜ぶかき暁のかねよりつづく鳥のこゑこゑ

（龜山院、新後撰・一三五三）

あかつきはゆくへもしらぬ別かなみねのあらしのよこ雲のそら

（教実、続後撰・八二七）

わすれずよあかぬ名残にたちわかれみしをかぎりのよこ雲の空

（実兼、新後撰・一一二九）

しらみゆく霞のうへのよこ雲にありあけほそき山のはのそら

(九条左大臣女、風雅・一四三二)

たがかきねそこもしらぬ梅がかの夜はのまくらになれにけるかな

(式子内親王、新勅撰・三七)

梅がかは枕にみちてうぐひすの声よりあくる窓のしのめ

(為兼、風雅・八四)

ひとすぢに心なき身とおもへどもうきをば袖にしる涙かな

(為兼、新千載・一〇七〇)

うつつともおもひわかれですぐるまにみしよの夢をなにかたりけん

(上東門院、千載・五六七)

もう一箇所、右と同様に公宗との逢瀬を記しているのは、正慶二年(一三三三)三月、赤松勢が京都に侵攻してきたことにより光厳天皇と後伏見・花園兩上皇が六波羅へ遷幸されたことなどを記した後である。次いでその章段を引用する。

世中今日やくと思ひつゝ、卯月廿日余りになりぬ。事の序をなん求められたるとて、まだ宵の程に立ち寄り給へる、程なく鳥の声、鐘の音、此方彼方に聞ゆ。「そら音にこそは」などおぼめき給さまなるに、明けなばいと便悪しかるべきをと度くおとなへば、妻戸押し開けられたるに、有明の月いとさやかにて、軒近き萩の葉も、なべて此頃の程にもあらず高やかなるに、ひまなく置き渡して下葉もかくれなき露の光など、秋の空めきたる暁の眺めは、さらでもあはれなるべきを、これや限りとなべて世を思ひ乱れたる折からのあはれに、まして行くもとまるもいと心細し。明けはなるゝ気色なれば、鬢櫛など召して立出給。端もさながらにて打臥しつゝ猶ながめ出でたるに、俄に空さへかき曇りて、わづかに残りつる月影も見えずなりぬれば、何となく思ひ続けられしをかし。

⑩ いかにせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬぐの空

先と同じく傍線部分が参考歌を踏まえた叙述と思われる（前節に掲出）。ここでも公宗から「そら音にこそは」と洒脱に名残惜しさを伝えられた後朝の別れに、残された作者がひとり慕情を募らせるといふ物語的狀況を叙情性豊かに記している。和歌は、「何となく思ひ続けられし」その思いを素直に詠んだものである。

『竹むきが記』では、この二つの章段のみが公宗との関係を叙情的に記しているのであるが、前者には和歌が記されず、後者には記されている。どのような事情でこのような形になっているのであろうか。

三 当該章段前後の記事の配列

本項では、右の章段前後の記事の配列を確認しておきたい。上巻を日付や記事内容を手がかりとして私に65の章段に分け、番号を付す。章段の内容はでき得る限りその章段の書き出しの一文をもって示し、それ以外は簡単に説明を加える。また、（中略）中には、公宗を指す語（波線部）を含む本文を示す。

19 「同月廿二日、御即位行はる」

（注—元弘二年三月）

20 「四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる」

21 「祭の頃、内へ参る（中略）祭の日は警固の姿どもをかしう見ゆ」

22 「七月に、常磐井殿にはじめて行幸ならせ給」

（その程、前右大臣殿・大納言殿・宰相中将殿など参り給）

23 「その年の八月、内に候ひし比に、時は井殿より幸若といひし稚児を参らせられて（下略）」

24 「同じ年の九月に、長講堂供花なるに参り侍し（中略）御陪膳にたゞ一人候」

（御簾に西園寺大納言殿参り給）・（御前に大納言殿候はせ給）

25 「供花の後、内に候ひしに、夜いたく更け静まりて、南殿の月御覽ぜられしに（下略）」 和歌⑦

26 「神無月に御禊の行幸あり。前の日、河原へ御幸侍て、内侍習礼などあり。御見物の御幸ならせ給」

27 35 「十一月四日、院の拍子合侍し」から「十五日、清暑堂御神楽、御遊也」まで十一月の一連の行事。

その中、御前の試の折に和歌⑧。

（五節沙汰人々、花山・西園寺殿・日野大納言（中略）参りは西園寺殿より也）・（西園寺大納言殿、

妻戸の左の方に候ひ給）・（西園寺大納言殿より、魚袋の金の笛、松の打枝につけて（中略）五節の

薫物、北山殿よりも然るべき所くへ聞え給とて）

36 「時は井殿に推参の参る日々は、夜中暁となく、彼方此方と通ひ参りつゝ、身も苦しまでぞ覚え侍し」

37 「いつの夜にか、清暑堂に成らせ給し」に情緒ある気配であったが、番衆の方から「いと臭き匂ひ」がし

て早めに切り上げられ残念であったこと。

38 「午の日は豊明の節会にて、高御座に出御なれば、舞姫昇る」 和歌⑨

39 「思ひがけず旅寝の床に夜を明かす事なん侍し比、二月の初め（下略）」

40 常磐井殿の僧房の妻に伏した朝、少将にからかわれた思い出。

41 「里に侍し年、春立つ」日、公宗より求婚の和歌⑩を贈られる。作者の返歌⑪。

（人の許より）

42 「正月十二日、春の節なりしに、御方違」、乞われて別殿に参る。公宗との結婚についてからかわれ困惑したが、「それを限りの百敷」となった。

（御破子、北山殿よりまうけらる。やがて参り給）・（人も出で給しかば）

43 「十二日には女院の御方御入内なり」

44 「白馬節会、午の時にはじめらる」

45 「十六日もいと疾くはじめらるべし」

46 「廿日より内にはさまべかりし」であつたが、支障があり延期する。世の中騒然とする。公宗も出仕し、逢瀬もままならず。

〈大納言殿も御前参る〉

47 世情は平静化するが、公宗とは逢えず和歌⑫を贈られる。「いかなる折にか」、公宗から贈られた和歌⑬。

〈人の許より〉

48 参殿の留守に公宗が訪れ、和歌の贈答。⑭⑮

49 「その春、梅の枝に子日の松」の行事の折、前夜の不在を後伏見院にからかわれた思い出。

〈北山殿より御丑末の事まいれるとて〉

50 「後二月のはじめつ方、悩ましき事侍て里に出でぬ」

51 「廿日余りの程にはよろしき心地にて、常磐井殿に参り」新院の御方（花園院）に妊娠かとからかわれる。

52 「三月十六日、六波羅へ行幸御幸侍」、参上するも赤松勢が押し寄せるとの事で心算に違うがやむを得ず退出。

53 翌日、公宗、六波羅から使いを寄越す。

54 作者、公宗の配慮で清水の父の宿に「俄に迎へられて渡りぬ」

55 「世の中、今日やくと思ひつゝ、卯月廿日余りになりぬ」

56 「東国の夷」（高氏など）の動きへの感想。

57 「五月五日、世の中今はかくと聞えしかば、何の文目もわかれずかきくれたるに」公宗より和歌⑰⑱、それへの返歌⑳㉑。

〈人の許より〉

58 「同じき七日、六波羅の四方に押し寄せて打囲む」

この配列一覧中、章段39が前者（一四八頁に引用した部分）であり、章段55が後者（一四九頁に引用した部分）である。

四 和歌の有無と地の文の叙述との関係

章段39は、きわめて臚化されている上、正慶元年（元弘二年・四月二十八日改元）十一月の記事と同二年正月の記事との間に位置しており、いつの年の「如月」のことであるのか判然としないが、前後の文脈から、元弘二年二月であると考えるのが自然ではないかと思われる。とすれば、章段39は、19の三月二十二日の即位式より以前の出来事ということになる。この前年（元弘元年）十一月一日の日蝕の日には公宗が『竹むきが記』に初めて登場するが、この時に公宗は作者の胸に特別な存在として意識せられたと考えられる⁵⁸から、それ以降作者の目は公宗に向けられていたはずである。前項配列一覧に（へ）で示したように「西園寺大納言殿」・「大納言殿」などとあえて官職で表記されているが、これらの記事に公宗の名が頻出するようになるのである。元弘元年十一月以降の記事は、たとえそれが宮廷行事の記録であるとしても、それを記憶している作者の意識の中には常に公宗がいたと想像されるのである。そのように考えれば、章段39は作者の中では決して唐突に出てきたものではないということもできるのではないだろうか。そして波線で示したように章段39を境として、公宗の呼称は公的な「西園寺大納言殿」などと並行して、私的な「人」も使われはじめるのである。

さらに、この章段の後の文脈をいま少し詳しく検討するため、重複を厭わず章段39を含めて引用する。

39 思ひかけず旅寝の床に夜を明かす事なん侍し比、二月の初め、例の宿りに立ちとまれるに、鳥の声、鐘の音、しきりに驚かしつゝ、車引出たる暁の空霞み渡りて、峰の横雲ほのかに白みゆく程なり。吹きすさむ風

につけて、其処とも知らぬ梅が香の匂ひたるなど、いと艶なりしも、心なき身にはさしも思ひわかれざりし
さへ、思ひ出らるゝ端にありける。

40 常磐井殿の僧房の妻へ寄せて下りつゝ、打臥したる朝^{あした}、少将寄り来て、召しある由言ふに、夜の衣を傍ら
に脱ぎすべしつるまゝなるを見て、とかく言ふも、答へん方なければ、宿直物^{とらふ}に顔引き入て猶臥したるを、
引き動かしつゝ戯れしさまなど、只今の心地して、いとあはれにぞ思ひ出られける。

41 里に侍し年、春立つ日、人の許より、紅の薄様に匂ひいたくしめつゝ、

⑩ 新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春
同じ色の紙にて、

⑪ 行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず

ことなる障りならでは待ち見る事となりぬるも、ひたみに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し。

章段41では、公宗からの正式な求婚という作者にとつて重大な事件を記している。にもかかわらず、記事は詞書
程度の簡潔な叙述でしか描いていない。それを補うかのように章段39・40で公宗にまつわる思い出を綴っている
ことがわかるのである。

章段39は、視覚・聴覚・嗅覚でその折の情感を叙述している。この場面は作者にとつて特に印象深いものであ
ったのであろう。この年の「如月」の思い出は数ある公宗との思い出の一つの典型としてここに記されたのでは
ないだろうか。ここでは「思ひ出らるゝ端にありける」に作者の意識の重点が置かれているように思われる。同
様に章段40においても作者は「只今の心地して、いとあはれにぞ思ひ出られける」と記している。このように連
続して「思ひ出」ずとしているのは、作者が回想することを強く意識していたからに他ならない。このことから、
公宗の求婚の和歌⑩とそれへの返歌⑪から遡る形で、章段39もそれに続く章段40も回想され記されたという経路
を想定できるのではないだろうか。

⑩⑪の贈答は、「里に侍し年、春立つ日」のものであったと記している。正慶二年の「春立つ日」は正月十三日であったから^(ま)、章段42の「正月十二日」とは明らかに記載順が前後している。このことも章段39から章段41にかけてが、作者には一連のものとしてとらえられていたことを示唆している。このように考えると、この部分の記事の配置は、章段39はむしろ章段41への布石として置かれ、この章段39に込められている作者の思いは、求婚の和歌の贈答という形へと集約されていっているともいえよう^(ま)。こういったことから章段39に和歌は特に必要とされなかったと考えられる。岩佐美代子氏は、「思うにこの『きさらぎ』は元弘二年二月であり、この年の公的記述をまず全部終えて、次に同年におこった私的な事件の思い出をまとめてここに記したものである」と推察しておられる^(ま)が、敢えて年立てを無視する形で章段39をこの位置にもつてこなければならなかった理由は、その後の章段との関係で明らかにすることができないのではないだろうか。

次いで、章段55の場合はどうであったのかについて検討するため、章段39と同様に当該の章段も含めた形で本文を引用する。

55 世中今日やくと思ひつゝ、卯月廿日余りになりぬ。事の序をなん求められたるとて、まだ宵の程に立ち寄り給へる、程なく鳥の声、鐘の音、此方彼方に聞ゆ。「そら音にこそは」などおぼめき給さまなるに、明けなばいと便悪しかるべきをと度くおとなへば、妻戸押し開けられたるに、有明の月いとさやかにて、軒近き萩の葉も、なべて此頃の程にもあらず高やかなるに、ひまなく置き渡して下葉もかくれなき露の光など、秋の空めきたる暁の眺めは、さらでもあはれるべきを、これや限りとなべて世を思ひ乱れたる折からのあはれに、まして行くもとまるもいと心細し。明けはなるゝ気色なれば、髪櫛など召して立出給。端もさながらにて打臥しつゝ猶ながめ出でたるに、俄に空さへかき曇りて、わづかに残りつる月影も見えずなりぬれば、何となく思ひ続けられしをかし。

⑬ いかにせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬぐの空

56 東国の夷ども近づくと聞ゆれば、皆人色を直す程に、梓弓のよそに引き違へぬるあやなさは、あさましともいみじとも言はん方なし。

57 五月五日、世の中今はかくと聞えしかば、何の文目もわかれずかきくれたるに、人の許より白薄様にて、

①7 沼水に生ふる菖蒲の長き根も君が契りのためしにぞ引く

①8 掛けなれし袖のうきねは変らねど何のあやめも分かぬ今日かな
また奥に、

①9 忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと

筥の蓋に紅・紫染め分けたる薄様敷きて、薬玉そへらる。返事、

②0 浅き江に引くや菖蒲のうきねをも長きためしと我や掛くべき

②1 残し置く形見ときけば見るからに音のみなかるゝ水茎のあと

前項配列一覧から、この部分の前後は、章段52が三月、章段55が四月、章段57が五月と日付が明示され、その事柄が起きた順に従って記されていることが確認できる。そこから公宗との逢瀬や和歌の贈答などが緊迫する政情の合間をぬつてのものであったことがわかる。

さて、章段57の五月五日の贈答歌群は『竹むきが記』において最後の公宗との贈答である。その詠歌内容を見ると、①7①8は五月五日の菖蒲にことよせたものであるが、ことさらに別にしたためられていた①9は、時勢が時勢であるだけに、辞世の和歌とも取り得る詠みぶりである。作者の返歌は①7①8に対して②0一首（内容からいえば①7への返歌のようである）、①9に対して②1と甚だしくバランスを欠いているが、それだけ①9の公宗の歌が、作者には厳粛に受け止められたということであろう。公宗との最後の和歌の贈答、しかもそこには遺言歌ともいふべき和歌が含まれている。このような場合、作者としては万感の思いを込めたいところであろうが、ここに感情の迸りはない。この贈答歌群の地の文は、和歌①⑩①⑪の場合（章段41）と同様、詞書程度である。むしろ敢えて己の感情

を排除した叙述が採られたかのである。そこに、この歌群を契機として公宗との思い出を思い切り綴ることができない作者の姿を看取することができよう。それは先学が指摘されるように公宗の斬罪前後について書き記すことができない事情・心情と相通じるものであろう（序章第一節）。しかし、だからといって作者にはこの歌群を葬り去ることなどとてもできなかったのではなからうか。この歌群の詞書的な叙述にはこのような事情があるのではないかと推測できる。

作者が公宗への思いを最後の贈答歌に託して綴ることができないとすれば、この作品には珍しく叙情性の濃い章段55をことさらに記したのは、そのことへの代償であったともとらえることができるのではないだろうか。

「『そら音にこそは』などおぼめき給さまなる」といった公宗の作者への直接的な語りかけを記すのは、この場面と公宗初登場の章段9、日蝕の日の「大納言殿、『こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ』などありしもをかし」だけである。章段9では、権門の貴公子公宗から思いがけず気のきいた言葉をかけられた喜びを控えめに記している。章段55の「そら音にこそは」は、別れの時刻になってもまだ別れ難く思っている名残惜しさを表した公宗の洒脱な言い回しとして、章段9の「雪に怖づるにこそありけれ」と同様に作者に印象深く記憶されていたものであろう。このように章段の内容そのものが作者にとって記し残したいものであったことは十分に想像できるのであるが、それとともに、章段55は、この時期の二人の交流を、最後の贈答歌群の前のこの位置にぜひとも書き記しておきたいという思いもあって選ばれ配された記事なのではないだろうか。

この章段では「これや限りとなべて世を思ひ乱れたる折からのあはれに、まして行くもとまるもいと心細し」と双方が不安を抱いての別れであったことを記した上で、残された作者は去っていった人への思慕の情を独詠している。しかも叙景とはいえず、「月さへ曇る」は、明確ではないものの先行きの不安というものを作者が感じ取っていたことをうかがわせる。最後の贈答歌群が密かに漂わせる悲壮感と和歌⑩のもつ不安感は作者の意識の流れの中では軌を一にしていたのではないだろうか。章段55の場合においても、そこに記され、和歌⑩に素直に歌

い込められている作者の思慕の情は、後の章段57の和歌⑩以下の歌群に集約されていていつているのではないかと考えられる。

五 公宗とのかかわりで詠まれた和歌の意味

『竹むきが記』において、公宗との交流を叙情的に記すのは、章段39と章段55だけである。公宗を政治的混乱の中で喪ったことを己の日記の中で表だって悲しむことができない作者が、なぜこの二箇所を選び公宗との交流や彼への思いを書き記したのか、その意識を探ってみた。そして、そのどちらもが公宗と作者との関係において重要な意味を持つ求婚の和歌の贈答(⑩⑪)と遺言歌を含む歌群(⑬から⑲)とを、集約する先として据えての叙述であったことが確認できたのではないかと思う。

公宗とのかかわりで記されている和歌は、右の他に⑫から⑮と⑲である。これらについて簡単にみておく。

47 されど程なく事直るさまにて、紛れ出でつゝ二三日にもなりぬるに、猶とゞむる人ありて、さるは又、避りがたき障り出で来ぬとて、見えずなりにし朝に、

⑫ いかにせむ偽ならぬいつはりを猶いつはりと思ひなされば
いかなる折にか、人の許より言ひ侍し、

⑬ 偽の誰がならはしぞ独寝はさしも夜なくされじと思ふに

48 少し世ものどかになりぬる比、里に侍て参りし日、今二三日猶あるべくいさむる人ありしかど、召さるゝ事さへあれば、かくとも言はず参り侍しに、人案内しけるに、かくと聞えければ、その朝、

⑭ さても猶契し末のかはらずは明日の夕や頼みなるべき
返し、

⑮ 定めなき昨日の暮のならひには明日の契もいかゞ頼まん

右はいずれも公宗と逢えなかった折の和歌である。逢瀬もままならない二人を点描している。しかし、その次の章段49から章段51では、後伏見院や花園院に公宗とのことをからかわれた思い出を記している（三項、記事配列一覽参照）ので、このような状況にもかかわらず、二人の関係が順調であつたことがわかるような構成をとっている。

62 近江国伊吹とかやにて、五宮といふ人、御所くぐとゞめ奉らせ給由聞えしかば、いみじともさらに言はん方なし。かゝる程に、伊吹に御唐櫃ども渡さるとて、これより御使をそへらるべき由、当時の將軍よりあれば、侍を奉らる。氏光、御馬の口につき奉り侍けるに、流れ矢とかやに当りて、道に留^{とま}れる由聞かせ給て、わざと尋ね給。御返事にそへて聞え侍。

⑫ かくてだに捨てぬならひの身の憂さは思ひしよりもあられるかな
和歌⑫は、上巻最後の和歌である。この章段では作者の兄弟氏光の負傷に対するわざわざの見舞いという公宗の配慮を記している。しかし和歌⑫の詠歌内容は、それへの返礼としてはいささか趣が異なり、述懐性が濃いように思われる。「思ひしよりもあられるかな」には、この折の状況以上の作者の思いが込められているようである。

以上のように、この作品の上巻後半部において和歌を選別する作者の意識は、ひとえに公宗との関係に集中させていこうというものであつた。作者は和歌を据えることで、二人の交流を公的記録的な記述の合間に滑り込ませる形にして、公宗との思い出を綴つていつているのである。夫を政治的な理由で喪つた後も遺児実俊を育てながら一人で生き抜いてゆくことを自ら選び取つた作者にとって、政情の不安定な中にも二人が愛を育み生きた軌跡を辿ることこそが、声を大にして悲しめない者として精一杯の公宗への鎮魂であつたといえるのではないだろうか。同時にそれは作者自身への慰めでもあつたのである。

注

1 拙稿「『竹むきが記』の構成と和歌の役割―元弘元年の暮の記事を中心に―」（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』創刊号、平10・3）。（本論第一章第二節参照）

2 前掲注1。

3 『日本暦日原典』（雄山閣出版 昭51）により算出した。

4 公宗が将来を約束した和歌⑩に比して作者の返歌⑪の詠歌内容は重苦しく暗い。それは「ことなる障りならでは待ち見る事となりぬるも、ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し」という境遇の変化への怖れと不安とを反映しているものであろう。そのことと公宗から正式な結婚の申し込みを受けたという喜びとは、女性の心理として併存し得るのではないだろうか。

5 「『竹むきが記』私注（上巻）」（『国語国文』第四一巻第二号、昭47・2）

第三節 下巻の和歌のあり方と地の文の叙述

一 下巻収載の和歌

前節では、上巻における和歌と地の文の叙述との関係を検討した。本節では、前節と同様に和歌と地の文との関係について下巻の場合を検討したい。

下巻には、三七首の和歌が収載されている。まず、その下巻収載の和歌すべてを掲げる。和歌には、私に上巻からの通し番号(23)〜(37)を付し、推定される詠者を()を以て示す。

- | | | |
|----|-------------------------------|---------------|
| ②3 | 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん | (名子) |
| ②4 | 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方に別るゝ沖の釣舟 | (同右) |
| ②5 | 雪降りて寒き朝に文読めと責めらるゝこそ悲しうはあれ | (実俊) |
| ②6 | 踏み初むる和歌のこしぢの鳥の跡になをも絶えせぬ末ぞ見えける | (永福門院) |
| ②7 | 栄ふべき宿の主の幾年か絶えぬ御幸のあとを見るべき | (同右) |
| ②8 | 消ぬが上に降り積む雪の情にも宿の主を待つと知らずや | (同右) |
| ②9 | 栄ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる | (資明) |
| ③0 | 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし | (名子) |
| ③1 | 宿もそれ花も見し世の木の下になれし春のみなどかとまらぬ | (同右) |
| ③2 | 鳥の子を十づゝ十の数よりも思ふ思ひはまさりこそせめ | (永福門院) |
| ③3 | 思ひ置くそれをば置きて言の葉の露の情などなかるらん | (ある人の夢中、公宗詠か) |

- ③4 あはれこの眠らぬ床に見る夢を覚ます現の暁もがな
(名子)
- ③5 頼めてもとはれぬ花の春暮れてたれ松山とかゝる藤波
(同右)
- ③6 とへや君山時鳥をとづれて小田の早苗も取りそむる比
(同右)
- ③7 頼め来し花の盛りは過ぬれど今も心にかゝる藤波
(花の盛りを頼めつゝ訪はずなりぬる人)
- ③8 時鳥さこそ五月の己が比鳴くや山路を思ひやりつゝ
(同右)
- ③9 世を照らす同じ八千世も三笠山おなじ光と月ぞさやけき
(名子)
- ④0 頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手
(同右)
- ④1 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと
(同右)
- ④2 待見ばやふりにし世ゝに立帰り昔のあとも絶えぬみゆきを
(我が身に代りて老人)
- ④3 呉竹の世ゝにふりにし宿なれば待つやみゆきのあとも絶せじ
(光厳院か)
- ④4 神や知る引く注連縄の打延へて一筋にのみたのむ心を
(名子)
- ④5 御幸そふ宿の紅葉の八千入に君ぞ幾代の色をかさねん
(同右)
- ④6 幾代見ん君が心の色そへてみゆきふりぬる宿の紅葉ゝ
(鎌倉右兵衛督室)
- ④7 一入の色や染むると見るほどに時雨と連れて降る紅葉かな
(資明)
- ④8 一入を惜しむにあらじ紅葉ゝをさそひて見する時雨成けん
(名子)
- ④9 驚の山深く入りぬと聞きしかど鷹の鳥とて見るもめづらし
(資明)
- ⑤0 山陰や杉の庵の明方に心ぼそくも出づる月影
(名子)
- ⑤1 あはれなり柴の庵の柴の垣うき世中の隔てと思へば
(同右)
- ⑤2 迷ふらん闇路を照せ法の水結ぶはちすの露の光に
(同右)
- ⑤3 慕ひ見し山路の花の木のもとにとめし心の程は知らずや
(鷹司の老人)

⑤4 馴れしよりかゝる別れのあらんとは思ひながらも猶ぞおどろく (鷹司の老人)

⑤5 名残思ふ涙の雨のかきくれて花もしほれし帰るさぞ憂き (同右)

⑤6 思ひやれ雨も涙もかきくれて名残しほれし花の木本 (名子)

⑤7 いとせめてあかぬ名残の悲しさに馴れしさへ憂き恨みとぞなる (同右)

⑤8 藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに (同右)

⑤9 なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば (同右)

上巻とは違つた詠者の多様さに気づかされる。上巻では、公宗と自分との関係へ集中させるような方向で和歌が選ばれ記されていることを推定したが、下巻ではそのような一つの方向性を見いだせる可能性は低いといえよう。それでは、下巻における和歌のあり方とはどのようなものであろうか。次項でその把握を試みたい。

二 下巻における和歌の諸相

本項では、下巻における和歌の諸相について、作者自詠の和歌を中心にみてゆく。その際に、地の文の叙述との関係も併せて検討する。

上巻の前半には、公事の記録の最後に作者自身の感慨を詠んだ和歌を据えてその記事をしめくくるといった一つの型が見られ、後半ではすべて公宗との関わりで和歌が詠まれていた。下巻には、上巻前半の型に適応する例は皆無である。第一章第四節において確認したように、下巻にも相当数の公事関係の記事がある。しかし、これらの記事に和歌は記されていない。わずかに暦応四年十二月の実俊元服の翌日の資明との贈答②・③が上巻前半の型に近い例といえようか。次に本文を引用する。

その夜、雪いみじう降り積りぬるに、朝あしたいと疾とく、別当、昨夜よべの儀よろづいと由よししう、昔に恥ぢざる由

など、様ぐに賀侍で、

②⑦ 栄ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる

返事に添へ侍ける、

③⑩ 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし

しかし、この場合でも、その日の夜に降雪をみたことによそえた資明からの贈歌に対して、作者があくまでも公的儀礼的に返歌しているにすぎない。上巻のようにその行事にあたつての作者の感慨が和歌として最後に記されるという型ではないのである。しかもこの贈答は、作者の実家日野家の人間からのものであり、本来であればもう少し親密な関係に基づいた素直な感情表現があつてもよさそうな場面であるにもかかわらず、作者は敢えて当主の母親としての立場を堅苦しく守っているという感触がある。この贈答をここに記したのは、「昔に恥ぢざる由」を言いたかつたからではないかとさえ思わせる。このように下巻では、実俊に関する行事や公事の場合、作者は上巻のような詠歌態度をとつてはいないということがわかる。

ただし、公事ではない場合、つまり作者の個人的な行動の記事の場合に、上巻における詠歌態度に近い例を見いだせる。例えば、貞和五年、作者が日野家の塔頭に詣でた記事である。

七月十三日に、日野の塔頭に詣でつゝ、はちす経陀羅尼など、此彼と回向する数くもあはれになん。親の親とか言ふべきを、はじめて手向くる水の玉ゆらに結べる蓮葉の露を見つゝも、闇路の光なるとぞ、分きて思ひ送られける。

⑤② 迷ふらん闇路を照せ法の水結ぶはちすの露の光に

この他に記事の最後に和歌を置いてその記事を締めくくるという型を取る例は、和歌⑤④・⑤⑤の場合（後出）がある。

次に和歌③④の場合を見てみたい。和歌③④は、作者が永福門院の崩御（五月）ほどない八月に今出川実尹の死を

記した後、仏道への傾倒を語り始め、さらに靈鷲寺の長老に教えを請うた経緯を記した記事に次ぐ章段に記されている。この和歌の前後を引用する。

されども自ら不審もあれば、尋ぬる事もありて過ぐる程に、まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知らるゝ。

騒ぎ紛るゝ営にてのみ日を暮らせば、座を定むる事は難ければ、立ち居、起き伏す所に心をつけつゝ明か
し暮らす。冬の夜、一人起き居たるに、窓をたゞく嵐も常に烈しく吹冴えつゝ、いとすさまじき夜の氣配な
るに、熾し火さへほのかになりぬ。明けぬと驚かす鐘の音にも、覚むる現はいつならんと悲し。

㊦ あはれこの眠らぬ床に見る夢を覚ます現の暁もがな

内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さ
すが世に経る慣ひにて、さがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は
自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

ここで作者は、「生死の根を切」るには靈鷲寺の長老の導きによる臨済禅の修行（第三章第一節に後述）しかな
いと思ひ定めるものの、日常生活に追われ修行もままならない我が身の状況を嘆いている。冬の一夜、おそらく
修行のために一人過して、明け方を迎えた感慨を和歌に詠んだものであろう。この和歌の表現は、直前の「覚
むる現はいつならんと悲し」を承けているが、それと同時に直後の章段の「なを晴れがたき心の闇」とも響き合
っている。この和歌の前に記される「騒ぎ紛るゝ営にてのみ日を暮らせば」と、後に記される「内には道行を励
み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして」とが照応していることから、和歌前後の結びつきが強い
ということがいえるのではなからうか。

このように和歌が直前の章段を承けるばかりではなく、その直後の章段へもかかっているというあり方は、こ
の他に、康永四年正月、資明と春日詣に出かけた折の和歌㊦・㊧の場合にも見られる。

正月中旬に、日野の中納言、春日に詣づる事あるに、誘ひ侍れば、頼もしき道連はいと嬉しく侍て、俄に思ひ立ちぬ。(中略)

暮るゝ程にまうで着ぎぬれば、宮廻の程、月いとさやかなり。三笠山の御光さし添ふ所からにや、霞む慣ひも見えず。昔、世を照らさせ給ける、八千反とかや聞き奉る御光、今しも変らせ給はじかしと思ひ続けらるゝも、傍痛き事ならむかし。

③⑨ 世を照らす同じ八千世も三笠山おなじ光と月ぞさやけき

かしこまるしと御幣など捧ぐるに、いさゝか思ふ事侍て、

④④ 頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手

和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法樂は、随喜の笑を含みましくて、二世の願成就せしめ給とかや。

和歌③⑨の前段での「今しも変らせ給はじかしと思ひ続け」られた作者の感興を和歌③⑨が引き受け、「御幣」を捧げた折に浮かんだ和歌④④の内容は、続く「和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし」によつて補足説明される。

『竹むきが記』の場合、地の文が和歌の解説的な役割を果たしている箇所がある(註し)。そこでは、地の文が和歌の表現の不足を補うような働きをしている。ここもその例である。和歌が章段と章段とを結びつける役割を担うと同時にその章段の叙述は和歌の補足的な説明を担うという、地の文と和歌とが補完的な関係を保っていると考えられる。

また第一節でも指摘したが、和歌②③・②④の場合は、地の文は和歌的叙述で叙景を主としているにもかかわらず、この二首の和歌は旅情を詠んだものである。

如月の中旬に、さるべき人く伴ひて天王寺に詣づる事あり。(中略)まだ知らぬ旅の空、いと珍し。暮れ

果つる程に、あやしき宿^{どより}に着きぬ。仮寝の草の枕もなを結ぶ程なく、夜深く立ちて芦屋の里といふわたりに留まる。暮れ行くまゝに、浦風さまざま吹冴えたるに、さすがに春のしるべとや、霞める月影は海面遙かに見渡されつゝ、繫がぬ舟の浮きたる例もげにあはれに見ゆ。いたく旧りぬる蘆葦の小屋は、八重にもあらぬにや、漏り来る月影、隙多くぞ見えける。明けぬればこの泊りも起き別るとて、書き置きしものとをかし。

㉓ 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん

泊り取りつる旅人ども、わづかに釣舟にて己がさまぐに漕ぎ行も、何処をさしてとあはれに見ゆ。

㉔ 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方に別るゝ沖の釣舟

天王寺にのどかなる程、住吉に詣でたるに、岸に生ふなる草の名もいかなるにか、寄せ返す浦曲の浪もうらやましく、来し方に帰る身ならましかばと、思ひ続ける事多かるは、神の御心もいとわづかしうなん。

地の文では傍線を施した箇所^{（本第一章第一節三項）}に和歌や物語を踏まえた叙述を用いている。作者は、旅先だからこそ平素は見ることもない景色に接することができ、その感興のままに熱心に叙景しているのである。しかし、そこに記されている和歌にはそういった感興は詠まれない。ここに詠まれているのは、むしろ旅先の仮の宿の一夜の縁といった人事への関心である。

右の他にこれと同様、地の文で和歌的叙述を用いて叙景をしている記事において、和歌がどのように機能しているのかを見る。まず貞和五年二月、神明寺での別行の折の草庵での記事を見る。

暁、北の庵に立ち寄れる事侍に、其処となく霞みたるに、軒端の梅の匂のみ、隠れぬ物とや、うち薫れるなど、いと艶なる暁の空なり。雲間に残る有明もいと心細く見ゆ。

㉕ 山陰や杉の庵の明方に心ばそくも出づる月影

庭の通ひとなれる柴垣の、いと物はかなきさまも、憂世の隔てにやと見なさるゝに、あはれに目とまる心地して、

⑤1 あはれなり柴の庵の柴の垣うき世中の隔てと思へば

暁の北の庵の様子を和歌的叙述を用いて、しかも視覚・嗅覚で感覚的に表している（本章第一節三項）。和歌⑤は「雲間に残る有明もいと心細く見ゆ」という作者の心情を詠んだものであり、地の文で描写されている「いと艶なる暁」の様は和歌には取り込まれていない。和歌⑤も、柴の垣を「憂世の隔て」と見ればこそ「あはれ」を感じさせるのだという作者の感慨を詠んだものである。先述の如く、ここでは和歌⑤・⑥を最後に据えることで記事を締めくくるという型を採っている。しかし、この記事の場合においても、作者は地の文の叙景をかならずしも和歌という形に結晶させようとはしていないのである。

次に、暦応五年の二月中旬、石山詣の記事を挙げる。

如月の中の十日余りに、忍びて石山に詣づる事、行帰りなれぬ逢坂の関は又も越えなんと頼む物から、明日知らぬ世はこれや限りと、あはれならずしもなし。関寺の程に興昇き下しつゝ、檜破子などすゝむ。浜の方に打出でぬる眺めの末は、度毎に珍しからんやうにぞ覚えける。暮れ果つる程にまうで着きぬ。（中略）

次の日は桜谷とて、弁財天おはします所へ詣づ。（中略）川の面いと広く見渡されて、岩打つ浪の己のみ砕けつゝ寄せ返気色、ひまなくたぎれるさま、すべてをどろくしき。河の向へに、いと高き山あり。その峰にうるはしき御社はおはしますとぞ申侍。

下向には日吉にと心ざして、志賀の浦へ出でたるに、其処となく霞み籠めて、さし昇る日影は波を分くると見ゆ。唐崎の松も昔旧りぬるにや、いと小さきぞ見えける。男子どもは舟にてさし渡るもありけり。右にめぐり左に返みるにたゞはるゞとして、岸打つ波の寄せ返つゝ、其処とも見えず果も知られぬ眺、おかしければ、過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ侍ける。

旅程途次の文らしく旅の途中の景色を和歌的文学的に描写しており、作者が旅の感興に浸っていることがわかる（注）。ところが、この記事に和歌は記されていない。同様な例が、貞和三年正月の初瀬詣の記事にも見られる。

この旅では都を発つてから一旦奈良に泊まり翌日初瀬へ詣でて、しばらく逗留して翌月の一日に再び奈良に泊り、二日に帰京している。この参詣の旅のうち和歌は往路での春日大社大宮の前での「昔をかけて思ひ続ける事あるにも、さすが捨て果てさせ給まじきにやと、頼みをぞかけ聞え」て詠んだ「神や知る」の和歌④だけなのである。そこから初瀬への道中と帰京の様子は次のような描写で綴られている。

檜破子など設け侍所にて見れば、田の面逢^{おもむき}かなる東に山ありて、二本の杉立てるに、輪を三掛けたる、これぞ名に旧りぬる三輪山と聞くもいと珍し。

詣で着きぬるに、御堂の気色、所のさまなど、なべてならずぞ侍ける。宿にうち休みぬるに、眺めの末のいと見所ありておかし。往来定めぬ夕の雲、たゞ此処もとに見なされつゝ、檜原に響く入逢^{ゆき}も、あはれ深くぞ聞きなされける。(中略)

騒がしかりつる人音も聞えず、仏前更け静まりて、御灯^{あかし}の光もかすかにて、伴へる人々も寄り臥しぬれば、一心もおさまれるに、雨さへいとしめやかにぞ降り出ぬる。暁方には少し小止^{せや}みつゝ、檜原を払ふ峰の嵐、いとすごう聞ゆ。明けぬるになを雨うちそゞけば、慌しながら見廻りつゝ、北野の天神の跡垂れましますなる与喜^{よき}の御社に詣づるに、音に聞きわたりし初瀬川、げにいとおどろくしく岩切り落ちつゝ、麓を廻れる山には花より外の木ずゑもなし、八入の岡には紅葉ならでは混る木も見えず。春秋の色、己が山くゝに分きける心も珍し。

如月の朔日、又奈良に泊り侍て、二日ぞ宮こに赴く。一重なる桜ども、此処彼処の垣根に咲き乱れつゝ、げに敷し分かぬ春の光にや、それとなき木の芽も恵みにもれぬ色は、数ならぬ身の頼みかとさへ見渡さる。傍線を施した箇所には和歌的表現が見いだせる。しかし、ここに和歌はないのである。

数少ない例で判断するのはためらわれるが、『竹むきが記』下巻において和歌的叙述を駆使して叙景している記事には和歌が記されない、たとえ和歌が記されていても、それは地の文の叙景を反映してはいないといえる。

逆に、『竹むぎが記』所載の和歌の中でいわゆる叙景歌として最も成功していると思われる和歌④の場合はどうであろうか。

宇治の泊りは保光知れる所とかや、いといたく経営^{けいめい}し騒ぎたり。明けぬれば舟にてさし渡り、川風吹き冴えていとすさまじ。さすが時知る色とや、霞みこめたるなど、おかしう見ゆ。

④ 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと

右のように地の文は非常に簡潔である。このことから、和歌を記していない場合には、地の文において十分に和歌的発想で叙述を施しているのだということがわかるのである。

本章第一節で、作者自詠の和歌の使用語句について、天象・自然についての語句が多く、心情を直接的にあらわすような語句は少ないと指摘した。しかし、用語にそういった傾向があるにもかかわらず、詠まれている内容には、天象・自然に関するものは少ない。『竹むぎが記』に収載される作者自詠の和歌は上巻一五首下巻二〇首の計三五首であるが、このうち心情的なものを面に出さず叙景を主としていると思われる和歌を探してみると、上巻では、

⑦ 秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月

下巻では、

④ 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと

程度なのである。

以上のように、『竹むぎが記』下巻では、自詠の和歌は一つの記事を締めくくる位置におかれることが少なく、またその場合であっても、その章段での作者の感興全体をすべてまとめて引き受けるといった形にはなっていないことがわかる。むしろ和歌は地の文の中で章段と章段とをより強く結びつける役目を担っていたり、地の文によって補足的に説明されたりといったように地の文と有機的に結びついており、融合的なあり方を示していると

いえよう。さらに和歌を記さない場合には、地の文に和歌的素養を十分に垣間見せる叙述をしていることも確認できたと考える。

最後に、下巻における他者詠の和歌についてその様相を簡単にまとめておきたい。

下巻における他者詠は、作者との贈答とその他の和歌に分けられる。さらに贈答歌はその詠歌内容から、西園寺家当主の母としての立場が比較的鮮明な、いわば公的なものと、作者の私的な行動に基づくものとに二分される。前者には、実俊元服の翌日の資明とのもの（和歌②⑨・③⑩）、九月尽の雪によそえた直義室とのもの（和歌④⑤・④⑥）がある。さらに貞和元年十二月靈鷲寺談義の雪によそえての女院の御方・院との贈答（④④・④⑤）は、詠者は作者ではないが、「我が身に代りて老人」といつており詠歌内容も北山第への御幸に関することであろうと思われるので、ここに含めてもよいであろう。

後者の私的な贈答歌には、康永三年五月一日の「花の盛りを頼めつゝ訪はずなりぬる人」へのもの（和歌③⑨・③⑩）、貞和三年九月頃の資明との時雨に散る紅葉を素材としたもの（和歌④⑦・④⑧）、貞和五年春の頃、北山第での花見を雨のため途中で切りあげた際の「鷹司の老人」とのもの（和歌⑤③・⑤④）がある。

下巻の和歌のうち作者との贈答歌でない他者詠は、英才教育に音をあげる幼い実俊の和歌⑤⑤、永福門院の実俊愛育の様を象徴する和歌⑤⑥・⑤⑦・⑤⑧と実俊が西園寺家の正統であることを尊氏へ訴えかけるような和歌⑤⑨、ある人の夢中で詠まれた公宗と思われる昔人の和歌⑥③、作者が雉を志葉へ贈った返しの資明の代詠⑥④である。

これらの和歌のあり方と地の文の叙述との関係、他者詠の和歌の意味などについては、次節で検討を加える。

注

1 例えば次のような箇所が該当する。

元弘元年十月劍璽篋寮みかえ

篋の様は黒塗にて、しぶくとぞ見えし。一方には錠を鎖したり。平家の乱の時、宝剣は海にとまりて、神璽のみ浮きて都に二度かへり入らせ給へるなれば、神代より今に伝はれる程を思ふぞ、手になるゝ契さへぞおろかなぬ心地し侍し。

① 手になるゝ契さへこそかしけれ神代古りぬる君が守りは

篋の古びた様子から、作者の思いが源平の争乱にまで及び、そこから「神代より今に伝はれる程」に思いをいたした、その思いがあつてこそ「神代古りぬる」であつたことが地の文によつて説明されている。

元弘二年三月光厳天皇即位式

公卿拝あり。(中略) ことくしき大香炉も、この庭には何ならず見ゆ。この香炉の煙の末、雲の色に見えて、唐国にも日本の御代のはじめを知ると聞きしにや。他にことならざる御式は、さらにぞ覚え侍し。

⑤ 今日やさは唐国人も君が代を天つ空ゆく雲に知るらん

この和歌を理解するためには、「この香炉の煙」以下「聞きしにや」までが解説として必要であつたのである。このような例は他に、和歌⑦・和歌③①・和歌③④・和歌④④などがある。

2 本章第一節三項参照。この他に、参考歌としては次のようなものが挙げられる。

世にふれば又もこえけりすずか山昔の今になるにやあるらん

(斎宮女御、拾遺・四九五)

恋しさはながめの末にかたちして涙にうかぶとほ山のまつ

(実兼、玉葉・一五七七)

鳥のゆく夕のそらのはるばるとながめのするゑに山ぞ色こき

(後伏見院、風雅・一六五九)

かぜをいたみいはうつなみのおのれのみくだけでものおもふころかな

(源重之、詞花・二一一)

志賀のうらやさは昔にふりぬれど色ぞかはらぬから崎の松

(為世女、嘉元百首・二六八〇)

3 本章第一節三項参照。この他に、参考歌としては次のようなものが挙げられる。

たのもより山もとさしてゆくさぎのちかしとみればはるかにぞとぶ

(伏見院、玉葉・二二六三)

はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎ年をへて又もあひ見むふたもとあるすぎ

(よみ人しらず、古今・一〇〇九)

三輪の山先さとかすむはつせ川いかにあひみん二もとの杉

(定家、拾遺愚草・一五〇三)

いりあひはひばらのおくにひびきそめて霧にこまれる山ぞくれ行く

(尊氏、風雅・六六四)

こもりえのはつせのひばら吹きわけて嵐にもるる入あひのかね

(為定、風雅・一六五七)

日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり

(布留今道、古今・八七〇)

花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらむかずならぬ身は

(よみ人しらず、古今・七五四)

第四節 記録的叙述の特質と再評価の試み

一 作者にとつての和歌の位置と叙述

前節まで、『竹むきが記』の表現様式について、和歌的叙述を中心に見てきた。その結果、作者にとつて和歌が必ずしも最も切実な表現手段ではなく、むしろ他の表現様式においてより自在に己を表現できたのではないかという感触を得た。本項では、その点について、今少し詳しく検討を加えたい。

その際の指標となるのが、今までに度々触れてきた和歌的叙述が見られるにもかかわらずその章段に和歌が記されない場合や、和歌にその叙述の感興が反映されない場合である。

まず、暦応二年二月と考えられる天王寺詣を見てみたい。『竹むきが記』において物詣の旅について初めての詳しい記述である。

如月の中旬に、さるべき人々伴ひて天王寺に詣づる事あり。水の御牧より舟をば設く。わざと伝ふべき事ありて、難波なんばの浦に出でたるに、「川舟にて海の渡り、危なくや」と言ひあへるに、その境見えて、げにいと波高く、気色異なり。まだ知らぬ旅の空、いと珍し。暮れ果つる程に、あやしき宿やどに着きぬ。仮寝の草の枕もなを結ぶ程なく、夜深く立ちて芦屋の里といふわたりに留まる。暮れ行くまゝに、浦風すさまじく吹冴えたるに、さすがに春のしるべとや、霞める月影は海面遙かに見渡されつゝ、繫がぬ舟の浮きたる例もげにあはれに見ゆ。いたく旧りぬる蘆葦の小屋は、八重にもあらぬにや、漏り来る月影、隙ひま多くぞ見えける。明けぬればこの泊りも起き別るとて、書き置きしもいとをかし。

②③ 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん

泊り取りつる旅人ども、わづかに釣舟にて己がさまぐに漕ぎ行も、何処をさしてとあはれに見ゆ。

④ 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方に別るゝ沖の釣舟

天王寺にのどかなる程、住吉に詣でたるに、岸に生ふなる草の名もいかなるにか、寄せ返す浦曲の浪もうらやましく、来し方に帰る身ならましかばと、思ひ続ける事多かるは、神の御心もいとばかしうなん。

旅程は、「水の御牧」（山城国の歌枕）から舟で、難波の浦を経て芦屋に至り、天王寺に着いている。摂津国（つのくに）を枕にして和歌に詠まれることの多かった「難波」や「住吉」などを経巡っている。父資名を亡くして一年足らず、実俊はようやく深瀬を済ませたばかりである。しかし、この旅では、作者は都を離れた解放感に浸っているように見える。「まだ知らぬ旅の空、いと珍し」と、天王寺詣あるいはこのような物詣の旅が初めてであるかのような書き方をしている。ここでの叙述は、「仮寝の草の枕もなを結ぶ程なく」と和歌の表現を借りて慌ただしく出立したことをあらわし、その後は、芦屋の里の情景を遠景と近景と、いずれも月影を用いて描いている。その中に源氏物語の表現や和泉式部の和歌を背景にした表現を用いているのであるが、それが自然にしかも緊密に叙述に生かされている。作者は視線の赴くままに感興を記しているが、その自然な発想自体に和歌的な教養を十分感じさせている。しかも、和歌③の下句には地の文と同じ表現が見られるが、詠まれているのは翌朝の、仮の宿での感慨であり、前日の珍しい旅の空の有様は詠まれていない。ここでの叙景には、和歌としてではない形の、しかし、十分和歌的な発想を踏まえた表現を見て取ることができよう。

次に暦応五年二月中旬の石山詣の記事を見る。

如月の中の十日余りに、忍びて石山に詣づる事、行帰りなれぬる逢坂の関は又も越えなんと頼む物から、明日知らぬ世はこれや限りと、あはれならずしもなし。関寺の程に興弁き下しつゝ、檜破子などすゝむ。浜の方に打出でぬる眺めの末は、度毎に珍しからんやうにぞ覚えける。暮れ果つる程にまうで着きぬ。（中略）

次の日は桜谷とて、弁財天おはします所へ詣づ。（中略）川の面いと広く見渡されて、岩打つ浪の己のみ碎

けつゝ寄せ返気色、ひまなくなたぎれるさま、すべてをどろくしき。河の向へに、いと高き山あり。その峰にうるはしき御社はおはしますとぞ申侍。

下向には日吉にと心ざして、志賀の浦へ出でたるに、其処となく霞み籠めて、さし昇る日影は波を分くるかと思ゆ。唐崎の松も昔旧りぬるにや、いと小さきぞ見えける。男子どもは舟にてさし渡るもありけり。右にめぐり左に返みるにたゞはるくとして、岸打つ波の寄せ返つゝ、其処とも見えず果も知られぬ眺、おかしければ、過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ侍ける。

ここでは、「行帰りなれぬ逢坂の関」、「度毎に珍しからんやうにぞ覚えける」としており、この道は何度か通った事がわかる。そのせいか往路は「眺めの末」として一括し詳しくは記さない。しかし、帰路では、桜谷の弁財天に舟で詣でた様子を、詞花集を踏まえて叙述している。また志賀の浦でも、祖父俊光をはじめ比較的時代の近い勅撰集・家集や歌人の和歌を踏まえて、まるで一幅の絵画のように点描している。「過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ侍ける」としているが、ここに和歌は記されていない。このような折にも、作者は和歌ではなく、地の文で己の感興を表現しているのである。それは和歌的な発想、和歌的な叙述を地の文において發揮することにより、あたかも和歌的世界をそこに取り込んだかのような形の表現としてとらえることができるのではないだろうか。同様な例を、貞和三年初瀬詣の記事にもみることができる。

いかに思ひ初めけるにか、初瀬の観音を頼み奉りて、朝ごとに香花かうけを供養しなど侍しを、なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず、願など立て置く事あれど、遙けき道にすがくしくも思ひ立たれず、年月を送る程に、貞和三年正月に夢想の事あるに驚きて、忍びつゝぞ思ひ立ち侍。睦月の廿八日に宮こをたちて、その夜は奈良に泊る。(中略)大宮の御前に念誦ねんじゆするに、山際ぎはいさゝか白みそめて、人の気配もまだ見え、いと静かなるに、昔をかけて思ひ続ける事あるにも、さすが捨て果てさせ給まじきにやと、頼みをぞかけ聞えける。

④ 神や知る引く注連縄の打延へて一筋にのみたのむ心を

五重唯識の翠の簾、二空真如の露を垂れたる、百法明門の朱の齋垣、(中略)檜破子など設け侍所にて見れば、田の面遙かなる東に山ありて、二本の杉立てるに、輪を三掛けたる、これぞ名に旧りぬる三輪山と聞くもいと珍し。

詣で着きぬるに、御堂の気色、所のさまなど、なべてならずぞ侍ける。宿にうち休みぬるに、眺めの末のいと見所ありておかし。往来定めぬ夕の雲、たゞ此処もとに見なされつゝ、檜原に響く入逢も、あはれ深くぞ聞きなされける。(中略)現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし。

騒がしかりつる人音も聞えず、仏前更け静まりて、御灯の光もかすかにて、伴へる人々も寄り臥しぬれば、一心もおさまれるに、雨さへいとしめやかにぞ降り出ぬる。暁方には少し小止みつゝ、檜原を払ふ峰の嵐、いとすごう聞ゆ。明けぬるになを雨うちそゝけば、慌しながら見廻りつゝ、北野の天神の跡垂れましますなると与喜の御社に詣づるに、音に聞きわたりし初瀬川、げにいとodorくしく岩切り落ちつゝ、麓を廻れる山には花より外の木ずるもなし、八入の岡には紅葉ならでは混る木も見えず。春秋の色、己が山くゝに分ける心も珍し。

如月の朔日、又奈良に泊り待て、二日ぞ宮こに赴く。一重なる桜ども、此処彼処の垣根に咲き乱れつゝ、げに数し分かぬ春の光にや、それとなき木の芽も恵みにもれぬ色は、数ならぬ身の頼みかとさへ見渡さる。

初瀬への参詣の旅は、夢想によるものであった。しかも作者は初瀬観音に長年帰依していたと言っている。しかし、この旅の記事には、春日大社での帰依の気持を詠んだ和歌④しか記されていない。大和国の歌枕でもある初瀬であるからには、和歌の題材にはこと欠かないはずである。作者が地の文で触れている和歌的な語は、「二本の杉」、「眺めの末」、「檜原」、「八入の岡」、「初瀬川」などの他多数である。この記事に和歌がないことは、作者が表現手段として和歌を第一義と位置づけていなかったことを示していると思われる。地の文では十分に和歌

を意識した叙述をしているからである。

右に二、三の例を挙げて、作者の感情表現の手段として和歌が必ずしも最優先されるものではなかったのではないかということを想定してみた。そのことは、下巻において記された八人の身近なあるいは有縁の人々の死去に関する記事に、挽歌が一切記されていないということからも推測できよう。作者が悲嘆にくれなかつたはずはない。例えば、父資名死去（建武五年五月）の場合は、次のように記している。

五月二日ほのぐに人走りて、この夜より苦くしう頼みなき由言ひて迎へあり。ともかくも言の葉もなし。人く立ち騒ぎあきれ惑へるより外の事なし。医師どももあれど、その驗も見えず、遂に未の刻ばかりに空しう見なしぬる心の中ども、言はん方ぞなき。やがてその日、様変へらる。時の間にかゝる夢をも見る業にこそと、憂世の理もさらにぞ驚かれける。

中陰の程は僧衆あまたして六時の勤めなどあり。かくても一筋に悲しあはれのみにもあらず、中陰の末の方より、跡の事ども、とかく雄々しからぬ事ありて、思ひ送るべき追善の営、なを次なるにやと、いと悲しうぞ侍。（下略）

「言の葉もなし」、「心の中ども、言はん方ぞなき」、「憂世の理もさらにぞ驚かれける」、さらに「いと悲しうぞ侍」と重ねて嘆いている。また、作者が敬慕し実俊の後援者としても頼みにしていた永福門院の崩御（康永元年五月）に際しては次のように記している。

永福門院、例ならぬ様に聞えさせ給へど、取り立てたる御事おはしまさざりつるに、春の末よりはまことしくならせ給へばいとあさましく思ひ聞ゆるに、日々に重らせ給て、院・女院御幸ありて見奉らせ給。中将殿の事、女院にも聞えさせ給なるも、いとどあはれに悲しうなん。

五月七日失せさせ給ぬ。朝夕の事わざにつけても頼もしき御事なりつれば、一方ならぬ御名残も言はんかたなし。（中略）かばかりの御事、儀式なきさまに思し置かせ給ひけるも、いと無念なる御事にぞ、世人も申

侍ける。故法皇の御方おはしまさしかばと、前後のさかひも今更に恨めしうなん。

御七日の程は御時などにて、女房たちも変わらぬさまなるも、皆己がさまぐに行き別れ給ふ程ぞ、更に又かきくれ侍ける。(下略)

ここでも、「いとゞあはれに悲しうなん」、「一方ならぬ御名残も言はんかたなし」、「今更に恨めしうなん」、「更に又かきくれ侍ける」と口惜しさもあるのか、一層の悲しみを綴っているのである。特に、この二人の場合は通り一遍でない嘆き様である。しかし、ここにも和歌は記されない。

この作者の悲嘆は、少なくとも『竹むきが記』中においては和歌へと結晶されず、道心へと昇華されていくようである(第三章に後述)。

作者の和歌的文学的素養は、決して未熟なものではない。例えば、康永四年二月の賀茂社詣では、次のように記している。

如月に賀茂の社に詣で侍に、下より上の宮に参る道に、蘆垣を囲ひたるに竹繁りて、梅の梢も所く咲き匂へるに、鶯のはなやかに鳴きたるなど、いとおかしきにも、昔この垣根に御目止めさせ給て、御傍続にをはせらるゝなど思ひ出づるに、なつかしうさへ覚ゆ。御前に参りつゝ、罷り出づるとて柵尾の御社伏拝み聞ゆるに、西行が「四手に涙の」と詠みけん古言もこの御前ならんかしと思ひ出でらる。昔、御生の比、兵衛督君といひし人に参あひて侍しに、片岡の御前より出でがてにやすらひつゝ、「声待つ程は」とかや口ずさまれしなど、面影浮びつゝあはれにぞ思ひ出でられ侍ける。

柵尾の社では、西行の玉葉集入集歌「かしこまるしでに涙のかかるかなまたいつかはと思ふあはれに」(二七八六)を想起している。この和歌の詞書は、「そのかみよりつかうまつりなれけるならひに世をのがれて後も賀茂社にまゐりけるを、としたかくなりて四国のかたへ修行しけるが、またかへりまゐらぬこともやとて仁安三年十月十日夜まゐりて幣まゐらすとて、たなをの社のもとにてしづかに法施たてまつりけるほど、このまの月ほのぼ

の^{ついで}にてつねよりも神さびあはれにおぼえ侍りければ」というもので、作者の念頭にこの和歌が浮かんだのは、この詞書を十分意識してのものである。また、片岡社で兵衛督君が口にした「声待つ程は」は、紫式部の「郭公こゑまつほどはかたをかのりのしづくにたちやぬれまし」（新古今・一九一）であり、これも詞書に、「賀茂にまうでて侍りけるに、人の、郭公なかなかんと申しけるあけぼの、かたをかのこずゑをかく見え侍りければ」とあり、お互いの和歌的教養を前提とした交流であろう。さらに、貞和三年九月の「故竹林院入道大臣」（公衡）の三十三回忌仏事の記事には、次のような叙述がある。

三位中将、釣殿より参給て西の座に付く。山の気色、心許なき秋の色しも、見所あるさま也。階^{はし}の下^{した}の尾花の打靡きつゝ、岩間をくぐる水の流れなど、いとおかしう見ゆ。西面^{にしおもて}の格子どもを上げわたしたるに、池の鏡も曇りなく見えつゝ、傾^{かたむ}く日影には仏の御光いとゞしく磨かれつゝ、袖をひる返し給菩薩^{ぼさつ}の影向^{やうかう}も、まことに眼^{まなこ}の前に輝けりと見ゆ。懺^{ざん}法の末つ方に、三位中将立たる。いまだ神事の公事に従はざるによりて、御布施略せらるべき由、仰侍れば、その故なるべし。（下略）

実俊の仏事での様子を見守る母親の感想が、庭の有様を叙述することによって、さりげなく表現されている。ここには、『栄花物語』の法成寺讚美の叙述と共通する発想も見られ（第三章第二節に後述）、文学的な表現をとっているが、この中でも特に『源氏物語』初音巻の紫の上の和歌「くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきかげぞしるく見えける」を踏まえているらしい「池の鏡も曇りなく見え」という叙述は、『園太暦』によると当日の天候が曇りから雨になっている^まことから、作者が筆の赴くままに、あるいはその行事の合間に念頭に去来した思いのままに書き綴っていた、つまり己の感情移入が優先した結果ではないかと考えられる。このように作者の和歌的文学的教養が相当深いものであったことが随所にあらわれているのである。

そうであればこそ、作者が敢えて取った表現方法は、和歌を中心に据えるものではないが、和歌をその基盤に据えるものであったと考えられるのである。それは、和歌を地の文と補完的な関係を保ちながら有機的に存在さ

せる形、あるいは和歌的叙情を完全に地の文に融合し切った形であるといえる。その表現・発想の背景に和歌的なものを十分に感じさせることで成り立っている文学的な叙述の形であると考えられよう。そのような叙述のあり方が、作者の選んだ表現形式であった。それが作者独自の文学的な表現形式であったのである。

二 記録的叙述の底流にあるもの

前項では、作者にとっての和歌の位置づけと、それが作者の表現形式にどのように生かされているのかについて検討した。次いで、作者がそのような表現形式をとり記録的叙述をしながら表現したかったものは何なのか、作者独自の感情表現の方法に注意しながら、叙述の底流にあるものについて考えてみたい。

『竹むきが記』上巻前半部は、典侍として宮仕えしていた折の公事の記録と身辺雑記とで構成されている。前章でも述べたが、その中で、一見宮廷生活の一コマ一コマを描き出しているように見える記事の中に、作者は公宗への密やかな思慕の情を忍ばせていることを見いだせた。それが和歌②「雪や猶かさねて寒き朝ぼらけ返す雲井の山藍の袖」から和歌④「いとゞ猶雲井の星の声ぞ澄む天の岩戸の明くる光に」までを含む章段である。そこで作者は、雪を公宗への思いの表象として和歌表現と絡ませながら、己の思慕の情を露わに表出させることなく綴っているのである。それと同様に、和歌⑦「秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月」から和歌⑨「更くる夜の雲の通ひ路霜冴えて乙女の袖にこほる月影」までを含む正慶元年の一連の行事の記録的記述においても、宮廷行事の合間にも作者の視線が常に公宗へと向けられていたであろうことが、頻出する公宗の呼称からも想像されるのである。これらの記事を記憶し記述する作者の脳裏には常に公宗がいたと思われる（本章第二節）。

また、上巻前半部から読み取ることができるもう一つの感情は、光厳天皇の即位という一大事に典侍として参加してきた我が身の栄誉とその感激であろう。元弘元年十一月璽の筥の裏みかえに苦勞した様を記した後、作者

は次のように記す。

宮の様は黒塗にて、しぶくとぞ見えし。一方には錠を鎖したり。平家の乱の時、宝剣は海にとまりて、神璽のみ浮きて都に二度かへり入らせ給へるなれば、神代より今に伝はれる程を思ふぞ、手になるゝ契さへぞおろかならぬ心地し侍し。

① 手になるゝ契さへこそかしこけれ神代古りぬる君が守りは

和歌①には、典侍として璽の宮の裏みかえに直接携われた名譽を感慨とともに詠み込んでいる。それは、次の和歌⑤⑥の場合にもあてはまる。元弘二年三月二十二日、光厳天皇の即位式が行われた。作者はその式に表帳の典侍として直接参加している。

行幸なりて事はじまれば、女皇と同じく左右に参上りて進み立つ。得選、先に進みて、左右の御帳の帷を裏げ奉る。主上、玉の御冠、御礼服奉りて、御笏正しくておはします御さま、唐めける御装ひには、いとゞしく世に知らぬ御光加はりてぞ見えさせ給し。

公卿拝あり。親王代、宰相中将公有、右は右兵衛督隆蔭勤む。唐めきたる装ひども、我世の事とも見えず、いと珍し。南門に院の御車立てらる。供奉人、直衣束帯、心くとぞ聞えし。ことくしき大香炉も、この庭には何ならず見ゆ。この香炉の煙の末、雲の色に見えて、唐国にも日本の御代のはじめを知ると聞きしにや。他にことならざる御式は、さらにぞ覚え侍し。

⑤ 今日やさは唐国人も君が代を天つ空ゆく雲に知るらん

⑥ 君が代の千世のはじめと高御座雲の帳をかゝげつるかな

儀式の唐様、特に天皇の召す冕冠冕服を始めとして公卿の装束が、ことさらに特別の感を催したのであるう。「唐めける装ひ」、「唐めきたる装ひども」と重ねて記している。いつもは特に唐めいて見える香炉も、今日はそれほどにも感じられない程、唐風に行事が進められている、それは、遙か唐にも聞こえるまでに立派な儀式であった。

たのだという感慨を和歌にしている。和歌⑥の「かゝげつるかな」は、体験した者でなくしてはなしえない表現であろう。しかもこの体験は天皇一代について二人のみしか機会を得られないものである。数多い女房の中で他ならぬこの自分が選ばれたのだという感動を表現している。このような作者にとって特別な思い入れのある光厳天皇の即位であつたから、その後の諸々の行事は、実際は混乱の内に行われたとしても、整然とした形で行われたように記録される必要があつたのである（前章第四節）。

上巻後半部は、ひとえに公宗との関係に集中させるように記事も和歌も選ばれ記されている。その中でも、和歌を記録的記事の合間に織り込むことで、二人の関係が混乱する政情の中にも深まっていたことを綴っている（本章第二節）。それは、上巻最後の作者の北山第入りに収束されていく。

公宗の斬罪について一切語らない作者の思いは、それだからこそいつそう一子実俊が西園寺家の正統として認められること、西園寺家が昔の権威を復活させることに向かつてゆくことになる。

その書き出しが実俊の真魚始であつたことに象徴されるように、『竹むぎが記』下巻は、実俊の成長と彼の順調な昇進とを一つの軸として書き進められていく。

下巻に記されている和歌からその道筋をたどってみる。暦応三年、実俊が永福門院の強い意向で北山第移住を果たした記事には、実俊の和歌が一首残されている。

雪の朝に、日毎の所作なる文を、人く読ませ聞ゆるに、詠み給へる、

②⑤ 雪降りて寒き朝に文読めと責めらるゝこそ悲しうはあれ

女院の御方に聞かせ給て、

②⑥ 踏み初むる和歌のこしぢの鳥の跡になをも絶えせぬ末ぞ見えける

又雪の朝、女院の御方より、

②⑦ 栄ふべき宿の主の幾年か絶えぬ御幸のあとを見るべき

②⑧ 消ぬが上に降り積む雪の情にも宿の主を待つと知らずや

英才教育に音を上げる実俊の幼い和歌と、それを聞かれた女院の実俊への暖かいまなざしが感じられる和歌を続けて記している。作者はここに全く己の感情を記していない。しかし、この歌群に、実俊が北山への移住を果たし女院がその膝元で愛育される様を記すことにより、実俊がようやく西園寺家当主として本格的な扱いを受ける立場になったことを象徴させているのである。

暦応四年十二月、実俊元服の翌日には次のような資明との贈答を記している。

その夜、雪いみじう降り積りぬるに、朝いと疾く、別当、昨夜の儀よろづいと由しう、昔に恥ぢざる由など、様ぐに賀侍て、

②⑨ 栄ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる

返事に添へ侍ける、

③⑩ 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし

先述したように、積雪によそえた実俊の当主としての将来を予祝した資明の詠みかけに対し、ここでの作者はあくまでも実俊の未来への展望を頼もしく見守る西園寺家当主の母としての態度を保っている。実俊の元服という慶事を祝う母親としての気持、しかしそれは決して生な形では表出されないがゆえに、この贈答がこのような形でこの位置に記されたのではないだろうか。実俊が順調に成長している喜びと、昔に劣らないような形で当主の祝事を行えたという喜びとを、この贈答に託していると考えられる。

さらに西園寺家の復興を目指し、嫡嗣としての実俊の地位を固めるための作者周辺の動きは、次のような記事にさりげなく記されている。

まず、貞和元年十二月靈鷲寺談義の雪によそえての女院の御方・院との贈答がある。

貞和の初の年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、折しも雪いみじう降りて二尺余よばかり

り積れる、分けがたきさまなれど、ことさらに心ざす事しありて、例の老人誘ひ聞えつゝ思ひ立ちぬ。(中略)
女院の御方の御文にて、この雪をとほせ給へり。談義果てぬれば急ぎ帰りつゝ、御帰聞ゆ。松の枝に垂氷
の閉ぢて、いと珍かなるが見ゆれば、紅葉の古葉など入て、おかしきさまにしなして、雉の鳥付けたる一枝
御使に持たせて、御酒など奉る。我が身に代りて老人、

④② 待見ばやふりにし世々、に立帰り昔のあとも絶えぬみゆきを

御目一つにはあかず思さるれば、さながらあの御所へ奉られける御返事とて、竹に付けさせ給ふ。

④③ 呉竹の世々にふりにし宿なれば待つやみゆきのあとも絶せじ

詠者は作者ではないが、「我が身に代りて老人」といつており詠歌内容も北山第への御幸に関するであろうと思われる。靈鷲寺へ談義聴聞に出かけた作者たちに雪見舞いを寄越された広義門院に対して、老人の和歌は、雪見舞いにかこつけて北山への御幸を請うものである。女院との近しさを示す逸話でもあろうし、趣向のおもしろさを女院や院に興がられたという誇らしさもあつての記事であろう。ちなみに暦応五年正月の御幸始以後この時まで、史料を見る限り北山第への晴の御幸はない。それもまた老人は作者の意を受けてこの和歌を詠んだと思われる。

この記事の直後には、大宮入道右大臣(季衡)逝去を記し、それに触発されるように己の仏道修行への覚悟を述べるのであるが、これらの自身の心境に関する記事を除くと、記事は女院と一品宮の俄な北山第御幸へとつながっていることになる。

同じ年の神無月の比、俄に女院の御方・一品宮ならせ給ふ。紅葉御覧ぜらるべき御心ざしなるべし。かねて聞えあらば、ことくしうなりぬべき御憚りにや、召次などにもさらに漏らすまじう仰せられけるとて、思ひ寄り聞えぬ御事なれば、いと慌し。されども、御酒などもとかくあれば、「とりあへずはいかでかかくはあらん」と、「かねて聞えけるにやと念なく」などぞ御沙汰侍ける。御硯・文台・花瓶・香筥など奉る。一

品の宮にも花瓶などやうの物取り添へてぞ、ことさら贈り奉り侍ける。

ここでも、広義門院の作者方への心遣いと、かろうじて面目を保った迎える側の作者の心遣いとが記されている。この記事では、心理的に疎遠でない広義門院との関係が明らかにされているのではないだろうか。これより約八ヶ月前の和歌の贈答(④・⑤)で、垂氷と共に作者から広義門院へ献上された「紅葉の古葉」が想起されての御幸なのかもしれないと思わせる配列となっている。光厳・光明両院二代の国母であり、公宗の実の叔母にあたる広義門院は、永福門院亡き後、作者が近しく頼ることのできる唯一の人であつたのではないだろうか。そのこともこれらの記事に影響していると思われる。

さらに、貞和三年九月晦に初雪を見た折には、次のような贈答をしている。相手の「鎌倉の右兵衛督の御前」は足利直義の室であらう。

廿五日御幸侍し後、晦日^{こもり}に雪いさゝか降りぬ。九月尽の初雪はいと珍かなりかし。鎌倉の右兵衛督の御前の許へ、菊紅葉など薄様敷きて、広蓋に紅葉を入て遣はすに、添へ侍ける、

⑤ 御幸そふ宿の紅葉の八千入に君ぞ幾代の色をかさねん

返事に、

④ 幾代見ん君が心の色そへてみゆきふりぬる宿の紅葉ゝ

「廿五日御幸」とは公衡三十三回忌のため光厳院・広義門院が北山第へ御幸されたことをさす。「廿五日」が、たとえ後人の傍注が書写の過程で本文中に入り込んだものであつたとしても、作者が、この仏事のための御幸と同じ月の晦と記憶していたことによりここに記されたものであらう。西園寺家としては当然の行為であつた鎌倉方への目配りも、特に実俊の家督相続を確固たるものにしたという意図があればなおさら強調しておきたい事柄であつたと思われる。

以上のように、和歌から西園寺家復興への動きが辿れるのであるが、このような和歌の贈答を記すことで、作

者は自身の、実俊を当主とする西園寺家復興への動きと、その基にある思いとをそれとなく匂わせているのである。それは決して露わな形では記されていないことに留意する必要がある。この場合と同様に、西園寺家当主の母としての気配りをあえて表に出さない例として、康永四年三月、実俊が御幸に供奉した記事が指摘できる。

年かへりぬるに、御幸、新御所へ成らせ給ふ。三位中納言（ハヤシ）も供奉せらる。狩衣（ハヤシ）白青、はんふたい、栢（ハヤシ）紅梅（ハヤシ）の浮織物、指貫（ハヤシ）濃き紫烏（ハヤシ）標。御剣の役を勤め給。御車寄、三条坊門大納言なり。供奉の公卿には三位中将、次に殿上人四人、上下の北面、召次所五人、御牛飼十二人。色くなる水干ども、えも言はず。徒歩（ハヤシ）の御幸なれば、中くいと珍し。

記録的叙述の記事である。作者の母親としての感情は、「中くいと珍し」という感想に垣間見ることができ程度で、生な形での心境の告白は一切されていない。この供奉は実俊の初出仕であつたので、作者は実俊を案じて、当時左大臣であつた洞院公賢に助力を頼んでいるのである。『園太暦』康永四年三月十六日の条に、次のようにある。

十六日、天晴、今日上皇褻御幸始也、依御不予今春未及御幸也、西園寺三位中将実俊、始供奉、彼卿今年十一歳也、年少出現雖非無斟酌、掌一流正統、相待成人籠居、非無事恐之上、上皇・広義門院頻可出仕之旨被仰、仍可構参之旨、先日母儀被談之、何事之有哉之由報了、御劔役など年少不便、春宮大夫出仕加扶持哉之由同被命之上、母堂又有其命、予小女可為一對之由約了、未遣彼家之間、雖可有傍難、一家事也、相憑之条難処之外、仍可参旨示大夫了、且依上皇仰、大略相副扶持云々、

今日御幸、御車寄源大納言、「通冬、直衣、」公卿三位中将、「白襖狩衣・紅梅栢、」殿上人宗光朝臣（中略）新御所近々也、仍歩儀如去年云々、

このことについて作者は全く記していない。備忘録的な日記であれば、当然記録されていなければならないはずのものでもあるし、作者が忘れるはずもない。また、『中院一品記』同日条には、次のようにある。

十六日天晴院可有御幸新御所「広義門院御所持明院殿 西面御所中也」可候御車寄之由兼日蒙催之間申領状了今日西園寺三位中将雖令供奉依焉年少予可参之由被仰下云

午一点着直衣「下絙」駕八葉車「遣牛飼文車 未調置之間内、参」召具諸大夫一人「時茂」侍一人「秀冬」召具之参持明院殿良久西園寺三位中将参御所方先内、可候御劔役之様御所有御扶持云 其後既出御之由奉行隆邦朝臣示之（中略）上皇自寝殿東腋妻戸出御三位中将候御劔在左方「歩御後方可先立之由御所告示御然而未練之間不分明」（中略）三位中将渡御劔於予、取之進御車「年少故也」（下略）

これを見ると、光嚴院を始めとして周囲の人々が年少の実俊に対して種々配慮していることがよくわかる。このような周囲の配慮は作者にはありがたいことであつたろうが、それについても記さない。作者は敢えてこれらの記事を排除することで、実俊が何の支障もなく初出仕を果たしたとしておきたかつたのではないかと推測される。この記事の淡泊ともいえる叙述の底流には、右のような作者の思いがあるのではないだろうか。

作者が実俊の後援者として心の支えにしていたのは永福門院である。実俊の北山第移住（暦応三年）は女院の強い意向によるものであつた。

かゝる程に、侍従の君移り住み給へう、女院の御方急ぎ立たせ給ふ。やがて添ひ聞ゆべうあれば、さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ事しあれば、二位殿にて女院の御方さまへもこの趣を聞えたるに、いと僻くしき事と諫めさせ給つゝ、差し放つべきにはあらぬ由、さまざまにたまへるも御理なれば、心弱く思ひ立たれぬ。二位殿もあからさまにおはします。誰もく皆参るべし。小御所を竹向かけてしつらへり。何処もありしに交らねば、面影浮ぶ事多し。（下略）

「思ひわづら」い、なかなか決心のつかない作者に対して、理を尽くして説得する永福門院の姿が描き出されている。それは、作者の複雑な心中をも垣間見せるものではあるが、永福門院が強い意志を持って実俊養育に当たられるつもりであつたことを明らかにするものでもある。先に掲げた実俊の「雪降りて」の幼い和歌に対する女

院の和歌(26) (27) には、西園寺家復興をかけて実俊に期待する女院の氣持が滲み出ている。

女院が実俊のために力を注いでいた様を物語るのが、次の暦応五年と思われる記事である。

鎌倉の二品、知るたよりありて時々聞え通ふに、暦応の比、例の家門の沙汰あれば、彼へも此へも聞え侍事もあるに、卯月ばかりに、雁の子の見え侍を、十づゝあまたを重ねて藤に付けて遣はすに、永福門院、敷きたる薄様に書かせ給ふ。

③② 鳥の子を十づゝ十の数よりも思ふ思ひはまさりこそせめ

実俊のために尊氏に積極的に働きかける作者の動きとそれを支援する永福門院の姿が記録されている。それは、作者にとっては是非とも書き残しておきたかったことであつたはずである。「例の家門の沙汰」が実俊と公重との西園寺家の家督に関する争いと考えられるからである。それを裏書きするように、この記事に続けて作者が記すのは公宗の恨みがましい、ある人の夢中での詠である。

その頃、按察の二位殿より、「或る人の御夢に昔人かくなん仰せらると見給へるは、いかなる御恨のあるにかと、いと悲しうなん」あるを見れば、

③③ 思ひ置くそれをば置きて言の葉の露の情(の露)などなかるらん

人の御心ども、恨み給事もあるにやと思ひ合する事もあるに、更に悲しう思ひ続けらる。

例によつて、公宗と明らかにわかるようには記されないが、前章段の「家門の沙汰」を考えればこの和歌の詠者は公宗以外あり得ないであろう。作者は、公宗が斬罪に処されたことを一切記さず、その悲しみを表に出すこともしていない。夫を奪われた悲しみを胸底深く秘した姿勢を貫く『竹むきが記』において、ここは作者の悲しみが浮かび上がってしまった唯一つの箇所である。くすぶり続ける家督問題への公宗のいらだちともとらえられるような和歌を、自分ではなく他人の夢の中の詠として聞かされた衝撃があまりにも大きかったため、はしくも己の真情を露呈してしまった体となっている。「人の御心ども」が誰々の何に對してのものなのかは、つい

に『竹むきが記』において明らかにされることはなかった。しかし、「人の御心ども、恨み給事もあるにやと思ひ合する事」があつたということは、作者にはその心当たりがあり、常々恨みに思っていたということである。

公宗が「思ひ置く」といったその具体的なことは不明であるが、この時点での作者にとつて、公宗の恨みを少しでも晴らせるのは、公宗の忘れ形見実俊を当主とする西園寺家の復興を果たすことしかないと思われたであろう。この記事の直後には、永福門院崩御の記事が続けられている。それまでの記事の流れから作者の心境を忖度してみると、暦応五年には西園寺家の面目を施したといえる待望久しかった北山第への御幸始（史実は暦応四年正月）を迎えることが実現し、作者としては一応安堵したものの、この時期になつてもなおくすぶり続ける家督相続の問題に前途の多難を思い知らされたということであろう。それとほぼ時を同じくして、頼みとしていた永福門院の崩御という事態を迎えたのである。家門の事に関する女院の尽力は、作者にとつて何物にも代え難い後盾と思われていたはずであり、その女院を喪うことは作者にとつて、大きな悲しみとともに大いなる不安材料となつたはずである。この部分では、そういった家督相続の問題に係る事柄を並べている。この公宗の和歌は、実は、永福門院とともに西園寺家の正統を守ろうとして尽力する己の姿と、なかなかその成果があらわれない事への焦燥という作者自身の心理状態をもあらわしているのではなからうか。ひとえに亡くなった夫公宗のために、一人生きて西園寺家の再興と忘れ形見の実俊を守ろうと決意したであろう作者には、思うにまかせぬ日々であつたことを彷彿とさせる記事であり、和歌であるといえる。この一連の記事には、嫡嗣である実俊を当主とする西園寺家の復興のために力強い抛り所と頼んでいた永福門院の崩御と、それに伴う作者の喪失感、挫折感というものが象徴的に描かれているのではないかと思われる。

さて、下巻になつてから、作者は物語の旅に出るようになる。このような旅は、右のとおり（記載順）計八回を数える。

- 2 曆応五年二月 石山詣
- 3 同 年三月 若宮詣
- 4 康永四年二月 賀茂社詣
- 5 同 年十月 八幡詣
- 6 同 年正月 春日詣
- 7 貞和三年正月 初瀬詣
- 8 貞和四年三月 梅尾詣

これらの記事では、作者は旅に出ることにより日常生活から離れることができた解放感をそここに滲ませながら、道中の景色や人々の動向を記している。特に、3の若宮詣や4の賀茂社詣では、記事はほとんどがその場所に触発された作者の回想であって、参詣の行為そのものが描かれることは少ない。そのような中で参詣の目的や具体的な行動が比較的鮮明に記されているのは、6の春日詣と7の初瀬詣である。春日詣は、資明に誘われてもので、作者の主體的な行動とはいえないが、次のように記している。

昔、世を照らせ給ける、八千反とかや聞き奉る御光、今しも変らせ給はじかしと思ひ続けらるゝも、^{かたから}傍痛き事ならむかし。

③⑨ 世を照らす同じ八千世も三笠山おなじ光と月ぞさやけき
かしこまるしるしと御幣など捧ぐるに、いさゝか思ふ事侍て、

④⑩ 頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手

和光同塵の垂跡、平方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法樂は、随喜の笑を含みましくて、二世の願成就せしめ給とかや。

ここで作者は「いさゝか思ふ事侍て」と、その内容について明らかにしていない。しかし、春日大社が藤原氏の

氏社であることから、作者が「頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方」へなびいて欲しいと念願しているのは、やはり西園寺家の家督を実俊の手にということであろうと推測される。

7の初瀬詣では、さらに参詣の目的は明らかである。

いかに思ひ初めけるにか、初瀬の観音を頼み奉りて、朝ごとに香花かうげを供養しなど侍しを、なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず、願など立て置く事あれど、遙けき道にすがくしくも思ひ立たれず、年月を送る程に、貞和三年正月に夢想の事あるに驚きて、忍びつゝぞ思ひ立ち侍。睦月の廿八日に宮こをたちて、その夜は奈良に泊る。(中略)大宮の御前に念誦ねんじゆするに、山際さぎいさゝか白みそめて、人の気配もまだ見えず、いと静かなるに、昔をかけて思ひ続ける事あるにも、さすが捨て果てさせ給まじきにやと、頼みをぞかけ聞えける。

④ 神や知る引く注連縄の打延へて一筋にのみたのむ心を

五重唯識の翠の簾、二空真如の露を垂れたる、百法明門の朱あけの斎垣いがき、随喜の思ひも深く、立ち憂き御名残なれど、急ぐべき道なれば明け果てぬ程にと参り廻りつゝ、はるぐと赴きぬ。(中略)年比持ち奉れる本尊を中尊として、三十三体を造り供養し侍を、ことさらこの寺にて供養すべく思ひ給へし、その心ざしをぞ遂げぬ。過ぎにし頃より家門の事わづらはしき子細ども侍うへ、大方代々の流れ久しかるべき安全を、思ひ心ざしなるべし。(中略)濟度利生さいりしやうの空しからざる事、古に旧り今に流れて初瀬川の音絶えず、大悲大慈の深き色は八入の岡の木ゝに染めても、猶喩とするに及ばざるにや。現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし。

この記事で作者が、「昔をかけて思ひ続ける事あるにも、さすが捨て果てさせ給まじきにやと、頼みをぞかけ」と言うのは、やはり大宮（春日大社本宮）の御前であつた。ここでの「頼み」も、6の記事と同様に西園寺家のことであろうと思われる。さらに、初瀬について作者は、「なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞

えしかど、さてもあらず、願など立て置く」としているが、それは後の「三十三体を造り供養し侍を、ことさらこの寺にて供養すべく思ひ給へし、その心ざしをぞ遂げぬる。過ぎにし頃より家門の事わづらはしき子細ども侍うへ、大方代々の流れ久しかるべき安全を、思ひ心ざしなるべし」から、やはり西園寺家の家督相続の問題と西園寺家の将来への継続を願つてのものであったと明らかになるのである。物詣の旅の目的がそれとわかるように記されているものは、いずれも西園寺家に関するものである。

実俊の名譽をことさら強調するように整えた形で記したことも、永福門院の崩御によつて挫折感を抱いたことも、しきりに参詣に出かけたことも、すべては一つの思いに集約してゆくのである。それは、実俊を当主とする西園寺家の復興と繁栄への作者の熱望であつた。

以上、この作品の底流にあるものを追いかけてみた。そこからわかることは、光厳天皇の即位をあくまでも故実に則つて莊嚴に執り行われたという形に整えて記録したことからもうかがえる作者の自負と自我であろう。それは、公宗との愛の軌跡を、情感豊かにのめり込んで描こうとしなかったことにもあらわれている。罪を憚つてのことと考えられないこともないが、『竹むきが記』上巻で作者が描いているのは、まぎれもなく公宗との愛とその結果の西園寺家正室としての北山第入りである。この事柄を避けていない以上、別の描き方もあり得たはずであるが、作者は基本的には、あくまでも記事を淡々と連ねているだけである。実俊に関する記事においても、実俊は西園寺家の正統らしく、あくまで立派に危なげなく数々の段階を経て成長しているかのように記す。そのいわば舞台裏の、母親の心配や周囲の人々の配慮は排除される。このように『竹むきが記』を記す作者の態度には、誇り高い自負と自我とが作用しているのではないかと思われる。

一方、『竹むきが記』下巻において物詣とともに作者の行動として登場するのが、談義聴聞や参籠である。この行動の基になっているのは、いかにして出離解脱をなすかという仏道修行への思いである。開悟への傾心は、亡き夫公宗のため、ひいては一子実俊のため、西園寺家の復興と繁栄とを願ひ続けた作者が、それとは別の次元

で心の安定をも希求していたということのあらわれに他ならない。己の実人生で思い知らされた人の世の無常の理や過去への執着、胸底の動かし難い「心の闇」などからの解脱を求めて、作者が仏道修行を志す心理的過程は、この作品の文学性を支えるものの一つでもある。このことについては、次章で考察することとする。

三 表現様式の特質とその評価

これまでの作業を通じて確認できたことは、『竹むきが記』において我々に訴えかけてくる作者の思いは、実は表面的な叙述のみではなく、記事の取捨選択・配置さらには記録的叙述においてさえ、その底流に存在しているということである。無味乾燥な記録の羅列と見える叙述も、そのような作者の感情や意図に支えられて成り立っているものなのである。それがこの作品の表現様式の特異さなのではないだろうか。記録的叙述の羅列に見える『竹むきが記』の記事も、実は単なる純粋な備忘録でも無意味な記録の羅列でもなく、意図をもって再構成されたものであった。作者は日記を綴っていくことで、己の人生を再体験していつているのであるが、それは彼女の实人生と必ずしも完全に一致したものではないということを確認できたのではないかと思う。

『竹むきが記』においては「事実の記録を書き連ねること」（叙事）は、その事柄が作者の感情や意図に応じて選択・配置されることにより、実は微妙な色合いを施されているのである。そのような記録的叙述を積み重ねることにより、作者は己の感情を、その記事の合間に埋め込んでいつていることになる。つまり、叙事を重ねていくことによる叙情の表現であると考えることができるのではないだろうか。

作者の夫公宗は後醍醐天皇方から謀叛の疑いをかけられ斬罪に処された。この時、作者が懷妊中であつた可能性は高い。このような劇的な体験をしていながら、作者はこのことについてはほとんど何も語らない。それは、諸家の説かれるとおり（序章第一節）、あまりにもつらく悲しい事柄であつたため客観化しては語れなかった、

あるいは、その恨みを語るとは当時公宗を救えなかった人々に対する非難ともなり、それは実俊や西園寺家のためにならないと憚つてのことであつたものでもあらう。作者の背負つたものは、あまりにも重かつたのである。

六月も半になりぬ。忍びたる住ゐるなど、改まるべきにや、さやうにては、いつしかならん出入も何となく憚りあるべければ、「さらばあからさまに」と許されあればいと嬉しくて、都に出でぬるに、聞き見る事は皆あらぬ世の心地しつゝ、さらに悲し。二三日ありて車などあれば、立ち返山路にも、いかになり行く身ぞと、万に浮きたる心地して思ひ乱るべし。

いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り待べきにやとぞ。

『竹むきが記』上巻最後の章段である。岩佐美代子氏は、この章段の叙述について、次のように結論しておられる。^(註)

きわめて醜化された、屈折した表現ではあるが、やはりこれは名子としての愛の勝利の揚言であらう。^(中略)平時であれば名子も公宗の妻妾の一人にすぎず、もし幸いに子をもうけたなら、その子の器量次第で或いは正室待遇におさまり得るかもしれぬといった程度の身分であらう。固定した社会常識を根底からゆるがす大動乱の中で互いの愛をたしかめあつたればこそ、公宗は社会通念を排して名子を正室にすえる決意をなしたのである。かかる非常事態の中なればこそ、周囲もそれを認めたのである。^(中略)身分違いの名門に嫁したこと、その事自身が――更にいえば自らをかくあらしめた夫の知遇への感謝、自らの出自についての劣等感が、婚家の伝統を守りぬくべく振いたつ彼女らの「恐るべき執念」の源泉であつたのである。

このように見れば、一見何の奇もなく、むしろ昏迷した印象をしか与え得ぬようなこの一文こそ、実は名子自身にとつてはぜひとも本記上巻の末尾にすえるべき、最重要な章段であつたに違いないと思われる。そして自らかちとつた愛の勝利をすらかかる屈折した形でしか表現しえない、その人柄とその環境とその時代とが、おのずから下巻の叙述のあり方をも規定してゆくのである。

このような時代と環境と、そして作者の理知的な性格とが、『竹むぎが記』の表現形式の背景にある。そしてまた、岩佐氏は次のようにも言われている（注¹）。

なればこそ名子は、動乱の世を必死に生きぬいて来た自らの生の軌跡を、自らの手でえがきうるぎりぎりの形でたしかめ、そのとじめとじめに、人しれず自らの愛の勝利をうたったのである。それは後世の読者から見れば、ほとんど真意をよみとり難い程の屈折した表現ではあるが、彼女の矜持はこのような表現をしか自らに許さなかったのである。

作者は公宗との愛ゆえに、あまりにも悲惨な体験、あまりにも重い使命を背負いつつ生きなければならなかった。しかし、作者はそのすべてをこの日記に綴っている訳ではないのである。それが、この作品の表現様式の基底にはある。

このような状況の中で、作者が選んだのが、先の特異な表現様式であつたのである。これまでの検討作業を通じて、そのことをいささかでも具体的に示し得たのではないかと思う。しかも、このような状況にあつても、なお作者はやむにやまれぬ欲求によつて、『竹むぎが記』という作品を残した。これらの底流にある作者の思いをさらに奥から支えていたものは、己の人生を書き残しておきたいという作者の欲求であつたのである。

注

1 『園太暦』貞和三年九月二十五日の条には、次のようにある。

廿五日、天晴、但自申刻許陰、自酉刻微雨、及夜景雨脚滂沱、今日竹林院入道左大臣卅三回忌辰也、茲固広義門院就于西園寺無量光院壇場、被修御仏事（中略）良久不始、経頭卿与亭主三位中将可著座、而彼装束有遅々事、其故如此云々、及酉刻、奉行院司朝房申事具之由、予気色、参御聴聞所方奏了歟、帰出仰聞食之由、予又気色、朝房退令

打鐘、此後人々著無量光院前庇、東西座相分著之、東予・経顕卿・公名卿（中略）西公秀卿・資明卿・実夏卿（以上直衣、）降蔭「束帯、」実俊卿「直衣、」等也、如此著座、左右強不守次第也、而東西守位次之間、著座移刻了、毎事不似旧規、不便々々、其後僧導師澄俊法印（中略）入後戸、次第著座（下略）

この記事から参会の公卿たちや実俊が着座し、導師入堂となったのは、酉の刻を過ぎていたことがわかる。作者も「傾く日影」と言っている。そして酉の刻からは雨が降り出しているのである。

2 康永元年には、永福門院の見舞いのため光嚴院・徽安門院が北山第へ御幸されているが、これは晴のものではない。

3 「竹むきが記」私注（上巻）（『国語国文』第四一巻第二号、昭47・2）

4 「竹むきが記」私注（下巻）（『国語国文』第四一巻第三号、昭47・3）

第三章 『竹むきが記』における宗教観

第一節 浄土教思想とそれへの懷疑

一 作者の宗教的環境

『竹むきが記』の上巻と下巻の間には約四年半の空白の期間がある。その間に作者日野名子の夫西園寺公宗は、建武の新政に対する謀叛の疑いをかけられ斬罪に処された。上巻には、作者が女房として持明院統の宮廷に出仕していた折の思い出と公宗との交情が記されている。下巻には、一子実俊の成長と表裏をなす西園寺家の復興への願い、および自身の信仰への思いなどが綴られている。上巻には全く見られず下巻においてかなりの比重を占めるようになるのは、信仰への作者の関心である。表だって語られることはないものの、そこには公宗の事件が大きく影響していると思われるが、徐々に作者の関心の強まってゆく道心について考察することは、作者の執筆動機を探るために有用であるといえよう。本節では、作者の信仰の全体像をとらえる第一段階として、まず主として浄土教思想との関連について検討を加えるとともに、『竹むきが記』からうかがわれる作者の信仰の歩みを跡づけておきたい。

夙に指摘されているごとく『竹むきが記』下巻には、作者周辺の人物八名の死が記録されている。次に、その人物名と作者の書き添えている感想を掲げる。クは、作者自身の感想の記述ではないが、作者が共感を持って書き記したこととして含めておく。

ア 資名（作者の父） 建武五年五月二日没

遂に未の刻ばかりに空しう見なしぬる心の中ども、言はん方ぞなき。(中略)時の間にかゝる夢をも見る業にこそと、憂世の理もさらにぞ驚かれける。

イ 前右大臣(今出川兼季・西園寺実兼息) 暦応二年正月十六日没

同正月に失せ給ぬる、いとあへなくあはれになん。

ウ 東北院僧正(覚円、永福門院同腹弟) 暦応三年六月十九日没

十九日、朝の露と消え給ぬ。あはれにいみじとも、言へばさらなり。

エ 永福門院(西園寺実兼女、伏見院中宮) 康永元年五月七日没

五月七日失せさせ給ぬ。朝夕の事わざにつけても頼もしき御事なりつれば、一方ならぬ御名残も言はんかたなし。

オ 菊亭大納言(実尹、今出川兼季息) 康永元年八月二十一日没

もしさるべき人にやと思ひ置き給事あれば、「弟の公直を」終の家督となるべう定め置かるゝも、あはれに悲しうなん。

カ 大宮入道右大臣(季衡、公宗伯父) 貞和二年五月二十五日没

今更ならぬ世の慣ひも、差し当りてあへなくあはれになん。(中略)故女院の御事、菊亭の大納言殿、又この御事、打続きかくのみおはするにも、留まらぬ世の慣ひ、更にぞ驚かれ侍ける。

キ 霊鷲寺の長老 貞和四年七月八日没

既に法滅の期にやと心細くなん。

ク 法皇(花園院) 貞和四年十一月十一日没

院〔光厳〕・新院〔光明〕、いみじう御歎きども、疎かならずぞ聞えさせ給ふ。

作者が信仰に強く関心を持つきっかけになったものは、おそらく前述のごとく公宗の刑死であろう。しかし、

『竹むきが記』において公宗の死は明らかに記されることがないために、作者がどのような思いにとらわれたの
か知る術はない。作者がこの日記で初めて信仰への思いを綴るのは、オの菊亭大納言死去の記事の直後である。
そこには次のように記されている。

生あれば滅あり、人必ず免れざる理、目の前なれば、さすが惡道も恐しければ、十惡五逆の捨て給はずと聞
く弥陀の願力を頼みつゝ、悲願あやまたずは来迎引接らいぎんげつ定めて疑ふべからずと、偏に念仏の数をぞ積みける。

身近な人々の死に直面して、必滅の理を実感させられた作者がまず拠り所を求めたのが、浄土教、浄土思想であ
ったと語られる。この三ヶ月前には、北山にあつて実俊の養育に力を注いでおられた永福門院が亡くなっている
のである（エ）。力での述べ懷でも「故女院の御事、菊亭の大納言殿、又この御事、打続きかくのみおはするにも、
留まらぬ世の慣ひ、更にぞ驚かれ侍ける」といい、身近な人々を次々に喪い、人の世の無常を痛感させられてい
る作者の姿が浮かび上がる。

当時の貴族社会には、浄土教思想が浸透していた。それは、天台宗・真言宗・禅宗などと融合した形での浸透
であった。ここで、作者の嫁いだ西園寺家を例にその実態を見ておく。作者は北山第について、次のように記し
ている。

所くゝに建て置かれ侍御堂は、家門繁昌の為のみならず、勅願寺にて天下の御祈禱、他に異ことならぬ御願にて
侍れば、代々これを大事と沙汰侍れど、諸堂数多く御願事繁ければ、聊ちやうずる事も侍らめども、大方は怠らぬ
さまなり。ことに成就心院は座をさまさぬ不断の勤め、嚴重げんじゆうの御願なれば、安貞二年十一月に始置かれける
より、今貞和五に至るまで、一時も退転あることなし。昼夜朝暮の勤の音、霞に余り霧に漏るゝ鈴かねの声絶え
ず、松を払ふ冬の嵐には、峰に答ふる声は煩惱の雲を分けて法性の空にや響くらんと、心も澄みて聞ゆ。

「西園寺為三神具足」、諸仏遊地令地、天下第一勝地是也」など、長増心院供養の御願文の言葉に侍も、ま
ことにありがたき靈地なるべし。奥の御堂と侍は終の御住処と示されて、代々の御跡をぞ残され侍。不断の

念仏あり。本願院には四十八体の弥陀如来、光を並べておはします。浄土の法文、止観の談義などあり。浄金剛院・三福寺など、然るべきをぞ供僧にも選びなされ侍ける。

さらに、貞和三年秋、公宗の十三回忌での仏事について述べらるくだりにおいても、次のように記している。

憂世に耐えたるつれなさも、さらに驚かれつゝ、十年あまり三年の秋を迎へぬ。かねては如法経など思ひしかど、法水院にて五種の行をぞ行ひ侍。朝夕の懺法の声に響を交はす水は、八功德池の波の音かと聞きなされ、(中略)二日は靈鷲寺にて陞座あり。ついでに金泥の金剛経、供養し奉る。法水院にては五種の結願、仏経供養などあり。(中略)導師三福寺也。御布施二両、单襲・生絹の衣なり。西園寺には阿弥陀三昧あり。二位殿より御沙汰なるべし。

これにより西園寺諸堂の有様を見ると、まず西園寺本堂の本尊は、「阿弥陀三昧」とあることから阿弥陀如来と思われる。「本願院」には「四十八体の弥陀如来」が安置されている。これらは浄土教によつていられる。この他に、「成就心院」では「不断の勤め」、「奥の御堂」では「不断の念仏」が行われている。仏事では、「阿弥陀三昧」の他、「法水院」で「五種の行」、近くの禅宗寺院靈鷲寺(後述)でも「陞座」が行われたように記している。またこれらとは別に、『竹むぎが記』には「無量光院」の名が三箇所に見られるが、仏事に関する一例を次に示す。先の公宗十三回忌の記事に引き続いての章段である。

故竹林院入道大臣、卅三年に当り給。御仏事の為、広義門院御沙汰として、無量光院にて仏経供養あり。

『増鏡』第五「内野の雪」冒頭に、西園寺についての記述があることは広く知られているが、その部分を次に掲げる(注)。

本堂は西園寺、本尊の如来まことに妙なる御姿、生身もかくやと、いつくしうあらはされ給へり。又、善積院は薬師、功德藏院は地藏菩薩にてをはず。池のほとりに妙音堂、滝のもとには不動尊。この不動は、津の国より生身の明王、簪笠うち奉りて、さし歩みてをはしたりき。その簪笠は宝蔵にこめて、卅三年に一度出

ださるとぞうけたまはる。石橋の上には五大堂。成就心院といふは愛染王の座さまさぬ秘法とり行なはせらる。供僧も紅梅の衣、袈裟数珠の糸まで、おなじ色にて侍める。又、法水院・化水院、無量光院とかやとて、来迎の気色、弥陀如来・廿五の菩薩、虚空に現じ給へる御姿も侍めり。

この記述からは、まず西園寺本堂の本尊は「如来」（阿弥陀如来であろう）であることや「法水院」・「無量光院」は、「来迎の気色、弥陀如来・廿五の菩薩」から浄土教によつてゐることがわかる。また、「成就心院」の「不断の勤め」が愛染王の秘法であることが判明する。さらに、『竹むきが記』には記されないものとして、「善積院」（本尊は薬師）・「功德藏院」（本尊は地藏菩薩）・「妙音堂」・「不動尊」・「五大堂」・「化水院」が挙げられる。

このように西園寺^{さいいんじ}ひとつをとりあげてみても、あるいは天台宗系、あるいは禅宗系、あるいは浄土宗系など種々の信仰が併存していることが明らかであろう。このようなあり方が、西園寺家に限らず当時の多くの貴族の信仰の実態であつたと思われる。このような中で作者はまず浄土教思想に拠り所を求めたのであつた。

二 『竹むきが記』にみえる浄土教思想

作者の道心がどのようなものであつたのか、『竹むきが記』の記述から具体的に見てゆくことにする。浄土教思想が直接的にうかがわれるのは、作者が『竹むきが記』で初めて信仰への思いを綴つた前掲の章段とそれにく部分である。

生あれば滅あり、人必ず免れざる理、目の前なれば、さすが惡道も恐れければ、十惡五逆の捨て給はずと聞く弥陀の願力を頼みつゝ、悲願あやまたずは来迎^{らいがういんぜう}引接定めて疑ふべからずと、偏に念仏の数をぞ積みける。さても猶九品往生の儀を思へば、上中品はまづ置きて、下品の趣を見れば、二七日を経て蓮花開くる時、

甚深の十二部經を聞き終りて、信解して無上道心を起し、十小劫を経て百法明門を具し、初地しよぢに入る事を得。三宝の名を聞きて即ち往生しやうじやうすと言ひ、或は蓮花れんげの中うちにして十二大劫を満みて花まさに開くる時、觀世音大勢至くわんぜいおんたいせし、それが為に諸法の実相除滅罪の法を説き給を聞き終りて、歡喜して即ち菩提心を起すと説けり。かの国土に生じ終りて、法ほふを聞きて次第に果を得たり。現在げんざいにしてかの法を聞く事あらば、順次じゆんじに生死を出づべきにやと、いさゝか不審なる事侍ける。

ここで作者は、まず「生あれば滅あり、人必ず免れざる理」と、永福門院薨御に引き続く菊亭大納言逝去によつて身近に思い知らされた人の世の無常の理を述べている。「十惡五逆の」以下は、例えば『梁塵秘抄』の、弥陀の誓ひぞ頼もしき、十惡五逆の人なれど、一度御名を称ふれば、来迎引接疑はず

(卷第二、三〇) （三〇）

などに見られる人口に膾炙した表現、つまり作者にもなじみのある表現を使つたと思われる。「さても」以下は、『觀無量壽經』（以下『觀經』と略す）正説に拠る表現である。「上中品はまづ置きて、下品の趣を見れば」と注しているように、下品の上生・中生・下生について説く箇所である。以下に、少々長くなるが『觀經』のその部分を引用する（まづ）。

仏、阿難および韋提希いだいけに告げたもう、「（下品上生）とは、あるいは衆生ありて、もろもろの惡業を作る。方等經典ほうとうきんを誹謗はいわうせずといえども、かくのごとき愚人、多くもろもろの惡を造りて、慚愧あることなし。命終らんと欲する時、たまたま善知識ぜんしき、（その人の）ために大乘十二部經の首題の名字を讃たえん。かくのごとき諸經の名を聞くをもつてのゆえに、千劫の極重の惡業を除却す。（この）智者、また、（その人に）教えて、合掌・叉手しやしゅして（南無阿彌陀仏）と称えしむ。仏の名みなを称うるがゆえに、五十億劫の生死の罪を除く。その時、かの仏、すなわち化仏と化觀世音・化大勢至を遣わして、行者の前に至り、讀えていたもう、『善男子よ、汝、仏の名を称うるがゆえに、もろもろの罪消滅す。われ、來りて汝を迎う』と。この語をな

しおわるに、行者、すなわち化仏の光明の、その室に徧満せるを見る。見おわりて、歎喜し、すなわち命終る。(そのとき)宝蓮華に乗り、化仏の後に随しりえつて、宝池の中に生まる。七七日を経て、蓮華すなわち敷ひらく。華の敷く時にあたりて、大悲の觀世音菩薩および大勢至(菩薩)、大光明を放ちて、その人の前に住じゅうりゆう(立)し、ために甚深の十二部經を説きたもう。(かれ、これを)聞きおわりて信解し、無上道の心を發はす。十小劫を経て、百法明門を具し、初地に入ることをう。これを(下品上生の者)と名づく。(かれ)仏の名と法の名を聞き、および僧の名を聞くことをうればなり。三宝の名を聞かば、すなわち往生をうるなり。「仏、阿難および韋提希に告げたまう、「(下品中生)とは、あるいは衆生ありて、五戒、八戒および具足戒を毀犯きはんす。かくのごときの愚人、僧祇物を偷み、現前僧物を盗み、不淨說法して、慚愧あることなく、もろもろの惡業をもつて、みづから莊嚴す。かくのごときの罪人、惡業をもつてのゆえに、まさに地獄に墮すべし(中略)一念の頃あいだほどにすなわち七宝の池中の蓮華の内に往生することをう。六劫を経て、蓮華すなわち敷く。華の敷く時にあたりて、觀世音・大勢至、梵音声をもつて、かの人を安慰し、ために大乘の深甚の經典を説きたもう。この法を聞きおわりて、ただちに、すなわち無上道の心を發す。これを(下品中生の者)と名づく。「仏、阿難および韋提希に告げたまう、「(下品下生)とは、あるいは衆生ありて、不善業の五逆・十惡を作り、(その他)もろもろの不善を具す。(中略)かくのごときの愚人、命終る時に臨みて、善知識の種々に安慰あんゐして、ために妙法を説き、教えて仏を念ぜしむるに遇わん。この人、苦に逼せまられて、仏を念ずるに違いとまあらず。(かの)善友、告げていう、『汝よ、もし(仏を)念ずることあたわざれば、まさに無量壽仏(の名)を称うべし』と。かくのごとく、至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、(南無阿弥陀仏)と称えしむ。仏の名を称うるがゆえに、念々の中において、八十億劫の生死の罪を除き、命終る時、金蓮華の、なお日輪のごとくにして、その人の前に住するを見ん。一念の頃ほどに、すなわち極樂世界に往生することをえ、蓮華の中において、十二大劫を満たし、蓮華まさに開く。(その時)觀世音・大勢至、大悲

の音声をもつて、それがために、広く諸法の実相と、罪を除滅する法を説く。(この人)聞きおわりて歡喜し、ただちに、菩提の心を發す。これを「下品下生の者」と名づく。(下品の三種の往生の觀想)これを「下輩の生まるる想い」と名づけ、(第十六觀)と名づく。」

傍線を施した箇所がそれぞれ『竹むきが記』の傍線部と対応する表現である。『竹むきが記』では、「下品」のうち「上生」と「下生」の者の往生に関する部分を取り上げ、「中生」の者については触れない。「下品」の「上生」とは、「方等經典を誹謗」はしないが「もろもろの惡を造」つても慚愧しない者をいい、「中生」とは、「五戒、八戒および具足戒を毀犯する、つまり「僧祇物を偷み、現前僧物を盜み、不淨說法して、慚愧」しない者、「下生」とは「不善業の五逆・十惡を作り、もろもろの不善を具す」者とされている。「中生」について触れなかったのは、「中生」が僧体にある者を念頭に置いたような表現となつてゐるためかとも推量される。

『觀經』のこの部分は、命終の時、どのような惡人も「諸經の名を聞く」こと、「仏の名を稱うる」ことにより、「極重の惡業」や「生死の罪」を除くことができ、「蓮華」の中に迎えられると説いている。それが、作者のいう二重傍線部A「かの国土に生じ終りて」の内容であろう。さらに『觀經』は続けて、しかる後、ある一定の期間をおいて觀世音・大勢至の導きにより、深甚の法を聞き、往生することができると説く。これが二重傍線部B「法を聞きて次第に果を得」るにあたる。このように『觀經』では、二段階に分けて往生を説いており、作者もその両方をとらえていることがわかるのであるが、作者が引用しているのは、どちらも後半部分である。また、引用されている部分は、『觀經』の優良耶舍訳カウラヤシヤスの原文に照らしてみても、かなり正確である(『竹むきが記』の「二七日」は「七七」の誤写と思われる)。では、なぜ作者は前半を引用しないのであろうか。その答えは、二重傍線部C「現在にしてかの法を聞く事あらば、順次に生死を出づべきにや」という作者の信仰上の不審にあると考えられる。このことは作者にとつて、己の信仰の出発点でもある大命題なのである。自ら「十惡五逆」としてゐること、また「上中品はまづ置きて、下品の趣」と「下品」をことさら選んでゐることなどから、

少なくとも作者には「十惡五逆」の凡夫、「もろもろの惡を作」り、「もろもろの不善を具す」「かくのごとき
の愚人」との認識があつたことが推量できる。『觀經』には、そのような凡夫が蓮華の中に生まれるために、

「善知識」の導きにより「仏の名を称うる」事で、「生死の罪」を除却することができると説明されている。作者は「かの国に生じ終りて、法を聞きて次第に果を得」ることには理解を示しながらも、では「現在」、現世でこの法を聞いただけで來世の解脱が保証されるのだろうかという疑問を持つのである。それは生身の人間としては当然の疑問であつたろう。そのために『觀經』には、先述の説が準備されている訳なのであるが、作者は「仏の名を称」えるだけでいいのか、「偏に念仏の数を積」む、それだけで救われると頼り切つていいのだろうか、なお本心から納得できないのである。その「不審」があるため、敢えて『觀經』の前半部分を引用しなかつたのではないかと考えられる。善導は、その『觀經疏』で「二種深信」について次のように記している（註5）。

即是深信之心也。亦有二種。一者決定深信。自身現是罪惡生死凡夫。曠劫已來常沒常流轉。無有出離之緣。二者決定深信。彼阿彌陀仏四十八願攝受衆生。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。

この文の趣は、「第1の自身が救われたい凡夫であると、深信すること（機の深信）」と、第2のこのような凡夫を阿彌陀仏の本願力がかならず救うと深信すること（法の深信）」（『岩波仏教辭典』）である。自身が凡夫であるという強い自覺に基づいた弥陀への深い信心なのである。作者は、善導の説く如く我が身を出離の縁のない愚人と思ひ捨てて深く信じ、頼り切ることができないのである。あるいは、作者はただ任せきりということができず、自力で何かしらしているという充足感のごときものを欲していたのかもしれない。それは、作善、仏像の造立や布施や写經といった宗教的行動をもさしていたと考えられる。ただ念仏を称えていればよいという専修念仏に従うには、その環境からいっても作者はあまりに「自力」に執着する人であつたと考えることもできるのではないだろうか。

このことは、『法然上人行狀絵図』詞書からの引用にもうかがえる。『法然上人行狀絵図』は、「比叡山功德

院の舜昌が、後伏見上皇の命を承り、法然の旧記伝説を集大成したものであり、詞書は、後伏見上皇・後二条天皇・伏見法皇・青蓮院尊円法親王をはじめ、三條実重・姉小路濟氏・世尊寺行尹などの当代上流貴族が執筆し、絵図は土佐吉光ら数人の画工の手になると伝え^{（註）}られていたものである。岩佐氏美代子も、「『法然上人絵伝』との共通表現は計4箇所にわたって認められ、同書が後伏見院の勅命である事ともからめて、今後の検討に値するであろう」としておられる^{（註）}。この絵図の制作が作者に非常に近いところで行われたことから、作者が披見の機会を得たことがあるか、あるいは絵伝が準拠した資料を見た可能性も考えられる。『竹むきが記』との共通表現を具体的に検討すると、例えば作者が帰依していた靈鷲寺の長老の入滅に際しての表現は、次の如くである。

靈鷲寺の長老、春の頃よりわづらひ給し、日々に弱りつゝ、仏日すでに涅槃の山に入なんとす。但し、仏の非生に生を唱へ、非滅を現せしめ給しが如くならんかし。惑ひの前には滅に入の相をまことに悲しむ。遂に七月八日未の刻に滅に入給。^{（中略）}道俗の慕ふ涙は衣をうるほし、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の御弟子、天に仰ぎ地にして悲しむ声は巷に満ちぬべし。尺尊、靈山の峰の月にかくれましくける時、五天に声をあげけん娑羅林の春の夕も、かくやとぞ覚えける。

傍線部分がそれぞれ『絵図』詞書の第一巻に「非生に生を現して無憂樹の花をミをふくミ 非滅に滅をとなへて堅固林の風こゝろをいたましむ」、第三四巻に「貴賤のかなしむこゑちまたにみち 道俗のしたふなみた地をうるをす」と見いだせる。また、第三三巻の「上人の給はく 流刑さらにうらミとすへからす^{（中略）} たとひ山海をへたつとも 浄土の再会なむそうたかはん 又いとふといへとも存する八人の身なり おしむといへとも死する八人のいのちなり なんそかならずしもところによらんや」は、『竹むきが記』では大宮入道右大臣の死を記した章段に、次のように使われている。

故女院の御事、菊亭の大納言殿、又この御事、打続きかくのみおはするにも、留まらぬ世の慣ひ、更にぞ驚

かれ侍ける。厭ふといへど存するは人の身、惜しむといへど死するは人の命也。老たるは理の道とて留まらず、若きは不定の境とて止めがたし。

表現は酷似している。一方、『絵図』詞書には、例えば次のような章段がある。

又凡夫の心ハ 物にしたかひてうつりやすし たとへハ猿猴の枝につたふかことし まことに散乱して 動しやすく 一心しつまりかたし 無漏の正智 なにゝよりてかをこらんや 若無漏の智剣なくはいかてか 悪業煩惱のきつなをたゝんや 悪業煩惱のきつなをたゝすハ なんぞ生死繫縛の身を 解脱することをえんや かなしきかな く いかゝせん く こゝに我等こときハすてに戒定恵の三学の器にあらず (第六卷)

それすみやかに生死をはなれんとおもはゝ 二種の勝法の中に しはらく聖道門をさしをきて えらひて浄土門にいれ 浄土門に入らんとおもはゝ 正雜二行の中にしはらくもろくの雜行をなけすてゝ えらひて正行に帰すへし 正行を修せんと思はゝ 正助二業の中に猶助業をかたハラにして えらひて正定をもハラにすへし 正定の業といふは すなハちこれ仏の御名を称するなり 名を称すれハかならずむまるゝことをう 仏の本願によるかゆへにと(中略)又云 たゝ心の善惡をもちへりみす つみの輕重をもわきまへす 心に往生せんと思てくちに南無阿弥陀仏とゝなへは こゑにつきて決定往生の思をなすへし その決定心によりて すなハち往生の業はさたまるなり (第一八卷)

ここには、善導の「二種深信」を和らげた法然の思想がよくあらわているといえるが、作者はそれらを引かない。つまり、『絵図』詞書と共通する表現を用いながら、思想の直接的な影響は読み取ることができないのである。このことも、先と同様の理由で作者の心の深奥に響いてこなかったためと思われる。『観経』からの引用態度、『法然上人行狀図絵』詞書からの引用態度から、「自力」への執着を断ち切ることでできない作者の心意をうかがうことができる。

三 「生死を出づる道」

専修念仏の教えに満足できないものを感じた作者は、次いでその不審を解決しようと、かねて縁のあった靈鷲寺の長老に機を得て「如何にしてかまさに生死を出づべからん」との質問をぶつける。その事情を記すのが次の章段である。

諸行無常、是生滅法、生滅、已、寂滅為樂。此四句、菩提心開けて天上に昇る階、煩惱の黒き雲を捨てて愛欲別離の海を渡る舟、八相成道の義果なりと言へり。彼を聞き此を思ふにも、まさに生死を出づべき道は尋ねまほしう侍に、この山の奥に靈鷲寺といふ所あり。(中略)今の長老、道学ともに其徳高く聞ゆ。この山に過ぎにし跡を残され侍を、代々の所に移し聞ゆべきを、いまだそのまゝにてをはすれば、踏みなるゝ山路にて対面の序も侍れば、「如何にしてかまさに生死を出づべからん」と尋ね侍に、一句を示さるゝ事あり。更に又言葉なし。それよりこゝをあけみるに、思ひ得る方ぞなき。されども自ら不審もあれば、尋ぬる事もありて過ぐる程に、まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知らるゝ。

不審に対する答を即座に得ることはできなかったものの、作者はこの修行こそが解脱への道と「思ひ知」つたと記している。「彼を聞き此を思ふにも」には、答えを探し求める作者の姿勢を見て取ることができる。また、傍線部で示した箇所からは、作者の関心が専ら「生死を出づべき」ことにあり、出離の思いがことさら強かったことがわかる。浄土教思想に不審を抱いたのも「順次に生死を出づべきにや」という問題であったことは先に指摘したとおりである。

その思いがいかに強かったかということは、熱心な談義聴聞によつても理解できる。

貞和の初年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、折しも雪いみじう降りて二尺余ばかり

積れる、分けがたきさまなれど、ことさらに心ざす事しありて、例の老人誘ひ聞えつゝ思ひ立ちぬ。輿舁かきの分けかねたるさま、いといみじ。入もてゆくまゝに、やゝ深くなりて、其処と見えぬ行先なれど、岨そばの懸路かけちの一筋に迷ふ方なきをしるべにてぞ分けける。人々あまた侍にも、この道を分けける心ざしは浅からざらんかしなど見渡さる。

「ことさらに心ざす事」について、位藤邦生氏は「亡夫公宗の菩提を弔う事であつたのであろうか。それとも、家門の安全を願うことであつたのであろうか」と推測されている（註）。しかし、靈鷲寺へは「踏みなるゝ山路」であつたことは先に引用した本文に記されているとおりであり、また靈鷲寺は禪宗であることから（註）、菩提を弔うためや現世利益を求めていることは考えにくく、ここはやはり談義を聴聞すること、信仰上の疑問を明かすということが、積雪を厭わず出かけた目的であらうと考えられる。それ程に、「生死を出づ」ることは作者にとつて解決したい問題であつたのであろう。

作者が「生死を出づ」る方法を積極的に求めた思いを表白するのは、次の文である。

厭ふといへど存するは人の身、惜しむといへど死するは人の命也。老たるは理の道とて留まらず、若きは不定の境とて止めがたし。されば、あはれと言ひなつかしと思ふも、たゞ刹那の語らひ、須臾しゅんの馴染なじみなり。何に心を止め、何れの所にをいてから（うか）き世を厭はざるべき。いかにして堅固の道心を勧め侍べきや。大方、諸法は一心より生ずといへり。心の善悪によりて物に善悪あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心のこれなり。業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き悪には勝つとも言へるなるべし。妙法（註）の功能は因果の道に越え、大乘の作用は邪正なし。この法の力にあらずは、いかでかこれらの重き咎を滅する道あらん。よく常に一心を修むべきなり。

それたゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず。悪

にはいかにも遠ざかり、善には必ず近付くべし。麻の中の蓬は矯めざるに直く、松にかゝる葛は自ら千尋に昇るといへる、まことなるべし。

ここには、心の善なる部分を信じ、精進によつて心を善く保ち自律せしめることにより解脱へ向かうとしている姿勢が明らかに示されている。「諸法は一心より生ずといへり」は、『華嚴經』の「三界虚妄但是心作。十二緣分。是皆依心」(註10)との根本理念に基づく唯心思想に依るものと考えられる。『織田仏教大辞典』(「三界唯一心」の項)によると、『華嚴經』中の「三界所有唯是一心」や「心如工画師」画種種五陰「一切世界中無三法而不造 如心仏亦爾 如心衆生然 心仏及衆生 是三無差別」などから日本において創造されたと考えられている偈、「三界唯一心 心外無三別法」心仏及衆生 是三無差別」(註11)は、源信の『自行略記』を嚆矢として巷間に流布していたようである。これらに拠つた表現ではないだろうか。

また、ここには『妻鏡』の次のような箇所と類似表現や類似の発想(傍線部)が見られ、⑥の所説は作者の関心のある所に近く注目される(註12)。

① 一生の間、悪には進み善には物憂心のみ有て、心中に悪業をのみ造り積む。食欲は是餓鬼の業因なれば、此身破るゝ時、餓鬼の身と現じ、瞋恚は地獄の業因なれば、死ては地獄の猛火と成て身をこがし、愚痴は畜生の業因なれば、当来には畜生の姿と成て、残害の苦を受く。

② 凡そ人は皆心より沈み浮ぶなるべし。生死を離れんと思ふ志し深人は、必ず菩提を証し、其志し無き者は、輪廻して昇沈の果報を受く。

③ 「我も今日頭陀の間に、不思議の事を見たり。(中略)老少不定の理通がたく、盛者必衰の謂を不^{いはれ}免。朝より夕べに不^{あした}及して空^{むなし}く成つる不思議さよ」と仰有けり。凡そ生死無常は、心に任^なぬ習にて、二度間に帰ること希也。老て又若きに帰る事なし。

④ 何事も皆因果の理り、先生の宿業の報なれば、強に悲み、強に喜ぶべきに非ず。因果必然の道理、善悪

の果は必ず善惡の因より生ずる者也。此善惡の二つは、共に輪廻の業として、昇沈の果報を受べし。又世善を修して、世間の福報を感じ、仏法を行じて、仏果菩提に到るべし。小因大果と云て、纔に善惡の業因に依て、多く善惡の果を感じべし。喩ば草木等の一粒の種を植て、百千の実を結が如し。

⑤ 觀經の發起には、韋提希夫人、法華の不思議は、龍女が成仏を説たり。女人罪重事を知なば、心を改めて一旦の夢の世の名利の営みを捨て、生々世々に身を助くべき仏法修行に趣くべし。一生が間、惡には進み善には退心のみあり。弥よ暗よりくらきに入り、深より深に沈むべき態のみあり。凡そ業は秤りの如し。重き方へ引べし。若人一生が間の善と與惡、若は一年一月一日一時を過す間に造る所の善業と惡業と、勝劣を校量せんに惡勝れば惡道に落ち、善勝れば善生を得べし。

⑥ 亦直に惡を不レ行、善には進み惡には退く心有共、持て是を不レ可レ思。一度は浮べ共、一度は沈むべし。然者、止惡修レ善『惡を止め善を修する』の心を地として、此の上に此度正しく生死を離れ、菩提を可レ証有縁の行を立べし。其行と者、悟入門には心地修行、口称念仏也。此二行は多聞広学を不レ撰、有智無智を不レ論。信心堅固にして、仏教に随順し、昼夜精進して智識教をたがへざれば、直に生死を離れ、菩提に到事、掌を指すよりも易しとす。其心地と者、四家の大乘並に宗門に勧むる所の修行也。(中略)次に、口称念仏と者、機の利鈍を不レ取、罪福の多少を不レ撰。直に本願を信じて余行を不レ兼。一心に称念して不レ怠。決定往生の業とす。謂る一心と者、三心也。三心と者、信の一字也。然ば信の一字に落付なば、三心も捨つべし。念仏の一行に落付なば、信の一字も捨べし。

同書は、一応無住の作、一三〇〇年頃成立とされている。作者が参考にしたものかどうか今は判断材料を持たないが、時代も近く、無住は臨済宗の僧でもあり、作者が敬慕していた靈鷲寺の長老とは法系も近く、この人物からの教示もあり得ることではないかと思われる。名称からもわかるとおり、『妻鏡』は女人を対象として往生を説くものと考えられたようであり、作者の関心を引くものであったことは容易に想像できるからである。ここで

の叙述からも、「いかにして堅固の道心を勧め」るかについて「彼此」と模索する作者の姿を看取できる。『妻鏡』と作者との関係については次節で考えてみたい。

作者が深く帰依するに至った靈鷲寺は臨済宗の寺と推定される上、「一句を示さる」、「たゞ一句の公案を挙げみて」と作者自身が記していることから、最終的に作者が志したのは禅の修行であったと考えられる。しかし、作者はその公案の内容や自身がその修行によって領解し得たものの具体的な内容を全く記さない。それは作者がいまだ確とした開悟には至っていなかったためであろうか。

靈鷲寺の長老への帰依を表明した章段に引き続いて、作者は己の徹底できなかった修行について、次のように述懐している。

騒ぎ紛るゝ営にてのみ日を暮らせば、座を定むる事は難ければ、立ち居、起き伏す所に心をつけつゝ明かし暮らす。(中略) 明けぬと驚かす鐘の音にも、覚むる現はいつならんと悲し。(中略) 内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さすが世に経る慣ひにて、さりがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

夫公宗刑死後も生き抜いてゆく道を選び取った作者は、現実には生きている己を捨て去るわけにはいかなかったのである。作者は、西園寺家当主たる一子実俊の養育にあたり、西園寺家を再び興隆させることをその身に背負いながら生きていかざるを得なかった。『竹むきが記』下巻において作者は頻繁に物詣や参籠・談義聴聞などを行っている(註1)。それらの中には観音信仰に基づく現世利益を求めての行動もある。例えば、康永四年正月と思われる春日詣では、

和光同塵の垂跡、平等方便の利益^{やく}には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法樂は、随喜^{あみ}の笑を含みましくて、二世の願成就せしめ給とかや。

としている。また、貞和三年正月の初瀬詣では、

いかに思ひ初めけるにか、初瀬の観音を頼み奉りて、朝ごとに香花を供養しなど侍しを、なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず、願など立て置く事あれど、遙けき道にすがくしくも思ひ立たれず、年月を送る程に、貞和三年正月に夢想の事あるに驚きて、忍びつゝぞ思ひ立ち侍。

(中略) 年比持ち奉れる本尊を中尊として、三十三体を造り供養し侍を、ことさらこの寺にて供養すべく思ひ給へし、その心ざしをぞ遂げぬる。過ぎにし頃より家門の事わづらはしき子細ども侍うへ、大方代々の流れ久しかるべき安全を、思ひ心ざしなるべし。

観音の利生方便は異なる上、この山の霊地、世に勝れて、一度もこの地を踏む者あらば、長く三惡道に墮つべからずなどぞ申侍。(中略) 現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし。

と記している。「なべて神仏をも恨めしく思ひし世」は、公宗の事件前後のことを指していると推量されるが、「年比持ち奉れる本尊」からもわかるように、長期にわたる初瀬観音への帰依がうかがわれる。また、「大方代々の流れ久しかるべき安全を、思ひ心ざし」は文脈から西園寺家にかかわるものであったと思われる。さらに、同じ年の十二月には、十一面観音を造立しているが、それも「宿願」、「祈念の旨」があつての行動であつた。

宿願侍て、十一面観音の像を造り奉る。御丈、長谷の一丈六尺になぞらへて、一尺六寸とす。仏舍利三粒東寺、御家門相伝也、水晶の塔納寿、十一面卅三体木像、観音経一卷自筆書写、金字札押、料紙、故大納言殿御手、裏を返す、これらを御身中奉籠。貞和三年十二月十八日、三身堂にして供養し奉る。法印静宴なり。いさゝか心の中に祈念の旨侍し。

ここも、その御身に籠めたものから、その宿願は西園寺家にかかわるものであったと推測できる。いずれも現世での利益を求めての行動であつたのである。

一方で「いかにして生死を出づべき」と真摯に問い続けながら、また一方でこの世における利益をも求めるこ

とについて、渡辺静子氏は「作者において、家門意識という現世執着とそこから脱出しようとする宗教的志向との葛藤によって、人生探求、自己確立の立場から飛躍し、道念として人間開眼へ赴く契機をなした」としておられるが^(註)、『竹むきが記』の記述を見る限り作者にそのような深刻な相剋があったとは考えにくい。例えば、先の春日詣においては「二世の願成就せしめ給とかや」とし、初瀬詣でも「現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし」としている。現世・来世二世について、それぞれの利生を求めており、その間に作者内面の葛藤は感じ取ることができない。作者には現世か来世かの選択はなかったといえよう。そのことは、先に引用した述懐にも、端的にあらわれている。ここでは、内（道行）と外（家門安全）という二つの方向で求めるものがあつたので、花鳥風月を眺めやる暇もなく、ひたすら「憂世の色」は捨て去ったと思つていたのに、「心の闇」はなお晴れることがないといつてゐる。作者は、それを徹底して現世を捨てきれなかつたせいだとは考えていないのである。内も外も作者にとっては、同じ次元の希求であつたと思われる。この章段に引き続いて「さるは折につけたる興遊も、世にありがたき住ひにぞありける」と北山第を讚美するもの、その現世利益のあらわれの一環としてとらえたものである。前掲北山第諸堂の描写でも、不断勤行や不断念仏にふれるなど来世を祈ることをも同時に記しており、この二つの希求は作者の中では各々別に意識されながら、それらはまた矛盾なく並存され得る関係であつたとわかる。また、靈鷲寺の長老を喪つた折には、

我、今逢がたき善知識に逢へる宿善を喜ぶといへど、心もとより愚にして、朝には暮を頼み、夕には又明日を後する程に、光陰移り過ぎて、年去り年来りて五の春を送るまで、まことある事なくして今滅後に逢へり。^(順力)
先非を悲しめど、後悔先に立たざれば、恨千万といへど、さらにかひなし。

と、「まことある事な」いまま、ここで作者が言わんとするのは端的に言えば「生死を出づる」道を悟り得ないままということであろうが、善知識と頼んだ長老を喪つたと、虚しく日々を過ごしたことを悔いている。さらに、神明寺参籠での述懐では、

事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし。

と、「心ざしの至らざる」ことを恥じた上、さらなる精進を誓っている。多分に謙遜が含まれてもいようが、同様なことを重ねて記していること、己の信仰については率直に記していることなどから、作者が少なくとも自身では、開悟できてはいないと意識していたであろうことが確認できるのである。

本節では、浄土教思想を中心に、「いかにして生死を出づべき」との不審を発端として、作者が求道していった道筋を辿ってみた。西園寺家当主の母として現実の生活を捨てられない立場の者にとり、解脱は容易に到達できようなものでなかったことは自明ではあるが、『竹むきが記』に見える作者の態度には、己の納得がいくまであくまでも追尋する姿勢、己の心にまやかしを許さない峻烈な態度、真摯な強さを見て取ることができよう。

注

- 1 『増鏡』本文は、時枝誠記氏・木藤才蔵氏校注『増鏡』（『日本古典文学大系』87『神皇正統記 増鏡』 岩波書店、昭和40 所収）による。

- 2 『京都坊目誌』（『京都叢書』第十四卷所収）には、次のようにある。「〔内は、原割注。

西園寺 高德寺町東側三百五十六番地の一にあり。〔天寧寺の南隣〕浄土宗鎮西派知恩院に属し。宝樹山竹林院と号す。本尊丈六阿弥陀仏は恵心の作なり。元。東山雲居寺の安置仏なりと云ふ。当寺初め北山にありて。真言宗。

明恵派なり。西園寺公経の建立して。一品寛勝法親王を以て開基とす。永仁元年十二月二日供養。〔或云嘉禄元年〕其結構善美を尽す。其体増鏡に見へたり。文和三年京師室町頭今の竹園町に遷す。天文二十三年。僧縁誉之を

中興し当宗とす。（下略）

西園寺は初め真言宗で、天文二十三年（一五五四）に中興され浄土宗に改宗したとされている。時代も下る上、どのような史料に拠ったのか不明だが、仮にこれに従うと作者の時代には、真言宗であったことになる。

3 志田延義氏校注『梁塵秘抄』（『日本古典文学大系』73『和漢朗詠集 梁塵秘抄』岩波書店、昭和40年所収）による。

4 『観無量寿経』の書き下し文は、岩波文庫『浄土三部経』所収による。『観無量寿経』後半部「散心の凡夫、往生をうる九種の方法」。

5 善導『観無量寿仏経疏』巻第四「観経正宗分散善義」（『大正新脩大蔵経』第三十七巻 經疏部五所収）。

6 塚本善隆『四十八巻伝と知恩院』日本絵巻物全集13『法然上人絵伝』（角川書店、昭和44・3）所収。なお、詞書本文の引用も本書による。

7 「『竹むきが記』の引歌」（『女流日記文学講座』第六巻『建礼門院右京大夫集 うたたね・竹むきが記』（勉誠社、平成2年所収）

8 「『竹むきが記』の特質」（『中世文芸』第44号、昭和44・7）

9 位藤氏は前掲論文（注8）において、「りやうしゆ寺」について『和漢禪刹次第』、『山城名勝志』などから、北山の靈鷲寺であろうと推測され、名子の私淑した長老は仏通禪師かと考えられた。ちなみに『山城名勝志』巻第二十一

（『増補京都叢書』第七巻所収）「靈鷲寺」の項、割注には、「和漢禪刹次第云北山開山靈岩和尚嗣三翁」普明国師語録云二世仏通禪師」とある。岩佐氏は「『竹むきが記』私注（下巻）」（『国語国文』第四一巻第三号、昭和47・

3）において、位藤氏の所説を『日本仏家人名辞書』などで敷衍され、「いまの長老」はやはり二世長老となつて間もない仏通禪師意翁円浄であろうとされている。

10 六十巻『華嚴経』巻第二十五（『大正新脩大蔵経』第九巻 華嚴部上他所収）。

11 「三界所有…」は、八十巻『華嚴経』巻第三十七（『大正新脩大蔵経』第十巻 華嚴部下所収）。「心如工画師…」は、前掲六十巻『華嚴経』巻第十。

12 『妻鏡』本文は、宮坂有勝氏校注『妻鏡』（『日本古典文学大系』83『仮名法語集』岩波書店、昭39所収）による。

13 『竹むきが記』における物語・参籠・談義聴聞などに関する記事は次のとおりである。

- ① 北小路念仏、二位殿に同道（建武五・三） ② 天王寺・住吉詣（暦応二・二） ③ 石山詣（暦応五・二） ④ 若宮詣（暦応五・三） ⑤ 賀茂社詣（康永四・二） ⑥ 八幡宮詣（康永四・十） ⑦ 春日詣（康永四・正）

⑧ 靈鷲寺談義（貞和元・十二） ⑨ 初瀬詣（貞和三・正） ⑩ 十一面観音供養（貞和三・十二） ⑪

梅尾詣（貞和四・三） ⑫ 神明寺参籠（貞和五・二） ⑬ 日野塔頭詣（貞和五・七）

14 『中世日記文学序説』（第三章「鎌倉後期の女性の日記」第五節『竹むきが記』の無常観） 新典社、平1）

第二節 『竹むきが記』作者の宗教への想念

一 靈鷲寺とその長老

前節において、『竹むきが記』作者の宗教的行動の軌跡をおつたが、本項では、最終的に作者が指導を仰いだ靈鷲寺の長老およびその法系についていまいし詳しくみておきたい。

先に確認した如く、浄土教思想に納得できないものを感じた作者は、その答えを求めて事のついでをとらえ北山の奥にある靈鷲寺の長老に疑問をぶつける。

この山の奥に靈鷲寺といふ所あり。昔、北野の天神の御遊山の地にて、寺号なども御筆にて侍けるとぞ申伝へたる。その跡もなく、葉山の繁りにて侍けるを、後西園寺殿御帰依侍ける僧、この山を開かれけるより、仏法の地となりけり。今の長老、道学ともに其徳高く聞ゆ。この山に過ぎにし跡を残され侍を、代々の所に移し聞ゆべきを、いまだそのまゝにてをはすれば、踏みなるゝ山路にて対面の序も侍れば、「如何にしてかまさに生死を出づべからん」と尋ね侍に、一句を示さるゝ事あり。更に又言葉なし。それよりこゝをあけるに、思ひ得る方ぞなき。されども自ら不審もあれば、尋ぬる事もありて過ぐる程に、まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知らるゝ。

作者の疑問が一気に氷解することはなかったものの、この長老に師事して仏道修行をしてゆこうと決めたと記している。その長老が示寂した折の作者の感想は次のとおりである。

遂に七月八日未の刻に滅に入給。たゞ眠れる如くにして、威儀正しく見え給ふ。仏法の光は猶この山にのみ挑^かげ給へりと聞えつる灯火も、かく影かくし給へれば、既に法滅の期にやと心細くなん。(中略)我、今逢が

たき善知識に逢へる宿善を喜ぶといへど、心もとより愚にして、朝には暮を頼み、夕には又明日を後する程に、光陰移り過ぎて、年去り年来りて五の春を送るまで、まことある事なくして今滅後に逢へり。先非を悲しめど、後悔先に立たざれば、恨千万といへど、さらにかひなし。

この悲嘆と悔悟から、作者の長老への敬愛の程がよく伝わってくる。さらに、貞和五年二月、別行に洛西に出かけていた作者のもとに亡き長老の後に指導者として頼っていた長老が訪れた。その折にも、作者は、「昔ながらに待ち付け聞えましかば、耳を喜ばしむる言葉の末もあらましをと、なをそのかみそ偲ばれ侍ける」としている。作者がいかに亡き長老を頼りにし慕っていたかを物語るものである。

この靈鷲寺の長老は仏通禪師意翁円淨であらうとされている^(註1)。そこで、靈鷲寺の長老について、その法系を検討してみたい。

『和漢禪刹次第』『日本諸国諸山之禅院』のうち、「五畿内」の項に、
同（山城州）靈鷲寺。「北山。開山靈岩和上。嗣一翁。」

とある^(註2)。また、『山城名勝志』巻第二十一には、「靈鷲寺」の項があり、次のように記されている^(註3)。

○靈鷲寺「和漢禪刹次第云北山開山靈岩和尚嗣一翁／普明国師語録云二世仏通禪師」

永享日録云永享八年七月十九日靈鷲寺御成以来二十八日伺之

管見記云文龜三年正月二十三日靈鷲寺進^{ナリ}佳例「扇并十帖」為^{ナリ}侍者僧、

永享八年（一四三六）、文龜三年（一五〇三）とかなり時代は下るが、靈鷲寺について言及するものを挙げてみる。割注にある『普明国師語録』とは、『智覚普明国師春屋和尚語録』のこと、その巻第三「陞座下」に、「北山靈鷲寺二世仏通禪師三十三回忌請」とあることを指していると思われる^(註4)。『普明国師語録』の「仏通禪師三十三回忌」における陞座の記事の前後の記事を次に掲げる（陞座の内容はこれを略す）。

為ニ先考了性先妣円和三十二年忌請ニ

北山円応開山大朴和尚三十三回忌請

康暦二年四月八日江州景瑞山金剛禪寺仏殿慶讃

北山靈鷲寺第二世仏通禪師三十三回忌請

土岐予州太守雲岫慶公居士断七請

施主請預修大祥忌辰

永徳二年七月十九日。承ニ大丞相命ニ就ニ于等持禪院ニ。為ニ大聖寺殿従一品無相円公大禪定尼尽七忌辰ニ。丞相

自書ニ金剛經ニ。

ここに名前の出ている人物を、『日本仏家人名辞書』『国史大辞典』などで検索してみる。まず、善入黙菴は、臨済宗等持寺の僧で応安六年（一三七三）六月十七日寂である。したがって七周忌は康暦元年（一三七九）に行われたはずである。次の「了性」「円和」については該当する人物名の掲載がなく判明しない。普明国師春屋妙葩の父母であるのかどうかも確認できない。大朴は、暦応二年に北山に円応寺を開き、貞和二年（一三四六）正月二十八日に示寂。その三十三回忌は、永和四年（一三七八）のことであろう。また、「土岐予州太守雲岫慶公居士」は、『尊卑分脉』に土岐頼清の息つまり土岐頼遠の甥にあたるとして直氏なる人物がそれにあたるのではないかと思われる（注）。直氏には、「伊与守 宮内少輔 ーー出家 法名信慶 康暦二十一十四死」と注されている。もしこの人物であるとすれば、「断七」、四十九日の法会は康暦三年（一三八一）正月三日に行われたはずである。次の「大祥忌辰」は、施主が誰なのか不明である。永徳二年七月の大聖寺殿、無相円公大禪定尼は、『空華日用工夫略集』永徳二年七月十九日条に「十九日府君就ニ于等持院ニ。為ニ従一品尽七忌ニ。重設ニ千僧会ニ。天竜普明国師陞座。」（注）とあるのに符合する。同書にはこれ以前（同年六月十四日及び七月二日条）に、次のような記事を見いだせる。

(六月) 十四日岡松殿一品禪尼既逝矣。

(七月) 二日左丞相府君為_ニ從一品大聖寺無相園公禪尼_一。預為_レ弁_ニ五七忌仏事_一。就_ニ等持禪院_一。千僧勝會。命_レ余陞座。(中略) 府君長齋。自写_ニ金剛般若經_一。

これによると、六月十四日に亡くなった禪尼は、「岡松一品」と号した日野宣子(『尊卑分脉』)であり、その法名は「大聖寺無相園公禪尼」(『集韻』に「園、或作_レ圓」とある)であったと判明する。彼女は、作者日野名子の妹である。そして、「大丞相」は、足利義満のことである。これらの推定年次を入れて並べると次のようになる。

善入默菴七周忌 康曆元年(一三七九) 六月

了性・円和三十三回忌 不明

円心三十三回忌 永和四年(一三七八) 正月

康曆二年(一三八〇) 四月八日 金剛禪寺仏殿慶讃

仏通禪師三十三回忌 不明

土岐直氏断七忌 康曆三年(一三八一) 正月

施主 不明

永徳二年(一三八二) 七月十九日 日野宣子尽七忌

默菴七周忌の年次が不審ではあるが、この語録の「陞座」の巻がほぼ日付の順に記事を並べていることが推量できる。それに従うと、「靈鷲寺第二世仏通禪師三十三回忌」は、康曆二年(一三八〇) 四月から、永徳二年(一三八二) 七月の間、さらに限定した言い方が許されるとすれば、康曆二年四月から翌年正月までの間に行われたと考えることができる。とすれば、仏通禪師の没年は、貞和四年(一三四八)、あるいは広く考えてその年から観応二年(一三五二)までの間ということになり、『竹むぎが記』で作者が靈鷲寺の長老の寂滅の日を貞和四年

七月八日としてゐること何ら矛盾しないことになる。このことも、作者のいう「靈鷲寺の長老」が仏通禪師円淨であることを示唆しているといえるのではないだろうか。

さて、靈鷲寺の開山靈岩和上と第二世仏通禪師については、『本朝高僧伝』・『延宝伝燈録』に記載があることが『日本仏家人名辞書』に示されている。両書とも、師奎の手になるもので内容も類似しているので、今は、『本朝高僧伝』（巻第二十四）を挙げておく（注一）。

洛北靈鷲寺沙門良真伝 延宝伝燈録第十九

釈良真号ニ夢嵩一。時人称ニ靈巖一。奥州人也。幼有ニ老成之智一。不レ甘レ処俗。辞レ親出家。遊ニ衍教肆一。該ニ貫ニ藏一。俄嘆。古人糟粕徒勞ニ斟酌一。棄去参ニ一翁豪公一。侍ニ長樂函丈一者十年。卒徹ニ禪源一。翁指見ニ仏光禪師一。光前宵夢。一僧自ニ嵩山少林寺一來。持ニ十六応真像一惠レ之。十五幀而欠レ一。怪而問レ之。曰。明日有ニ肉身大士一來。斯其一也。翌晨真至。光笑而参堂。及レ卻ニ回長樂一。一翁既寂矣。諸徒以下入ニ仏光炉竈來一。欲以下ニ叔父一待レ之。真不レ可上レ洛。依ニ大明国師于東福一。充ニ典座之職一。大明禪余講ニ説經論一。真每レ臨ニ其席一屢致ニ問難一。其徒噉レ之。真柴崖去。入ニ城北靈巖一。閉レ門不ニ与レ世接一。大相国実衡藤公〔西園寺〕愛ニ真枯澹一。相從論レ道。因締ニ小廬於靈鷲一。以居。禪榻蕭然万象為レ徒。藤公欲レ広ニ其居一。真曰。風穴艸庵。楊岐疎壁。古人尚爾。況於ニ吾儕一乎。学人往来無ニ虚日一。随レ叩応レ之。或問。師何姓。真曰。無姓。姓性空故。問。寿算多少。真曰。与ニ虚空一同年。一日無レ病澡浴新衣。召ニ諸徒一曰。我今日行矣。汝等努力。過ニ一紀一後。当ニ発レ壙視レ之。全身不レ壞矣。索レ筆書レ偈。書訖端坐。侍僧撼レ之已脱去。門人檀信等。昇ニ全身一。塔ニ于本山一。至レ期高弟等議曰。色体之壞与ニ不壞一。法身何干哉。慎勿レ動ニ那伽定一。竟不レ発焉。有ニ嗣法弟子二人一。釈円淨字意翁。開ニ因之興聖一。後光嚴帝勅賜ニ仏通禪師一。釈良忠字直翁。為ニ慈徳第一代一。

これによると良真是、初め經論による教えにおもむいたが、後、禪に転じ、長樂一翁院豪禪師に師事している。

その後一翁の師にあたる仏光禪師無学祖元にも師事し、東福寺第三世大明国師無関普門より典座職を与えられた。院豪と祖元は、臨濟宗「円覚寺派」(『望月仏教大辞典』)の僧であり、普門は聖一国師円爾弁円(臨濟宗東福寺派)に師事しており、東福寺第三世として十一年間住持をつとめている。その後龜山天皇の帰依を受け、南禅寺の開山となった僧である。それらの僧のもとで修行をした良真は、煩わしい人との関係を厭い、北山の靈巖寺に入った。そこで「大相国実衡」が良真に帰依して、北山靈巖寺に小廬を結ばせたという。「大相国実衡」は「大相国後西園寺実兼」の誤りであろう(実衡祖父)。実衡(一二九〇—一三二六)は、作者の夫公宗の父で、太政大臣になつてはいない。また、右の記事を信ずれば、良真が東福寺の大明国師から典座職を与えられたのは、おそらく普門が東福寺第三世であつた弘安四年(一二八二)から正応四年(一二九一・示寂)の間のことであろう(『国史大辞典』、『日本仏家人名辞書』など)。良真が北山に隠棲したのは、そのしばらく後のことであろうから、正応三年(一二九〇)生まれの実衡では、時代が合わない。『竹むきが記』に「後西園寺殿御帰依侍ける僧、この山を開かれけるより」としている如く、「大相国」とは実兼(一二四九—一三一五)を指していると考えておいてよいと思われる。

北山に「靈巖寺」という寺があつたことは、先の『山城名勝志』巻之七に次のような記事があり確認できる。

○靈巖寺「拾芥抄云／北山円行」

元享釈書云釈円行ハ果隣法師ノ之徒ナリ也入テ唐ニ從テ青龍寺ノ義真和尚ニ受テ兩部ノ密教ヲ承和六年歸テ居ス靈巖寺ニ「密宗血脉抄云伝燈大法師位円行建ニ立靈巖寺ニ」

今昔物語ニ云北山ニ靈巖寺ト云寺有ケリ此ノ寺ハ妙見ノ現ジ給フ所也(下略)

公事根源云御燈「三月三日」これは天子の北斗に燈明を奉り給ふ也昔は北山靈岩寺などいふ所にてたかき峯に火をともして北辰に供せられけるよし御記などにもみえたり

西宮抄云「三月三日御燈」奉ル御燈テ於靈巖寺ニ「仁和以往被レ奉ニ円成寺ニ」(中略)故ニ因ニ旧例ニ於テ靈巖寺

ニ可キノ奉状仰ゼ了ヌ

園太曆^ニ云観応三年二月十五日今日未ノ尅許リ有^レ火後聞^ク北山ノ奥靈巖^ニ禪庵^云

前三者には特に問題はないが、『園太曆』のいう「北山ノ奥靈巖禪庵」がこの靈巖寺をさしているものなのかどうか疑義がある。『大日本史料』は同日条に「靈巖寺火アリ」として、『園太曆』の記事を掲載し、両寺院を同一視している。しかし、次のような点から「北山ノ奥靈巖禪庵」は、靈巖寺ではなく靈鷲寺のことを指しているものと考えられる。

一、靈巖寺の開基円行は真言宗の僧であり（『日本仏家人名辞書』）、靈巖寺は禅宗寺院ではなかったと思われること。ただし、この時代においても真言寺院であったのかどうか、確認はできない。

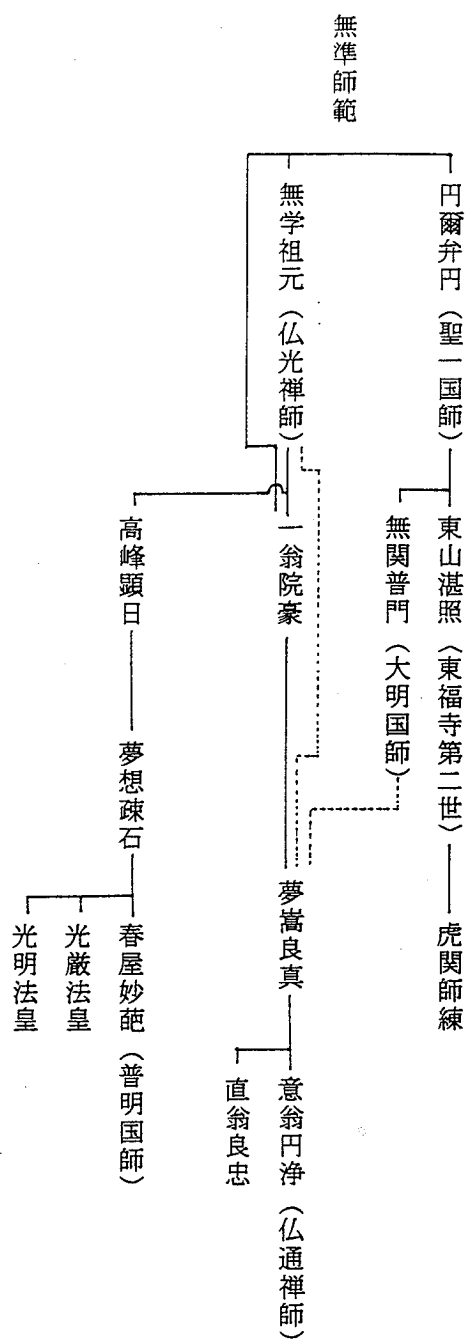
一、前三者については単に「北山」とのみであるのに、『園太曆』では、「靈巖禪庵」の場所を「北山ノ奥」としており、所在が異なっていると思われること。

一、「禪庵」という表記が、真言寺院で、御燈を奉られるような格式を保っていた靈巖寺を指しているとは考えにくいこと。

一、良真が「靈巖」と呼ばれていたことから、「靈巖禪庵」とは良真禪庵、良真の居住していた禪庵の意とも解し得ること。

岩佐美代子氏は、良真と実兼の接触を正安初年頃かと推測され、『読史備要』忌日索引から良真の没年を延元四年（暦応二年）とされた上、この「靈巖禪庵」を良真の旧居と考えておられる（注8）。

良真の嗣法に、良忠と作者が帰依したと考えられる円淨がいる。これらの法系に関する記事を簡単に図示すると左のとおりである（『望月仏教大辞典』・竹貫元勝氏『日本禅宗史』所載の諸宗派系譜も参照し、適宜加除した）（注9）。

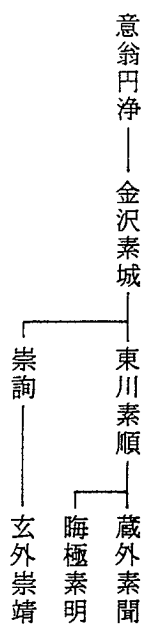


また、玉村竹二氏が紹介された史料『建仁寺両足院甲本本邦禅林宗派』には次のようにある^(註10)。関係分を抄出する。

一翁院豪——靈岩良真——夢嵩良英——意翁円浄

この宗派図では、他の宗派図が一人の人物としている「夢嵩良真」を、「靈岩良真」・「夢嵩良英」といった二人の人物としており、いささかその真偽については不審がある。先に紹介した『智覚普明国師春屋和尚語録』巻第三「陞座下」に「北山靈鷲寺第二世仏通禪師三十三回忌請」とあり、靈鷲寺の二世は円浄以外あり得ない。この宗派図が二人にしているのは誤りであろう。良真が「靈巖」とも呼ばれていたことが混乱を生じさせたのかもしれない。

さらに、同系統の『建仁寺兩足院甲本本邦禪林宗派』に見られる同院高峰東叟の書入を紹介されているので、これも関係分を抄出する。



※「崇詢」の法諱は不明

これによると、円浄には、素城という嗣法がいたことになっており、作者との関係からも興味深い。円浄の死後、作者が「残りの灯火と頼み侍長老」と記している人物は、円浄の嗣法と考えられるが、この書入を信ずるに足るものとすれば、それは素城であるということになる。

作者の帰依した円浄、円浄の師良真の教え・思想内容について、管見に入る範囲では「語録」なども存在せず、例えば公案などの具体的内容を知る手がかりが得られない。したがって以下の項では、宗教史家の禅宗史などを参照しながら、作者の宗教的想念について、『竹むきが記』の記述から探っていくことにしたい。

二 作者の志向した修行

ここで、作者が『竹むきが記』に己の修行について記している箇所を再び掲げて、その修行がどのようなものを目指したものであったのかを確認しておく必要がある。

まず、靈鷲寺の長老の導きによつて「まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそ」と思い定めた作者は、次のように記す。

騒ぎ紛るゝ營にてのみ日を暮らせば、座を定むる事は難ければ、立ち居、起き伏す所に心をつけつゝ明かし暮らす。(中略)内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。(中略)憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

ここでの叙述からは、別行や談義聴聞などの特別な場を設定しての修行以外に、日常の生活をこなしながらの修行も志していることがわかる。

さらに、貞和二年五月の大宮入道右大臣(季衡)の死去に人の世の無常を更に強く意識させられての道心の表白では、次のように記している。

厭ふといへど存するは人の身、惜しむといへど死するは人の命也。老たるは理の道とて留まらず、若きは不定の境とて止めがたし。されば、あはれと言ひなつかしと思ふも、たゞ刹那の語らひ、須臾の馴染なり。何に心を止め、何れの所にをいてからき世を厭はざるべき。いかにして堅固の道心を勧め待べきや。大方、諸法は一心より生ずといへり。心の善惡によりて物に善惡あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心のこれなり。業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き惡には勝つとも言へるなるべし。妙法の内容は因果の道に越え、大乘の作用は邪正なし。この法の力にあらずは、いかでかこれらの重き咎を滅する道あらん。よく常に一心を修むべきなり。

それたゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず。惡にはいかにも遠ざかり、善には必ず近づくべし。麻の中の蓬は矯めざるに直く、松にかゝる葛は自ら千尋に

昇るといへる、まことなるべし。

ここでも、「これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず」と常時、心にかける形で修行も心がけていたことがわかる。作者が己の修行の内容について比較的具体的に記しているのは、この箇所のみである。この章段の詳しい検討は次項に譲る。

貞和五年二月、京の西、神明寺に別行を志して出かけた折には、次のような感慨を漏らしている。

その夜、たゞ一人起き居たるに、雨俄に降り出でて、窓を打つ音もおどろくし。されど一通りにて止みぬれば、山月窓に臨みて、起き居る夜半の友たり。峰々の嵐は扉をたゞきて眠を覚ますしるべとなる。事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし。後ざまには南なる庵に宿しつゝ、各座を並べて眠を覚ますべし。

ここでは、別行といつてわざわざ京の西効まで出かけている。「居所を改めたる」は、単に修行の場所のことを言っているものなのか、それとも作者自身の心のあり所のことを言っているものなのだろうか。ついで「心ざしの至らざる事」を恥じていることから、また、これが神明寺での別行の最中の述懐であることから、「居所」は修行の場所のことを言っていると考えられる。ここで作者が、「且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし」と言っているのは修行の場においての覚悟のことであろう。

以上のことから、作者は特別な場を設定しての修行とともに日常生活においても常に修行に心を懸けて過ごすことを念頭においていたことがわかる。

それでは、禅の修行とはどのようなものなのであろうか。赤松俊秀氏は「一遍上人の時宗について」という論文の中で、時宗が武士層に受け入れられた要因の一つとして「時宗の教義に於ては神仏がいとも密接に結び付いていること」を挙げ、それが要因となった理由を、次のようにとらえておられる（注1）。

仏教の究極の理想である慈悲心を以て、一切衆生を平等に救済せんとする所謂一乗の精神が、我が国に於いては惟神道に於て、事実に顕現しており、この事実が存したことに依つて、仏教渡来当時の国民は、極めて容易に、仏教の教理の何たるかを理解し得たのであつて、かかる事実を胎盤としなくては、仏教が流布し得なかつたことは疑う可からざる事実である。仏教はかくの如く流布の当初から神祇崇拜に依つて扶けられていた。(下略)

そのような時宗の在り方に比較して、鎌倉時代後期の武士の信仰心を支配したものととしてよく挙げられる禅宗について、その本来的な性質を次のように概括されている。

我が国の仏教は先にも述べた如く、国民の醇乎たる敬神觀念に依つて育くまれただけに、聖徳太子以来教學の中心問題は、常に救済の主体である仏心の究明に向けられており、信仰も亦教學と歩調を一にして、仏を絶対の慈悲者として仰信して来た。然るに禅宗では、仏心論は問題ではなく、超越的な仏の存在などは、全然認められない。ただ問題は、思念する自己の本体が何であるかと云うことであり、坐禅の間、直観に依つて、これを捉え得た者のみが、仏として認められるのである。日本仏教との相違は、根本的と云わなければならないであらう。

氏は、禅宗が鎌倉時代後期に至り本質的なものを變容させることによって、ようやく鎌倉武士に受容され得たことを喚起すべきであるとしておられる。

この赤松氏の所説からいうと、禅宗の修行とは、「思念する自己の本体が何であるか」を「坐禅の間、直観に依つて」捉えること、すなわちそれが「悟り」ということであらうが、それを目指すことと考えられる。この「悟り」について、鈴木大拙氏は、次のように述べておられる(註12)。

悟は斯くの如く禅の全てである。禅は悟を以つて始まり悟を以つて終る。悟の無き処に禅は無い。古人の云つたやうに「以悟為則」である。悟は單なる寂靜の心的状態でもなく、精神活動の停止でもない。それは認

識的特性を帯びたる内的経験であり、そこには或る種の醒覚がある、それが相対的な意識の領域から出て来る、一つの転回である、而してそれが我々の日常生活を特徴づける普通の経験様式そのものから生じてくるのである。

その「悟り」には、「畢竟他人に伝へ得ず、又他人より習得し得ざる物が存する」^(註15)という困難がある。しかも禪の修行は「必ず名師の鉗鎚の下に、来らんことを要する。参学者乃ちこの下に来りて、汝が便々たる狸の肚裡の有象無象を吐却し了ぜよ。これを尽すのでなければ畢竟じて頭に迷ひ、影を認むるの癡をまぬがることが出来ぬ」^(註16)とされる。それはつまり「禪宗本来の理想である問答商量といふことが重んぜられ、人と人との触れ合い（したがって、面授といふことに通ずる）を貴んだ」^(註17)ことにつながつてゆくのであろう。

名師に直接面授することにより教示を得ることが修行の基本にあれば、当然そのような場で重要視されるのが公案である。

禪の公案について、鈴木氏は次のように述べておられる^(註18)。

公案には義路あるが如くにして義路なく、これに理智分別を加へ得べきが如くにして、然かも近づいて見れば手脚の着く可きところがない。題目の如く経巻を目標として、奇特の利益を願ふものでもない、また阿字観のやうに無意義の符号をたよりて器械的に精神の凝集を謀るものでもない。また弥陀の名号を唱へて、ある客観体の加被力を待つものでもない。理なきが如く、理あるが如く、一条の脈絡の通ずるが如く、また通ぜざるが如きところに向つて一大疑念を挟み、この疑念をたどりて最後決着のところに到らんとするのである。

この公案の非論理性、「禪なるものは到底分別計較上の憶測を以て手に入れ得べきものでないこと」^(註19)が、禪の修行を困難なものにしている。

禪においては悟入の方便として公案を拈提する事が必要である。公案を工夫し、その所解を師に呈して問答

し、師に誘掖されて悟入境に入るのである。然し公案といい、師の問といい、誠に没論理的であつて、これを理解するのは至難の事であつた。

右は、藤岡大拙氏が、禪が多数の受容層をもたなかつた理由としてあげておられるものである^(註18)。しかし、作者は、このような難解さにもたじろがなかつた。むしろ日々、公案工夫して過ごすことにこそ意味を見いだしていたかのである。

先の鈴木氏の所説にもあつた如く、悟りは、「我々の日常生活を特徴づける普通の経験様式そのものから生じて」こなければならぬのである。

禪の悟入方便たる公案の工夫も、かかる日常生活の場においてなすべきものであつたから、抱子弄孫著衣喫飯裏に一種不思議境界を発現しようと教えた。^(中略)別にひまを設けて専心に坐禅する必要もない。十二時中の生活の瞬間瞬間が見性への方便となるのである^(註19)。

叙上をごく大まかにまとめると、禪の修行は、名師の教示のもと、「著衣喫飯」のうちになされ、その修行によって己が悟りを得ることを目指すものであると考えられる。

作者が、『竹むきが記』において繰り返し記している己の修行への志も、まさに右のようなものであつた。作者は、己が悟つたものの具体的内容について全く触れない。それは、作者が未だ悟入の境地に無かつたことの証左でもあるうし、また、そう簡単に転回の瞬間が訪れる性質のものでもない。

作者の靈鷲寺の長老への敬慕がひととおりでないのも、このような禪の修行の在り方に基づいたものであつたとすれば首肯できるのである。優れた師との面授による問答商量が、禪の基本的な、かつ重要な修行の形態であつた。作者が「耳を喜ばしむる言葉の末」と靈鷲寺の長老を偲び、師亡き後の指導者として頼む長老に対して、前長老に対するような思いをもてないでいるらしいのも故なしとしない。敬愛する師から示された公案を一途に工夫することが、作者の修行の在り方であつた。このような修行の在り方は、師円浄からの教示が、禅宗本来の、

いわば純粹な在り方に近い形でなされたことを推量させる。靈鷲寺の長老から、祈禱などの、いわゆる融合的なものを一切勤められていないと思われることも、それを示唆していよう。

作者が繰り返し日々の公案工夫を記すのは、このような「方便」によつてこそ、いつか悟入の瞬間を迎えることができるのだという確信を得ていたからこそではないだろうか。そういう意味で、作者は、修行をしていること、そのこと自体が、すなわち己の心を定めることであると考えていたのではないかと思われる。作者にとつては、開悟の瞬間を目指して修行していること、その行為そのものが、心の安定のために最も重要なことであると観ぜられていたのではないだろうか。

三 作者の教説受容の態度

前項で作者の志向した修行では、その行為自体がすなわち作者の目的として位置づけられていたこともあり得たのではないかと考えた。本項では、作者が修行する過程において、談義聴聞や經文の解釈から何を得ていったのかを具体的な叙述からみておきたい。

作者は、『竹むきが記』において、「とかや」、「と云へり」、「とぞ」などと断つて教説や見聞したことなどを引用している。このような事柄について検討することで、作者の教説受容のあり方を明らかにしてみたい。次に、「とかや」「云へり」「とぞ」としている箇所を記載順に掲げる。ただし、他人の言動についての伝聞など、特に宗教的なものに関わらない事柄については、これを除く。例えば、康永元年七月、実俊中将拝賀の折に、「御所さま、中門に出でさせ給ひて御覽侍けるとかや」と記す如きものである。

① 暦応五年二月・石山詣

この尊は金の砂いさぎにて鑄く奉れるとぞ申侍。聖徳太子の前生の御本尊とかや。(中略)これにぞかの御願成就し侍

けるとかや、縁起に細かに侍也。(中略)石の回りめぐりに御帳を掛け奉れるとぞ申侍。聖徳太子は救世観音にておはしますなれば、御本尊なりける故にや侍らん。(中略)僧正の房、この下しもに侍ける、それより礼堂らいだうまで焼けるに、御堂は残りけるとぞ。されば建てられける所の昔より変らざる由申侍は、まことにや侍らん。(中略)河の向へに、いと高き山あり。その峰にうるはしき御社はおはしますとぞ申侍。

②菊亭大納言逝去に触発されての表白

さても猶九品往生の儀を思へば、上中品はまづ置きて、(中略)三宝の名を聞きて即ち往生すと言ひ、或は蓮花の中うちにして十二大劫を満てて花まさに開くる時、観世音大勢至、それが為に諸法の実相除滅罪の法を説き給を聞き終りて、歓喜して即ち菩提心を起すと説けり。(中略)諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為樂。此四句、菩提心開けて天上に昇はる階、煩惱の黒き雲を捨てて愛欲別離の海を渡る舟、八相成道の義果なりと言へり。彼を聞き此を思ふにも、まさに生死を出づべき道は尋ねまほしう侍に、この山の奥に靈鷲寺といふ所あり。

③康永四年正月・春日詣

三笠山の御光さし添ふ所からにや、霞む慣ひも見えず。昔、世を照らさせ給ける、八千反とかや聞き奉る御光、今しも変らせ給はじかしと思ひ続けらるゝも、傍かたわら痛き事ならむかし。(中略)和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法樂は、隨喜みみの笑を含みましゝて、二世の願成就せしめ給とかや。

④貞和二年五月・大宮入道右大臣逝去に触発されての表白

いかにして堅固の道心を勧め侍べきや。大方、諸法は一心より生ずといへり。心の善惡によりて物に善惡あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心のこれなり。業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き

悪には勝つとも言へるなるべし。(中略)悪にはいかにも遠ざかり、善には必ず近付くべし。麻の中の蓬は矯めざるに直く、松にかゝる葛は自ら千尋に昇るといへる、まことなるべし。

⑤貞和三年正月・初瀬詣

観音の利生方便は異なる上、この山の霊地、世に勝れて、一度もこの地を踏む者あらば、長く三惡道に墮つべからずなどぞ申侍。御足に踏ませ給なる瑠璃めなうの石は、天竺国・補陀落山・この山、三界がくの中に三所にのみありと申伝へたるは、まことにや侍らん。

⑥貞和五年、靈鷲寺の有様

「鷄足山の深き道には竹繁りて通ふ跡なく、孤独園おんの昔の庭には人住まず」とかや侍事も思ひよそへられて、まことに鷲の峰には思ひあらはれつゝ、あはれにぞ侍ける。

①・③・⑤は、いずれも縁起の類であり、作者が己の見聞をもとに記したものであろう(註20)。この中で、作者がどのような教説をどのように受容していったのかを知る手がかりとなるものは、②と④である。これについて、検討を加える。

まず、②の前半部、『観無量寿經』に依る表現については前節で詳しく触れた。本項では、後半の「諸行無常」以下の表現について検討してみたい。

ここでは作者は、「八相成道の義果なりと言へり」と、談義聴聞で得た知識か依拠した資料があるかのような表現をとっている。「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽」は、『大般涅槃經』卷下に説かれている偈で、「諸行無常偈」とも「雪山偈」とも言われる。この偈は、「総仏教の大綱なれば各其の宗義に依つて所釈不同なり」(『織田仏教大辞典』)とされているが、ちなみに『織田仏教大辞典』では、次のようにいう。

今、通途の一義を明かせば、諸の三世に遷流する有為法を諸行と名く。諸行は無常にして是れ生滅の法なり、此生滅の法は苦なり。此半偈は流転門なり。此生と滅とを滅し已て生なく滅なきを寂滅とす、寂滅は即ち涅槃

槃是れ樂なり。為樂とは涅槃樂を受くと言ふにあらず、有為の苦に対して寂滅を樂と為すのみ。此半偈は還滅門なり。

また、『仏教語大辞典』（中村元著）では、「もろもろのつくられたものは無常である。生じては滅びる性質のものであり、生じては滅びる。それらの静まることが安樂である」という意であるとしている。この偈に、作者の記すような解釈を添えている文献を探してみると、『栄花物語』、『宝物集』などが挙げられる。それらの表現を次に掲げる。

『栄花物語』卷第三十「つるのはやし」 古本系統梅沢本^(註21)

この中に十六字あり。諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂。「その処何の心かある」と問はば、即ち尊靈答へ給ふべし。「諸行無常は天上に上る智慧」の「橋なり、是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり、生滅滅已は劍の山を越ゆる宝車なり、寂滅為樂は浄土に参る八相成道の義果なり」。(下略)

『宝物集』卷二 吉田本系吉川泰蔵氏蔵本^(註22)

されば諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為樂と観ぜん人、仏法の宝をまうくるもの也。諸行無常は天にのぼる階、是生滅法は愛欲の川をわたる船、生滅々已は劍の山をこゆる車、寂滅為樂は八相成道の化果也。ここで注目したいのは、『竹むきが記』にいう「義果」である。種々の仏教語辞典を見ても「義果」という項目は見いだせない。そこで、『栄花物語』・『宝物集』の諸本間の異動を確認しておく。

○『栄花物語』

異本系統 富岡家旧蔵乙本（『古典文庫』所収による）

寂滅為樂は浄土に生るゝ八相成道の木なり。

流布本系統 住吉大社蔵本（『栄花物語標注』^(註23)による）

じゃくめつゐらくは、じゃうどにまゐる八さうじやうだうの義果也。

○『宝物集』

一卷本系（『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』^{〔註1〕}所収による）

寂滅為樂ハ浄土ニムマレムトオモフ八相成道ノ記果ナリ涅槃經文也

吉田本系 身延山久遠寺本（『古鈔本 宝物集』^{〔註2〕}所収による）

寂滅為樂ハ八相成道ノ記果也。

片仮名古活字三卷本（『統群書類従』所収による）

寂滅為樂ハ八相成道ノ証果也。

『栄花物語』はほとんど「義果」で固定しているようである。一方、『宝物集』では、「化果」・「記果」・「証果」など多様である。最も古態を存していると言われている一卷本には「記果」とある^{〔註26〕}。織田得能氏は、『国文学十二種仏語解釈』において、『栄花物語』のこの部分を取り上げておられる^{〔註27〕}。

義果は義乗の誤なるへし。浄土に参りて八相成道を示現する乗物なるをいふ。

また、同書「再考」の項に、再度取り上げられ、「証果」としている『宝物集』を引用されている。おそらく「義乗」以外の可能性を示されたものであろう。管見の及ぶ範囲でいうならば、『宝物集』諸本には、「義果」とするものは見いだせない。この点だけでいえば、『栄花物語』との近似ということもできよう。

この一文の表記を対照してみる。

『竹むきが記』

『栄花物語』（梅沢本）

『宝物集』（吉川泰雄氏蔵本）

此四句、菩提心開けて天上に昇る階、煩惱の黒き雲を捨てて愛

諸行無常は天上に上る智恵「の」橋なり、是生滅法は愛欲の

諸行無常は天にのぼる階、是生滅法は愛欲の

欲別離の海を渡る舟、

八相成道の義果なりと云へり

河を渡る般若の船なり

生滅滅已は劍の山を越ゆる宝車

なり、寂滅為樂は淨土に参る八相

成道の義果なり

川をわたる船

生滅、已は劍の山をこゆる車、

寂滅為樂は八相成道の化果也

点線を施した部分が『竹むきが記』独自の表現で、波線が『竹むきが記』にない表現である。これをみると、『竹むきが記』は、一句一句について解説したものではなく、四句全体を捉えていつているものであることがわかる。『栄花物語』の「智恵」・「般若の」・「淨土に参る」という装飾的な言い回しはとっていないのに、「煩惱の黒き雲を捨てて」という表現を書き加えている点、作者の関心の在り所をうかがわせる。表現は、概して簡略な『宝物集』に近いといえよう。しかし、語として一般的でもなく、『宝物集』でも使われているとはいえない「義果」を共通して用いていることには、注意しておきたい。

これだけで言えば、『竹むきが記』の表記は、『栄花物語』か、あるいは『栄花物語』と接触した何らかの文献・言説によったものという可能性が考えられる。

また、『栄花物語』との関連で興味深いのは、靈鷲寺の長老の寂滅に際しての作者の感慨である。

靈鷲寺の長老、春の頃よりわづらひ給し、日々に弱りつゝ、仏日すでに涅槃の山に入なんとす。但し、仏の非生に生を唱へ、非滅を現せしめ給しが如くならんかし。惑ひの前には滅に入の相をまことに悲しむ。

前節では、『法然上人行状絵図』詞書との共通表現を見たが、『栄花物語』にも同様の表現が見いだせるのである。

『法然上人行状絵図』第一卷

(註28)

非生に生を現して無憂樹の花をミをふくミ 非滅に滅をとへて 堅固林の風ををいたましむ

『栄花物語』卷第三十「つるのはやし」

八十にして涅槃に入り給ふ。仏日既に涅槃の山に入り給ひなば、生死の闇に惑ふべし。ただしこれは非生に生を唱へ、非滅に滅を現じ給ひしが如く、まことに滅し給はずは、いかに嬉しからんや。

「非生非滅」は、『法華経』「寿命品」を釈した『法華文句』卷九下の次の文によるものである（注）。

又復言其入於涅槃即弘三果疑。如此因果非復一条。皆我方便非三実説也。故名三弘疑。或有レ人云。方便説然燈仏是我之師。然実釈迦現作。非レ生現レ生非レ滅現レ滅。故言又復言其涅槃。以下略

これを見ると、『法然上人行狀絵図』の表現がより正確であると考えられるが、傍線を施した箇所を比較すると、「非生に生を唱へ、非滅を現ぜしめ給しが如く」という『竹むきが記』の表記に近いのは、『栄花物語』の表記であることが明白である。

また、「仏日既に」云々は、『法然上人行狀絵図』には用いられておらず、『栄花物語』には用いられている。

『竹むきが記』と『栄花物語』との類似表現は、もう一箇所見いだせる。貞和五年の靈鷲寺の有様を記す章段⑥である。

「鷄足山の深き道には竹繁りて通ふ跡なく、孤独園おんの昔の庭には人住まず」とかや侍事も思ひよそへられて、まことに驚の峰には思ひあらはれつゝ、あはれにぞ侍ける。

『栄花物語』卷第十五「うたがひ」には、次のようにある。

世の中像法の末になりて、天竺は仏の現れ給ひし界さかひなれども、今は鷄足山の古き道には、竹繁りて人の跡も見えず、孤独園ぼつこえんの昔（の）庭、薄伽梵せううせて人住まずなり、驚の峯には思ひ現れ、鶴の林には声絶えて、迦葉は鐘の声に伝へ、憍梵婆提は四偈を唱へて水と流れなどして、あはれなる末の世にて、仏を造り堂を建て、僧をとぶらひ、力を傾けさせ給ふ。

同様の表現が『三宝絵』中にもある。該当する箇所を引用してみる。

モロコシノ貞観三年二、玄蔵ノ天竺ニユキメグリシ時二、鶏足山ノフルキ室（脚注…前田本「古道」）二ハ、竹シゲリテ人モカヨハズ、孤独苑ノ昔ノ庭二ハ、室ウセテ僧モスマザリケリ。摩竭陀国ニユキテ菩提樹院ヲミレバ、昔ノ国王ノツクレル観音ノ像アリ。

（『新日本古典文学大系』）

ここには、作者が引いている「まことに驚の峰には思ひあらはれつゝ」にあたる表現がない。つまり『栄花物語』の作者によって付け加えられたと思われる表現を、作者が引いているということになる。これによって、『竹むきが記』のこの部分は、作者が『栄花物語』（あるいは『栄花物語』の影響を受けた何らかの文献）の表現を想起してのものであることが推断できるのではないだろうか。

『栄花物語』との類似表現は三箇所あり、そのすべてが靈鷲寺かそれに関わる事柄であることは、注意されてよいと思われる。しかも『栄花物語』から引用された表現は、いわゆる法成寺グループと呼ばれている「うたがひ」、「つるのはやし」からのものであることも、作者の『栄花物語』受容をうかがわせて興味深い。『栄花物語』の法成寺讚美の姿勢は、後述（四項）する作者の北山第讚美の姿勢と相通じるものをもっていると思われるのである。

さて、作者は、これに続けて「彼を聞き此を思ふにも、まさに生死を出づべき道は尋ねまほしう侍」としている。文脈からは、「彼」は『観経』に基づいた説、「此」は、涅槃経に基づいた説を具体的には示すと考えてよいであろう。それと同時に、作者の思考過程の経緯をもあらわした表現でもあろう。『観経』の説明にも「諸行無常偈」の解説にも、「菩提心」が出てきている。『竹むきが記』には「菩提心」が計三箇所出てくるが、次に検討する④の章段に「菩提心は仏身を成ず」とあるのが三番目である。作者にとって、悟りを得るためにまさに必要不可欠なものと観ぜられていたのは、「菩提心」であったということができよう。まず、己が「菩提」を得るために修行しようとする志である。このことは、前項で確認した点と相通じる態度のあらわれでもあろう。

引き続き④について本文を再掲し、検討する。

いかにして堅固の道心を勧め待べきや。大方、諸法は一心より生ずといへり。心の善悪によりて物に善悪あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心のこれなり。業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き悪には勝つとも言へるなるべし。妙法は因果の道に越え、大乘の作用は邪正なし。この法の力にあらずは、いかでかこれらの重き咎を滅する道あらん。よく常に一心を修むべきなり。

それたゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず。悪にはいかにも遠ざかり、善には必ず近付くべし。麻の中の蓬は矯めざるに直く、松にかゝる葛は自ら千尋に昇るといへる、まことなるべし。

「大方、諸法は一心より生ずといへり」は、前節で『華嚴經』による唯心思想によるものではないかと指摘した。この一文の直接の典拠は見いだし得ないが、明恵高弁の『華嚴唯心義』が参考にできよう。この書は、跋文によると、建仁元年（一一二〇）二月、糸野で療養中であつた高弁が在家の女房たちの懇請により、病苦をおして著したものである。今、高弁が解釈の対象とした「如来林菩薩」の偈を、六十巻本『大方広仏華嚴經』により掲げる（注³⁰）。

譬如 _三 工画師	分 _三 布諸彩色 _一
虚妄取 _三 異色 _一	四大無 _三 差別 _一
四大非 _三 彩色 _一	彩色非 _三 四大 _一
不 _レ 離 _三 四大体 _一	而別有 _中 彩色 _上
心非 _三 彩画色 _一	彩画色非 _レ 心
離 _レ 心無 _三 画色 _一	離 _三 画色 _一 無 _レ 心
彼心不 _三 常住 _一	無量難思議

顯_二現一切色_一 各各不_二相知_一
 猶_二如工画師_一 不_レ能_レ知_二画心_一
 当_レ知一切法 其性亦如_レ是
 心如_二工画師_一 画_二種種五陰_一
 一切世間中 無_二法而不_レ造
 如_レ心仏亦爾 如_レ仏衆生然
 心仏及衆生 是三無_二差別_一
 諸仏悉了_二知_一 一切從_レ心轉_一
 若能如_レ是解 彼人見_二真仏_一
 心亦非_二是身_一 身亦非_二是心_一
 作_二一切仏事_一 自在未曾有
 若人欲_二求知_一 三世一切仏_一
 応_二当如_レ是觀_一 心造_二諸如来_一

高弁の解説は主として、この偈のうちの後半部を対象にしている。このうち、「諸仏悉了_二知一切從_レ心轉_一若能如_レ是解彼人見_二真仏_一」についての釈が次である。

次二諸仏悉了知。一切從心轉ト云ハ。上人ノ所知ヲアケテ。下ノ衆生ヲ勸ル也。上人トイフハ諸仏也。言ク諸仏既_二一切ノ法ハ皆此一心ヨリ起ルト了知シ給ヘ_一。次二若能如是解。彼人見真仏ト云ハ。下人ヲ勸テ上人ニ同セシム。如_レ此悟ル人ト云ハ。上ノ唯心ノ道理ヲ知人也。若シ此ノ甚深唯心ノ道理ヲ悟ル人ハ。即如来ノ法界身ヲ見ル人也。真仏ト云ハ。即法身ノ仏也。三身ノ中ニ於テ。法身ヲハ真仏ト名ケ。報身化身ヲハ非真仏ト名ク。(中略)法身ハ是。本質ナル力故ニ。真仏ト云也。若此道理ヲ悟ル人ハ。彼ノ真仏ノ体ヲ見ル也。コ

ノ諸仏悉了知等ノ。一行四句ノ偈ハ。翻シテ前ノ文ノ譬喩ニ合スル也。言、諸法唯心也トシラスシテ。別法アリト見ルナラハ。上ノ虚妄取異色ノ文ニ同スル也。若シ虚妄ニシテ遍計ヲ成セハ。即正覺ヲ。成スル事アタハシ。即是凡夫ナルヘシ。然ルニ。一切法皆此一心ヨリ。転スト知ルカ故ニ。既ニ正覺ヲナリテ。無上ノ位ニ到レリ。仏果ノ位ニ到リテ。亦此心性ヲ証シテ体トス。今ノ凡夫モ。亦カクノコトク。了知セハ。即是真仏ヲ見ル也。(下略)

ここに何度も繰り返される「一切ノ法ハ皆此一心ヨリ起ル」、「諸法唯心也」、「一切法皆此一心ヨリ。転スト知ル」などの表現が、作者の表現に類似したものを感ぜさせる。高弁は、この偈全体を「心ノ如来ト成ル事ヲ説リ」と捉えた上で、「心」とは、

一切衆生ノ心也。此心総シテ八種アリ。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿頼耶識也。前ノ七識ハ。一向ニ生滅ス是レ有為ノ法也。第八ノ阿頼耶識ハ。生滅不生滅ノ二分アリ。有為無為ノ法和合セリ。不生滅ト云ハ。如来藏自性清淨心也。即是人法二空所顯ノ真如也。(中略)其底ニ別ニ実物有テ。尽キサル性ヲ真如ト名ク。真ト云ハ。其体偽妄ニ非ス。如ト云ハ。言ク性ニ改量无キ也。是則一切衆生ノ心ノ本性也。此本性ハ本ヨリ常ニ住シテ。変異アル事ナシ。

としている。さらに、この偈の最終聯「若人欲求知三世一切仏ニ応当如是觀心造諸如来」については次のように釈している。

次ニ若人欲了知三世一切仏。応当如是觀。心造諸如来トイフ。衆生ヲ勸メテ。此ノ唯識觀ヲ。修学セシムル也。言、若シ人三世一切ノ仏体ヲ了知セント思ハ。此唯心ノ道理ヲ觀スヘシ。真理ヲ見ルハ。即真仏ヲ見ルカ故ニ。即我力心性ヲ以テ仏体ト作^{ナス}ヲ心造諸如来ト云也。言、此道理ヲサトルニ。即于心ノ相ヲ会シテ。心性ニイル。即仮名ヲ会シテ。真実ニイル。カルカユエニ。是我力心ノ上ニ。如来ヲ顯ハス也。如来ト云ハ。如ハ言、此ノ心性也。来ハ言、觀智。進ミ来リテ。此心性ノ理ニ来入スル也。

高弁は、一切衆生の心は、本来的に如来藏であつて自性清淨心であるとする。この他にも、「心ト云ハ。一法界大総相法門ノ心也」や「即円成実性也」「心ハ是総体也。此心性ヲ悟ラハ仏ト名ク」などと説いている。つまり、心に真如を認めているのである。その上で、「謂ク六道四聖。皆此ノ真心ノ不^ル造^ラナキ也」、心は一切を造る、その「諸法唯心也」を觀じてこそ悟りへの道がひらけるのだとしている。

高弁は『華嚴唯心義』巻下に、しきりに『大乘起信論』を引いている。高弁の如上の「心」觀は、『大乘起信論』の次のような思想に拠っているものでもあらう^(註1)。

心真如者。即是一法界大総相法門体。所謂心性不生不滅。一切諸法唯依^ニ妄念^ニ而有^ニ差別^ニ。若離^ニ妄念^ニ則無^ニ一切境界之相^ニ。是故一切法從^レ本已來。離^ニ言說相^ニ離^ニ名字相^ニ離^ニ心緣相^ニ。畢竟平等無^レ有^ニ變異^ニ不^レ可^ニ破壞^ニ。唯是一心故名^ニ真如^ニ。

作者の「諸法は一心より生ずといへり」という表現は、このような「衆生心」に如来藏を認める思想を背景としてのものではないかと思われる。

作者はこれに続けて「心の善惡によりて物に善惡あり。果報は業因によりて感ずべし」としている。このことは、右の「心性」への認識と作者の理解との間に、ある隔離を感じさせる。作者が考える「諸法は一心より生ず」とは、文脈をたどると、具体的には「心の善惡によりて物に善惡あり」ということを指すことになり、それを受けて「果報は業因によりて感ず」ることになる。しかし、「諸法は一心より生ず」と「果報は業因によりて感ず」とは、直結し得るとはいいたいがたい。「心の善惡」による「物」の善惡としていことから、「物」は前文の「諸法」に対応し、一切万物といった意味合いで使われているのであろう。それを、直後では果報と業因との関係に置き換えて論を展開させているのである。ここで作者が使っている「心の善惡」、「物」の「善惡」とは抽象的な認識論上のものではなく、より現実的な作者自身の行動、生きていく上で犯している罪、あるいは積むことのできる善行といったものを指していると思われる。このような認識に立つからこそ、それは果報と業因に直結さ

れ得るといえるのではないだろうか。

前節で、この章段には無住の著作と考えられている『妻鏡』との類似表現があると指摘した。作者がこの書を見たという確証は得られていないのであるが、「業量、秤の如し、重き物まづ引く」という発想は、『妻鏡』以外の文献には見いだされていない。この点からも、『竹むきが記』と『妻鏡』との表現・発想の類似について検討しておく必要はあろう。

『妻鏡』は一応無住の作と考えられているが、それに対する疑問も呈示されている。小島孝之氏は、「無住晩年の著述活動」中の「附 無住著述関係略年譜」において、正安二年（一三〇〇）の条に次のように付記されている（注³²）。

◎この年、『妻鏡』を著す。

▲『道跡考』は正安二年の条に、「妻鏡一卷之ヲ著ス」と記載しており、『東福寺誌』も同様であるが、それらが何に基づいてこの年と認めたのか明らかでない。『妻鏡』自体、これを無住の著書と断定できるのかどうか、問題がないわけではない。詳細は省略に従うが、簡単に疑問点を挙げておく。(1)他の著書にはいずれも克明に奥書を付するのに、『妻鏡』にはそれが一切ない。(2)他の自著の中でこれについて言及していない。(3)室町期の記録類の中で無住の著書を列挙している場合にもこれに言及しない。(4)本文中、奥州から名馬の貢納がないという逸話を記すところで、「関東相州ノ時」としてあるのは、日本古典文学大系の頭注のように「相模守北条氏が相州に幕府を置いて治めていたとき、の意」と考えるのが妥当だと思うが、そうすると、これは鎌倉幕府滅亡後に書かれたと考えるほうがよいことにはならないか。

しかし、無住の著でないとは断言できるほどの論拠もないから、ひとまずこの年に入れておくことにする。

三木紀人氏は、小島氏の疑義を紹介された上、

たしかにこれは、無住著を裏付ける外部徴証に乏しく、また、文体も他の三書と違つて修辭に意を配つた美文調で書かれていて疑わしいが、『雜誌集』卷四・無常ノ言など、同趣の文章も見られるので、一概には否定できないかもしれない。いずれにせよこれは短かく、思想的にも特記すべきものに乏しくて、無住の文名を高めるほどのものではないが、仏法に志す者への指針を簡潔にのべる仮名法語として、それなりに重宝がられたようである。

としておられる^(註3)。『妻鏡』がそれなりに流布していたとすれば、作者の目に触れた可能性も高いといえよう。

先に検討していた『竹むきが記』の部分と類似する『妻鏡』の本文を、次に掲げてみる。

一生の間、悪には進み善には物憂心のみ有て、心中に悪業をのみ造り積む。食欲は是餓鬼の業因なれば、此身破るゝ時、餓鬼の身と現じ、瞋恚は地獄の業因なれば、死ては地獄の猛火と成て身をこがし、愚痴は畜生の業因なれば、当来には畜生の姿と成て、残害の苦を受く。

『妻鏡』は、人の一生というものは悪業を造り続けるものであつて、その現世で造つた業因によつて来世の苦を受けるものであること、つまり因果の理を説いているのである。これを、作者はまず「果報は業因によりて感ず」と統括しておいて、「菩提心は仏身を成ず」以下、「慳貪の心」・「瞋恚の心」・「愚痴の心」と「心」を使った表現にしている。それは、作者が「心」の作用に観点をおいているからであろう。作者は「心」に集中させた捉え方をしているのである。

また『妻鏡』は、因果の理について次のようにも説く。

何事も皆因果の理り、先生の宿業の報なれば、強に悲み、強に喜ぶべきに非ず。因果必然の道理、善悪の果は必ず善悪の因より生ずる者也。此善悪の二つは、共に輪廻の業として、昇沈の果報を受べし。又世善を修して、世間の福報を感じ、仏法を行じて、仏果菩提に到るべし。小因大果と云て、纔に善悪の業因に依て、

多く善悪の果を感じずべし。

この「先生の宿業の報」という発想は、『竹むきが記』には記されない。作者の関心は、あくまでも己の現世での行いにあるようである。つまり、ここで作者がいう「心」とは、高弁の説く「一法界大総相法門体」、すべての認識の根源なるものとしての「心」ではなく、今生きている己の心の在り様として捉えられているものと思われるのである。それは『妻鏡』が、

凡そ人は皆心より沈み浮ぶなるべし。生死を離れんと思ふ志し深人は、必ず菩提を証し、其志し無き者は、輪廻して昇沈の果報を受く。

という時の「志し」と同様の認識といえるのではないだろうか。

さて、先述した「業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり」との類似表現を、『妻鏡』から掲げると次のとおりである。

女人罪重事を知なば、心を改めて一旦の夢の世の名利の営みを捨て、生々世々に身を助くべき仏法修行に趣くべし。一生が間、悪には進み善には退心のみあり。弥よ暗よりくらきに入り、深より深に沈むべき態のみあり。凡そ業は秤りの如し。重き方へ引べし。若人一生が間の善と与^レ悪、若は一年一月一日一時を過す間に造る所の善業と悪業と、勝劣を校量せんに悪勝れば悪道に落ち、善勝れば善生を得べし。

ここは、女人の罪が重い事を述べるくだりであり、作者の関心の強いところであろうと思われる。「重き方へ引べし」と説いているのは、一生の間、あるいは須臾の間に造る善業と悪業と、その重い方に従って果報が決定されるという意味であることが後文からわかる。その造った業のうち、悪業が多ければ悪道に堕ち、善業が多ければ善生を得ることができるといっているのである。では、作者は、この表現をどのような意味合いで使っているのだろうか。作者は、

業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き悪には勝つとも言へるなるべし。

妙法の功能は因果の道に越え、大乘の作用は邪正なし。この法の力にあらずは、いかでかこれらの重き咎を滅する道あらん。よく常に一心を修むべきなり。

としている。「善は少けれども、多き悪には勝つとも言へる」としているが、何を典拠にしているのか管見の及ぶ範囲では見いだし得ないでいる。ともあれ、この文脈からは、作者が『妻鏡』の説くような趣旨を言おうとしているわけではないことがわかる。善は少なくとも多くの悪に勝つとしていことから、むしろ、業量を秤に喻えたのは、少ない善業でも悪業に勝て、秤も少ない善業の方を重いとすることはある、つまり、積極的な修行への心の在り様を肯定的にとらえることによつてのものであったと思われる。これに続けて、「妙法の功能は因果の道に越え」と言っていることも、そういった作者の認識に基づいて採られたものであろう。だからこそ、作者は「この法の力」によつてこそ「重き咎を滅する」のだという仏法に対する帰依の表明と、「一心を修むべき」という修行への覚悟を述べるのである。

これに続けて、

それたゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず。悪にはいかにも遠ざかり、善には必ず近付くべし。

と記すのは、その修行の在り方を示したものである。前項で考察した如く「一句の公案」としていることから、作者は禅の修行を志していることがわかるのであるが、ここにも、『妻鏡』の次のような発想との類似が見られる。

若智恵も賢く道念も有人をば、諸仏の使、世に出たりと知て、帰命を致し、供養を演べし。若悪縁来て偽り親まば、地獄より阿防羅刹あばらせつの使、我を縛り取とると意得て、近付事なかれ。人は皆友に依て振廻ふるまいを成す故也。

作者のいう悪と善との一つの例として、「智者」と「悪者」との場合が考えられよう。また、『妻鏡』は次のようにも説く。

然者、止惡修善《惡を止め善を修する》の心を地として、此の上に此度正しく生死を離れ、菩提を可證有縁の行を立べし。其行と者、悟入門には心地修行、口称念仏也。

無住は、「八宗兼学、明師顯密禪之達者也」（寛永二十年版本『聖財集』中巻奥書）と後人から評されている。それと矛盾しない融合的な宗教観が、『妻鏡』にも見受けられる。右は、その一例である。作者の目指しているものは、『妻鏡』のいう「悟入門には心地修行」であろう。あくまでも、己の心を自律せしむることを是とする姿勢が見られるのである。それは、「行住坐臥」、日々の生活のうちに思念し続けることにより、いつか悟入への転回の瞬間を迎えることを目指す禪の修行そのものである。

作者は作者なりの立場で様々な教説を把握していたといえる。熱心な談義聴聞や靈鷲寺の長老との問答商量によつて様々に摂取したであろう教説の中から、ほんの一部を『竹むきが記』に記しているのではあるが、それは、彼女がつかみ取ったものを最も端的に抽出させたものであつたはずである。『妻鏡』が真言密教について説くくだりに、

希に人身を受、適仏教に値て修行せば、同は此の法を修行して、直に即身成仏の位に叶べし。若し其機に不叶者、いづれもく、心の引に任せて、仏道修行すれば、遲速の不同は有共、終には生死の苦海を渡て、菩提の岸に到る者也。

とある。『妻鏡』は融合的な受け入れ方を説くものであり、各人その身の分に応じた修行を勧めているのであるが、作者は己の生き方の許容範囲にあるものを選び取っている。先に、『妻鏡』に説いていた、「女人罪重事を知なば、心を改めて一旦の夢の世の名利の営みを捨て、生々世々に身を助くべき仏法修行に趣くべし」は、作者には到底受け入れることのできないものであつたはずである。なればこそ、敢えて作者は、

騒ぎ紛るゝ當にてのみ日を暮らせば、座を定むる事は難ければ、立ち居、起き伏す所に心をつけつゝ明かし暮らす。（中略）内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情

も知らず。

と記すのである。作者は、仏道修行への峻烈な思いを抱えていながら、この世を捨て出家する道を選んではいない。出家遁世という形を選ぶ訳にはいかなかったという状況ももちろんであるが、おそらく作者にしてみれば、むしろそれは初めから選択肢の中になかった、必要とされていなかったのではないかとさえ思われる。動乱の世情の中を生き抜いて行くために、敢えて様々な罪を犯し、その業を背負いながら、悟りを求めて道行するという在り方が、作者の信仰の形態であつたのではないだろうか。

四 作者の道心の本質

前項では作者が見聞した教説などを引用している箇所を選んで、作者の受容の在り方について検討した。このような箇所には、「まことにや侍らん」や「まことに」、「まことなるべし」という表現が使われている（前項二三四～二三六頁参照）。これは、作者が自分が納得できることを中心に考える発想から出てきた表現ではないかと思われる。作者は、自身で確認しながら筆を進めているのである。特に前項で検討した章段④では、最後は「まことなるべし」と言い切っており、文中にも、「感ずべし」、「これなり」、「言へるなるべし」、「修むべきなり」などの確信を持つて断定している文末が多い。逆に言えば、作者は談義聴聞や寺社詣、仏事の場合の説教などから得た教説のうち、己が納得できる言説だけを抜き出して使用し、己の志向する修行の覚悟を述べているのである。本章第一節で辿つてみた作者の修行の道程は、浄土思想への、「現在にしてかの法を聞く事あらば、順次に生死を出づべきにや」との疑問に端を発して、靈鷲寺の長老の教示により「まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知」り、専心に「一句の公案を挙げみて」、「行住坐臥、退転あるべからず」修行するということに己の心を定めたというものであつた。このような道程を辿る中で、作者は、例えばある言説に触

発されて、己の道心を変換せしめられたといった形の経験を語らない。教説そのものを深く追究して、それによって己の生き方なり宗教観なりを変貌させていくといった姿勢はみられないのである。少なくとも『竹むぎが記』中には、そういった思索の変遷は記されていない。作者がここに記そうとしているのは、現在の自分が是とする思いであつて、そこに至るまでの葛藤や懊悩は描かれる必要がないのである。結果として、前項で見たように、あらゆる機会を捉えて摂取してきた教説のうち、作者が記憶し利用しているのは、作者の許容できる、あるいは首肯できる範囲でのものに限定されていることになつたのである。

作者は、現実の生活を捨てない。それは、何度も確認してきたように、政情の混乱から夫公宗を「謀叛」の汚名をきせられたまま喪い、それでも生きていく道を選び取った作者の宿命でもあつた。『竹むぎが記』下巻に時折交えられる尊氏や直義との交流を、実のところ作者はどんな思いで記しているのだろうか。公宗が謀叛の疑いをかけられ斬罪に処された時、尊氏は形の上だけでも後醍醐方に与していたのではなかったか。記事の配列から暦応五年と思われる次の章段は、その意味でも興味深い。

鎌倉の二品、知るたよりありて時々聞え通ふに、暦応の比、例の家門の沙汰あれば、彼へも此へも聞え侍事もあるに、卯月ばかりに、雁の子の見え侍を、十づゝあまたを重ねて藤に付けて遣はすに、永福門院、數きたる薄様に書かせ給ふ。

③② 鳥の子を十づゝ十の数よりも思ふ思ひはまさりこそせめ

その頃、按察の二位殿より、「或る人の御夢に昔人かくなん仰せらると見給へるは、いかなる御恨のあるにかと、いと悲しうなん」あるを見れば、

③③ 思ひ置くそれをば置きて言の葉の露の情のなどなかるらん

人の御心ども、恨み給事もあるにやと思ひ合する事もあるに、更に悲しう思ひ続けらる。

「例の家門の沙汰」、くすぶり続ける家督問題に決着をつけようと奔走する作者とそれを支援する永福門院の姿

を記した章段である。これに続けて、公宗の恨みがましい和歌を記している。「その頃」とあるので、事実としてこの頃にちやうど聞かされたものかもしれないし、どうしてもこの位置に置きたいという作者の思いがあったのかもしれない。前章では、この後に永福門院の崩御が記されることに注目して、それに伴う作者の喪失感、挫折感といったようなものをも象徴的に描いているのではないかと推量したが、それと同時に、実俊と西園寺家の復興のためとはいえ、こともあろうに夫公宗を見殺しにしたと思われても仕方のない立場にいた尊氏に支援を願うことについての作者の鬱屈した怨嗟が、このような公宗の和歌を書き付けずにはおかせなかったとも考えられる。位藤邦生氏の指摘されるとおり⁵¹⁾、当時公宗を救えなかった持明院統の人々に対する作者の思いは複雑であつたであろう。ましてや、尊氏に対しては、それよりもさらにあからさまな感情を抱いていたと考えても不自然ではない。しかも、東国の武士である尊氏が全幅の信頼を寄せられる相手でもないことは、作者自身が十分わかつていたはずである。にもかかわらず西園寺家の家督相続争いという作者にとって最も関心の強い問題が起こり、その善後策のために尊氏に援助を求めなければならなかった。その直後といつてもよいこの場所にこの記事が配置されていることに、作者の内面の屈託した思いを読み取るべきではないだろうか。「更に悲しう思ひ続ける」には、いや増す嗟嘆や怨嗟の入り交じった感情が込められていると考えたい。

暦応四年十二月、実俊の元服に際し、

まことや、將軍より馬・太刀奉らる。先例にも叶へれば、更にめでたくぞ侍。

と、作者は記している。元服という大きな節目を無事迎えられた我が子の成長を、西園寺家の嫡嗣としてふさわしい形で祝えたことを強調したいがためであると思われる。しかし、作者はこの記事を「まことや」と始めている。『角川古語大辞典』「まこと」の項には、「忘れていたことをふと思ひ出して話をさしはさむようなときに用いる。ほんとに。間投助詞『や』を添えて、『まことや』の形で用いられることも多い。ほんとにまあ。」とある。実俊の元服の記事に続いて、その翌朝の資明との祝いの贈答歌を記した後の、この位置に、しかも、思い

出したほんのついでにといった軽い調子で記している。作者はなぜそのような記し方をしたのであるか。西園寺家は、鎌倉幕府滅亡まで関東申次として幕府方へも朝廷方へも通じることによって、政治上重要な位置を占めていた。当時の西園寺家からすれば、いかに幕府の有力大名とはいえず利氏など眼中になかったはずである。將軍から祝いの品を送られるという先例になかった扱いは、西園寺家の名誉としては非とも書き記しておかなければならなかった。しかし、その將軍は、西園寺家からすればかつては眼中にすらなかったはずの足利氏である。その時代の転変に対する作者の屈託が、尊氏からのそれを実俊の元服に際しての主たる記事とさせなかったのではないだろうか。作者が「まことや」としたのは、実は、この時の「將軍」、時の権力者となった尊氏に対する心底の屈託した思いがあったからなのではないだろうか。『竹むきが記』には決して表だつては描かれることはないが、作者は、その内面には夜叉のような妄執を抱えていたかもしれないのである。

そのように想定する時、次の作者の述懐は、また別の意味を帯びてくるといえよう。

内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さすが世に経る慣ひにて、さがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

ここには、仏道修行の成果があがらないことへの単なる修辭だけではないものが感じられる。「なを晴れがたき心の闇」には、己の心の深淵に巣くつてどうしても晴らせない闇を見いだしている作者の凝視の姿を読み取ることができるのではないだろうか。

直後に北山第讚美に筆を転じるのも、己の「心の闇」からの救いを求めるような思いにとらわれてのことではないかと思われる。この現実社会に実現された浄土ともいうべき北山第を目のあたりに見ているのだという感慨を抱くことが、すなわちある程度は「心の闇」からの救いとなるのではないか、そのような心理が働いていることではないかと思われる。そこには、『栄花物語』の作者が道長の造営した法成寺をこの世に出現した浄土として、

ひたすら讚美してやまない姿勢と似通うものを感じ取ることができる。次に例示する。

一、北山第讚美

さるは折につけたる興遊も、世にありがたき住ひにぞありける。代々の君の皇居として、深き匠の心をあらはせる様、旧りぬる今もなを珍し。(中略)折につけつゝ、花にあり葉にある色、月雪の眺め、すべて世に知らぬ情、求めざるに自らあり。岩木の姿つくろはぬ己がたゞずまひしも、中く珍し。岩間をくぐる清水は代々にすみける流れ絶えず、結ぶ手の雫に濁る恨だになし。事にふれつゝ憂世を忘るゝつまにぞ侍べき。

所くに建て置かれ侍御堂は、家門繁昌の為のみならず、勅願寺にて天下の御祈祷、(中略)昼夜朝暮の勤の音、霞に余り霧に漏るゝ鈴の声絶えず、松を払ふ冬の嵐には、峰に答ふる声は煩惱の雲を分けて法性の空にや響くらんと、心も澄みて聞ゆ。(下略)

この叙述には、『栄花物語』の尼たちが法成寺を訪れた折黄昏の御念仏に行き会った章段や法成寺薬師堂遷仏の盛儀を記した章段における発想と通じるものがある。

西日の程になれば、御堂御堂の金物、所所の御はしの金物どもきらめきて、池の面にうつれるもめでたし。風少しうち吹けば、御念仏の声に響きて、池の浪も、五根・五力・七菩提分・八正道を述べ説くと聞ゆ。山彦も同じ声に答ふれば、草木すら皆法を説くと聞ゆ。三聚淨戒香薫じて、三解脱門風涼しきに、思ひあつかふ煩惱の焰皆滅除すると覺ゆ。(巻第十八「たまのうてな」)

「今我等かすの仏を見奉りつ。これおぼるけの縁にあらず。これを縁として極楽浄土に往生して、もろもろの仏を見奉らざらんや」と、見仏聞法の縁深き心地して、かなしくなん。

仰ぎて見れば、法性の空晴れぬと、稀^{ゆづ}求の霞さす。楽の声・大鼓の音、げに六種に大地動きぬべし。池に色色の蓮花並みよりて、風涼しう吹けば、池の浪苦空無我の声をとなへ、諸波羅密を説くと聞ゆ。

二、公宗十三回忌、公衡三十三回忌の仏事における北山第の様

憂世に耐えたるつれなさも、さらに驚かれつゝ、十年あまり三年の秋を迎へぬ。かねては如法経など思ひしかど、法水院にて五種の行をぞ行ひ侍。朝夕の懺法の声に響を交はす水は、八功德池の波の音かと聞きなされ、幡をひる返すは清涼の風ならんと、梢を渡る音も涼し。宝樹宝池も外ならず見えたる道場のさまに、自らあはれもよほすべし。(中略)三位中将、釣殿より参給て西の座に付く。山の気色、心許なき秋の色しも、見所あるさま也。階の下尾花の打ち靡きつゝ、岩間をくぐる水の流れなど、いとおかしう見ゆ。西面の格子ども上げわたしたるに、池の鏡も曇りなく見えつゝ、傾く日影には仏の御光いとゞしく磨かれつゝ、袖をひる返し給菩薩の影向も、まことに眼の前に輝けりと見ゆ。(下略)

ここには、『栄花物語』法成寺造営のくだりの次の部分と似通う発想を見いだせる。

池掘る翁の、あやしき影の写るを見て、

曇なき鏡と磨く池の面に写れる影の恥しきかな(中略)

のどかに院の内の有様を御覧ずれば、庭の砂は水精のやうに閃きて、池の水清く澄みて、色色の蓮の花並み生ひたり。その上に皆仏頭れ給へり。仏の御影は池に写り映じ給へり。東西南北の御堂御堂、経蔵・鐘楼^{しゅうろう}まで影写りて、一仏世界と見えたり。(下略) (巻第十七「おむがく」)

さて、作者は、北山第を讚美しながら、「憂世を忘るゝつま」、「心も澄みて聞ゆ」などと、前段の「憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし」という自分の現状と逆のことを言っている。ここに、己が心の闇を吹き払って欲しいという希求が出ているようである。それ程に、作者の自覚していた心の闇は深いのではないだろうか。それは、宗教的な罪業の自覚というよりも、おそらく表だつては決して出せないだけに、自分でもどうしようもない程に深く浸みついてしまった怨嗟を自覚し、このことであつたのではないかと思われる。それに加えて、政情の不安定な状況の中、実俊の家督相続と西園寺

家の復興とを目指して生き抜いて行くためには、決してきれいな事だけでは済ま^せられなかったであろうことも考えられる。先の尊氏や直義に対する接触もその一例であろうが、手段を選ばずといった面もなかったとはいえない。これらは、『竹むきが記』には、決して語られない。語られないが、『竹むきが記』を執筆した作者の実人生には必ずや存在したはずの事柄である。それらを『竹むきが記』の記述の背後に想定しつつ、実際に記されている記事を理解してゆかなければならないであろう。

そのような視点で『竹むきが記』下巻を見る時、右の例外以外にも、作者が押さえようとし消し去りたいと願っているような屈託が、思わず浮かび上がってきているのではないかと思われるような箇所がある。それを例示してみると、例えば、前項で見た『妻鏡』との類似表現でいえば、「菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心のこれなり」も挙げられよう。『妻鏡』では、

貪欲は是餓鬼の業因なれば、此身破るゝ時、餓鬼の身と現じ、瞋恚は地獄の業因なれば、死ては地獄の猛火と成て身をこがし、愚痴は畜生の業因なれば、当来には畜生の姿と成て、残害の苦を受く。

としている。三惡道の業因となる三毒を挙げたといえはそれまでだが、作者は、『妻鏡』の表現を、「心」に観点を置いた表現に変えている。それは、「瞋恚の心」、「愚痴の心」を己が心中に見いだしていたからではないのだろうか。あるいは、『栄花物語』受容がうかがわれる「諸行無常偈」に対する解釈を比較してみると、『栄花物語』では先述した如く（二三八・二三九頁）、次のようにしている。

諸行無常は天上に上る智恵の橋なり、是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり、生滅滅已は劍の山を越ゆる宝車なり、寂滅為樂は淨土に參る八相成道の義果なり。

『栄花物語』の文では、まず四句をあげてそれぞれに修飾句（波線）を用いているが、『竹むきが記』では、それらを取り除いて、次のようにしている。

菩提心開けて天上に昇る階、煩惱の黒き雲を捨てて愛欲別離の海を渡る舟、八相成道の義果なりと言へり。

「菩提心開けて」、「煩惱の黒き雲を捨てて」という句をわざわざ付け加えているのである。作者がいかに「煩惱の黒き雲」すなわち「心の闇」を意識していたかを知ることができよう。

また、暦応二年二月中旬の天王寺詣の記事でも、作者のそのような屈託した思いが付度できるが、本文中に「げにいと波高く、気色異なり。まだ知らぬ旅の空、いと珍し」としていることから、天王寺へは初めて下ることがわかる。その旅の感興のままに道中の様子を和歌的素養を滲ませながら描いている。この時、作者は天王寺に続いて住吉に詣でている。

天王寺にのどかなる程、住吉に詣でたるに、岸に生ふなる草の名もいかなるにか、寄せ返す浦曲の浪もうらやましく、来し方に帰る身ならましかばと、思ひ続く事多かるは、神の御心もいとづかしうなん。

珍しい海の景色に見とれるうちに、作者の思いはつい過去へ漂ってゆく。「来し方」は、公宗存命当時のことであろう。「思ひ続くる事」が多いと記しているのは、公宗の死とともにそれまでに抛り所としていた一切を喪失してしまったことへの嗟嘆がとぎれることなく作者をさいなんでいるということであろう。その嗟嘆から脱却できないでいることが、「神の御心もいとづかしう」としているのではないだろうか。景色に目を奪われながら、ふと作者の思いは過去へ引きずられていく。一般的にいえば自分を解放してくれるはずの物語の途次であるだけに、いつまでも過去への執着を捨てきれない自分の心底を自覚させられている作者の姿が描かれている記事である。

この翌年、作者と実俊は永福門院の強い意向により、ついに北山第へ戻った。

何処もありしに変わらねば、面影浮ぶ事多し。寄る方なきさまにて籠り居侍つる諸大夫・侍など、かゝる世を待ち出でつゝ、老いくづをれたる入道どもなど、更に出で仕へつゝ、頼む蔭と思へるさまども、実にかゝるぬ世なりせばと、あはれに見ゆ。

右のように作者は、多くを語らない。しかし、「実にかゝるぬ世なりせばと」という一句に時代の転変と西園寺家

の盛衰に対する感慨を滲ませている。

このように、明確にそれと指摘できる訳ではないが、作者が我が身内に抱え、しかもそれを表に出すまいと努めている思いが、それでもなお滲み出てきていると思われる箇所を数多く挙げる事ができるのである。これらをもつて断定することはできないが、作者が、そのような妄執ともいふべき思いや西園寺家再興という宿願を果たすために弄したはずの策略といった生きていく上で犯さざるを得なかった罪などを抱え込んで生きていたという事は類推できるのではないだろうか。心中にこのような消し去りがたい罪深い思いがあつたればこそ、作者の生死を出すことへの希求は、より一層深刻なものになったといえよう。また、それだからこそ、来世での解脱ではなく、現世での解脱、生きてゆく今の自分の心の問題に結着をつけないと切に願つたともいえるのである。

前項でも指摘したとおり作者は様々な機会を捉えて様々な教説を聴聞したり学んだりしたはずであるが、それによつて己の生き方を変えることはしていない。作者の志向したのは、あくまでも現世の生活を保持した上での仏道修行であつた。先（本節二項）に引用した藤岡大拙氏の禅の修行に関する所説を再掲する（注35）。

禅の悟入方便たる公案の工夫も、かかる日常生活の場においてなすべきものであつたから、抱子弄孫著衣喫飯裏に一種不思議境界を発現しようと教えた。（中略）別にひまを設けて専心に坐禅する必要もない。十二時中の生活の瞬間瞬間が見性への方便となるのである。

本質的にこのような実践哲学を持つ禅は、そのような作者の志向に叶うものであつたといえよう。

それは、作者の意志的自力的な生き方と相通うものである。作者には、「厭離穢土」という発想は、精神的にはあり得ても、現実的にはあり得なかつたのではなからうか。作者の道心は、決して自分の生の生活（ナツ）を否定し捨て去るようなものではなかつた。下巻に至つてたびたび記されるようになる物詣も、単なる遊山ばかりではなく、現世利益を求めているものもあつた。悟りを求めて真摯に志す仏道修行と、このような神仏に西園寺家の安泰と興

隆という現世の利益を頼む信仰とが、同じ次元で並立し得たということも、作者の生きる姿勢から生まれてきたものであろう。罪業にあふれたこの世での自らの「生」を忌避することは作者には決してできなかった。しかし、現実生活を捨て去れないからといって、作者は、あきらめるようなこともしなかった。実兼の如く初め禪の修行におもむき結局は念仏の教えにすぎるといった道筋ではなく、あくまでも、己の自律的な在り方に拠ってたとくとしてゐる。このような修行への志向には、おそらく「如来蔵」「自性清浄心」という発想が基盤としてあったと思われる。今、現にこの手を汚しながら生きている自分ではあるが、修行を続けていけばいつの日にか開悟の時を迎えることができるという希望、確信こそが作者の信仰の基盤にある。開悟へ至る道を歩いているのだという思いが、作者を支えていたのではないだろうか。

右に述べきったような作者の仏道修行への姿勢は、求道者としてははなはだ不徹底なものというべきかもしれない。また、当時の貴族の融合的な信仰の範疇を一步も出ておらず、特筆に価しないといわれるかもしれない。しかしながら作者が、「己の生」という規制の中で、己の「心の闇」を自覚させられながら、そこからの脱却を求めて、真摯に仏道修行を志したこと、そのことを『竹むぎが記』という作品の中に綴っていたことの意味は問われなければならない。次は、作者の『竹むぎが記』中最後の宗教的な述懐である。

事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし。(中略)かの光隠し給しあとに、残りの灯火と頼み侍長老、ほかへ出づる道の便りとして、雪を分けて立ち寄らる。いと嬉しきにも、昔ながらに待ち付け聞えましかば、耳を喜ばしむる言葉の末もあらましをと、なをそのかみぞ俣ばれ侍ける。

作者の仏道修行の成果が果たしてどうなったのか『竹むぎが記』には語られないし、それを求めるための他の史料もない。その修行に自ずから限界があったとしても、それをもってのみ作者の信仰の是非について評価を下すべきではないと考える。

公宗を喪った後、志半ばに倒れた夫のため遺児実俊を当主とする西園寺家の復興を念願しながら、一人で生き抜いて行くことを選んだ作者にとつて、その生き方を変えることは不可能なことであつた。なぜなら、その変更は、自分の「生」そのものを否定することを意味するからである。作者の道心の本質はここにこそあるといえるのではないだろうか。

注

- 1 位藤邦生氏「『竹むきが記』の特質」(『中世文芸』第44号、昭44・7)、岩佐美代子氏「『竹むきが記』私注(下巻)」(『国語国文』第四一卷第三号、昭47・3)
- 2 『和漢禪刹次第』(『続群書類従』巻第八百二十一、第二十八輯・上)
- 3 『山城名勝志』(『増補京都叢書』第七巻)
- 4 『智覚普明国師春屋和尚語録』(『大正新脩大藏經』第八十巻 続諸宗部十一)
- 5 玉村竹二氏は、「中世前期の美濃に於ける禅宗の発展」と題して、土岐氏と臨済宗各派とのつながりを詳論しておられる(『日本禅宗史論集』下之二 思文閣出版、昭56)。
- 6 『空華日用工夫略集』は、「新訂増補史籍集覧 続編三」(臨川書店、昭42)所収による。なお、今枝愛真氏は、「足利義満の相国寺創建」(『中世禅宗史の研究』 東京大学出版会、昭53)において、義満と宣子の関係について、『空華日用工夫略集』にある「一品以三身後仏事等」(「三府君」(生前に後事について依頼されていた)だけではないことを論じておられる。氏が、宣子を実俊の側室としておられるのは、『後愚昧記』(『大日本古記録』第二五巻) 応安四年三月二十六日条にある右のような割注に拠っておられるのであろうが、『尊卑分脉』には、別人を実俊側室としており不審である。

二品局「禁裏御介酌、故日野大納言資名卿女、前右府実俊公妾、此腹有息女等、所謂右府九條、室彼随一也、」
 7 『本朝高僧伝』（『大日本仏教全書』第六三卷 史伝部二）。『延宝伝燈録』第十九（『大日本仏教全書』第六九卷 史伝部八）では、臨済宗「円覚故元祖元国師法嗣」の「長楽一翁院豪禅師法嗣」として「洛北靈鷲寺夢嵩良真禅師」が挙げられている。ここには良真の法嗣について、「至レ期高弟円淨等曰。（下略）」とあるのみである。

8 岩佐氏、前掲注1論文。

9 竹貫元勝氏『日本禅宗史』（大蔵出版、平4）

10 『日本禅宗史論集』下之一（『臨済宗の宗派図各説』 思文閣出版、昭54）

11 『鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店、昭43）

12 『禅思想史研究』第四（「禅と念仏の心理学的基礎」前篇、第二「禅に於ける悟の意義」 岩波書店、昭62）

13 前掲注12。

14 前掲注12（「禅思想史研究」第四、「公案論」五「公案には両重の作用あり」）。

15 玉村竹二氏『日本禅宗史論集』上（「禅宗の発展」五「林下の興隆」 思文閣出版、昭63）

16 前掲注14（「公案論」一「禅の公案」）。

17 前掲注14（「公案論」六「禅の特色」）。

18 「禅宗の日本的展開」（『荣西禅師と臨済宗』 吉川弘文館、昭60 所収）

19 前掲注18。

20 松本寧至氏は、①については『石山寺縁起』、⑤については『長谷寺靈驗記』との関係を論じておられる（『中世女流日記文学の研究』第五章「竹むきが記の研究」三「竹むきが記」の素材―石山寺・長谷寺縁起との関係― 明治書院、昭58）。

21 『荣花物語』本文は、松村博司氏『荣花物語全注釈』（角川書店、昭51）所収による。以下同じ。

- 22 『宝物集』本文は、小泉弘氏・山田昭全氏校注『宝物集』（『新日本古典文学大系』40『宝物集 閑居友 比良山古人
證記』岩波書店、平5 所収）による。
- 23 『住吉大社藏 佐野久成著 栄花物語標注』下（笠間書院、昭57）
- 24 『宮内庁書陵部藏本 宝物集総索引』影印（汲古書院、平5）
- 25 『古鈔本 宝物集』（貴重古典籍叢刊八 角川書店、昭53）
- 26 『大日本仏教全書』所収、残欠古本一卷および『続群書類従』所収の一卷本では、「證果」に作るが、『宮内庁書陵部
藏本 宝物集総索引』所収の影印によると、「記果」と読める。
- 27 『国文学十二種仏語解釈』（『栄花物語』 光融館、明治34）
- 28 『法然上人行状絵図』詞書は、日本絵巻物全集13『法然上人絵伝』（角川書店、昭44）所収による。
- 29 『妙法蓮華經文句』（『大正新脩大藏經』第三十四卷 經疏部二）
- 30 『大方仏華嚴經』（『大正新脩大藏經』第九卷 法華部全 華嚴部上）、『華嚴唯心義』（『大日本仏教全書』第三六卷
古宗部）
- 31 『大乘起信論』（『大正新脩大藏經』第三十二卷 論集部全）
- 32 『中世説話集の形成』（『若草書房、平11』）
- 33 『沙石集・雑談集』（『説話の講座』第五卷 勉誠社、平5 所収）
- 34 位藤邦生氏、前掲注1論文。
- 35 前掲注18。

終章 『竹むきが記』の成立

第一節 『竹むきが記』の原点

一 公宗事件の実相

『竹むきが記』上巻と下巻の間には、約四年半にわたる空白の期間がある。この間に作者の夫公宗は、後醍醐天皇方から謀叛の疑いをかけられ斬罪に処されている。そのことの意味についての諸先学の見解は、序章において触れておいた。作者にとつては、公宗の死罪はあまりにも悲惨な体験であり、さらに周囲の人々への配慮からも、それを書くことは到底できなかったのであろうというのが、大方の賛同を得ている中断の事由である。

南北朝という動乱の時代であつたこともあり、この時代についての史料は多いとはいえない。作者が書き残さなかつた中断の期間に何があつたのか、公宗が斬罪に処せられたのはいかなる事情によるのかなど、具体相を探るのはかなり困難である。その中で現存する諸史料から確認することができる点を整理しておく。

『公卿補任』建武二年条、公宗の項には、次のような注記がある。

西園寺同公宗二十六 中宮大夫。四月七日兵部卿。六月廿二日勘勅被召捕之。同廿六日勘罪名。八月二日所誅也。

また、『小槻匡遠記』には、次のような記事が見いだせる（注し）。

廿二日、「壬申」晴 参決断所了、／今日西園寺大納言公宗卿・日野中納言入道資名卿父子三人被召置云々、各武士相向云々、以外事歟、又於建仁寺前召捕隠謀輩了、正成・師直相向云々、於所々猶多召捕云々、（中略）

廿六日、「丙子」晴陰不定時々雨降（中略）

建武二年六月廿六日 宣旨

権大納言藤原朝臣公宗・左近衛権中将藤原朝臣俊季・左衛門佐藤原朝臣氏光・文衡法師・散位中原朝臣清景等奉太上天皇旨、謀危国家、宜仰明法博士等令勘申所当罪名

藏人右少弁藤原範国奉

建武二年六月廿六日 宣旨

田野中納言入道

資名法師乍知子息氏光陰謀、与同意不告官司、宜仰明法博士等令勘申所当罪名

藏人右少弁藤原範国奉

廿七日、「丑」晴 流人宣下也、（下略）

さらに、『尊卑分脉』、公宗、氏光の項にはそれぞれ次のとおりある。

公宗 正二位 兵部卿 中宮大夫 春宮大夫 権大納言／母為世卿女「昭訓門院春日局」 建武二八二被誅依天下事也

氏光 左衛門権佐（イ春宮、大進号裏松）／中先代隠謀之時依公宗卿命書 院宣仍元弘三八二被誅了これらにより、

一、西園寺公宗が謀叛の陰謀発覚で、建武二年六月二十二日に捕縛され、二十六日流人宣下、八月二日に誅されたこと。

一、この時連座したのは、日野資名・氏光父子、俊季（季経とも）、文衡、清景などである。このうち、氏光は公宗とともに処刑されていること。

の二点が確認できる。夫公宗とともに、父・兄弟までも連座したということは、作者に深刻な衝撃を与えたに違

いない。やや時代が下る『師守記』、『園太暦』にも関係の記事が見いだせる。

『師守記』第二十三卷 貞和三年（一三四七）四月二十四日条

廿四日、丙申／天陰、朝間雨灑、今日文殿庭中也、（中略）今朝執權勸修寺前大納言経頭卿被尋申云、故西園寺大納言公宗卿、先配流事被宣下候哉、将又無其儀候歟、解官不及沙汰候歟、当職前官不審事候之間尋申候、御所見候者、可注賜候^云、御返事云、西園寺故大納言「公宗卿」配流并解官事無所見候、但建武二年六月廿二日蒙勅勘被召捕、「于時権大納言、中宮大夫、兵部卿、」八〇〇〇被莫由、被注置候^云、（下略）

『園太暦』延文四年（一三五九）十二月二日条 三條実継書状

^{御子左衛門}拾遺黄門一昨日入来、条々令不審事候き、西園寺故大納言建武二年六月廿二日被召捕、同廿六日被勘罪名

候、八月二日所誅候云々、若誅戮以前被解官候哉、謀反罪名治定候者、可致除名候、（傍書 尤可然候、其比物念無沙汰歟、沙汰之趣、公卿補任注落候歟と覚候、）本官全候事よてと存候、然而所見不詳候、若被知食候哉、風雅集二八、只権大納言と候やらん、（傍書 只此儀、何事候哉とこそ覚候へ、）彼時分、中宮大夫・兵部卿等を兼候、当職候者、宮司号を可載歟と相存候、此事申出候間、黄門も令不審候き、余々取乱候、能々治定候者、可申旨詔置候、仍申入候也、事期^{々々}参拜之時候、誠恐謹言、

（傍書は、公賢のものと思われる。）

『師守記』が公宗の斬罪からほぼ十二年後、『園太暦』が二十四年後のものである。記事の内容から、この頃でさえ、すでに公宗事件の実相がわかりにくくなっているという実情を知ることができる。

作者が語らず、他史料でも確認することが困難なこの間の事情について詳記するのが、『太平記』卷第十三「北山殿謀叛事」である。少し長くなるが、北の方（名子）との別れの場面とその後の実俊養育に関する記述を中心にして掲げることにする（注²）。

明日必配所へ赴キ給ベシト、治定有ケル其夜、中院ヨリ北ノ御方へ被^ニ告申^ニケレバ、北ノ方忍タル体ニテ泣

々彼コへ坐シタリ。暫ク警固ノ武士ヲノケサセテ、篋ノ傍リヲ見給へバ、一間ナル所ノ蜘蛛手密ク結タル中ニ身ヲ縮メテ、起伏モナク泣沈ミ給ケレバ、流ル、泪袖ニ余リテ、身モ浮ク許ニ成ニケリ。大納言殿北ノ方ヲ一目見給テ、イトゞ泪ニ咽ビ、云出シ給ヘル言葉モナシ。北ノ方モ、「コハ如何ニ成ヌル御有様ゾヤ。」ト許涙ノ中ニ聞ヘテ、引カツキ泣伏給フ。良暫有テ、大納言殿泪ヲ押ヘテ宣ケルハ、「我身カク引人モナキ捨小舟ノ如ク、深罪ニ沈ミヌルニ付テモ、タゞナラヌ御事トヤラン承リシカバ、我故ノ物思ヒニ、如何ナル煩ハシキ御心地カアランズラント、ソレサヘ後ノ闊路ノ迷ト成ヌベウ覺テコソ候ヘ。若ソレ男子ニテモ候ハゞ、行末ノ事思捨給ハデ、哀ミノ懷ノ中ニ人トナシ給ベシ。我家ニ伝ル所ノ物ナレバ、見ザリシ親ノ忘形見トモナシ給ヘ。」トテ、上原・石上・流泉・啄木ノ秘曲ヲ被レ書タル琵琶ノ譜ヲ一帖、膚ノ護ヨリ取出シ玉テ、北ノ方ニ手カラ被レ渡ケルガ、側ナル硯ヲ引寄テ、上巻ノ紙ニ一首ノ歌ヲ書給フ。

哀ナリ日影待間ノ露ノ身ニ思ヲカル、石竹ノ花

硯ノ水ニ泪落テ、薄墨ノ文字サダカナラズ、見ル心地サヘ消ヌベキニ、是ヲ今ハノ形見トモ、泪ト共ニ留玉ヘバ、北ノ御方ハイトゞ悲ミヲ被レ副テ中々言葉モナケレバ、只顔ヲモ不レ拾泣給フ。去程ニ追立ノ官人來テ、「今夜先伯耆守長年ガ方ヘ渡シ奉テ暁配所ヘ可レ奉レ下。」ト申ケレバ、頓テ物騒シク成テ、北方モ傍ヘ立隠給ヌ。サテモ猶今ヨリ後ノ御有様如何ト心苦覺テ、透垣ノ中ニ立紛テ見玉ヘバ、大納言殿ヲ請取進ントテ、長年物具シタル者共二三百人召具シテ、庭上ニ並居タリ。余リニ夜ノ深候ヌルト急ケレバ、大納言殿繩取ニ引ヘラレテ中門ヘ出玉フ。其有様ヲ見給ケル北ノ御方ノ心ノ中、譬ヘテ云ハン方モナシ。既ニ庭上ニ昇居タル興ノ簾ヲ褰テ乗ラントシ給ケル時、定平朝臣長年ニ向テ、「早。」ト被レ云ケルヲ、「殺シ奉レ。」トノ詞ソト心得テ、長年、大納言ニ走懸テ鬢髪ヲ掴テ覆ニ引伏セ、腰刀ヲ抜テ御頸ヲ搔落シケリ。下トシテ上ヲ犯ント企ル罰ノ程コソ恐シケレ。北ノ方ハ是ヲ見給テ、不レ覺アツトヲメイテ、透垣ノ中ニ倒レ伏給フ。此俣頓テ絶入り給ヌト見ヘケレバ、女房達車ニ扶乗奉テ、泣々又北山殿ヘ歸シ入レ奉ル。サシモ堂上堂下雲ノ

如ナリシ青侍官女、何地ヘカ落行ケン。人一人モ不レ見成テ、翠簾几帳皆被_レ引落_二タリ。常ノ御方ヲ見給ヘバ、月ノ夜・雪ノ朝、興ニ触テ読棄給ヘル短冊共ノ、此彼ニ散乱タルモ、今ハナキ人ノ忘形見ト成テ、ソモロニ泪ヲ被_レ催給フ。又夜ノ御方ヲ見給ヘバ、旧キ衾ハ留テ、枕ナラベシ人ハナシ。其面影ハソレナガラ、語テ慰ム方モナシ。庭ニハ紅葉散敷テ、風ノ気色モ冷キニ、古キ梢ノ鼻声、ケウトゲニ啼タル暁ノ物サビシサ、堪テハ如何ト住ハビ給ヘル処ニ、西園寺ノ一跡ヲバ、竹林院中納言公重卿賜ラセ給タリトテ、青侍共數タ来テ取貸ヘバ、是サヘ別ノ憂數ニ成テ、北ノ御方ハ仁和寺ナル傍ニ、幽ナル住所尋出シテ移玉フ。時シモコソアレ、故大納言殿ノ百箇日ニ当リケル日、御産事故無シテ、若君生レサセ玉ヘリ。アハレ其昔ナラバ、御祈ノ貴僧高僧歡喜ノ眉ヲ開キ、弄璋ノ御慶天下ニ聞ヘテ門前ノ車馬群ヲ可_レ成ニ、桑ノ弓引人モナク、蓬ノ矢射ル所モナキアバラ屋ニ、透間ノ風冷ジケレドモ、防ギシ陰モカレハテヌレバ、御乳母ナンド被_レ付マデモ不_レ叶、只母上自懷キソダテ給ヘバ、漸ク故大納言殿ニ似給ヘル御顔ツキヲ見玉フニモ、「形見コソ今ハアタナレ是ナクバ忘ル、時モアラマシ物ヲ。」ト古人ノ読タリシモ、泪ノ故ト成ニケリ。悲歎ノ思_ヲ二滿テ、生産_ヲニ筵未_レ乾、中院中将定平ノ許ヨリ、以_レ使、「御産ノ事ニ付テ、内裡ヨリ被_レ尋仰_二事候。モシ若君ニテモ御渡候ハバ、御乳母ニ懷カセテ、是ヘ先入進ラレ候ヘ。」ト被_レ仰ケレバ、母上、「アナ心憂ヤ、故大納言ノ公達ヲバ、腹ノ中マデモ開テ可_レ被_二御覽_一聞ヘシカバ、若君出来サセ給ヌト漏聞ヘケルニコソ有ケレ。歎ノ中ニモ此子ヲソダテ、コソ、故大納言殿ノ忘形見トモ見、若人トナラバ僧ニモナシテ、無跡ヲモ問セント思ツルニ、未ダ_レ嬪房モ離ヌミドリ子ヲ、武士ノ手ニ懸テ被_レ失ヌト聞テ、有シ別ノ今ノ歎ニ、消ハビ_レ露ノ命ヲ何ニ懸テカ可_レ堪忍。アルヲ限ノ命ダニ、心ニ叶フ者ナラデ、斯ル憂事ヲノミ見聞ク身コソ悲シケレ。」ト泣沈ミ給ケレバ、春日ノ局泣々内ヨリ御使ニ出合給テ、「故大納言殿ノ忘形見ノ出来サセ給テ候シガ、母上ノタバナラザリシ時節限ナキ物思ニ沈給フ故ニヤ、生レ落玉ヒシ後、無_レ幾程ハカナク成給候。是モ咎有シ人ノ行エナレバ、如何ナル御沙汰ニカ逢候ハンズラント、上ノ御尤ヲ怖テ、隠シ侍ルニコソト被_二思召_一事

モ候ヌベケレバ、僞ナラヌシルシノ一言ヲ、佛神ニ懸テ申入候ベシ。」トテ、泣々消息ヲ書給ヒ、其奥ニ、
僞ヲ糺ノ森ニ置露ノ消シニツケテ濡ル、袖哉

使此御文ヲ持テ歸リ參レバ、定平泪ヲ押ヘテ奏覽シ給フ。此一言ニ、君モ哀トヤ思召レケン、其後ハ御尋
モナカリケレバ、ウレシキ中ニ思ヒ有テ、焼野ノ雉ノ残ル叢ヲ命ニテ、雛ヲ育ラム風情ニテ、泣声ヲダ二人
ニ聞セジト、口ヲ押ヘ乳ヲ含テ、同枕ノ忍ビネニ、泣明シ泣暮シテ、三年ヲ過シ給シ心ノ中コソ悲シケレ。

其後建武ノ乱出来テ、天下將軍ノ代ト成シカバ、此人朝ニ仕ヘテ、西園寺ノ跡ヲ繼給シ、北山ノ右大将実俊
卿是也。

別れを告げるために密かに訪れていた懷妊中の「北ノ方」(作者)の眼前で公宗が切られたこと、西園寺家の家
督が公重に渡されたこと、それによつて「北ノ方」は北山第を追われたこと、公宗の百箇日に「北ノ方」が一子
実俊を産み落としたこと、天皇方の探索の目を逃れつつ苦勞して実俊を育てたことなどが描かれている。西園寺
実俊は、『公卿補任』康永三年(一二三四)初出の項に「西園寺実俊」とあり、『竹むぎが記』においても康永元
年と推定される中将拝賀の記事に「今年八歳にぞおはすべき」とあることから、建武二年(一二三五)の生誕で
あることはほぼ確実である^(註)。公宗が斬罪に処された八月時点で、『太平記』が描く如く作者が出産前であつ
たかどうか、ましてや百箇日にあたる日の生誕であつたのかも定かではないが、可能性は十分にあるとい
えよう。春日局(公宗母、昭訓門院春日局であろう)の機転で実俊探索を逃れたことなどの細かな事柄の虚実
別にしても、公宗の妻が遺児実俊を世間の目を憚りながら苦勞して育てたという大まかな状況は、現実を踏まえ
ての叙述であると考えておいてもよいと思われる。

西園寺公宗が北条氏の復権を図らなければならなかったのは、いかなる理由によるものなのであろうか。『太
平記』が、

是モ承久ノ合戦ノ時、西園寺ノ太政大臣公経公、関東ヘ内通ノ旨有シニ依テ、義時其日ノ合戦ニ利ヲ得タリ

シ間、子孫七代迄、西園寺殿ヲ可ニ憑申一ト云置タリシカバ、今ニ至迄武家異レ他思ヲ成セリ。依レ之代々ノ立后モ、多ハ此家ヨリ出テ、国々ノ拝任モ半ハ其族ニアリ。然レバ官太政大臣ニ至リ、位一品ノ極位ヲ不レ極ト云事ナシ。偏ニ是関東最眞ノ厚恩也ト被レ思ケルニヤ、如何ニモシテ故相摸入道ガ一族ヲ取立テ、再ビ天下ノ權ヲ取セ、我身公家ノ執政トシテ、四海ヲ掌ニ握ラバヤト被レ思ケレバ、此四郎左近大夫入道ヲ還俗セサセ、刑部少輔時興ト名ヲ替テ、明暮ハ只謀叛ノ計略ヲソ被レ回ケル。
(「北山殿謀叛事」)

と述べているように西園寺氏は、関東申次という役目上鎌倉幕府と朝廷との間に立ち、公武の折衝の窓口として常に政権の中枢に位置し、そのことによつて政治に深く関与してきた。しかし、鎌倉幕府の滅亡によつて、その重要な位置を失つたのである。公宗が西園寺家の政治的な復活を果たそうとすれば、幕府と親密な関係にある持明院統の皇統を主軸とする権力中枢への復帰を目指すのは当然であり、公家一統の政治を実現しようとする後醍醐天皇とは、必然的に利害が対立することになる。その場合、公宗の動きは、大覚寺統から見れば「謀叛」と呼ばれるべきものであった。そのあたりの政情を『太平記』は語っているであろう。『太平記』は、謀叛はあつたことにして、後醍醐天皇暗殺の計略の内容にまで話を進めている。

西ノ京ヨリ番匠数タ召寄テ、俄ニ温殿ヲソ被レ作ケル。其裏場ニ板ヲ一間蹈メバ落ル様ニ構ヘテ、其下ニ刀ノ簇ヲ被レ殖タリ。是ハ主上御遊ノ為ニ臨幸成タランズル時、華清宮ノ温泉ニ准ヘテ、浴室ノ宴ヲ勸メ申テ、君ヲ此下ヘ陥入奉ラン為ノ企也。
(「北山殿謀叛事」)

およそ荒唐無稽なこの計略の発想の参考にしたものとして、『日本書紀』・『古事記』などが考えられる。『日本書紀』巻第三「神武紀」(即位前紀)には「乃ち潜に其の兵を伏して、権に新宮を作りて、殿の内に機を施きて、饗らむと請すに因りて作難らむとす」とあり、また『古事記』中巻(神武天皇)には「仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に押機を作りて待ちし」とある(原漢文、「日本古典文学大系」によつて書き下し文を掲出する)。共に、罌を仕掛けて天皇を暗殺しようとする計略なのである。しかもこの話は、兄(『日本書紀』

では「兄^{えうかし}猪」、『古事記』では「兄^{えうかし}宇迦斯」の謀略を弟（同様に「弟^{おとうかし}猪」・「弟^{おとうかし}宇迦斯」）が天皇に密告するという構造となっているのである。

右のように、すでに『日本書紀』・『古事記』に『太平記』と同様の構造を持つ話が存在することから、『太平記』の叙述は、これらを踏まえた虚構であると指摘できる。とすれば、勅使の中院定平が輿の出發を促して言った「早」を、名和長年が「早く殺せ」と言われたものと誤解したという劇的で都合な話の展開も、虚構である可能性が高いといえよう。しかし一方『神皇正統記』では、北畠親房が、次のように記している⁵⁴。

建武乙亥ノ秋ノ比、滅ニシ高時ガ余類謀反ヲオコシテ鎌倉ニイリヌ。直義ハ成良ノ親王ヲヒキツレ奉テ参河国マデノガレニキ。兵部卿護良親王コトアリテ鎌倉ニオハシマシケルヲバ、ツレ申ニヨバズウシナヒ申テケリ。ミダレノ中ナレド、宿意ヲハタスニヤアリケン。都ニモ、カネテ陰謀ノキコエアリテ嫌疑セラレケル中ニ権大納言公宗卿召ヲカレシモ、コノマギレニ誅セラル。承久ヨリ関東ノ方人ニテ七代ニナリヌルニヤ。高時モ七代ニテ滅ヌレバ、運ノシカラシムルコトトハオボユレド、弘仁ニ死罪ヲトメラレテ後、信頼ガ時ニコソメヅラカナルコトニ申ハベリケレ。威里ノヨセモ久シクナリ大納言以上ニイタリヌルニ、オナジ死罪ナリトモアラハナラヌ法令モアルニ、ウケ給オコナフ輩ノアヤマリナリトゾキコエシ」と記しているのである。このことからすると、公宗殺害の事情に関する記述に限っていえば、『太平記』作者の創作ばかりとはいえず、何らかの手違いか、あるいは作為かでもって公宗が殺害されたという事もあり得ないわけではない。『神皇正統記』は、本来死罪を免れるはずであった公宗が殺されてしまった事情を説明し、一旦配流が決定したにもかかわらず斬罪に処せられてしまった不運に同情的な筆致である。この親房の記述は、先に掲げた『師守記』や『園太暦』の記すところと矛盾しない。この事件は動き出した時代の生んだ悲劇といえるが、公宗が、本来は死罪を免れるべき立場に

あつたことは十分に認識しておかなければなるまい。

二 生きていく作者の心底

先に指摘した如く公宗の忘れ形見実俊は、建武二年の生誕である。公宗が斬罪に処された八月時点で、作者が出産前であつたかどうかは定かではない。しかし、たとえそれが生誕後であつたとしても、少なくとも実俊はまだ乳飲み児であつたはずである。そのような遺児を抱えて、作者は公宗の後を追うこともせず生きていく道を選んだのである。本論第二章第四節で確認した西園寺家再興への作者の熱望は、この選択が、公宗の意志を継ぎ西園寺家の昔日の威光を取り戻すべく努めるよう定められた実俊を、守り育てることに使命を見いだしてのことであると感じさせる。『竹むきが記』上巻と下巻との間にある中断期間は、作者にとっては逼塞の時でもあつたが、再興の機が熟するのを待つて隠忍すべき時という心持で過ごした期間でもあつたのではないだろうか。

この中断期間には、公宗の事件以外にも、第一章第一節で確認しておいたように、北朝方に限っても、次のような事柄が起こっている。

建武二年一月二二日 花園上皇落飾

三年 二月二五日 広義門院落飾

四月 六日 後伏見院崩御

八月一五日 豊仁親王、踐祚（光明天皇）

四年 一月二六日 鷹司冬教、薨ず

持明院統の皇統に依拠する以外に実俊の西園寺家督相続への道はない上に、上巻の記述からうかがわれる後伏見院への親密さから、その崩御も作者にとっては大きな痛手となったことであろう。朝敵の汚名をきせられて屠

られた公宗の室であつてみれば、遺児を抱えた逼塞の時代の作者にとつて、その時点ではもはや宮廷は身近な存在とは感じられなくなつていたのではないだろうか。『竹むきが記』下巻冒頭の記事直後の建武四年十二月二十八日に行われた光明天皇の即位について記さないことも、この感覚が原因となつてゐるものでもあらうし、我が子実俊のことに気持ちが集中して、それ以外のことに関心を持つ余裕がなかつたことも一因であらう。

諸家の説かれるとおり、公宗の事件は、作者にとつてはあまりにも悲惨な体験であつた為、いくら時間が経過しても客観視して描けるようなものにはなり得なかつたと考えることもできよう。そうではあるが、先に述べたとおり、作者は西園寺家復興にかけて生きていく道を選び取つた。それが、公宗を弔う最上の道と信じてのことであつたと思われる。そのような選択をした作者であつてみれば、その生の裏側には常に公宗の事件が貼りついてゐたと考えてもよいのではないだろうか。つまり作者にとつて公宗の斬罪は常に生々しい事件であり、過去のことにはなり得なかつたのである。そこから、作者は、前章でみた妄執ともいふべき「心の闇」を抱え込むことになつたのではないだろうか。

『竹むきが記』上巻においては、典侍の職掌を全うすることに誇りを持ち、それにふさわしい責任感をもつてゐた女性として作者が描かれてゐた。それと同時に、「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」と公宗にからかわれるような内気な面も持ち合わせてゐることも描かれてゐる。ここで、『竹むきが記』に描かれてゐる作者の性向について見ておきたい。

『竹むきが記』の中で作者が自らを評してゐる箇所は、公宗から右に引いた冗談を言いかけられた元弘元年十一月一日の日蝕の日の記事である。「例の埋もれにたる身の癖は」としてゐる。「埋もる」は、「人目につかないようにする。身をひそませる。人に知らせずに黙つてゐる。」（『角川古語大辞典』）ことである。多少の潤色があるにしても、それが「例の」、「癖」といつてゐるということから、作者の常として何事にも控え目で、思慮深かつたということができよう。このような性向は、別の記事の叙述からもうかがえる。

正慶二年正月、公宗から正式な求婚の和歌が贈られてくる。

里に侍し年、春立つ日、人の許より、紅の薄様に匂ひいたくしめつゝ

⑩ 新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春

同じ色の紙にて、

⑪ 行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず

ことなる障りならでは待ち見る事となりぬるも、ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し。

「ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し」という感想が何時のものか推断はできない。本記執筆の時点で書き加えられた可能性も否定できないからである。同様に、この和歌の詠歌時が、その時点であつたかどうかともわからない。しかし、このような重要な和歌を作者が独断で創作するとも思えず、恐らく公宗からの薄様とともに「手控え」ていたのではあるまいか。この贈答は、正慶二年当時のものであると考えて差し支えない。西園寺家の正嫡など思いもよらず、公宗を待つ身となつてしまったことは、いくら公宗の愛情を頼りにするからとはいへ、世間一般の感覚からしてもなにかの不安を覚えるはずであらう。しかし、作者の「ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し」との感想は、度を越して悲観的である。身に余る幸せに酔いしれるどころか、これから先の人生に深刻な悩みを抱え込んでしまいそうな程で、一片の甘さもない叙述である。そこにまたやかもすると悲観的になりがちな作者の性向を見ることができるといえる。

正慶二年五月、いよいよ北山第に入ることになった折には、次のように思っている。

此所にありとて喜びつゝ、やがて車あれど、ゆくりなくうかれ出でむといかならんとつゝましかれば、動くべき心地もせぬを、人々もすゝむれば心弱くぞ立ち出ぬる。妙音堂に車寄せて下りぬ。あからさまと出ぬるまゝにて、いと浮きたる心地して明かし暮す。

いよいよ北山第に迎え入れられるという段階になつても、なお躊躇している。もちろんそこには、「ゆくりなく

うかれ出で」ることを「つましく」思った配慮があつたことは否めない。ここに、家格の低い日野家の人間の西園寺家に対する劣等感をみることもできよう。しかし、二人の愛が実り、晴れて西園寺家に北の方として入る日を迎えたことを、単純に喜んでばかりはいない自省的で思慮深い作者の姿が映し出されてもいる記事である。下巻に至つて、再び北山第に実俊とともに移り住むよう永福門院から要請された折には、次のように記している。

かゝる程に、侍従の君移り住み給へう、女院の御方急ぎ立たせ給ふ。やがて添ひ聞ゆべうあれば、さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ事しあれば、二位殿にて女院の御方さまへもこの趣を聞えたるに、いと僻くしき事と諫めさせ給つゝ、差し放つべきにはあらぬ由、さまざまにたまへるも御理なれば、心弱く思ひ立たれぬ。二位殿もあからさまにおはします。誰もく皆参るべし。小御所を竹向かけてしつらへり。何処もありしに交らねば、面影浮ぶ事多し。(下略)

作者母子にとつて最大の後援者である永福門院の強い意向にもかかわらず、ここでも立ち止まり、周囲の状況へ思いを巡らし、自分に問いかけていることが、「さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ」からわかる。またこの場合「北山第」は、つらい思い出に直結する場所である事も作者の躊躇の要因であつたと推量できる。この叙述の裏には、作者の複雑な心理的葛藤が隠されているようである。それでも、結局は、女院の意向と「理」に負けて、「心弱く」移住する。ここには、感情よりも「理」が優先する、少なくとも「理」で自分を納得させて行動を起こすという性向も確認することができる。

一方、作者は『竹むぎが記』において、責任感の強さも見せている。正慶二年閏二月二十四日、後醍醐天皇は、配流先の隠岐を密かに脱出、それに呼応して赤松の軍勢が入京する。世情は一気に緊張し、光厳天皇、後伏見、花園両上皇は六波羅の北方へ行幸されることになった。その折、作者は、「我も人もたゞあぎれまよふほかの事なかりしかば、僻事もあらむとて、書きもとめず」としながら、次のような行動を起こす。

女房など候ふべきやうもなけれど、さてもおはしますべきにもあらねば、少く参り給。いかなる御式にても参るべき心地なりしを、あさましう便悪しきさまなれば、いと見苦しかるべき事に、さまぐ言ひとむる人ありしかば、あからさまにだにと思ひ立ちて、二位殿伴ひ聞えてぞ参り侍し。(中略) その夜より候ふべき心地なりしに、暁、寄すべき由聞ゆとて、女房なども出さるべき由、武家奏聞あれば、取りしたゝめ、里ぐに車召しなせしかば、折しもいと本意なかりき。(下略)

仮の御所ゆえ不便もあるうと、止める人があつたにもかかわらず参上している。我が身の上のことには、「心弱く」人の言に従う作者が、このような非常時には制止を振り切つて出かけてゆくという強さを持っていることがあらわれた場面である。赤松の軍勢が押し寄せてくるということで、やむを得ず退出することになるが、この時も「折しもいと本意なかりき」と、ひどく口惜しい様子である。このような責任感の強さから、「典侍」としての作者の在り様が推量される。作者は、表だつては出にくいものの、本来的に意志的な強さを持っているということを確認できる記事である。

また、下巻に至り西園寺家当主実俊の母となつた作者には、積極的に当主の補佐役を務めようとする姿勢が見られる。例えば、暦応五年久方ぶりの北山第への御幸始に際しては、次のように記す。

久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを、外様ばかりはあかぬ心地して侍れば、宝蔵をたづぬるに、三尺余ばかりなる花立を一对求め出ぬるをぞ奉る。「色も姿もなべてならず、いと由ゝしう」など、様ぐの御沙汰どもにぞ及び侍ける。

西園寺家の復興を、御幸という目に見える形で確認できた喜びが、作者にこのような行動をとらせたものである。うが、「宝蔵」にまで行つて献上物を選ぶという行為には、当主の母としての自信と責任感があらわれている。ここではもはや永福門院の強い意向に根負けする形で「心弱く」北山第に戻つた折の、作者の引つ込み思案な姿は見られない。作者にとつて、北山第に再び迎え入れられることは、大きな意味を持っていたのである。西園寺

家の北山第に再び入るといふことは、実俊が正統として世に認められるための第一歩である。今後は当主としての扱いを受けることを確約するものである。北山第に入ることを以て、作者の逼塞の時代は本当の意味でようやく終わったのである。

下巻になってから記されるようになる信仰への傾倒にしても、決して単純に受け入れたりはしない。近しい人々の死に無常の觀を強く意識させられた作者は、「十惡五逆の捨て給はずと聞く弥陀の願力を頼みつゝ、悲願あやまたずは来迎引接定めて疑ふべからずと、偏に念仏の数をぞ積」んできたが、「いさゝか不審なる事侍ける」と浄土教思想に疑問を抱くようになる。その後は、「今の長老、道学ともに其徳高く聞」えていた靈鷲寺へ出かけて「如何にしてかまさに生死を出づべからん」と率直に疑問をぶつけている。即座には答えを得られず不審を抱えたまま過ぎたが、「まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知」つたと記している。ここに、非常に理知的で真摯な作者の姿をみることができる（第三章）。

『竹むきが記』には、感情をそのまま表出しない抑制的な作者の姿勢が多々みられる。そのような自省で内向的で理知的な作者は、自分の生の感情を、その感情のままに表に出さない。実俊への母親としての愛情にしても同様で、直截な愛情表現は『竹むきが記』のどこにも見いだせない。実際は、実俊は、公宗の遺児であり、二人の愛の証でもあり、作者の西園寺家での立場を支える存在でもある。作者が愛しく思わないはずはないのである。にもかかわらず、あくまでも西園寺家当主としての扱いを崩さず、距離をおいた叙述しかない。このような作者の氣質が、記録的叙述の底流に作者の心意が流れているという『竹むきが記』の二重構造的な表現形式にも関与しているはずである（第二章）。

『竹むきが記』に見られる作者の性向は、内向的で自省的、理知的である上に、強い責任感も持ちあわせているというものであった。しかも、その芯には意志的な強さも持っていることを垣間見せている。それは、上巻でも下巻でも確認できる作者の持っている本来的な性向である。このような性向であつたればこそ、特にその芯に

強い自我を持つてゐる作者であればこそ、公宗の没後も一人生き抜く道を選び取り、そして『竹むきが記』は書かれたといえる。

本論第三章で、作者の心底に巣くつていた妄執とも言うべき「心の闇」について考察したが、上巻における作者の心底と下巻の作者のそれとの大きな違いは、この「心の闇」なのである。上巻を書き綴つてゐる時点での作者は、すでに「心の闇」を抱え込んでゐるのであるが、そこに描かれていく回想されてゐる「あの時代の作者」にはそのような妄執はなかつたのである。妄執のなかつた己を回想して上巻は書かれてゐる。第三章第二節四項で例示したが、作者ができるだけ表に出すまいとしながら下巻のそこに滲み出てきてゐる心底の屈託した怨嗟、過去への執着などをさし示すと思われる「心の闇」は、時として作者自身を愕然とさせる程に作者の胸底に沈潜し根付いてゐる。そのことを自覚させられてゐるが故に、作者は来世ではなく、いま生きて行かなければならないこの現世での解脱を真摯に求めてゐたのである。

暦応元年暮、実俊は深鍛^{ふかそぎ}の為、北山第へ出かける。

今年^{ふかそぎ}は深鍛あるべきを、永福門院に聞ゆべうやなど思ふ程に、年の内に御覧すべき由侍れば、わざともさるべきにて、十二月廿八日に北山におはします。二位殿、具し聞え給。女房もあまた参る。紅梅の二相^{唐織物}、

青き^{唐織物}、三小袖白に唐織物。物騒がしさもあかぬ御事なる上、年の内泊り初あるべう、女院の御方の給とて、俄

に留まり給て、次の日帰り給。「推し量らせ給へるにも過ぎて、行末頼もしきさまに」「永福門院が」などいみじうぞ喜びの給ふ。山水を御覧じつゝ、「何処より来たる流れにか」と本末を尋ね聞え給ければ、「直人にはあらじ」と不思議がらせ給て、いみじう興ぜさせ給ける」など、二位殿さまぐにぞ語らせ給。伏見院の御自筆一卷、松の打枝に付けられて賜はらせ給ふ。

この時、作者はただ、「伏見院の御自筆一卷、松の打枝に付けられて賜はらせ給ふ」とのみ記し、自分の感想を全く記さない。永福門院が実俊の将来を頼もしく御覧になったという記事を淡々と記しているように見える。実

俊の深鍔は本来であるならば、この記事が置かれている、暦応二年正月（今出川兼季死没の記事）と同年二月（天王寺詣の記事）との間に行われるべきであったのである。それが「今年は深鍔あるべきを」の示す内容である（第一章第四節）。実俊の深鍔は、永福門院からのたつての希望で時期を早め、しかも北山第で行うことになったのである。「推し量らせ給へるにも過ぎて」から、実俊は永福門院に初お目見えであることが推測できる上、庭の山水の流れを実俊が「何処より来たる流れにか」と尋ねたのも、彼が初めてこの庭を見たためであろう。また「年の内に泊り初」とも記していることから、これが実俊の生まれて初めての北山第訪問であるとわからせるような記述となっているのである。もしそうであるならば、作者にとっては重大な意味を持つていたはずであり、その感慨も大きかったに違いないが、そのことは一切記していない。この章段の素っ気ないとも見える叙述の背後には、実俊が他ならぬ永福門院の強い招聘により時期を早め深鍔という祝事の為に、生まれて初めて北山第に足を踏み入れたということへの、作者の複雑な思いが隠されているのではないだろうか。北山第は、作者にとって思い出の場所でもあり、それだけに悲痛な思いを再生産させる場所でもあり、そして何より西園寺家の本邸であることでまたことさら特別な場所でもあつたはずなのである。

右の実俊深鍔後の記事の配列は次のとおりであり、ここに作者の境遇の変化とそれに伴う心意の変化とが認められる。

暦応二年二月 天王寺詣・住吉詣 「来し方に帰る身ならましかばと、思ひ続くる事多かるは、神の御心もいとほづかしうなん」との感慨を抱く。

暦応三年五月 新女院御出家

同 六月 東北院僧正覚円死去

「かかる程」 実俊北山第へ移住

その年の暮 永福門院御座へ方違の御幸

暦応四年四月 萩原殿内親王、持明院殿へ。院号宣下あり。

同 八月 御幸始、永福門院御座

同 九月 神木帰座

十月 光厳院姫宮、永福門院の許へ

十二月 実俊、元服

「春の除目」 実俊、中将任官

暦応五年正月 御幸始

同 二月 石山詣

三月 若宮詣、長講堂での回想・御影堂での回想

四月 家門の沙汰にかかわり、尊氏へ永福門院より和歌

「その頃」 他人の夢中での公宗の詠に「恨み給事もあるにやと思ひ合する事もあるに、更に悲しう思ひ
続けらる」との心中を漏らす。

康永元年五月 永福門院薨御

実俊の深鍛後、住吉で、珍しい海の景色に見とれながら、やはり作者の思いは過去へ引き戻されていく。その三ヶ月前、実俊が生まれて初めて北山第へ入ったことも、その思いの契機になっていよう。そして、暦応三年（作者はなぜかその日を明示しないが、それは記載順からいって暦応三年中であろう）、とうとう作者と実俊は北山第に帰ってきた。それは、永福門院の強い意向によるものであった。作者の永福門院への敬慕の要因も、女院が実俊の後ろ盾となつて愛育されたためだけではなく、突き詰めていけば女院が作者母子を北山第に再び迎え入れたことに対する恩義にあつたと考えられるのではないだろうか。北山第への還住を以て、作者の逼塞・隠忍の時代はようやく本当の意味で終わりを告げたからである。暦応五年（史実では暦応四年）^{（注5）}、公宗事件以来絶え

ていた晴の御幸を北山第で迎えることができた作者が、その後、堰を切ったように寺社詣の旅に出かけるようになるのも、「北山第への晴の御幸」の復活に、西園寺家の復興の一つの兆しを見たからに他ならない。その旅先では、しきりに回想に浸っている。その思いを共有できる者もない孤独感が長講堂での「思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ慣ひさへぞ恨めしかりける」との一文に滲み出ている。作者は己一人で悲しさ、寂しさ、恨めしさに耐え続けていることが明らかである。この過去への思慕、恋うる昔が、作者の『竹むきが記』執筆の契機になっていると考えられはしまいか。北山第への還住を果たした後のこの時期に『竹むきが記』の始点を置くことができないであろうか。次節で検証する。

それと露わに書くことを憚る状況がある、あるいは書くことが到底できない事柄があるということ、加えて現実の自分の生活を捨てる訳にはいかないということ、この二点が、作者の背負った責務と重荷であった。作者の生きる意義は、ひとえに西園寺家の、それも公宗の遺児実俊を当主とする西園寺家の再興を目指すことにあった。建武二年の公宗の斬罪事件とその結果変わってしまった己の存在意義、そしてそれらと表裏の関係をなす己の晴れることのない「心の闇」が、『竹むきが記』の原点にあるといえる。

注

1 『小槻匡遠記』本文は、「書陵部紀要」第十一号（昭34・10）所収の翻刻による。

2 『太平記』本文は、後藤丹治氏・釜田喜三郎氏校注『太平記』（『日本古典文学大系』35『太平記二』岩波書店、昭和58）による。

3 『公卿補任』で実俊の年齢をおつていくと、『公卿補任』の記述自体に齟齬があることが見いだせる。

貞治五年 33 八月二九日 任右大臣

九月 九日 右近大将還宣旨

貞治六年 33 正月一六日 辞大将

九月二九日 辞退右大臣

永和元年 42 三月一三日 叙従一位

康応元年 56 七月 六日 薨

貞治五年と同六年での年齢が重複している。これから実俊の生年を逆算してみると、二通りの可能性が生まれる。すなわち、『公卿補任』初出の年康永三年（一三四四）10才・貞治三年（一三六四）30才・同六年（一三六七）33才から導き出される建武二年（一三三五）の可能性、貞治五年（一三六六）33才・永和元年（一三七五）42才・康応元年（一三八九）56才から導き出される建武元年（一三三四）の可能性である。また『尊卑分脉』の実俊の注記には「康応元七六歳五十七」とあり、『公卿補任』と相違している。これによれば、実俊は正慶二年（一三三三）生れということになる。『竹むきが記』の記述と齟齬しないのは、建武二年生誕の可能性である。作者が我が子の年齢を勘違いするとは考えにくい上に、『竹むきが記』でわざわざその年齢を改変する必然性もないことから、実俊の生誕は建武二年と考えておくべきであろう。

4 『神皇正統記』本文は、岩佐正氏校注『神皇正統記』（『日本古典文学大系』87『神皇正統記 増鏡』 岩波書店、昭和40 所収）による。

5 拙稿『竹むきが記』における記事の構成法―北山第御幸の記事から―（『中世文学』第四三号、平10・5）。〔本論第一章第三節参照〕

第二節 『竹むきが記』の成立

一 「昔」——回想の起点

『竹むきが記』の構成をごく大まかにとらえてみると、上巻の記事の主な流れは、光厳院の御代と作者の栄光の時代ということであり、その間に公宗との交情が綴られているといえる。これらの記録的な記事の底流に、作者の公宗への思いが秘められていると思われる章段もある。下巻の記事内容からは、実俊の成長に伴う西園寺家の再興の様子を辿ることになり、その間に作者の仏道修行への思いが綴られている。こちらも、その記事の底流に、作者の「心の闇」を見て取ることができる章段がある。各巻の冒頭部の記事は、上巻が、春宮（量仁親王・後の光厳天皇）の元服であり、下巻は、一子実俊の真魚始である。このことと各巻の構成とを対比してみると、その記事内容と照応するように適切な記事が冒頭部に配されていることがわかる。このことから『竹むきが記』が、ただ日次に書き継がれただけのものではなく、ある程度、作者の再構成の手が加えられているものとの感触を得る。当然、それは回想されつつ記されたものであり、何らかの整理の段階を経ていると考えられる。本論第一章で確認した作者の意図的操作、第二章で確認した詠草を基にしたと思われる記事の再構成などからも、それは推断される。そこには、己の記憶ばかりではなく、歌反故や何らかの書付類、消息類の存在が想定され得る。それらを基に作者は記憶を再生し、『竹むきが記』を綴っていったのである。

さて、それでは、作者の意識が回想することに向かつていったのはいつ頃からののであろうか。『竹むきが記』の中にそれを見いだすことができるのであろうか。

先に、北山第に再び戻ることができた時点で作者の逼塞の時代は本当の意味で終わったのではないかと考えた。

公宗の斬罪により北山第を追われてからの作者の当面の最も切実な願望の帰結点は、北山第に戻ることであったはずである。それは、同時に我が子実俊が西園寺家の正統として認められ、それにふさわしい扱いを受けるというところをも意味している。すべては、そこから始まると考えられたのではないだろうか。複雑な心境を匂わせながら、永福門院の意向に従う形で、それは実現された。暦応三年のことである。

かゝる程に、侍従の君移り住み給へう、女院の御方急ぎ立たせ給ふ。やがて添ひ聞ゆべうあれば、さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ事しあれば、二位殿にて女院の御方さまへもこの趣を聞えたるに、いと僻くしき事と諫めさせ給つゝ、差し放つべきにはあらぬ由、さまぐにのたまへるも御理なれば、心弱く思ひ立たれぬ。二位殿もあからさまにおはします。誰もく皆参るべし。小御所を竹向かけてしつらへり。何処もありしに変わらねば、面影浮ぶ事多し。寄る方なきさまにて籠り居侍つる諸大夫・侍など、かゝる世を待ち出でつゝ、老いくづをれたる入道どもなど、更に出で仕へつゝ、頼む蔭と思へるさまでも、実にかゝらぬ世なりせばと、あはれに見ゆ。

作者は、再び北山第に戻ることができた事について多くを語らない。「面影浮ぶ事多し」と「実にかゝらぬ世なりせばと、あはれに見ゆ」という短い叙述に、万感を込めているようである。この後、記事は、永福門院の実俊愛育の様から、北山第への内々の御幸、実俊元服、晴の御幸始と続く。これらはすべて北山第を舞台とする事柄であり、作者の北山第での生活が徐々に落ち着いてゆき、作者が北山第の主の母であることに慣れ親しんでいく様を辿っていることにもなる。北山第に久方ぶりの晴の御幸始を迎えた折の作者は次に引く行動をとる。

久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを、外様ばかりはあかぬ心地じて侍れば、宝蔵をたづぬるに、三尺余ばかりなる花立を一对求め出ぬるをぞ奉る。「色も姿もなべてならず、いと由々しう」など、様ぐの御沙汰どもにぞ及び侍ける。

これは、北山第の主実俊の母としての自信と責任感とがあらわれた行為であるにとらえられる。このように作者

は、自身の判断で西園寺家当主の母として行動できるようになっているのである。

公宗事件以来途絶えていた北山第への晴の御幸を迎えることができた暦応五年以降、作者は頻繁に物語に出かけるようになる。作者の北山第での生活が落ち着きをみせてきた証左でもあろうし、そのことにより作者が旅に出る余裕を持ち始めたということでもあろう。

暦応五年二月の石山詣においては、旅先の感興のままに「明日知らぬ世はこれや限りと、あはれならずしもなし」、「浜の方に打出でぬる眺めの末は、度毎に珍しからんやうにぞ覚えける」、「岸打つ波の寄せ返つゝ、其処とも見えず果も知られぬ眺、おかしければ、過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ侍ける」などと記している。しかし、翌月の若宮詣になると、いささか様相が転じてくる。やや長くなるが、この章段の全文掲げる。

弥生の比、若宮に詣でたるに、長講堂近く見やらるれば、車さし寄せて見巡る。昔供花の折など、心に浮ぶ事多し。花の下に立ち寄れるに、変らぬにも、見し世の春にめぐり逢ひぬる心地して、思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ憤ひさへぞ恨めしかりける。何時の年なりしにか、御八講の比、人目もなくなりにし夕べに、二御所、女房あまた御供にて、何となき事ものたまはせしかば、二位殿・宰相の典侍などやうの人々、古今の事も聞え出でつゝおはしましし御面影をはじめ、をのく並み候ひし人々此彼と思ひ出づるに、同じ世なるも少く、或るは苔の袂のあらぬ世に立ち返、さらでも己がさまぐに、よしあしにつけつゝ身を変へぬるなど、取り集め思ひ続けるに、涙さへこぼれぬ。

③ 宿もそれ花も見し世の木の下になれし春のみなどかとまらぬ

御影堂の□□梅もつくろはれぬにや、軒近くぞなりぬる。供花の座を見るに、袖を連ねし面影浮びつゝ、いとなつかし。御壺なる二本の松、言ひしらず木高き蔭にて、面変わりぬるにも、我やあらぬとぞたどらるゝ。この松は伏見の院御身づから二葉なるを植へさせ給けるとぞ聞き侍し。

帰るとて御堂の殿上を通るにも、昔御懺法の頃、のどかなる夜、男ども御尋ねありしに、素什僧正、御後

に祇候侍しに、「集ゐて稚児もてなす」と聞かせ給て、暗き夜に一人御供にて、辿るく成りて、この脇戸より御覽ぜられしかば、さまざまに乱れ遊びしにや、「茶少し」と折句に置きて御歌遊ばして、片仮名に書かせさせ給しかば、桜の薄様に書きて、柳に付けてさし置かせしを、「いかゞ言ふ」と又なりて聞かせ給へば、それか、かれかと心当てに言ひつゝ、御所よりとは思はざりき。後に辿り聞きけるとて、御酒・御茶などいみじう由あるさまにて僧正奉れりしかば、その夜の人々、幸若・あとなど召しつゝ、わざとならぬ御遊びにぞなりにし。はかなき事も御情をそへられしなど、その世の御面影も更にぞ浮び侍ける。

ここは、『竹むきが記』中唯一作者が自分の感情を感情のままに吐露している箇所である。「昔供花の折」と突然作者の思いは回想に入る。「心に浮ぶ事多し」と記しているが、長講堂供花は、作者が度々伺候していたはずの行事である。それだけに作者が女房として仕えていたあの「昔」、後伏見院や花園院に近しく接していたあの「昔」、もちろん公宗も共にいたあの「昔」への思いをかき立てられたものである。「昔」、「思ひ出づる」、「御面影」など思い出に浸りきっている。『竹むきが記』中、「昔」の使用は下巻においてのみ見られる。また「思ひ出づ」は、上巻に三例、下巻に七例あるが、上巻の使用例はいずれも公宗にかかわるものである。「面影」も上巻には公宗との後朝の別れにあたっての慕情を詠んだ和歌⑩のみあり、下巻では北山第に戻った記事、この長講堂での回想、康永四年正月春日詣の帰路伏見における回想、二月賀茂社詣における回想に使われている。いずれも「昔」「思ひ出づ」と共に使用されている。

しかも、ここには、「思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ憤ひさへぞ恨めしかりける」と、この思いを分かち合える人もいない孤独感を滲ませているのである。「長講堂供花」といえば、『竹むきが記』上巻にもその記事がある。正慶元年九月のことである。

同じ年の九月に、長講堂供花なるに参り侍し。萩の緯青に、黄筋白筋の単襲、朽葉の唐衣。御簾に西園寺大納言殿参り給。出御の後、北向にて御酒あり。新院、二御所おはします。御前に大納言殿候はせ給。御陪

膳にたゞ一人候。垣ほに這へる薦のわづかに色づきたるに、岩間をくぐる水の心ばへも由ありてと、心をやりて繡いたる小袖に、女郎花の羅うすものの単、脱ぎすべして候。宰相典侍、御さか月などすゝめ奉らる。

御通ひの道に、遣戸の御簾垂れて、出入むつかしとて上げさせらるゝに、八幡の新参いまいり、袴の腰をくわへて上ぐるに、ふとはづれてすべり落ちぬ。強こほくしき生絹すじの小袖なれば、うち絶へてまびろけ立てるさま、いとあさまし。笑はせおはしますさまども、いみじ。されど、かゝる戯れ人にしあらずは、よその心も猶死ぬばかりならましとぞおぼえし。御かはらけ度くになりて、宰相典侍、酔いすゝみつゝ、傍痛き事どもぞ侍し。「よからむ女むすめもがな、猶懲りずまに奉らん」など聞ゆれば、あひしらはせ給しをかしかりき。妹の君の、本意ほんいたが違ひし事どもなるべし。

供花の後、内に候ひしに、夜いたく更け静まりて、南殿の月御覽ぜられしに、迷ふ雲もなく空澄みつゝ、池の面もことさらに曇なく見えて、いと面白く侍しに、後々の方へ成らせ給しに、軒合に洩れる露台の月、はつかなるしもことにぞ見え侍し。心中に、

⑦ 秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月

こちらは九月ではあるが、長講堂供花の思い出を記している。「二御所」の御前に、「西園寺大納言殿」つまり公宗と伺候している己を回想している。八幡の新参の失態、宰相典侍の酔いに任せての醜態、それを受け流す後伏見院の様子などを記している。供花の後の月見の章段では、和歌⑦に詠んだ情景をそのまま地の文で叙述しているのであるが、しかし、ここには色濃い叙情性を感じ取ることができる。そこに回想する作者の姿を見て取ることができないだろうか。

この章段の直前に、「幸若といひし稚児」の話題が記されているのも、下巻の長講堂での回想に繋がるものを感じさせる。

その年の八月、内に候ひし比に、時は井殿より幸若といひし稚児を参らせられて、便宜びんぎの所にて御目につ

らるべう聞えさせ給へれば、常の御所の壺に召されて御覽ぜらる。萩の緯青に、その枝の高やかなるを織りて、露を高く置きたる浮線綾ふせんれうの水干なり。(中略)慈什僧正、いみじうすき物にて、稚児十人とのへて、舞樂を習はせて、色々の姿、いとおかしく仕立てて参らせ侍しかば、常に御覽ぜられしに、幸若・あとゝ、すぐれていみじと、人々もてはやす事にてぞありし。童舞うるはしくとゝのへ、御覽ぜらるゝ折くもあり。たゞ内く姿にては、ひまなく付き。

ここには、「慈什僧正」、「幸若・あとゝ」など、下巻の長講堂での回想に登場する人々が記されている。双方に互いによく似た話題が記されているのである。

ここに、「長講堂供花」を経路にした作者の回想への通路を想定することはできないであろうか。暦応五年三月、長講堂を訪れたことが契機となつて過去へ引き戻されていった作者の意識は、とめどなく「心に浮ぶ事」の一つであつた上巻のこの章段の回想から、広がつていったという回路を想定してみたいのである。

暦応五年三月は、作者母子が北山第に戻つて約二年である。陰謀の発覚により公宗が捕縛され斬罪に処された事件(建武二年八月二日)直後に北山第を追われたとすると、作者が北山第を空けていたのは約五年ということになる。永福門院が里邸として住まいされていたとはいえ、当主公宗を謀叛の咎で欠いた状態であつた北山第であつてみれば、公宗存命当時とは、万事様子が異なつていたはずである。当初はそれに馴れること、あるいは幼い実俊を当主としてもりたててゆくための準備などで、作者は心慌ただしく暮らすことを余儀なくされていたのではないだろうか。先に引用したが、作者は北山第に再び入つた折にも「面影浮ぶ事多し」としている。しかし、そこにはその思い出は語られない。北山第での思い出は公宗に直結するために記すことができなかったと考えることもできるが、それと同時に、その折はまだ思い出を綴るような心境になれなかつたことを示しているとも考えることができる。

『竹むぎが記』が単なる備忘録ではない以上、たとえその素材に即時的に書き留められたものがあつたとして

も、作者の整理を経て今の形になったと考えざるを得ない。そうであれば本格的な身辺整理とそれに伴った記憶の整理は、北山第に戻る日を待つて行われたと考えるのが至当であろう。しかも、ある程度客観視できなければ執筆作業はできない。また、本来居るべき場所、自分の本拠地に戻ってきたという心の安定も、その作業には必要であろう。そのような余裕を持ち得なければ、到底『竹むきが記』執筆には取りかかれなかったはずである。そのために、ようやく北山第での生活に根を張ることができたと感じられるようになった暦応五年までの年月を要したのではないだろうか。したがって、回想する作者の起点を、その時期に置いて考えてみたいのである。たとえその時間を勘案しないとしても、やはり『竹むきが記』は、作者が北山第に戻って以後に、過去の詠草や消息類、手控えなどを整理しつつ、一方では記憶を整理し、再構成の手を加えたりしながら次第に形成されていったと考えるのが、作者の心理面からいっても最も妥当な推測であろう。そのような作者の回想の経緯を想定すると、『竹むきが記』は、上巻が成って一旦筆が擱かれ、改めて下巻が書き始められたといった成立の過程を経てはいないように思われる。下巻の記事を綴りつつ、あの「昔」へと記憶を辿り、回顧した「昔」を再び書き記していくといった過程を推定する方が自然ではないだろうか。下巻を書いている途中で、上巻に遡って書き綴ることもしたとすれば、上巻が一旦擱筆されたかのような終わり方をしていることも無理なく理解することができる。その時点で下巻がすでに書き進められていればこそ、上巻はしっかりと綴じめられなければならないのであろう。慕わしい「昔」を回顧し書き綴っていくうちに、作者が上巻を書き綴る目的は、いつしか自分が北山第に入ることになるまでを記録しておくことに集約されていたものであろう。上巻が正慶二年六月「忍びたる住るなど、改まる」時点で擱筆されていることの意味を、そのようにとらえたい。

前項で、作者の回想の起点として、北山第に戻り、ようやく本来居るべき場所に本拠を据えたとして作者が実感することができた時点を想定してみた。公宗の事件が起こったことにより、北山第は住まうべき本邸という以上に、作者にとっては拘泥せざるを得ない特別な場所となつたのではなからうか。

本論第三章第二節で、作者が北山第を讚美するのは、己の「心の闇」からのせめてもの救いを求めていることであるのではないかと考えた。作者は北山第について、次のように記している。

さるは折につけたる興遊も、世にありがたき住ひにぞありける。代々の君の皇居として、深き匠の心をあらはせる様、旧りぬる今もなを珍し。峰にも尾にもと代々に植へ置かれける木ずるども、枝を交はせる花の軒、庵を並べつゝ、妙なる砌ことさらに情あり。(中略)あはれも浅からざらんかし。折につけつゝ、花にあり葉にある色、月雪の眺め、すべて世に知らぬ情、求めざるに自らあり。岩木の姿つくるはぬ己がたゞずまひしも、中々珍し。岩間をくぐる清水は代々にすみける流れ絶えず、結ぶ手の雪に濁る恨だになし。事にふれつゝ憂世を忘るゝつまにぞ侍べき。

所々に建て置かれ侍御堂は、家門繁昌の為のみならず、勅願寺にて天下の御祈禱、他に異ならぬ御願にて侍れば、代々これを大事と沙汰侍れど、諸堂数多く御願事繁ければ、聊ずる事も侍らめども、大方は怠らぬさまなり。ことに成就心院は座をさまさぬ不断の勤め、嚴重の御願なれば、安貞二年十一月に始置かれけるより、今貞和五に至るまで、一時も退転あることなし。昼夜朝暮の勤の音、霞に余り霧に漏るゝ鈴の声絶えず、松を払ふ冬の嵐には、峰に答ふる声は煩惱の雲を分けて法性の空にや響くらんと、心も澄みて聞ゆ。

「西園寺為四神具足、諸仏遊地令地、天下第一勝地是也」など、長増心院供養の御願文の言葉に侍も、まことにありがたき霊地なるべし。奥の御堂と侍は終の御住処と示されて、代々の御跡をぞ残され侍。不断の念仏あり。本願院には四十八体の弥陀如来、光を並べておはします。浄土の法文、止観の談義などあり。浄金剛院・三福寺など、然るべきをぞ供僧にも選びなされ侍ける。

北山第をこの世に実現した浄土ととらえ、それを目の当たりにしているのだという感慨によってなにがしか心に救いを求めようとしている。しかしながら、この中で作者が強調したいのは、その結構を成した西園寺家の昔日の権勢であることが、頻出する「代々」からうかがわれる。まず西園寺公経の新勅撰和歌集入集歌「山ざくらみねにもをにもうゑおかむ見ぬ世のはるを人やしのぶと」(巻第十六・一〇四〇、詞書「西園寺にて三十首歌よみ侍りける春歌」)を踏まえた叙述を用いているのも、その意識のあらわれであろう。まさしく作者は「見ぬ世のはる」を遙かに思いやり、しのである。ここでは西園寺家の栄光の流れは絶えることなく続いていくのだということをことさら強調しているようである。作者の意識には、公経がここを造営したことにあらわれている西園寺家の「昔」の権勢を象徴するものとして北山第があったといえよう。

このような北山第に対する意識を基に、『竹むきが記』をとらえなおしてみたい。本論第一章第三節で、『竹むきが記』に記された北山第御幸の記事をまとめておいた。上巻には、北山第御幸はただ一箇所だけ記録されている。元弘二年正月のことである。

二日、春の節になる。御方違の行幸・御幸、同じく北山殿にならせ給。御方く、所くにしつらひ置かる。

内御方には御引直衣皆具、御衣架に掛けらる。(中略)御衣架、奥にありて、見も覚えず。御服ども、経康掛けけるとぞ聞えし。夜もすがら御酒などありて、暁なるべき還御、昼程にぞなりにし。

「御衣架、奥にありて、見も覚えず」との叙述から作者も同行していたらしいことがうかがわれる。ここでは全く感情を交えず記録的筆致でしつらいの様子を記している。上巻の記載期間中に幾度か北山第御幸は行われているが(第一章第一節二項)、この日のもののみ記している。この前年の十一月一日日蝕の日は、作者が職掌を離れ一人の女性として公宗を意識した日、生涯忘れられない日であったらしいこと¹⁾から、この正月の記事も、底流には公宗の住まいする北山第という意識があつて記されたものかもしれないが、表面上はあくまでも典侍が記録している体をとっている。この時点では、作者にとって北山第は、まだ自分とはおよそ個人的な縁のあるは

ずのない余所余所しい場所であつたはずである。それによつて、このような叙述を採つたものであらう。この後、上巻では光厳天皇即位などの公事を記録しながら、筆は公宗との交情、求婚へと進められていく。記録的記事の中にも作者の視線が公宗へ向いていることを示す記述を見いだせる^(まぎ)。混迷する政情の中ではあるが二人は愛を育み、緊迫した情勢の中、正慶二年五月、作者はついに北山第に入った。しかし、すぐには当主の住まいに移れなかつたものか、同年六月に次のように記し、上巻を結んでいる。

六月も半になりぬ。忍びたる住るなど、改まるべきにや、さやうにては、いつしかならん出入も何となく憚りあるべければ、「さらばあからさまに」と許されあればいと嬉しくて、都に出でぬるに、聞き見る事は皆あらぬ世の心地しつゝ、さらに悲し。二三日ありて車などあれば、立ち返山路にも、いかになり行く身ぞと、万に浮きたる心地して思ひ乱るべし。

いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り待べきにやとぞ。

作者には、慕わしい「昔」の集大成は、北山第に公宗の正室として迎え入れられたことであると思われたのではないだろうか。それ以後の作者の人生は、このことによつて決せられてしまったのであるし、現在の自分がこのような自分として在るのも、すべてはそこに起因しているからである。

さて、下巻では、父資名邸の火災の記事や、資名の死没の記事などから、作者はこの頃は実家に身を寄せていたらしいと推測できる。永福門院の意向もあり、北山第には暦応三年に再び移り住んでいる。それ以後の記事の舞台は、当然のことながら北山第に移つてゆく。北山第に入つてからの女院の実俊愛育の様から、暦応三年暮の御方違御幸（永福門院御方へ内々の儀）、暦応四年八月の徽安門院御幸始（永福門院御方）、同年十二月の実俊元服、暦応五年の御幸始、康永元年春頃の永福門院不予のため見舞いの御幸などである。その後においては、記事は、実俊中将拝賀や仏道修行への述懐から北山第讃美へ、実俊が御幸へ供奉して御剣の役を勤めた記事の後は北山第での広義門院の五種の行、賀茂社・八幡宮・春日大社への物詣の記事、靈鷲寺の談義から北山へ戻つて

広義門院へ返歌、仏道修行への思いを表白した後に、再び広義門院・一品宮の俄な北山第への行啓の記事、初瀬詣の記事の後に続けて、公宗十三回忌、公衡三十三回忌の仏事（北山第）といった配置で、ことある毎に筆は北山第に戻りつつ進められてゆく。作者が北山第に住まいするようになったのであるからそれは当然のことではあるが、そこに「北山第」という場所に拘泥している作者の思いを読み取れないだろうか。

貞和四年九月、実俊は持明院殿への行幸に供奉して「劍璽の役」を立派に勤めた。十月には「御国譲り」（崇光天皇踐祚）があり、十一月には花園院が崩御された。貞和五年の記事に入ってから、靈鷲寺の寂れた様、己の仏道修行に関する反省と新たな覚悟の表明、七月、日野の塔頭に初めて詣でたことなど、擱筆を意識した構成となっている。記事は、ここで遡って正月の御幸始について記す。

貞和五の睦月に、院・新院御幸始、この山へ成らせ給ふ。俄なるやうにさへ侍て、一方ならぬ難治の由、度く聞え侍れど、新院御位去らせ給て、初たる御事なれば、さるべき本所なき上、且は家の為にもなど、逃れがたき事どもになん。（中略）その後、御対面あるべき由、御使度くあれば参りぬるに、今日の儀、よろづ昔に返りぬる沙汰ども、さまざま御感どもありて、「今よりは常に成らせ給べき御あらまし」など、いとこまやかにぞのたまはする。（下略）

正月二十九日の光厳院・光明院の襲御幸始である。作者はその受け入れについてやや困惑している様子ではあるが、光厳院から「よろづ昔に返りぬる沙汰」について感心され、「今よりは常に成らせ給べき御あらまし」との言葉をかけられたことは、今後の西園寺家への寵遇を確約するものとして重く受け止められたことであろう。『竹むきが記』に記される北山第御幸は、計八回に及ぶ（本論第一章第三節）。それを次に簡単に示す。

Ⅰ 元弘二年正月 御方違行幸・御幸 （上巻）

Ⅱ 暦応三年 暮 御方違御幸 「女院の御方へ内々成らせ給ふ儀」

Ⅲ 暦応四年八月 徽安門院御幸始 「永福門院の御方へ成らせ給ふ儀」

IV 暦応五年正月 御幸始

V 康永元年 春 永福門院御見舞の御幸 「院・女院御幸ありて見奉らせ給」

VI 貞和二年十月 広義門院紅葉御覧の行啓 「俄に女院の御方・一品宮ならせ給」

VII 貞和三年九月 公衡三十三回忌仏事で光厳院・広義門院御幸

VIII 貞和五年正月 光厳院・光明院褻御幸始

I については、先に触れた。下巻の記事のうちⅡ・Ⅲ・Ⅴは、内々のものである。Ⅵも、「俄に」とあり予定外のものであったらしい。Ⅶも、広義門院の父公衡の仏事であるから、いわば私的なものの範疇に入るであろう。とすれば、下巻において公的な御幸は、ⅣとⅧの二回のみということになるのである。その意味でも、貞和五年の御幸は褻の御幸始ではあっても、特に跋文近くに記しておかれる必要があったのではないだろうか。

『史料綜覧』を作者の没年（延文三年）まで通覧する限りでは、この後北山第御幸は行われていない。先の光厳院の言葉にもかかわらず、政情の混乱も相俟って、北山第への御幸は再び途絶えてしまったのである（第一章第一節二項「史実の確認」参照）。さらにいま少し踏み込めば、このことが、作者の擱筆の一因になっているのではないかという推測すら許されるのではないだろうか。そうであるならば、貞和五年の御幸始の記事は、この位置に置かれるべくして置かれたといえるのである。

作者は、この記事に続いて、

その年の春、除目に、三位中将、中納言になさる。参議を経ずして直任せらる。

とごく簡潔に実俊の昇進を記す。前章段の光厳院の西園寺家に対する寵遇を証するかのような異例の出世である。この後に、鷹司の老人との贈答歌を据えて『竹むきが記』は擱筆される。つまり『竹むきが記』は、北山第御幸、北山の花見に関する記事を最後として綴じめられているのである。

このような「北山第」を中心にすえた『竹むきが記』の構成のとらえ方も許されるのではないだろうか。この

日記が、雨のため北山の花見を途中で切り上げた折の次のような贈答歌で結ばれていることは、象徴的であるといえよう。

同春の頃、宮にて療治めかしき事侍に、鷹司の老人語りて、珍しうのどかなるに、帰る名残をいかにと慕ひの給へる。無量光院の花、いみじう盛りなれば、我も人も、いかに玩ぶべきにかなど、御酒すゝめつゝ眺めくらしたるに、雨さへしほくと降り出でぬれば、「いと山路たどくしうなりぬ」と人々急がせば、眺め捨てつゝ、彼より、

⑤③ 慕ひ見し山路の花の木のもとにとめし心の程は知らずや

⑤④ 馴れしよりかゝる別れのあらんとは思ひながらも猶ぞおどろく

⑤⑤ 名残思ふ涙の雨のかきくれて花もしほれし帰るさぞ憂き

返事にそへて、

⑤④ 思ひやれ雨も涙もかきくれて名残しほれし花の木本

⑤⑦ いとせめてあかぬ名残の悲しさに馴れしさへ憂き恨みとぞなる

⑤⑧ 藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

⑤⑨ なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

和歌⑤⑥・⑤⑦が、鷹司の老人の和歌に対する返歌である。内容から、⑤⑥が⑤③・⑤⑤に対する返歌で、⑤⑦が⑤④・⑤⑤に対するものと思われる。『竹むぎが記』中、最後の公宗との贈答でも、公宗の遺言歌ともいえる一首を含む三首の贈歌に対して作者は返歌を二首しか記していない（第二章第二節）が、ここでも同様に贈歌三首に対して返歌は二首しか記していない。最後の⑤⑧・⑤⑨は、この折の贈答ではなく『竹むぎが記』全体の跋として記されたものであると考えられる。

⑤③から⑤⑨までの贈答歌は、せつかくの北山の花見の機会を雨で中断せざるを得なくなった口惜しさ、心残りの

気持ちを鷹司の老人が言つて寄越したものである。素材としては、一般的な挨拶歌と考えてもよいのかもしれない。しかし、この贈答には、儀礼的な挨拶歌のやりとりというにしてはいささか過剰な表現が使われているように感じられる。しかも、『竹むきが記』最後のこの位置に置かれているということに、何の意味もないとは考えにくい。作者が若宮詣の途次立ち寄った長講堂で、「昔」を恋いしので涙した折の和歌③「宿もそれ花も見し世の木の下になれし春のみなどかとまらぬ」を思い浮かべる時、老人の和歌⑤は、まったく別の意味を帯びてくる。作者の和歌④「見し世の春」が、公経が西園寺の春を詠んだ新勅撰入集歌「山ざくらみねにもをにもうゑおかむ見ぬ世のはるを人やしのぶと」を想起しての語であるならば、なおさらである。「鷹司の老人」について岩佐美代子氏は、作者の伯母「日野俊光女伏見院中納言典侍、花山院家の支流鷹司家雅室、冬雅母」と比定された上、この人物と作者との関係を次のように考えておられる^(註3)。

何よりもこの人は、若くして夫を失い、ようやく成人させた息子にも幼児を残して先立たれるという、名子にも相似た不幸を味わい、更に伯母として名子の悲運の一部始終をも身近に見知っていて、名子が心を許してうちとける事のできるほとんど唯一の人である。この伯母との間でならば、日野家出身の西園寺家正室という矜持も劣等感も名子は感じないですむ。他人には口をつぐんで語らない公宗・氏光への思いも、又それにあつた数々の怨みも、この伯母にだけは安心してうちあけられる。長年心一つにかみしめて来た悲しみも辛さも、この伯母の前でならばすなおに訴え、共に涙しても名子の自我は傷つかないであろう。この伯母と共にあるだけで、名子の心は和められるのである。

ここまで作者がこの伯母に精神的に頼っていたものかどうか、『竹むきが記』中に滲み出ている作者の孤独感から首肯しがたいものがあるが、作者の周辺でその辛苦を見守ってきた人物であるならば、作者が語らない心底にある程度は付度できたはずである。その老人とのこの和歌の贈答に作者は別の意味合いを込めて、ここに書き記したのではないかと思われる。

公衡が「見ぬ世のはるを人やしのぶ」と植えおいた北山の桜、それ以来数多くの花見の御幸を仰いできた北山第、永福門院が暦応二年、花園院に贈った御幸を待望する和歌「さきちるもしる人もなきやどの花いつの春までみゆき待ちけん」（新拾遺和歌集・一一五）、いま作者の居るここ北山第にまつわる様々な思いが、作者をとらえていたのではないだろうか。老人との和歌の贈答には、静かな悲しみが漂っている。それは、雨によってしおれてしまうであろう花を惜しんでいるだけでなく、花見を中断せざるを得なくなったことを惜しんでいるだけでもない。静かに我が半生を振り返り、その悲しみを改めてかみしめているのではないかと感じさせる。その述懐性が、最後の二首へと連なっているのである。

和歌⑤は、「かきて集むるいたづらに」、「あまのすさみに」から、『竹むきが記』の謙辞として詠んだものと思われる。和歌⑥も同様に「なき跡にうき名やとめん」、「散り残りなば」から謙辞と思われるが、この二首には、それでも『竹むきが記』を書き記さずにはいられなかった真情、公宗を喪った後一人生きていくことを選び取った作者の己の人生への万感の思いが込められているように思われる。

作者は、北山第に戻ってきた。筆を擱いた時点で北山第の主の母として、その場所に住まいしていた。回想する作者の居る場所は、ここ「北山第」であった。作者は、ことある毎に己の現在の位置を確認し、確かに「北山第」にあることを確認していたのではないだろうか。常に現在の自分に立ち返りつつ、その思いは西園寺家の栄光の時代、光厳天皇の御代、自らの典侍としての栄光の時である過去へ、実俊が西園寺家当主としてその威光を復活させる未来へと往還していたと考えられる。『竹むきが記』上巻・下巻のそれぞれの擱筆の具体的な時期を推断することはできないが、作者の心理を手繰ってゆくことで、『竹むきが記』成立の過程を推定してみた。『竹むきが記』は、北山第に住まいする現在の己を確認しつつ綴られていったものではあるまいか。作者の思いは、何事につけ「北山第」へ回帰しているのである。

『竹むきが記』の「竹むき」は、呼称として作者名子を示し、また、「竹向かけてしつらへり」としているよ

うに北山第の作者の住まいした場所、本拠をも示してる。北山第の「竹むき」に住まいした西園寺家当主の母の日記として、『竹むきが記』という命名はまことに暗示的であり、象徴的であるといえよう。まさに作者名子の日記は、「北山第」に始まり、「北山第」に終わったといふべきなのである。

注

- 1 拙稿「『竹むきが記』の構成と和歌の役割—元弘元年の暮の記事を中心に—」（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』創刊号、平10・3）。「本論第一章第二節参照」
- 2 拙稿「『竹むきが記』上巻における和歌—公宗との贈答歌を中心に—」（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第二号、平11・3）。「本論第二章第二節参照」
- 3 「『竹むきが記』私注（下巻）」（『国語国文』第四一巻第三号、昭47・3）